Center for Global Studies on Culture and Society

Working Paper Series

CGS No.2021-02

近代日本における人文知移動の動態的研究

平成30年度グローバル社会文化研究センター
研究プロジェクトB　研究成果報告

研究期間：平成30年4月1日 ～ 令和2年3月31日

山岸郁子
小林修
大木志門
掛野剛史

March, 2022

College of Economics, Nihon University

【目　　次】

【研究報告】

近代日本における人文知移動の動態的研究について……山岸　郁子　1

文芸家住所録・住所付き名鑑集成の試み……小　林　修　6

徳田秋聲の転居から見る「知」の移動と「地縁」の存在… 大木　志門 23

薄田泣菫宛書簡からみる作家の移動と交流…… 掛野　剛史 31

【資　　料】

翻刻「現代文藝百家小伝」(『新潮』第 13 巻第 1 号　明治 43 年 1 月)　……　37

住所録データベース（住所録資料一覧）　……　73

【付　　録】

近代作家データベースの集計方法　……山岸　郁子　119

近代日本における人文知移動の動態的研究について

山 岸 郁 子

はじめに

本研究は明治から昭和にかけて文芸雑誌や文芸日誌、文士録、文藝年鑑などに記されている作家の居住地情報をもとに「近代文学作家の住所データベース」を作成する目的で日本大学経済学部グローバル社会文化研究センターのプロジェクトとしてはじまったものである。さらに作成したデータベースをもとにしてメディアと住所録の関係を捉え、作家の移動の変遷を当時の地図で辿ることで、人間の移動から知の動態を明らかにすべく調査を継続している。

本紙ではプロジェクトを通して確認できたことについて報告するとともに、住所録データのパイロット版(『日本近代文学大事典』日本近代文学館に立項されている作家を中心に注出したものであり、未定稿であることをあらかじめお断りしておく)、「現代文藝百家小伝」(『新潮』第 13 巻第 1 号　明治 43 年 1 月）を掲載する。「現代文藝百家小伝」は横山大観・川合玉堂・下村観山等の画家をはじめ小説家、歌人等を百名選出し、その略歴小伝に現住所を付したものである。文芸という枠にどのようなジャンルが含まれていたのか、また記述のスタイルが近代の文士録、作家名鑑の原型の一つと考えることができる重要な資料である。さらに付録として Excel を用いて住所録データベースを集計する手順について説明文を載せた。

1　住所録からわかること

住所録はその時点で確実にそこに居住していたことを保証するわけではない。そのことに留意せねばならないが、掲載媒体がその時点で把握している住所を記し、それを読者に向けて開示していることに間違いはない。作家同士の交流や文章等を発注するためといったネットワーク内での活用のほか、読者が手紙を出したり直接訪ねたりするためのものである。

小林修が述べるように「近代における作家名鑑ないし住所録は近代固有の産物であり、その固有の特質を有しながらも、その源流として、近世の文人名鑑の流れを受け継ぎながら質的転換を遂げていったもの」であり、もともとは「儒・俳諧・狂詩・狂歌・和歌・詩・画・書」といった文雅人の技芸が明記された上で住所が付されていたものとして、著名文人や画家を直接訪問してその直筆の書画を入手したい人々の需要に供する目的のために存在していた。

それが明治 25 年 3 月 30 日「東京現住　著作家案内」になると「当時在京の小説家、翻訳家、狂言作者等、諸家の雅号を五十音順に列叙し住所、寄寓所を記し音問等の便に供す」ためと記された上で代表作品が記載されるようになる。従来の文雅名鑑とは異なり「小説家」「翻訳家」が登場しており、近代文学成立期の東京に住む著作家に特化したものである。文を技芸の一つとして捉えられていたものが分化し、職業としての小説家が定着していくさまも住所録から辿ることができるのである。また雅号をもたない、あるいは雅号を外した小説家となることで「作家」の存在が前景化し、「作家」と作品内容との関係に変化をもたらしたということも考えられるであろう。

作家に特化した住所録を考える場合、投稿雑誌と「文章日記」「文芸日記」といった日記類との関係も重要である。日記には作家の自筆や寸言が入っており、末尾には文壇諸家住所録や年齢表がある。『明治四十年新案当用日記（春陽堂)』のような日記は存在していたが、作家を前面に出したものが製作されたのは大正期からのようだ。現物を確認しているのは大正 9 年以降のものであるが、作家の写真と直筆署名、月別に作

家の揮毫、日記用紙の罫外の小口側には文学者の一句が添えられており、巻末に作家の住所一覧がある。自分の「蔵書」を記入できる欄やその年の「文壇、劇壇、詩壇、映画界」の出来事、全国同人雑誌関係者一覧、出版法書式、文芸雑誌社や編集者ならびに新聞社文芸部員の住所録といった付録がついているものもある。作家を取り巻く環境や法令を知ることで、その道を目指す者へ業界への具体的なイメージを与えていくことにもなったであろう。

掛野剛史が薄田泣菫宛書簡の調査をとおして、詩人として、大阪毎日新聞社の編集者として、随筆家としてそのネットワークがどのように変化したのかを明らかにしている。大毎時代には作家の側にも泣菫の書簡が残されており、往復書簡として照らし合わせることで明らかになることも多い。

「文芸日記」を使用していたのは読者ばかりではない。例えば宇野浩二は『文芸自由日記』(文藝春秋社)、『新文芸日記』(新潮社)を使用していた(『文学者の日記 6』『文学者の日記 7』日本近代文学館 2000)。「文芸日記」から考察できることは多いが紙幅の関係上別稿に譲りたい。

2　住所の移動からわかること——久米正雄の場合

地方から上京する者はどのように居住地を決めたのだろうか。まず寮や学校あるいは職場周辺の下宿に住む、あるいは地元の縁者や親戚を頼ることが多いだろう。生活に馴れると経済状況に見合ったところ、あるいは新しい人脈を頼って自分の生活圏の中で移動をはじめる。作家の場合は、筆笥町の紅葉宅裏の崖下の二階屋を借りて作家志望の青年たちが共同生活をしたり、のちに文士村といわれるように作家たちがある地域に集住する場合もある。大木志門が述べるように移動を振り返ることで「『地縁』と『知縁』を媒介にした『移動』の軌跡」をそこに確認することもできるだろう。

ここでは久米正雄を例に考えてみたい。久米は福島県安積郡桑野村(現郡山市)から明治 43 年 9 月第一高等学校一部乙類英文科へ入学のために上京し、すでに上京していた兄哲夫と本郷区本郷 4 丁目で同居した後、第一高等学校南寮に入る。明治 45 年の大久保文学倶楽部編「現代文士録」には久米三汀の名で第一高等学校寄宿舎南寮四とある。俳人の三汀がまず文士として登録されたことを示しているだろう。

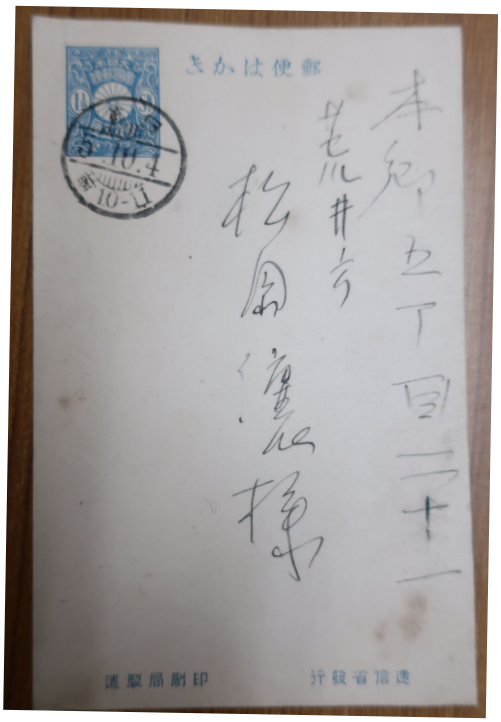
大正 2 年 9 月に第一高等学校を卒業し東京帝国大学英語英文学科に進学し寮を出る。翌年大正 3 年 2 月から刊行される第三次『新思潮』の発行所である本郷区本郷 4 丁目 49 が久米の新しい下宿であり、そこで久米は原稿のとりまとめや事務的な業務を行っていたのである。

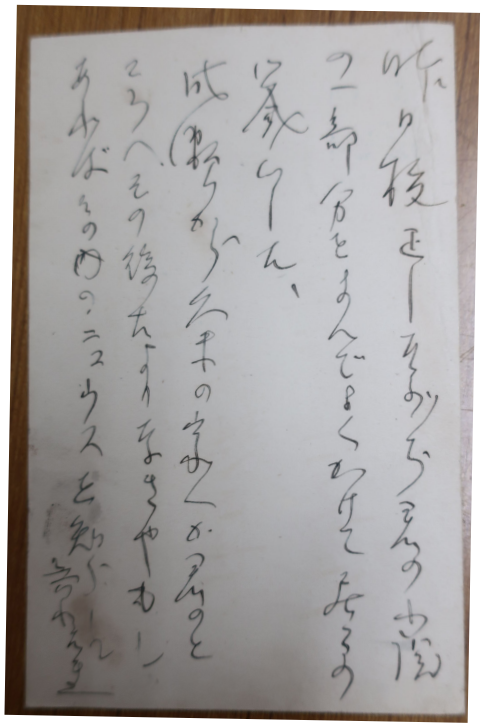
第三次『新思潮』には山本有三、井出説太郎(土屋文明)のほかのちに第四次『新思潮』を出すことになる、草田杜太郎(菊池寛)、松岡譲、芥川龍之介、成瀬正一も参加している。久米は三汀として俳壇ではすでに知られていたが、大正 3 年 3 月号の『新思潮』に載せた「牛乳屋の兄弟」(戯曲)が評価され 9 月にすぐに有楽座で上演されるほどであった。

「先達下駄をわすれて参り候　故とつておいて下され度君が留守でもわかる様にして置いて下され度候青い鼻緒の不景気な山桐のに候」(大正 3 年 7 月 12 日付)と芥川から久米のこの住所宛葉書が残っているように同人の出入りも多かったと思われる。

第三次『新思潮』が大正 3 年 9 月に 8 号をもって終了すると、久米は本郷区森川町一宮裏河野方、本郷区森川町一小吉方へ転居する。小吉方こと小吉館は小宮豊隆も住んでいた下宿である。同じ森川町一南堺裏には明治 39 年から亡くなるまでそこに住み続けた徳田秋聲がいた。ちなみに秋聲の住所録に小石川 4344 という電話番号が記載されるのが昭和 10 年前後のことである。

大正 5 年 2 月から刊行をはじめる第四次『新思潮』について「いよいよ雑誌発行となって、発行所という事になった時、電話がないと若しもの場合困るという事で、芝白金三光町の成瀬の邸宅にした。しかしこの方は事実上遥かに不便だったので、かれの洋行前に私の下宿に移してしまった」と松岡譲が回想している。「私の下宿」は本郷 5 丁目 21 荒井シゲが営む下宿である。同人が集まる場所として、また当初『新思潮』が印刷を依頼していたのが神田区美土代町 2-1 にあった「三秀社」であったため、利便性を考えてのことであろう。





昨日校正をしながら君の小説の一部分をよんでよくかけて居るのに感心した。
成瀬から久米の家へか　君のところへその後たよりなきや　もしあればその内のニユウスを知らして呉れたまへ　（大正5年10月4日）

これは本郷5丁目21荒井方松岡譲宛の葉書であるが差出人の署名がない。葉書に書かれた内容から「校正」は『新思潮』の校正のことを指しており「君の小説」とあるのは『新思潮』第1巻第8号（大正5年10月1日発行）の「青白瑞渓」であることが推測される。この前に成瀬の母から『新思潮』の財政について質問があり、月ごとの援助を得ることになるかもしれない、という内容の葉書を久米が松岡の同住所に出している（大正5年9月24日付）ことから、「ニユウス」とあるのは、成瀬家からの金銭的な援助についてであると考えられる。さらに消印は「白金」であることから、当時成瀬の家の離れ（芝区白金三光町273）に住んでいた菊池寛からの書簡であることがわかる。差出人を字体や内容から判別できる場合もあるが、消印と住所録データを照合させて確定させたり、消印の日付が読めない場合には住所から時期をある程度絞り込むことも可能である。

この頃『新思潮』の住所宛に小説家志望の中戸川吉二が「自画像」（のちに「島で遭つた画家」として発表）という作品を送ってきた。その後中戸川は直接訪ねてきて、やがて本郷5丁目40に居を構える。また広津和郎が住んだ本郷5丁目37にある下宿八重山館は本郷5丁目21の向かい側にあたる。広津は大正9年頃そこで菊池寛らと知りあい、また人間社の植村宗一（直木三十五）や林倭衛とも交流していくことになる。住居の位置については次頁の本郷5丁目の地図を参照されたい。

大正5年12月に夏目漱石が亡くなり、大正6年になると芥川は海軍機関学校の職を得、成瀬の白金の家の離れに住んでいた菊池は4月に結婚し麻布へ移り、松岡は菊池が住んでいた成瀬の家に移る。そして新思潮関係のものをそのまま残した松岡の下宿に久米が移り住むのだが、3月の「夏目漱石追慕号」をもって第四次『新思潮』は終了している。資金を援助し続けていた成瀬の大正6年4月26日付書簡にある「私にとつて新思潮は五人の friendship の symbol である」からなんとしても続けて欲しい、という願いも聞き入れられることはなかった。よみうり抄（『讀賣新聞』）には大正6年5月18日の記事に「▲久米正雄氏は去る十五日、本郷区本郷五の二十一新思潮社内へ転居せり」とある。

その後大学を卒業した松岡はいったん成瀬の家を引き払い、実家である古志郡石坂村（現長岡市）に戻るが、

実家との問題を抱えたまま再び上京し、早稲田南町の夏目家に子どもたちの家庭教師を兼ねて住むことになる。大正 7 年 1 月「現代文士録」(『文章世界』) に記載された松岡の住所は「牛込区早稲田南町 7 夏目方」となっている。

この転居を機に松岡は夏目鏡子や子どもたちとの距離を縮め、後に久米との間に確執を生む出来事へとつながることになる。大正 6 年 10 月 13 日付の夏目鏡子から久米正雄宛速達書簡の封筒のみが現在残っているが、果たして手紙には何が書かれていたのだろうか。

大正 6 年 12 月 9 日の『東京日日新聞』に久米と漱石の長女筆子との婚約が破棄されたと報じられる。同年末に久米は郡山の実家に帰るが、大正 7 年 1 月 4 日付で土屋文明が郡山開成山（当時の住所は安積郡桑野村開成山）の久米に東京に戻ってくるように、という手紙を出している。

久米は再び上京し、時事新報社に勤めた菊池寛のすすめにより「蛍草」を 3 月 19 日から連載する。同年 3 月 29 日付菊池寛から久米へ『時事新報』に連載中の「蛍草」の挿絵の絵組の指示を原稿五六回分送ってもらえないかという大阪からの手紙（朱字）を同封した手紙が残っている。

> （前略）小説　千葉さん（千葉亀雄）もウマイとほめて居るらしい。一般の評判もよいから安心したまえ。（中略）成瀬のムツターが死んだ時のどうして悔みに来なかつたのだ　芥も松岡も来たよ。又松岡の京都旅行は奥さんと二人限りだとさ。

『新思潮』に金銭的な援助をし続けた同人成瀬のムツター（母峰子）が死去したのが 3 月 22 日である。松岡と京都に行った「奥さん」とあるのは夏目鏡子のことであろう。そして松岡と漱石の長女筆子が結婚式をあげるのは同年 4 月 25 日のことである。

久米はその後母を呼び寄せ本郷区本郷 5 丁目 43、本郷 5 丁目 30 へと転居する。大正 12 年 11 月 17 日に結婚する艶子との新婚生活もここからはじまっている。当時の本郷区の地図で確認すると久米は 5 丁目

明治 40 年 1 月調査　本郷区全図（東京郵便局）

21 → 43 → 30 と、近い区画内で移動していたことがわかるのである。

1999 年 5 月芥川龍之介「鼻」の原稿の発見がメディアで大きく報じられた。草田杜太郎（菊池寛）「暴徒の子」、成瀬正一「骨晒し」といった第四次『新思潮』創刊号の入稿原稿も古書店で見つかったが、元は久米家から出たものである。

久米家からの資料は 1980 年の終わり頃から市場に出始めた。1989 年秋の明治古典会通常市に久米宛の来信がどっさり出品された。

（「即日完売した久米正雄旧蔵映画資料」稲垣書店　中山信如「日本古書通信」2011 年 8 月号）

大正 14 年『新文章日記』（大正 13 年 11 月 5 日）の住所録には久米の住所は鎌倉市大町蔵屋敷とある。よみうり抄（『讀賣新聞』大正 14 年 2 月 21 日）には「▲久米正雄氏　廿一日鵠沼から帰京廿六日家族と共に鎌倉大町蔵屋敷に転居す」とあるが、実際はもう少し前に転居していた、あるいは転居先が決まっていた可能性がある。

健康の都合上、急に鎌倉へ引移ることになつて、永年住み馴れた本郷の家を畳むに際し、何となく捨て難くて、蔵つて置いた書信が、二タ梱あつた。其上、古ぼけたボロ鞄に、一ぱい「新思潮」発刊前後の手紙や原稿が取つてあつた。他の書信類は、少し整理して焼き捨てたが、友人知己のもので、懐しい思ひ出のあるもの、珍らしく面白いものは、みんな此処まで持つて来た。流行感冒をこぢらして、弱つてゐる身体に、ぽかぽか日を浴びながら、今、それらを整理するのも、清い楽しみの極みだ。

（「今昔」『文藝春秋』大正 14 年 5 月）

その後久米は鎌倉雪の下 406、鎌倉塔の辻 206、鎌倉二階堂へと転居するが、おそらくボロ鞄の中の「友人知己のもので、懐しい思ひ出のあるもの」であった新思潮関係の原稿や書簡類などは捨てずに、転居先へ移動させたのだろう。

これが第四次『新思潮』関係の原稿の他、松岡譲宛や新思潮社宛の書簡が久米家に残っていた理由である。

おわりに

住所録の入力作業は現在も継続して進めており、データ数は 1 万件を超えている。データを用いて今後の研究課題としていることは以下の通りである。

・住所録内の分類と文壇の生成との関係。
・出郷作家がどのような人脈を頼り、居を構えたのか（学閥や縁故・同郷人との関係）。
・経済状況の変化による移動の実態（円本前後）。
・関東大震災後の移動の実態。
・文士村・鎌倉などの集住の実態とその意味について。

この継続課題について興味のある研究者にプロジェクトへの参加を呼びかけ、一定のルールを設けた上でデータを共有し研究を深めたいと考えている。

山岸郁子　yamagishi.ikuko@nihon-u.ac.jp

※住所は個人情報であるため注意を払いながら、公刊された「住所録」を前提としてデータ化を行っている。
※引用した書簡は全て「こおりやま文学の森資料館」蔵のものである。調査にあたり「こおりやま文学の森資料館」には格別のご配慮をいただきました。記してお礼申し上げます。
※文化資源社の滝口富夫氏には「現代文藝百家小伝」ならびに住所録の入力、データの成形、報告書の編集などのご協力をいただいたばかりではなく多くのアドバイスを賜りました。記して感謝申し上げます。

文芸家住所録・住所付き名鑑集成の試み

小　林　　修

近代文学成立期以降、様々な意図のもとに近代作家の住所録や名鑑が編纂されて来た。それ等を集成しデータ化することによって近代文学の歩みや個別作家あるいは作家相互の関わりなどを「居住地」の観点から検討し見直してみたいとの考えから本共同研究をスタートした。そのため我々は別表（別掲）のような明治以降の住所録や住所付き名鑑を収集して来たが、それらから膨大な住所データを抽出することによって本研究の基礎資料とした。筆者は、住所データ抽出前の「住所録」「文士録」という括りの中の個別の「情報群」に注目し、それぞれの時点で編纂発行された住所録（名鑑）の変遷（史的展開）と特徴を読み解き、「解題」的にまとめてみた。

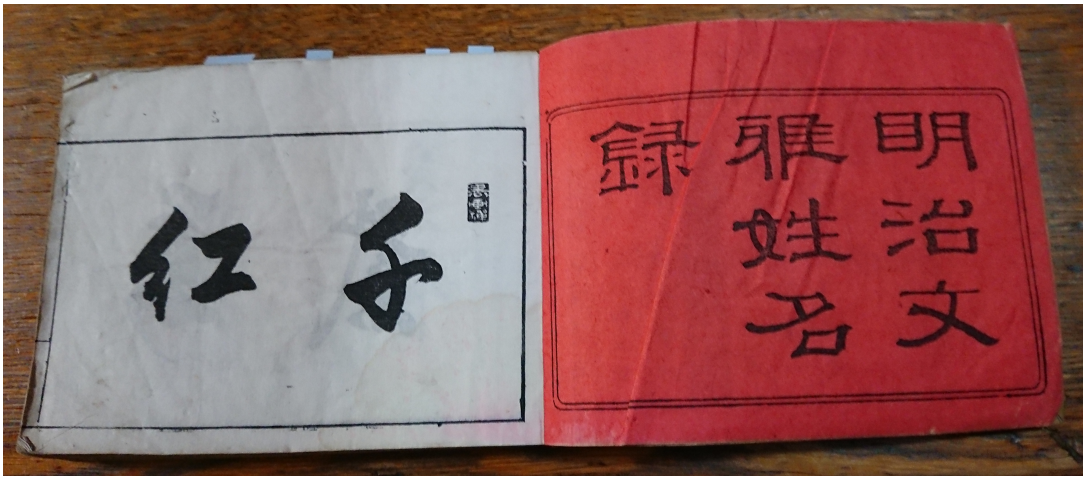
1　近代以前　「安政文雅人名録」から「明治文雅姓名録」へ

近代における作家名鑑ないし住所録は近代固有の産物であり、その固有の特質を有しながらも、その源流として、近世の文人名鑑の流れを受け継ぎながら質的転換を遂げていったものと思われる。したがって、先ず近世文人名鑑の代表的なものとして『安政文雅人名録』を見てみよう。

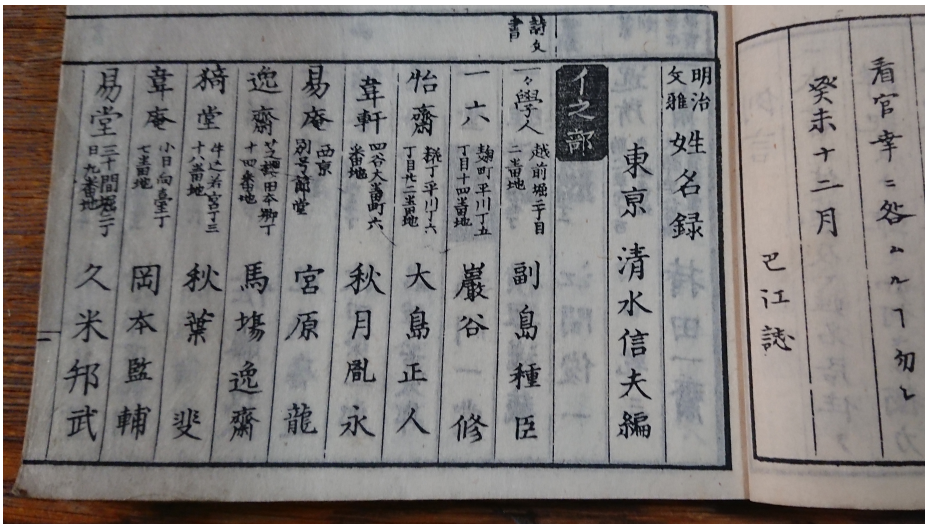
これは万延元年刊の横長の小本だが、現在からみて無名の人物も含めて 871 名の人物が収録されている。構成は上部に「儒・俳諧・狂詩・狂歌・和歌・詩・画・書」とそれぞれの文雅人の技芸が明記（複数ジャンルにまたがる者もいる）され、その下に「雅号･姓名･住所」の順に記載されている。江戸在住者が中心だが、京･大坂にも及んでおり、その収録人名の多さに驚かされる。

また、この全国規模の文雅人の名鑑と対照的に『下谷文人地図』なる地域限定の名鑑地図も出板されている。収録人名は約 70 名だが、「下谷文人」なる呼称もあったように下谷・御徒町地区は文人・画家などが多く居住し、書画会なども定期的に開催される著名なトポスであった。近代に至って何々文士村と呼ばれる作家たちの集住地域の先例とも言えよう。『下谷文人地図』の識語には「揮毫を求めて此地に至る者に付与して、居所の訪策に便ならしむ」とあるように、著名文人や画家を直接訪問してその直筆の書画を入手したい人々の需要に供する目的で、これらの文雅人名鑑が出板されたものと思われる。

さて、近世に於けるこうした文雅人名録の流れは、明治という新しい時代に入っても途絶えることはなかった。次に紹介するように、明治 16 年 12 月に『**明治文雅姓名録**』なる名鑑が出板されている。木版横長の小本で装丁や構成も『安政文雅人名録』をそっくり踏襲したものである。だが、収録人名は約 1720 名で、何と『安政文雅人名録』の 2 倍に増えている。居住地は東京中心だが、地方在住者も収録。配列は雅号によるイロハ順で、詩文・書・俳諧・歌・国学・書画・篆刻・陶器画などの表芸が頭書され、下に住所・氏名が記されている。いわゆる近代文学誕生以前であり、著名な文人や画家ばかりでなく、政治家や実業家などの名士も多く含まれている。編輯兼発行人は清水信夫（浅草聖天町 3 番地）、「発兌売弘所」として、筆墨舗･扇舗･紙商・書画舗・表具師・印章版本彫刻師など東京や地方の 42 店が名を連ねる。中でも「西京　鳩居堂」の他、「日本橋葺屋丁六番地　東陽堂吾妻健三郎」の名が目を惹く。これは後に『風俗画報』を発行することになる東陽堂のことであろうが、ここでは「書画・銅板石版彫刻」という営業項目である。すなわち未だ近代的出版書肆の出現以前であり、こうした「発兌売弘所」名からも『明治文雅姓名録』がどのような需要目的を対象にしていたかは明らかであろう。



清水信夫編『明治文雅姓名録』（明治 16 年 12 月）



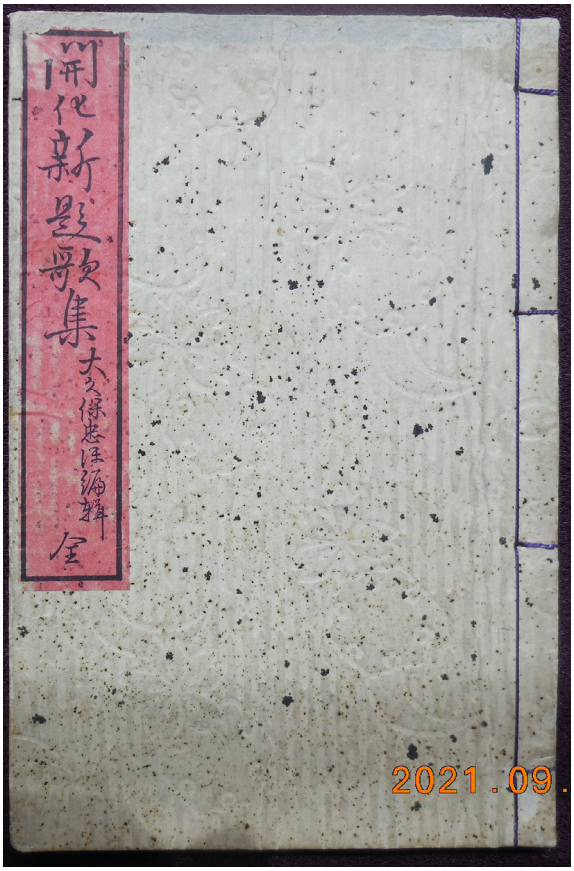
『明治文雅姓名録』「イ之部」

『安政文雅人名録』に比して大幅に収録人名数が膨らんだ『明治文雅姓名録』だが、技芸の分類ジャンルはほとんど変わらない。現在では戯作小説家として知られる仮名垣魯文の名があるが、分類ジャンル欄には「文歌俳」とあり、雅号は「玩佛」である。だが、後者には新しいジャンルに属するべき人物として、福地源一郎・末廣重恭・加藤九郎・伊藤卓三などのジャーナリストの名前がある。しかし、いずれの人物も分類ジャンルは「詩書」や「詩文書」である。ちなみに、政治小説家として知られる末廣重恭の記載は「詩文書　鉄腸　内幸町二丁目一番地　末廣重恭」である。政治小説『雪中梅』の刊行は 2 年後の明治 19 年、『花間鶯』は明治 20 年、明治 21 年であり、未だ刊行されていない。また『佳人之奇遇』も未刊（明治 18 年第 1 篇発行）であるため、東海散史の名は未収である。意外なところでは、「蟠斎　武州南多摩郡野津田村　石坂昌孝」の名がある。技芸は「詩文書」だが、これは、北村透谷の親友石坂公歴や妻美那の父であり、三多摩自由党の領袖である。また「南洋　南神保町十番地　有島武」は有島武郎や里見弴の父である。技芸は「詩画書」となっている。

＊

その他、文芸関係の住所録という視点から眺めれば、伝統的和歌の世界では、大久保忠保編『**開化新題歌集**』（明治 11 年 11 月）などは巻末に収載歌人 126 名の住所・氏名が記載されている。これは門流の地方ネットワークという基盤もあり、その居住地は全国に及んでいる。また専門の歌人のみでなく歌をよくする名士も多く、したがって女性も多く収録されていることも興味深い。この住所録は広く歌人同士あるいは和歌愛好者の交流に資する目的で収録されたものと思われる。和歌を対象とするこうした傾向の出板はその後も続

き、明治 25 年には諸名士の和歌と絵姿をおさめた石丸忠胤編『**明治百人一首**』も刊行され、付録として巻末に百人の住所録を収録している。絵姿の画工は寺崎廣業である。木版和装、大本。玄同舎刊。



大久保忠保編『開化新題歌集』（明治 11 年）

石丸忠胤編『明治百人一首』（明治 25 年）

1　近代文学形成期の住所名鑑　『東京現住　著作家案内』など

近代文学に焦点を当てた名鑑が登場して来るのは明治 20 年代に入ってからであった。その嚆矢と見られるものが、『東京現住　著作家案内』（明治 25 年）である。表紙には右手に筆を持った魁星図が描かれ、左手の分銅は見えないが中央に題簽代わりの木目の名札がアレンジされ「東京現住　著作家案内　全」と墨書されている。表紙の意匠は古風だが、『明治文雅姓名録』とは異なり四六判の活版印刷である。明治 25 年 3 月 30 日出版。編輯は神田区美土代町 4 丁目 5 番地の桜井徳太郎、発売元は同住所の博盛堂。大売捌は日本橋区本町 3 丁目 17 番地の金港堂書籍会社。定価は八銭である。雅号による配列は『明治文雅姓名録』と同じだが、アイウエオ順となっている。編者による「例言」は以下の 3 項目である。

○当時在京の小説家、翻訳家、狂言作者等、諸家の雅号を五十音順に列叙し住所、寄寓所を記し音問等の便に供す。

○著作、翻訳、正本等、有名なもの新聞に雑誌に或は巻冊となりて出でたるもの二三乃至四五種を択出し各発行の名所を注し又閲者の便に供す。

○書名の下に現出と記すものは現に出であるものにて該著に欠く可からざるものとす。巻末に批評家を出だすものは其論評もて大に著訳の真価を生ぜば亦知らざるを得ざらんものとす。諸家に遺漏あり、著書に猶優れるものあらんには追て補正すべし。

「例言」の最初に記されているように、「小説家」の他、近代文学成立期にふさわしく西洋文学の「翻訳家」や「狂言作者」（戯曲作家）に照明が当てられた他、3 項目にある如く末尾に批評家も加えられているのも興

味深い。また、これまでの文雅名鑑と異なり、技芸ジャンル別ではなく代表作が例示されているところに特徴がある。東京在住者に限定しているが､批評家（9 人）との重複者を差し引くと総計 68 人が収録されている。明らかに近代文学の成立期、文壇なるものが形成されつつあった実態を物語る資料でもある。この住所名鑑の背後には新しい「活字」という媒体を通して、従来とは比較にならぬ広範囲に伝達された「著作」によって、新しい読者層が形成され、その読者との交流を促そうとする磁力が働いている。これは従来の名鑑が直筆の書画の需要・供給を主な目的としていたのと異なり､「音問」つまり書信によるコミュニケーションの形成を意図していると思われる。これは新時代の郵便制度の確立普及とも相俟って、これ以降の文芸家住所録や名鑑の性格を決定づけたものと言えよう。記載例を示せば以下のようなものである。

○桜痴居士（アウチコジ）　又号　夢の屋　福地源一郎
　○住所　日本橋区築地一丁目三番地
　○著作　もしや草紙（大倉書店）○尊号美談（日報社）○春日局脚本（金港堂）
○鷗外漁史（オウグアイギョシ）　森　林太郎
　○住所　本郷区駒込千駄木町二十一番地
　○著作　舞姫（国民の友）○うたかたの記（しからみ草紙）○文使ひ（新著百首）
○花圃女史（クワホジョシ）　又号　ひさご　田辺氏令嬢　田辺　龍子
　○住所　麹町区下二番町五十番地
　○著作　藪の鶯（金港堂）○八重桜（都の花）○車の轍（女学雑誌）
○紅葉山人（コウエフサンジン）　尾崎徳太郎
　○住所　牛込区横寺町四十七番地
　○著作　新色懺悔（聚芳十種）○恋の山賤（文庫）○夏痩（春陽堂）○此ぬし（新作十二番）
　　○恋のぬけがら（都の花）○二人女房　現出（同上）
○湖処子（コショシ）　又号　西邨隠者　宮崎八百吉
　○住所　牛込区市ヶ谷富久町百五番地
　○著作　帰省（民友社）　○空屋（国民の友）
○鉄腸居士（テツチョウコジ）　末廣重恭
　○住所　芝区琴平町三番地
　○著作　雪中梅（博文堂）○花間鶯（金港堂）○南洋の大波瀾（春陽堂）
○春のや朧（ハルオボロ）　又号　逍遥学人　坪内雄蔵
　○住所　牛込区大久保余丁町百拾二番地
　○著作　細君（国民の友）○壱円紙幣の履歴はなし（読売新聞）○外務大臣（同上）
○美妙斎主人（ビメウサイしゅじん）　山田武太郎
　○住所　神田区平永町九番地
　○著作　夏子立（金港堂）○いちご姫（都の花）別為巻冊　○教師三昧（新作十二番）
　　白玉蘭（嵩山堂）○兜菊　現出　（都の花）
○二葉亭四迷（フタバテイシメイ）　長谷川辰之助
　○住所　神田区中猿楽町九番地
　○著作　浮雲（金港堂）○めぐりあひ（都の花）
○露伴子（ロハンシ）　幸田成行
　○住所　下谷区谷中村百四十五番地
　○著作　露団々（都の花）別為巻冊　○風流佛（新著百種）○対髑髏（葉末集）
　　辻浄瑠璃（新葉末集）
○若松しづ子（ワカマツ）　巌本氏令閨　巌本かし子

○住所　麹町区三番町六拾七番地
○著作　忘れがたみ（女学雑誌）○小公女（同上）

＊

『東京現住　著作家案内』（明治 25 年）

試みに 11 名の記載例を抽出してみたが、これらを参考に『東京現住　著作家案内』の特徴に触れてみたい。

田山花袋は近代文学草創期の文壇を六つのグループに分類している（『東京の三十年』－その頃の文壇）。花袋によれば、「その頃の文壇」の見取り図は硯友社派、早稲田派、千駄木派、国民文学派、根岸派、女学雑誌派に分けられるという。これは後のいわゆる文学史的呼称とはいささか異なるが、かえってその実態をよく物語っていると思われる。先ず「根岸派」「千駄木派」など居住地によって呼ばれるグループの存在があったことが窺われる。「根岸派」は上記の幸田露伴を中心に、森田思軒、饗庭篁村、石橋忍月など根岸およびその近辺に在住の作家を指し、「千駄木派」は森鷗外を中心にした人達。妹の小金井きみ子、弟三木竹二（批評家の中にあり）も上記の『著作家案内』に収録されている。「硯友社派」は言うまでもなく尾崎紅葉を中心とするグループで、『著作家案内』では既に横寺町に移っている。旧居の牛込区北町四十一番地は江見水蔭の住所となっている。その他「国民文学派」は徳富蘇峰を中心とする民友社グループ。上記例には宮崎湖処子を載せておいた。「女学雑誌派」はキリスト教的思潮を基盤とするグループで、巌本善治が創刊した『女学雑誌』に拠るグループ。後、ここから北村透谷、島崎藤村らが『文学界』派を形成するのだが、『著作家案内』には未だ現れていない。樋口一葉も同様である。上記例には巌本夫人の若松しづ子を摘記しておいたが、巌本善治は「批評家」の中に挙げられている。また、『明治文雅姓名録』と重複する人物をあげれば、先に摘記した福地源一郎（桜痴）の他、仮名垣魯文、末廣重恭（鉄腸）、依田学海なども含まれている。

また、明治 20 年代は雑誌の時代とも言われているが、この頃に創刊された文学的雑誌を挙げれば、『我楽多文庫』（明治 18）『女学雑誌』（同）『国民之友』（明治 20）『都の花』（明治 21）『日本人』（同）『風俗画報』（同）『し

からみ草紙』（明治 22）『新小説』（同）『少国民』（同）『早稲田文学』（明治 24）などである。『著作家案内』に載せられた代表作の掲載誌はこれらの雑誌名が多く見られる。なお『文学界』は明治 26 年創刊で『著作家案内』出版の翌年である。金港堂の名と『都の花』（金港堂発行）が多く見られるのは、『著作家案内』の「大売捌」が同社であったからだと思われる。いずれにしても、『東京現住　著作家案内』は我が国の近代文学成立期を照射する最初の著作家名鑑住所録として貴重なものであると言えよう。

*

2 「言文一致会」の会員名簿（明治 35 年 2 月　神田一ツ橋通帝国教育会内　言文一致会）

『東京現住　著作家案内』（明治 25 年）以後、これに類する名鑑住所録はしばらく発行されなかった。ここでは近代文学とも関係深い言文一致運動に関する組織「言文一致会」の会員名簿を紹介しておきたい。これはいわゆる言文一致の実用化を目指して組織されたもので、学者・教育者・新聞記者など幅広い会員によって発足した。当面は（イ）普通往復文、（ロ）記事論説文、（ハ）著書訳書、（ニ）教科書、（ホ）公用文、（ヘ）掲示広告などへの応用研究から着手した。したがって会員は多彩な分野の人物を擁しており、言文一致運動が近代文学上の文体問題にとどまらず幅広い文章表現を視野に入れていたことをあらわしている。しかしながら、ここでは 223 名の会員中、僅かだが当面我々の研究対象とする文学関係の人物のみ摘記しておきたい。ちなみに「酒と白足袋と言文一致はわれ大嫌ひ」と述べていた尾崎紅葉も会員であることも興味深い。アイウエオ順、住所氏名のみである。なお原本は本名のみの記載であるため、ここでは便宜上雅号を内に加えた。

○小石川区表町百九番地	井上哲次郎
○浅草区向柳原町二丁目一番地	上田　万年
○読売新聞社	上司　延貴（小剣）
○牛込区横寺町四十七番地	尾崎徳太郎（紅葉）
○牛込区納戸町	島村滝太郎（抱月）
○本郷区駒込曙町十五番地	新村　　出
○麹町区永田町壱丁目六番地	下田　歌子
○本郷区西片町十番地	高山林次郎（樗牛）
○小石川区関口町	高田　早苗（半峰）
○牛込区大久保余丁町百十二番地	坪内　雄蔵（逍遥）
○読売新聞社	徳田　末雄（秋声）
○牛込区中町三十五番地	東儀　季治（鉄笛）
○報知新聞社	鳥谷部銑太郎（春汀）
○大阪市北区曽根崎新地三丁目六十二	松崎　天民
○牛込区新小川町一丁目八番地	本居　豊穎
○東京府北豊島郡王子村	山田武太郎（美妙）

【コラム】1

「酒と白足袋と言文一致はわれ大嫌ひ」と言っていた尾崎紅葉も言文一致会の会員になっていたことはやや意外な感があるが、この頃には彼も試行錯誤の末「である」調の文体を創出していた。しかし、小説文体としては未だ懐疑的であったようで、明治 34 年 10 月 15 日の言文一致会で講演した時、次のような巧みな比喩を用いてその理由を語っている。同じことを表現する場合、言文一致は円朝の洗練された話芸、擬古文は影で音楽を奏で効果を演出する趣きだと言う。錯綜した思想をすらすら書くには言文一致に限るが、擬古文は不自由でも余韻がある。「同じ事柄でも唯すらりと話すのと、涙と美声とで口説くのとはよほど違ふ、ここに薄命の佳人が

あつて憂の淵に沈み世をかこち天を怨んで居るといふ様な事を美しい声で妙へなる調べをつけて歌ふのと、之を唯口ですらりと話すとは人を動かす力が大変違ふ、ここになると言文一致はどふも少し物足らぬ。」「だから私は言文一致を美文に用ゐる前に先づ実用の方面に手をつけたいと思ふ。」（「言文一致会の会誌」）近代リアリズム小説確立以前の、雅俗折衷体に腐心し、さらに『多情多恨』（明治 29）以後言文一致体に成功を収めた紅葉にして、なおこの懐疑的な言文一致観である。『金色夜叉』（明治 30）は中断している頃である。

3　近代文学確立後の住所録名鑑

『文章世界』（博文館）の「現代文学者小伝」（明治 40 年 4 月）

明治 25 年の『東京現住　著作家案内』から 15 年目にして漸く本格的な近代文学の名鑑住所録が編まれた。博文館発行の雑誌『文章世界』（主筆田山花袋）の明治 40 年 4 月増刊号「文と詩」に掲載された「現代文学者小伝」がそれである

○収録人数　233 名　　イロハ順

○記載事項　生年（月日）　　出生地　　出身校　　略歴　　代表作　　現職　　現住所

【記載例】

○夏目漱石　　文学士。名は金之助。慶応三年正月、東京市牛込区喜久井町一番地に生る。東京文科大学卒業後、東京高等師範、伊予の松山中学校、第五高等学校等に教鞭を執れり。後、英国に留学し、帰朝後、東京文科大学講師たりき。『吾輩は猫である』『漾虚集』『鶉籠』等の著あり。東京朝日新聞社員。現住所、本郷区西片町十番地ろ七号。

（＊注　漱石はこの年 9 月末に牛込区早稲田南町 7 番地に転居。）

○島崎藤村　　小説家。名は春樹。明治 5 年、信州木曽妻籠に生る。明治学院に学び、明治女学校、小諸中学校等に教鞭を執りき。かつて新体詩人として名声を馳せ、『藤村詩集』の著ありしが、今は小説家として立てり。『破戒』『緑葉集』等の作あり。現住所、浅草区新片町一番地。

（＊注　木曽妻籠とあるのは馬籠の誤り。）

『文章世界』（明治 40 年 4 月増刊号「文と詩」　博文館）

現代文學者小傳

『文章世界』「現代文学者小伝」（明治 40 年）

『文章世界』は明治 39 年 3 月、近代出版社の雄ともいうべき博文館によって創刊された投稿・文芸雑誌である。自然主義文学確立期にあって田山花袋が編輯兼発行名義人となり精力的に編集に携わったため全国の青少年に支持され人気を博した。この「現代文学者小伝」は翌 40 年 4 月に最初の臨時増刊号「文と詩」の鼈頭に掲載されたものであるが、近代文学初の本格的名鑑住所録となった。同号には同じく鼈頭に「明治名作解題」が載せられ『佳人之奇遇』以来およそ 113 篇に及ぶ明治文壇の代表作が解説されている。筆者は無署名だが花袋であることは確実である。後の『東京の三十年』および『近代の小説』の先駆をなす貴重な試みであったと言えよう。この「明治名作解題」と対をなす形で「現代文学者小伝」が編まれたのであり、旧来の作家たちに加え、新作家を含めて 223 人の名鑑が現住所入りで掲載されたのである。作家志望者を含めて文学愛好家の青少年読者には願ってもない企画であった。この「現代文学者小伝」の好評を裏付けるように､以後毎年改訂されて同誌に掲載されることになる。先に引用した漱石の住所も翌年の「現代文学者小伝」には早稲田南町に変更されているし、藤村の住所も木曽馬籠に訂正されている。大正 10 年まで（明治 44 年のみ休載）掲載された「小伝」は以下の通りである。

	発行年月	巻号	特集号名	タイトル	収録人数
1	明治 40 年 4 月	2 巻 4 号	第一臨時増刊　文と詩	現代文学者小伝	233
2	明治 41 年 2 月	3 巻 2 号	第四増刊　新詩文	改訂現代文学者小伝	251
3	明治 42 年 2 月	4 巻 2 号	増刊　新春壇	現代文士録	251
4	明治 43 年 2 月	5 巻 2 号	増刊　梅花号	現代文士録（いろは順）	252
5	明治 44 年			掲載なし	
6	明治 45 年 2 月	7 巻 3 号	増刊　読書作文の新味　春風号	現代文士録	313
7	大正 02 年 3 月	8 巻 4 号	文章新話　若草号	現代文士録	307
8	大正 03 年 4 月	9 巻 4 号	四月特別号	現代文士録	288
9	大正 04 年 4 月	10 巻 4 号	春季特別号	現代文士録	284
10	大正 05 年 4 月	11 巻 4 号	四月特別号	現代文士録	285
				現代美術家録	152
11	大正 06 年 4 月	12 巻 4 号	春季特別号	現代文士録	303
12	大正 07 年 1 月	13 巻 1 号	新春倍大号	現代文士録	310
				現代美術家録（洋画家・彫刻家）	152
13	大正 08 年 1 月	14 巻 1 号	新年倍大号	現代文士録	311
				現代美術家録（主に洋画家及彫刻家）	170
14	大正 09 年 1 月	15 巻 1 号	正月号	現代文士録	313
				現代美術家録（洋画家・彫刻家）	150
15	大正 10 年 1 月	16 巻 1 号	新文学（誌名変更）	付録　現代文士録	312
				付録　現代美術家録（洋画家及彫刻家）	151

＊

以上のように「現代文学者小伝」は後「現代文士録」と改題され、大正 5 年からは「現代美術家録」も加えられて、大正 10 年まで改訂されつつ掲載された。これらの情報は、基本的には各作家への書面による問い合わせによって、データの正確性を担保していったようである。一例を挙げれば、山田美妙の日記にそうした事情が窺われる。

先ず、最初の「現代文学者小伝」（明治 40）の山田美妙の記述を挙げておく。

○山田美妙　名は武太郎。明治元年、三月江戸に生る。夙に言文一致を唱導して、諸種の作あり。
『胡蝶』『いちご姫』『夏木立』等、最も聞ゆ。現住所、東京府下王子字岸八百四十二番地。

この記述は翌年の「改定　現代文学者小伝」（明治 41）も同一である。かつての僚友尾崎紅葉とも不仲になり硯友社から離れ、私生活上の問題から批判され、文壇からも追放された形で不遇を喞っていた美妙は上記 2 回の博文館からの調査には無視を決め込み返事もしなかったようである。ところが、明治 41 年 12 月

の日記からは、ふと気が変わって次のような返信をしたことが窺われる。ちなみに、博文館が依頼した調査項目も以下のごとき項目であったことがわかる。

▲姓名　山田武太郎
▲雅号　美妙（処女作時代には樵耕蛙船、是は今日まで秘密にしていた名、今そろそろ白状するのです）
▲生地　今の神田柳町
▲生年月日　明治元年七月八日
▲著書もしくは作物の重なるもの　どう考えても碌なものは一つも無し
▲出身校　よび門を最終とした丈で
▲現職　（不漁の文海をやぶれ網でかきまわしている丈）
▲現住所　まだ定まらぬような次第
▲その他（右御こたえ迄。とんだ一種の市勢調査と思し召せ）

いささか自嘲的かつ投げやりな返信だが、この回答を受けて、翌 42 年 2 月『文章世界』の「現代文士録」では次のような改訂がなされた。

○山田美妙　名は武太郎。処女作時代には樵耕蛙船と号しき。明治元年七月八日、東京神田柳町に生る。大学予備門に学びき。夙に言文一致を唱導して諸種の作あり。『胡蝶』『いちご姫』『夏木立』等最も聞ゆ。現住所、本郷区上富士前町十五番地。

処女作時代の雅号と出身校および現住所が新しく改訂されたことが確認できるが、いずれにしても、もはや過去の作家としての扱いである。

【コラム】2
『文章世界』の投稿者を経て作家になった者は多いが、「現代文士録」に触発されて小説家になろうと決心した作家に武田麟太郎がいる。
武田は 17 歳の正月に『文章世界』の新年特別号を買って繰り返し読み、とりわけ「文士録」が作家志望の野心を掻き立てたようである。早速母親に話すと、小説好きの母親は、小説家になるなら岩野泡鳴くらいにならなければ意味がない。しかし、それは容易なことではないから今は地道に勉強して高等文官試験に合格し将来官吏として堅実な生活を送った方が良いと諭されたという。ところが、それから間もない 1 月 21 日、麟太郎がいつも通り、母親に起こされ朝食を済ませ今宮中学へ登校している中に、母親は急死してしまう。授業中、危篤の報を受けて急ぎ帰宅してみると既に息を引き取った後であったという。この不意の悲しみの中で、彼はやはり小説家になろうと決心し、凍てつく星月夜の中で母の霊に声を出して誓ったという。必死に努力すれば、岩野泡鳴くらいになれるだろうと思ったのだ。以来泡鳴の小説を読みふけったが、その泡鳴もこの年 5 月 9 日に急逝した。いささか因縁話めくが、母親の死の前日（1 月 20 日）は泡鳴の誕生日であり、泡鳴が急逝した 5 月 9 日は武田麟太郎の誕生日であった。
17 歳の武田麟太郎が読んだ『文章世界』は大正 9 年新年特別号である。「現代文士録」（イロハ順）の 2 番目に「岩野泡鳴」の項がある。（引用略）これが「現代文士録」に泡鳴の名が掲載された最後になったわけである。ちなみに、この号には最も若い作家として共に明治 32 年生まれの中條百合子と島田清次郎が既に掲載されている。また、この頃の編集人は花袋や前田晃に代わり加能作次郎が担当している。

4　新潮社の文芸家名鑑

新潮社編輯局編『現代文藝百家小伝』（明治 43 年 1 月 15 日　新潮社刊）〔イロハ順〕

文芸出版社として着実に発展を遂げて来た新潮社は、その基幹雑誌ともいうべき『新潮』の明治 43 年新年号に「現代文藝百家小伝」を掲載するとともに、単行本としても刊行した。定価 20 銭。これは、横山大観・和田英作・寺崎廣業・川合玉堂・下村観山等の画家も含めて、現役の文芸家百人を選び、その略歴小伝を紹介し現住所を付したもので、巻末の「年齢早見表」によれば、最年長は内藤鳴雪の 64 歳、最年少は三木露風の 22 歳である。採録人数は 100 人と少ないものの、略歴小伝は従来の名鑑に比して格段に詳しく資料的価値は高い。一例として、最も若い三木露風の項を紹介しておく。作家によって記述に疎密の差が見られるが、露風の項は平均的な量である。ちなみに、ここでは割愛するが、この年 10 月 24 日に死去する山田美妙の項は露風の 2 倍以上の分量を費やし、晩年の『大辞典』編纂の仕事にも触れた詳細な内容になっている。先の『文章世界』の記述と比較すれば、その充実ぶりは明らかである。

○三木露風

名は操、明治二十二年六月を以て　播州龍野に生る。十一二歳の頃、始めて新体詩と和歌とを試みて雑誌『少国民』に寄稿し、後、『新聲』『文庫』等の愛読者となりて、文学に熱中せり。父は氏をして医師又は商人たらしめむとせしも、氏は此意嚮に肯んぜざりき。十七歳の時、土地の中学三年にして退校を命ぜられ、転じて岡山の閑谷黌に学ぶ。始めて国を離れ、父家を出でゝ詩に親しむの自由を得たるのみならず、谿谷の岡山の自然によりて感化を受けたること浅からず。第一の詩集『夏姫』は、当時の思ひでを語るもの也。翌年激しき恋愛に落ちて、学資の途を絶たれ、出でゝ『美濃新聞』に身を託せり。その間一度或女と婚したりしも、別れて同社を退き、上京す。徳田秋聲、三島霜川の保護を受けて、当時労作一篇を雑誌『芸苑』に掲げて、詩名漸く昇る。氏が早稲田の文科に籍を置きたるも此頃の事也。爾来詩作と修養とに努め、優しく濃やかなる調べは、詩壇の新声として迎へらるゝに至る。四十二年秋、詩集『廃園』を公にして詩壇に於ける位置こゝに定まる。近く亦『廃園』以後の集を出すべく、目下製作に余念なしと云ふ。（現住、東京市牛込区袋町十二番地）

なお、明治 40 年の『文章世界』「現代文学者小伝」に「目下全国行脚中なり。」と記されていた「河東碧梧桐」をここにも付加しておく。住所は、今なお一所不在の遊歴中のため記載されていない。

○河東碧梧桐

伊予の人、名は秉五郎、明治四年を以て松山市に生る。中学を卒ふるや、京都に出でゝ第三高等学校に学び、更に仙台第二高等学校に転じ、業半ばにして退く。新俳句の機運勃興するや、専ら之が研究創作に耽り、虚子と並んで子規門下の二秀才と称せられ、三十二年早く『俳句評釈』の著あり、子規が俳句革新の業を了りて文章に転ぜんとし、小説の試作をなせる時、氏亦新作一篇を『国民之友』新年附録に寄せて、観察行文共に評家の推讃を受けしも、其天分の俳句に在るを自覚して、爾来十年亦他を顧みず。三十五年子規没するや、虚子と共に天下を二分して其一を保つの状ありしが、虚子の小説に趨りて次第に俳句に遠ざかるに及び、氏独り四方の嘱望推重を受けて益々研究試練を重ね、始めは純客観趣味なりしもの、今や時代の新傾向を容れて実感を主とするに至る。人となり直情径行、真個俳人の風骨あり。屡々新聞記者生活をなせしも、固より安じ得るの境にあらず。三十九年八月より俳的旅行を企て、足跡天下に洽ねからんとす。目下山陰地方に在り。紀行『日本及日本人』に連載せらる。

新潮社編輯局編『現代文藝百家小伝』
（明治 43 年 1 月　新潮社刊　20 銭）

5　大久保文学倶楽部編『現代文士録』（明治 45 年 6 月　育英舎発行　50 銭）〔イロハ順〕

○収録人数　1055 人（内、画家 119 人）
○編者　　東京府豊多摩群大久保村西大久保百七番地　大久保文学倶楽部
○発行所　東京市京橋区南伝馬町一丁目十五番地　育英舎

明治の最後の年に発行されたこの文士録は、収録人数は 1055 人と圧倒的に多くの人名を収録、そのうち画家も 119 人含まれた充実した住所録である。編者「はしがき」によれば、当初は「本名」「生国」「母校」「職業」なども加えたかったが、実現できなかったという。また「最終に」によれば、「全国文芸雑誌一覧」を付すつもりで寄贈を願ったが充分に集まらなかったとある。

これらは再版時に実現したいと記しているが、再版が発行されたか否かは詳らかではない。いずれにしても、「現代文士録」は収録人数は多いが、「住所録」にとどまっている。また、多くが雅号による表記であり、本名が明記されていないため「加藤冬海」が加藤武雄であり、「中村泣花」が中村武羅夫，「片上天弦」が片上伸であることなど、現在ではちょっとわかりにくいという難点がある。また、これに関連して、「菊地（ママ）幽芳　大阪市北区中之島二ノ一」の次に「菊地（ママ）　清　兵庫県武庫郡四宮町夙川」とあるのは同一人物であろう。「菊池幽芳」は本名「清」、住所が異なるのは、この頃転居したことに起因すると思われる。勤務先（大阪毎日新聞）と自宅の相違とも考えたが、この当時大阪毎日新聞社は東区大川町（中之島の土佐堀川対岸）にあり、幽芳の自宅は、明治 41 年 12 月 31 日に訪問した中村武羅夫によれば中之島である（『現代文士廿八人』明治 42 年、日高有倫堂）。いずれにしても本名を記載せず雅号のみで編輯したための錯誤であろう。

もう一人付記しておけば、「久米三汀」名で久米正雄が早くも収録されているのが興味深い。三汀は久米の俳号であり、俳人として若き日より注目されていたことが窺われる。住所は「第一高等学校寄宿舎南寮四」である。

【コラム】3　大久保文学倶楽部のこと

この「現代文士録」を編輯した大久保文学倶楽部については、茅原健『新宿・大久保文士村界隈』（日本古書通信社）に詳しい。同書に拠れば「茅原茂の家を主な会場として文士が集まったのが、「大久保文学倶楽部」である。この文学倶楽部は、大正八年に日本評論社を創業した茅原茂が明治末年に、西大久保の自宅を開放して主催した、文士のサロンであった。」とある。茅原茂は茅原華山の実弟で、筆名は「小松蘭雪」であったという。『現代文士録』によれば、「茅原蘭雪　東京市外西大久保一〇七」とあり、兄の華山は「茅原華山　東京市牛込区払方町九」とある。

東京郊外の大久保と言えば、明治 38 年 4 月 29 日に島崎藤村が小諸義塾を退職し『破戒』の未完成の草稿を携えて小諸を出立、背水の陣を敷いて移り住んだ場所であった。住所は東京府豊多摩郡西大久保村四百五番地である。翌年『破戒』は完成､自費出版の形で上田屋書店から発売されるや､新時代の文学の出現として好評嘖々たるものがあり忽ち版を重ねた。しかし、この壮挙とは裏腹に藤村の家庭では 3 人の娘が次々に病死するという悲劇に襲われたのである。藤村はこの地に永く住むことに堪えられず、10 月 2 日には浅草区新片町一番地に転居している。大久保は 1 年半程の居住に終わった。しかし、藤村と前後して大久保界隈には多くの文学者や画家が居住し始め、既に〈文士村〉と呼ばれていたようである。藤村と入れ代わるように、國木田独歩が明治 40 年 4 月 23 日に西大久保百三十三番地に転居して来た。独歩は 7 月には大久保在住の文士の懇親会を大久保会と名付けて自宅で開催している。大町桂月、戸川残花、水野葉舟等が来会している。しかし、独歩は 8 月には体調を崩し転地療養したりして、翌年には茅ケ崎南湖院に入院、6 月には没しているから、大久保会はほとんど開催されなかったと思われる。続いて大久保界隈の文学者や画家によって明治 43 年頃に「十日会」なる会合が生まれた。岩野泡鳴、正宗得三郎、吉江孤雁、岡落葉、前田夕暮、戸川秋骨、蒲原有明らが毎月十日に岩野泡鳴と茅原茂の家に集まったのが始まりという。「十日会」は最終的には 270 人程に膨れ上がったと言われているが、間もなく泡鳴や茅原の自宅では収容しきれず、一年足らずで日本橋小網町のメーゾン鴻の巣に会場を移したという。茅原健によれば、十日会がメーゾン鴻の巣に移った後、引き続き西大久保に留まって、茅原茂の家を主な会場として文士や画家が集まったのが「大久保文学倶楽部」だという。『現代文士録』は茅原茂を中心とするこの「大久保文学倶楽部」によって編輯・発行されたわけである。名鑑を目指しながら住所録に終わったのが惜しまれる。しかしながら、大久保界隈が文士村と呼ばれ、後の田端文士村、馬込文士村、阿佐ヶ谷文士村などの先蹤をなした存在であったばかりでなく、「十日会」「大久保文学倶楽部」という会員組織を生み、とりわけ後者は全国規模の文芸家住所録を編輯発行した事実は特筆すべきことであったと言えよう。

6　大正期の文士録　『文章世界』（博文館）と『文章倶楽部』（新潮社）

大正期に入っても『文章世界』の文士録は改訂を加えつつ掲載を続け、大正 5 年からは「現代美術家録」も掲載し､大正 10 年まで続いた。この頃自然主義文学の退潮に伴い､『白樺』派や『三田文学』派､『新思潮』派など新しい文学の台頭が見られ､『文章世界』も人気に翳りが見えるようになった。同じ博文館の発行する『文藝倶楽部』の質も低下し低迷する中、文芸誌『新潮』を発行して来た新潮社は、大正 5 年 4 月、新たに『文章倶楽部』を創刊し､『文章世界』に対抗して新しい読者層を獲得しつつあった。ちなみに､『新潮』の編集は『文章世界』の投書家として文壇に出た中村武羅夫（泣花）であり､『文章倶楽部』の編集も同じ投書家仲間であった加藤武雄（冬海）であったことも皮肉な巡りあわせと言えよう。先に紹介した『現代文藝百家小伝』（明治 43 年）も雑誌『新潮』に掲載したものを単行本化したものであるが、新たに創刊した投稿雑誌『文章倶楽部』も文芸家志望や文芸愛好家の読者を想定した様々な企画が見られる。たとえば、大正 9 年新年号では､「文壇生活号」と題して、約 100 人の文士の写真･略歴を「現代文士一覧」として掲載した他､「東京文士巡り」や芥川・菊池・久米・春夫・秋声・花袋などの「私の生活」や「文壇鳥瞰図」､上司小剣・生田長江の「文壇に立たんとする人の為に」など盛沢山である。そして大正 13 年の新年特別号には『文章世界』の後を引き継ぐ形の「現代文士録」を掲載している。

『文章倶楽部』（新潮社）の「現代文士録」（大正 13 年新年号）

【収録人数】 256 名　　（アイウエオ順）

【凡例】▲此の文士録は、現下文壇に活動せる人々を中心として編んだ。

▲匆卒の際に編んだので、遺漏尚ほ頗る多かるべしと思ふ。年々改訂して、益々完備ならしめん事を期する。

▲当然載す可くして、調査に窮したる為載せ得ざりし向もあるが、他日を待つて増補するつもりである。

【記載例】

○芥川龍之介　俳号は我鬼、明治二十五年三月東京京橋に生る。第一高等学校を経て東京帝大英文科卒業。短篇小説集『羅生門』『煙草と悪魔』『傀儡師』『影燈籠』『夜来の花』『将軍』『春服』『沙羅の花』『点心』等の著がある。現住所、東京市外田端四三五。

*

この『文章倶楽部』の「現代文士録」は、大正 13 年新年号掲載であるところが先ず興味深い。奥付によれば、大正 12 年 12 月中旬には印刷納本が終了している。大正 12 年は言う迄もなく 9 月 1 日に発生した関東大震災の年である。この大震災の影響で輸送その他の復旧は未だ充分でなく、雑誌組合は申し合わせて 12 月号の発行を取りやめている。したがって新年号の編集も通常より早めに終了したようである。しかし言うまでもなく、雑誌内容には大震災の影響はなお避けがたいものがあった。詳細は割愛するが、「現代文士録」にも震災の影響は反映されている。大震災後〈文士の都落ち〉などと言われたごとく、壊滅的な東京を避けて地方へ避難した文士が数多く見られたことだ。それは 12 月になっても彼等の住所にその痕跡を留めている。【記載例】に記したごとく芥川龍之介は田端に留まっているが、室生犀星は田端から郷里金沢へ移住している。住所は「金沢市上本多町川御亭三一」と記されている。また佐藤春夫の住所は「生地に同じ」とあるのみである。いち早く大阪に避難した谷崎潤一郎の現住所は、この時点では「京都市東山線(ママ)三条西入る　要法寺内」となっている。小山内薫も「大阪市南区天王寺悲田院町一九二〇」である。また、震災の影響は、「凡例」に「匆卒の際に編んだ」あるいは「調査に窮したる為」とあるように、遺漏が多いことである。『文章世界』最後の「現代文士録」（大正 10 年）の収録人数は 312 名であったのに対し、この『文章倶楽部』の「現代文士録」の収録人数は 256 名である。震災の影響で連絡の取れなかった文士が多かったものと見られる。しかし、関東大震災後初めての住所付き名鑑として極めて意義深いものがある。

その他、この「現代文士録」の興味深い点を付け加えれば、新進作家横光利一や未だ学生の川端康成の名が既に見られることである。『文芸時代』の創刊は、この年 10 月になってからである。以下二人の項目を紹介しておく。

○横光利一　明治三十一年三月十七日、大分県宇佐郡長峰村に生る。早稲田の文科及び政治経済科に五六年遊学。短編の作がある。現住所、小石川区餌差町 34、野村初太郎方。

○川端康成　明治三十二年六月十一日、大阪市北区天満此花町に生る。東京帝大文学部在学中。数種の評論がある。現住所、本郷千駄木町三八、牧瀬方。

横光の生地（会津若松市東山温泉）は正確ではない。生地とされている長峰村は父の郷里だが、横光が既に新進作家として注目されていたことが窺われる。また、川端についても先ず評論が注目されたことが窺われて興味深い。

さらに、藤村千代（宇野千代）と尾崎士郎の住所は同一であり、関東大震災後いわゆる〈馬込文士村〉を形成する核となることになる。関東大震災後、多くの文士が馬込およびその周辺に移り住み新たな交流が生まれ、その規模は最盛期 100 人にも及んだと言われている。この文士録では、室生犀星は未だ金沢在住であるし、萩原朔太郎も前橋在住のままである。

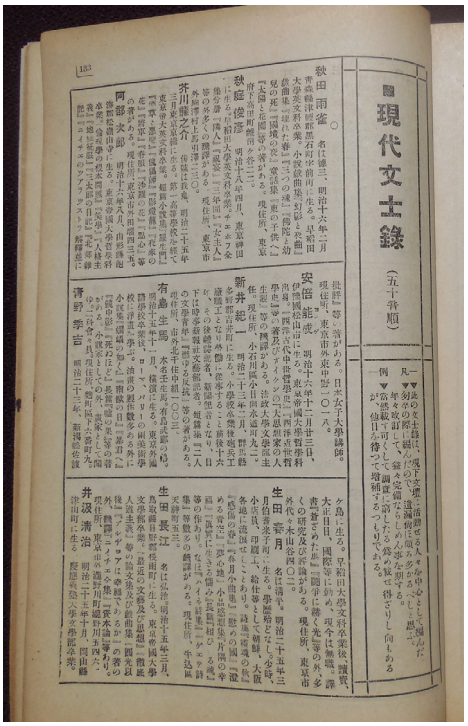
ちなみに、尾崎士郎と藤村千代の記載例は以下のごとくである。

○尾崎士郎　明治三十一年二月五日、愛知県幡豆郡横須賀村に生る。早稲田大学中途退学。『逃避行』『犠

牲者の群』の長篇の外、フェルディナンド・ラッサルレ等の翻訳がある。現住所、東京府下荏原郡馬込村中井一五七八。

○藤村千代　明治三十年十二月（ママ）二十八日、山口県玖珂郡岩国町川西に生る。岩国高等女学校卒業。数年間カフエーの女給をしたことがある。短篇集『脂粉の顔』の外に多くの短篇がある。現住所、東京府下荏原郡馬込村中井一五七八。

『文章倶楽部』（大正 13 年新年特別号）新潮社



『文章倶楽部』大正 13 年新年特別号「現代文士録」

【コラム】4　馬込文士村

〈馬込文士村〉の前史との言うべき尾崎士郎と藤村千代の同棲は、大正 10 年『時事新報』の懸賞小説に藤村の処女作「脂粉の顔」が第一席入選し、第二席が尾崎の「獄中より」であったことをきっかけとしている。翌年大森に住んでいた室伏高信の紹介で二人は知り合い、たちまち恋仲となった。12 年には菊富士ホテルから大森新井宿の寿館に移り、5 月には『都新聞』学芸部長上泉秀信のすすめで、馬込の畑の中の農家の納屋を買い 6 畳一間と土間の家を建てて二人の愛の住処とした。これが上記の住所馬込村中井一五七八番地の住居である。関東大震災の三ヶ月前のことである。大震災の翌年、吉屋信子は大森不入斗（いりやまず）に母親と家を持ったが、ここへ藤村が訪ね、以後親しく交流するようになった。大正 15 年には広津和郎が馬込に家を構え、萩原朔太郎も馬込村平張一三二〇に移転し、翌年には朔太郎のすすめで三好達治も近くに越してきた。さらに同じ昭和 2 年には北原白秋が馬込村霜田二八七へ、榊山潤も馬込村へ住み、さらに昭和 3 年 5 月には尾崎士郎のすすめで川端康成が大森子母沢から臼田坂へ、11 月には室生犀星が金沢から上京、大森谷中一〇七七へ転居、その後馬込東 3―763 に新築移転、竟の棲み処とした。こうした文士たちが、川端龍子、川瀬巴水、小林古径らの画家も含めて親しく交流を持ち大きなサロンを形成していったのである。

7　大正期最後の『明治大正文学美術人名辞書』（大正 15 年）立川文明堂刊

大正最後の年である大正 15 年 4 月に『明治大正文学美術人名辞書』という人名辞典が発行された。明治以降 60 年が経過し、文学者・美術家にジャンルを特化した我国最初の人名辞典であろう。ここに採り上げるのは、物故者は除いて現存の人物に関しては、現住所が記載されているからである。その意味では人名辞

典としては異例の存在であるが、我々の関心から見て極めて有益な住所付き名鑑ということになる。

松本龍之助編『明治大正文学美術人名辞書』（大正 15 年 4 月　立川文明堂刊　定価 5 円 50 銭）

【収録者数】 1630 名　総頁 953 ページ。巻末「名と号の索引」付き。（アイウエオ順）

【ジャンル】 小説、戯曲、詩、漢詩、短歌、俳句、川柳、評論、翻訳、新聞雑誌記者、漢学者、著述家、書家、画家、彫刻、塑像、鑑定家、美術関係諸家等。

【はしがき】 現存人物の現住所記載に関しては「諸家の現住所は将来も長く其の所に定住する人ばかりで無いから、寧ろ省略しようかとも思つたが、現在の住所が縦令前住所と変ずる場合があつても、有る方が幾らか便益あると思はれたので載せることにした。」と述べ、必ずしも積極的ではなかったことが窺われる。さらに「然るに諸家の住所中関東大震災以来移動甚しく、同一人で数回訂正を施したものも珍しく無い。」とあり、依然として関東大震災の影響が大きかったことが現住所の記載に困難を来したことを明記している。

【記載例】

○川端康成　カワバタヤスナリ（小）　　＊注―（小）は小説家の略

明治三十二年六月十一（ママ）日大阪市北区此花町に生れ中学校卒業後第一高等学校を経て東京帝国大学英文科に入学したが、後思ふところあつて国文科に転じた。これよりさき東京帝大の文科生間には幾度か文芸雑誌「新思潮」といふのが発行されたが氏は大正十年友人四人と共に第六次「新思潮」を創刊した。著作に「招魂祭一景」「油」等が、其の他最近の作としては小説「転生」評論「創作月評」「現代作家の文章を論ず」「文芸表現の理論」其他を「新思潮」「新潮」「文章倶楽部」等に続々発表して居る。近頃氏は挿絵小説といふものをも書いて婦人に通俗読物を提供してゐる。

現住所　東京本郷区千駄木町三八

○吉川英次　ヨシカワエイジ（川）　　＊注―（川）は川柳の略

明治二十五年八月十一日横浜市石川中村に生る。取立てゝ記すべき学歴は無い。幼時より印判屋の小僧、活版屋の丁稚、御用商人の小僧等を経て十五六歳の小間物行商人、目あきの子供按摩、土工の群に入つて少年労働者の体験があり、永きは船舶労働者二年、二十歳より三十歳迄の十年間は古代蒔絵、象嵌品製作に従事し、大正十一年より東京毎夕新聞記者となつて家庭部に在勤してゐる。著書「親鸞記」の外「耳輪の話」「でこぼこ花瓶」などの童話数十篇、「古川柳隅田川考」などの川柳研究及滑稽小説等を書いてゐる。

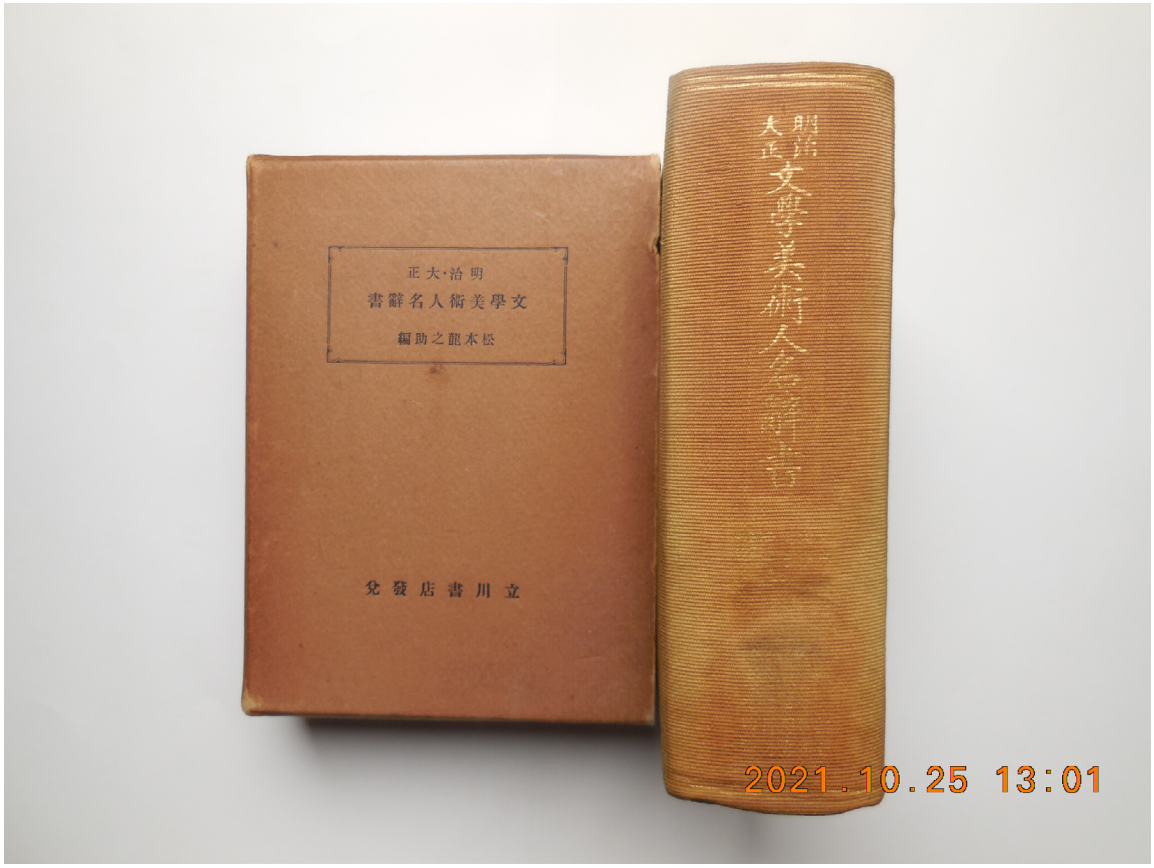
現住所　東京市本郷区駒込千駄木町六五

＊

編纂者の松本龍之助は、東京高等師範学校を卒業し奈良女子高等師範学校教諭などを勤めた教育者で、この『明治大正文学美術人名辞書』はほとんど独力で編纂したようである。発行は大阪市南区安堂寺町の立川文明堂。発行者は立川熊次郎である。これは講談小説「立川文庫」（たつかわぶんこ）で大成功を収めた出版書肆である。立川文庫とこの学術的人名辞書の取り合わせはいささか不似合いな印象を受けるが、関東大震災後、営業方針を見直し学校参考書にも手を広げて行ったようである。『明治大正文学美術人名辞書』の巻末広告にも、高等学校・専門学校・中学参考書として、『十八史略』『文章規範』『論語』『孟子』『枕草子』『徒然草』『新古今和歌集』などの注釈書が掲げられている。『明治大正文学美術人名辞書』も学術的人名辞典でありながら、「読む辞典」とも言うべき側面を有している。それは詩人、歌人、俳人、漢詩人など短詩形文学者に関しては、本人の略歴の後に代表作が引用紹介されているからである。小説家に関しては引用はスペース的に不可能だが、叙述は型通りではなく工夫が凝らされている。例えば、「広津和郎」の項では、「文章家として立つと同時に画家としても立ちうる自信をもつてゐる。」などと多才ぶりを紹介した後、「編者は嘗

て広津氏より「家の先代は柳浪といつたもので人口に膾炙してゐる「朝顔」の筆者であると聞いゐる」といふ話を聞いたが、其後編者の購入した古い読み本の中に「朝顔日記」といふのが見附かつた。中を熟読すれば芝叟といふ人の遺語を一返舎柳浪の著したもので、後に有名になつた浄瑠璃の種本なのである。」と付記してこの項を結んでいる。そして次の「広津柳浪」の項ではさらに考証を加え、広津家の遠祖蘭渓（儒者）の次子「馬田昌調は文藻があり「朝顔日記」を作つた。号して柳浪と云つた。氏は之を襲つて自家の号とした。」と記して、柳浪・和郎親子の項を連結しているのである。なお、現住所に関しては、父子とも「神奈川県鎌倉町字小町三三九」となっている。だが、これは関東大震災前の住所と思われる。柳浪夫妻は震災後、大森に転居しており、和郎は大正 13 年の「現代文士録」では「東京市外中渋谷字田川　藝術社内」となっている。藝術社は和郎が『武者小路実篤全集』を出版すべく創立したが失敗した出版社である。彼が松沢はま（カフエーライオンの女給）と馬込に家を持ったのは大正 15 年である。「コラム 3」にも書いたが、馬込文士村での交流が始まったのである。和郎の馬込の家（借家）は父柳浪の家とも近かった。ちなみに、『明治大正文学美術人名辞書』には、他にも親子で立項されている例がある。巌谷一六（修）と巌谷小波である。一六居士は故人だが書家として立項。永井禾原（久一郎）と永井荷風も同様である。久一郎も故人だが、漢詩人として立項。近代文学の範疇からは除け者扱いされて来たが、明治期に隆盛を見た漢詩文への目配りが利いた本書の特長を物語るものである。

ここで「記載例」に記した「川端康成」と「吉川英次」にも触れておきたい。川端に関しては、大正 13 年の『文章倶楽部』「現代文士録」の記述例と比較してもらいたい。大正 13 年に東大国文を卒業した川端はその前後も住所をいくつか変えているが、この人名辞書の住所は関東大震災に遭遇した時の下宿である。他方、吉川英次はこれ迄の文士録には立項されなかったが、後の「吉川英治」の本名である。数年後、吉川英治と誤植されたのを機に英治を正式にペンネームとしたものである。この時点では（川）即ち川柳作家・川柳研究家として立項されているところが興味深い。



松本龍之助編『明治大正文学美術人名辞書』（大正 15 年 4 月　立川文明堂刊）

【コラム】5　島田清次郎・高群逸枝など

この人名辞書の中で、大正 15 年という刊行時に着目しつつ、なお採り上げてみたい人物は多いが、とりあえず島田清次郎と高群逸枝の二人について触れておきたい。

▲島田清次郎　大正 8 年 20 歳の時『地上』によって一躍流行作家となり、天才作家と持て囃され巨万の富を得た島田清次郎だが、その傲慢な性格と奇矯な言動により次第に人気に翳りが見え始め、大正 11 年欧米遊覧の後、舟木芳江事件で人気は地に落ち、遂に統合失調症で養育院に保護入院されるに至る。『明治大正文学美術人名辞書』はその辺までを、文学営為を中心に作品名を挙げながら丁寧にまとめている。そして〈かかる問題（舟木氏令嬢事件）の発生以来氏の人気も衰えたやうであるが、元来鬱勃の氏は何れ将来何ものかを出すことであらう。著書には右の外に戯曲「革命前後」を改造社よりだしてゐる。十三年八月三十日長野県明治温泉に治療中同地笹原山中にて縊死した。〉と結んでいる。この文脈から見て、松本は大正 13 年以前に原稿を書き上げていたことが分かる。将来また立ち直り何事か成すであろうと予測しているからである。この期待から末尾の死の記述とは文脈上時制的に繋がらない。島田の将来への期待を述べて脱稿していた原稿にその後になって島田の死のニュースを得て急遽継ぎ足したものと思われる。ここまでは、この人名辞書の成立過程の一端が垣間見えて興味深いのだが、この死亡情報は誤報なのだ。この情報がどこから出たものか未詳だが、具体的地名まで明記されているところから見て、あるいは自殺未遂に終わったのかも知れない。それにしても、出版までに 1 年半もあったのに何故訂正されなかったのか疑問である。出版時、島田は未だ存命しており、彼が病死したのは昭和 5 年 4 月 29 日のことであった。『明治大正文学美術人名辞書』の島田の項は「故　島田清次郎」となっており、したがって現住所は記載なしである。ちなみに、この辞書と同年、半年後の 10 月 10 日に出版された相馬健作『文壇太平記』（萬世閣）の巻末に「文士住所録」があり、「島田清次郎　市外松沢村松沢病院」と記載されている。

▲高群逸枝　高群逸枝に関しては 1960 年代後半から 70 年代にかけて同じ熊本の石牟礼道子とともに時代状況の中で脚光を浴びた存在として、未だ筆者の記憶に鮮やかな人物である。（高群の方は 64 年に没していたが、全集が夫橋本憲三によって編まれ、関連書も次々刊行されていた。）だが、それは『母系制の研究』や『招婿婚の研究』など女性史研究のパイオニアであり、戦前平塚らいてうと『婦人戦線』を創刊したり、アナーキズム運動を通して女性史学、民俗学に志した女性としての存在であった。しかし、それ以前に詩人としてのキャリアがあり、大正期には詩人として注目される存在であったことはあまり知られていない。『明治大正文学美術人名辞書』には詩人としての「高群逸枝」が立項されている。だが、略歴はあいまいである。〈熊本生れといふ外、女史の生年月日も経歴も判然しないが、或る文芸雑誌の載せて居る處が誤無いものならば、女史は女工、乞食、詩人と言つたやうな、随分数奇な運命の持ち主であるやうだ。著作集に「日月の上に」「放浪者の詩」「美想曲」「妾薄命」「胸をいためて」「私の生活と芸術」等ある〉と記し、「私の生活と芸術」の一節を引用した後、詩を一篇引用している。現住所は不詳である。こうした記述からみると、編者松本龍之助はあまり積極的に高群について調査したのではなさそうである。膨大な人物をほぼ独力で調査編輯したことを考えれば、止むを得ないことであったかもしれない。詩人としての高群逸枝が立項されていることを以てよしとすべきだろう。ちなみに、先の相馬健作『文壇太平記』附載の「文士住所録」には、「高群逸枝　市外東中野一七二四」となっている。また、巻末広告には高群の新著として、長編詩『東京は熱病にかゝつてゐる』と評論『恋愛創生』（共に平凡社）が掲載されている。さらに付記すれば、相馬は『文壇太平記』の中で、与謝野晶子、宇野千代、中條百合子等と比較して、高群逸枝は全く違った立場にある。と述べ〈以上の女流は、全ての意味において個人主義的で情熱は個人主義的情熱、理性は個人主義的理性であるが、彼女はすべての意味において社会的である。〉〈他の女流はすべてが、「作家」として立つてゐる。だが、彼女は処女作「日月の上に」の冒頭に、反芸術至上を掲げ、民衆人の立場から文壇的生活を否定してゐる。また「放浪者の詩」において、自分は貧乏と虐待と虚無と嘲笑、これらのあらゆる社会のどん底からきたと云ひ、反抗と、さうしてその上に立つ建設の意識とを明らかにしてゐる。〉と高群逸枝の特異な文学的立場を位置付けている。

徳田秋聲の転居から見る「知」の移動と「地縁」の存在

大木　志門

はじめに　「知識階級」としての徳田秋聲

徳田秋聲は一般にインテリ型の作家とは考えられてこなかったし、実際に彼の学歴は旧制高等中学校中退である。もちろん医者で官僚だった森鷗外や帝国大学の教員を務めた夏目漱石は別格としても、尾崎紅葉門下から自然主義文学の波に乗って文壇の中心作家となった秋聲に、たたき上げのイメージはあっても知的階級のイメージは希薄である。

しかし、たとえ中退とはいえ所謂「ナンバースクール」である第四高等学校の前身にあたる学校で高等教育を受けた秋聲は、紛れもなく当時の国民の中では一握りの上位知識階層に属していた。そして、そのように捉え直してみると、彼の生涯における転居の履歴には、知識階級の移動という側面が見えてくるのではないか。もちろん秋聲の前半生、金沢と東京を中心にめまぐるしく転居したその移動の軌跡は、家庭やその他の事情で場当たり的に動いているに過ぎないのだが、そこには同時代の日本における「知」の偏在との相関性を看取することができるのだ。

本稿では、その徳田秋聲の転居の軌跡を自伝小説『光を追うて』(1938 年）や年譜から確認するとともに、それを「知」の移動という側面から捉え直してみたい。また、そこから見えてくる本プロジェクトの住所録データベースの可能性を考察するものである。なお、参考として掲載した各地の写真は、全て筆者が過去に撮影したものである。

1　秋聲の金沢時代

まずは秋聲の出生から第四高等中学校時代までの金沢での足跡を確認してみたい。

1871 年（明治 4 年）　金沢県金沢町第四区横山町 2 番丁 1 番地（現：石川県金沢市横山町 5 丁目 9 番地）に生まれる。
1874 年（明治 7 年）　浅野町（現：金沢市小橋町番地不明）に転居。
1883 年（明治 16 年）初冬、御歩町 2 番丁 4 番地（現：金沢市東山 1 丁目 18-26）に転居。
1884 年（明治 17 年）6 月、味噌蔵町裏丁 5 番地ノ 2（現：金沢市兼六元町 9-53）に転居。
1886 年（明治 19 年）馬場五番丁 14 番地（現：金沢市東山 3 丁目 36）の次姉きんの婚家に転居。

加賀八家の一つの横山家の家臣だった徳田家は、維新期もその主家の名がついた横山町にあり、徳田家の七人兄弟の六番目の子である末雄（秋聲）も、横山町の家で生まれている。父・雲平は、加賀藩の家老・横山三左衛門隆平の家人で、祖父・徳田十右衛門（七十石）の家督を明治元年に相続していた。なお雲平は四度結婚をしており、秋聲の実母・タケの前に三人の妻といずれも死別している。タケは前田家の直臣・津田采女（四百石）の三女であり、津田家は徳田家より家格は上だが、このころすでに没落していた。

なお長く横山家に仕えた徳田家であったが、その判明する限りの初代は、小松の地方豪族で一向一揆の指導者であった。父・雲平が明治 3 年に金沢市に提出した「先祖由緒并一類附帳」（金沢市立玉川図書館近世資料館蔵）には「九世祖父　徳田故志麻」として「能美群岩淵村ニ居住仕其辺致領知」「一向一揆之〔節〕戦死仕候」とある。この人物は岩淵城（現:小松市岩淵）および千代城（同千代町）の城主だった志摩守徳田重清（小次郎）のことで、天正 8（1580）年に加賀市の松山城に立てこもって柴田勝家軍と戦ったが敗北し、その首は織田信長の元に送られたという。現在の千代町にある八幡神社（千代城の二の丸にあった）の由緒には、徳田

志摩が城主だった旨が記されている。徳田家はその後三代を浪人として過ごし、五代徳田十右衛門が正徳３(1713)年に横山家に足軽として召し抱えられることになった。『光を追うて』には「何代目かの先祖」が横山家に従って金沢に移ってきた「関東の士(さむらい)」とだけ記してあるため、このあたりのことは秋聲の父の代にははっきりと伝わっていなかったことが想像される(注)

（注）：もちろん徳田志摩より前の先祖が関東から来た可能性はある。なお以上の徳田家の先祖に関わる内容は過去に『ふるさと人物伝』（北國新聞社、2010 年）のコラムで発表したことがあるが、入手しづらい文献のため筆者が当時撮影した写真とともにここに再掲した。

明治維新後の徳田家は、家運が傾いてゆくにしたがって繰り返しの転居を余儀なくされた。秋聲の幼少期に一家は横山町から当時は場末の浅野町へ移り、のち金禄公債の投資の失敗の補償として譲り受けたという御歩町(おかちまち)の屋敷、ほどなく長兄・直松が弁護士試験に失敗した後は味噌蔵町へと移り住み、次いで結婚した二番目の姉・太田きんの一家と同居するようになる。特に御歩町以降の転居は慌ただしく、坂を転がり落ちるような家計の逼迫が想像されるが、もっとも父・雲平の弟の家では娘を芸者に出すに至ったので、秋聲の一家はそこまで追い詰められなかっただけ幸運であったと考えるべきかも知れない。実際に末の男子として生

小松市千代町の八幡神社

八幡神社由緒

まれた秋聲も、金銭的なゆとりこそないにしても旧士族として様々に文化的な利益を得ていたのである。

秋聲が生まれた時期の金沢は、東京、大阪、京都、名古屋に次ぐ人口を持つ大都市であり、北陸地方の「知」の集積地でもあった。『光を追うて』を読むと、市内には劇場や新刊書店・貸本屋などがあふれていたことが分かる。特に幼い秋聲が好きだったのが、9 才の時、母に連れられて初めて入った近所の芝居小屋（浅の川桜馬場芝居）であり、その魅力にとりつかれ、最初は三番目の姉・かをりとともに、やがて一人でも小屋に入り浸るようになった。この小屋ははじめ卯辰山開拓にともない山頂に設けられたが、明治 4 年より浅野川沿いの場所（現：東山 3 丁目附近）に移り「浅野川（桜）馬場芝居」として開業、明治 28 年まで営業した。

また秋聲のような金沢の青少年が明治の新しい文学に触れるのには、貸本屋がもっとも身近な場所であった。秋聲も自宅から近い木町 1 番丁（現：金沢市東山 1 丁目）の「寺田」や、南町の「棚田」などに出入りし、末広鉄腸『雪中梅』、東海散士『佳人の奇遇』、二葉亭四迷『浮雲』、坪内逍遥『当世書生気質』、幸田露伴『露団々』、尾崎紅葉『拈華微笑』、森鷗外『文づかひ』などの「明治中葉の文運の所産」を読みふけったという。明治 21 年 4 月には第四高等中学校補充科に入学するが、その時代に同郷の鏡花の東京での動向を聞き知ったのもその「棚田」においてであった。

秋聲は養成尋常小学校（現：馬場小学校）から金沢区高等小学校（現：小将町中学校）を経て、石川県専門学校へ進み、前述のように明治 21 年の学制改革によって開学した第四高等中学校補充科へ編入学する。秋聲は石川県専門学校から改組された第四高等中学校に入ったので、半ば内部進学のような形だったが（とはいえ厳しい入学試験はあったようだ）、外から試験を受けた泉鏡花は入試に失敗している。このため鏡花は先に上京して紅葉門に入ることになったのだ。

秋聲が第四高等中学校で個性豊かな教師陣や友人たちとの交流の中から文学への関心を深めていったことは『光を追うて』の中に詳しく書かれている。なかでも日本で初めて Gouin Method を英語教育に導入したと言われるカナダ人の Daniel Rial McKenzie による英文法の授業や、三宅少太郎（号・真軒）の漢文の授業のことを思い出深く描いている。三宅は郷土の漢学者として知られ、前田家の尊経閣文庫の目録編纂にも従事した人物で、のちの短篇「青柳先生」（明治 35 年 1 月「文芸倶楽部」）のモデルである。

青年期の秋聲は近所の漢学塾に通うだけでなく、漢方医の津田道順の子息に数学の補習を受け、姉・きんの夫・太田為之が蘭方医の弟子に英語を学んでいたので彼から英語も習っていた。前述のように家計は極めて苦しかったが、秋聲は言うなれば各種の「文化資本」（ブルデュー）を受け継ぎながら成長したのである。むしろ家が没落していたゆえに、老父・雲平は末の息子に立身出世の厳しい時代を生きてゆくための教育を与えようとしたのであった。

2　最初の上京と放浪時代

続いて、秋聲が最初の上京に失敗し、大阪放浪時代を経て郷里に戻ってくるまでを見てみよう。

1892 年（明治 25 年）　3 月、桐生悠々と上京し八丁堀の大工宅に仮寓。尾崎紅葉を訪ねるが弟子入りに失敗。5 月、大阪に行き、長男直松のもとに寄宿（西区京町堀上通 2 丁目長安寺）。6 月、母方の従姉の嫁ぎ先である北区天神橋筋 1 丁目 91 番地（現：天神橋 1 丁目 11 番地）の笹島宅に仮寓。役所勤めをするが続かず。

1893 年（明治 26 年）　4 月、金沢へ帰郷。御歩町の借家に母と妹とともに住む。9 月末、自由党機関誌「北陸自由新聞」の編集に関わる。

1894 年（明治 27 年）　3 月、第四高等中学復学のための試験を放棄。長岡へ行き「平等新聞」の記者になる。

秋聲の第四高等中学時代の友人・知人には、親友の桐生悠々をはじめとして、国府犀東（漢詩人）や藤岡作太郎（国文学者）、中山白峰（紅葉門下でのち新聞人）など文化・文学の方面で活躍した者たちや、小倉正恒（住

友総理事･大蔵大臣)、小幡酉吉（外交官)、八田三喜（旧制新潟高校初代校長)、三島太郎（朝鮮銀行頭取）など、政治･教育・実業の分野で活躍した者たちが多くいた。他にも秋聲に漢学の面白さを教え、上京時に見送りに来てくれた美貌の青年・太田四郎や、浅野川大橋での橋場町涼みで秋聲に作家への道を勧めた上級生の佐垣帰一らのことが『光を追うて』には印象深く語られている。このうち何人かは尋常･高等小学校からの仲であり、秋聲が通っていた学校は屋敷町に近いため良家の子女が多かったことがうかがわれる。彼らとの関わりは上京後も、さらにそのうち何人かとは生涯続くことになったが、このように文壇人に限らない人脈を有していたのが作家としての秋聲の強みであり、それは第四高等中学校からの縁なのである。

桐生悠々との交友の中から文学への憧れが抑えきれなくなった秋聲は、兄を説得して学校を中退し、明治25年の3月末に悠々と連れの少年との三人で東京に向かって旅立つことになった。彼らが上京したころは北陸本線が金沢へ延伸する以前であったので、一行は北国街道（下街道）を東上して直江津まで徒歩で出ることにした。そして市内の大樋町境を出て森本・津幡を抜け、越中境の難所・倶利伽藍峠を越え、今石動・高岡・魚津を経て、黒部川を渡って越後に入り、北国街道一の難所である親不知海岸を通って直江津まで達する長い道のりであった。直江津からは生まれて初めての汽車に乗り、長野で一泊し、信越線の軽井沢－横川間が開業前でまだトンネル工事中であったために碓氷峠を徒歩で越え、再び汽車で上野に到着するまでに四日間を要したという。ただしこれだけ苦労して上京したにも関わらず、この時は尾崎紅葉への弟子入りにあえなく失敗している。

なお明治6年に金沢市高岡町で下級武士の三男として生れた桐生悠々（本名政次）は秋聲と高等小学校時代以来の旧友で､第四高等中学校時代には二人で硯友社の『新著百種』を真似した回覧雑誌「未開稿」を作っていた。前述のように明治25年にともに上京したが、紅葉への入門に失敗した後は悠々のみが金沢へ戻って復学し、この時代に当時『北國新聞』の主筆として招聘されていた石橋忍月の知遇を得て同紙に小説『紅花染』を発表することになる。その後東京帝国大学から東京火災、博文館などを経て、新聞記者としての人生を歩み「信濃毎日新聞」「新愛知新聞」などの主筆を歴任することになった。

その晩年の昭和8（1933）年に関東防空大演習を批判して筆禍事件を起こしたことなどで気骨の新聞人として知られる悠々だが、実は新聞社入りしたのは秋聲の方が早く、大阪放浪を経て金沢へ出戻った秋聲は、金沢市南町にあった自由党の機関誌「北陸自由新聞」に記者として勤めることになった。ここから、当時の知識階級の働き先としての「新聞社」の存在と、そのようなマスメディアが存在する地方都市であった当時の金沢の存在が浮かび上がってくる。

やがて秋聲は、同紙で知り合った新聞人・渋谷黙庵（虎太郎）の英語教師のような役割で、長岡の「平等新聞」へと移ることになる。『光を追うて』では、この金沢・長岡での記者時代は不満げに書かれているが、とにかくここでは秋聲の「知」（学歴と語学力）が役に立ち、糊口をしのぐことができたのは事実である。秋聲は記者としてこの時代に長岡に帰郷した博文館の大橋佐平を知り、のち渋谷のつてで代議士・小金井権三郎（小金井良精の兄）の紹介状を得て再上京後に博文館に入社することができたのであった。

3　二度目の上京と紅葉門下の時代

二度目の上京後の秋聲の足取りはかなりめまぐるしい。

1895年（明治28年）　1月、二度目の上京。「北陸自由新聞」時代の友人・窪田の縁者の神田今川小路の家へ間借り。2月、芝愛宕下の電信学校予備校に住み込み。4月、日本橋区本町三丁目の博文館に採用されて住み込み（時に八重洲河岸の館主の家にも滞在)。このころ田岡嶺雲もいた弥生町（現:文京区弥生）の下宿「横山」に一時居住か（秋聲「大学界隈」)。

1896年（明治29年）　11月、博文館を退社し、神田錦町の今井館（窪田のいた部屋）に下宿。芳賀矢一の仕事を手伝う。12月31日､箪笥町の紅葉宅裏の崖下の二階屋を借りて共同生活。小栗風葉､柳川春葉、田中涼葉、泉斜汀、中山白峰（前述のように秋聲の学友で紅葉の学友の弟でもある）らと同居。

1898 年（明治 31 年） 7 月、白金の魚籃寺下の長田秋濤宅へ翻訳の補助に行き、近くの秋濤別宅で法律書生と一時同居。のち十千万堂塾に戻る。

1899 年（明治 32 年） 2 月、十千万堂塾解散、牛込区筑土八幡前柿ノ木横町（現：新宿区筑土八幡町）の下宿「雍城館」に転居。12 月、京橋の読売新聞入社

1900 年（明治 33 年）「通勤に不便を感じ、再び神田の下宿へ移り」（「光を追うて」）徒歩で通勤（筑土からは人力車通勤だった）。

尾崎紅葉旧宅跡

紅葉宅崖下の十千万堂塾跡地

筑土八幡神社

この二度目の上京で世話になった、『光を追うて』では一橋の高等商業に勤める「久保」として登場する友人は、のち関西に移って神戸高等商業学校に勤務して書記をつとめた窪田安次郎という人物である。秋聲に電信学校予備校の英語教師の仕事を紹介したのもこの窪田であり、つまりここでも新聞社時代の人脈が役に立ったのである。

その後の秋聲は博文館への就職がかない、同社に住み込み勤務をすることになる。なおこの時期に一時住んだと書いている弥生町の下宿は「横山」という名前だったようだが､金沢の横山家との関係は不明である。この博文館時代に鏡花と再会し、尾崎紅葉への再訪を薦められて今度は入門を許可されることになった。

やがて小栗風葉の発案で紅葉宅の裏の住宅を借りて、風葉、春葉、斜汀（鏡花の弟）、涼葉らと共同生活の時代がしばらく続く。いわゆる「十千万堂塾」の時代である。この紅葉宅は「明治文壇の一大中心地」（野口冨士男『徳田秋聲傳』1965 年、筑摩書房）であり、周辺に多くの文壇人たちが居住していた。のち塾が解散し

たため、秋聲は筑土八幡前の下宿「薙城館」へと転居したが、その後紅葉の斡旋で読売新聞に入社したため、今度は通勤の便からさらに神田の下宿へと移ることになる。

この時代の秋聲は、他人の下宿や屋根裏に仮寓したり門下生同士で共同生活をしたりするなど経済的には極めて厳しい時代だったが、それでも何とか生きてゆけたのはやはり金沢時代に得た「知」の資本によってであった。前述の新聞社時代の人脈もそうであるが、窪田から神田の電信学校の英語教師の職を紹介されたように、何より英語という武器があったことは大きかった。紅葉に最初の原稿料をもらったのが英語のペーパーバックの一部を破って渡され、それを翻訳した稿料だったように、小説家として食べられない時代を支えたのはこの英語力であった。秋聲が明治 33 年 2 月 19 日付「太平洋」掲載の「文士内閣大見立」で「外務大臣秘書官」に見立てられたことは知られているが、のち紅葉が晩年の仕事であるユーゴー『ノートルダムドパリ』の翻訳『鐘楼守』の文飾を行うに際し、白羽の矢が立てられたのも秋聲であった。

4　東京での足取り

続く再上京後の秋聲の足取りは以下の通りである。

1901 年（明治 34 年）　3 月、三島霜川とその妹三人と本郷区向ヶ丘弥生町（現：文京区弥生）3 ノ 11 で共同生活開始。4 月末、読売退社。7 月末、薙城館に戻る。年末より大阪に行き、九条にいた長兄の徳田直松の下宿に滞在。

1902 年（明治 35 年）　直松の妻・八重の親戚を頼って別府にしばらく滞在。4 月、帰郷して薙城館を出て伝通院裏手の小石川区小石川表町（文京区小石川）108 番地で三島霜川と同居。同窓の田中千里の建てた借家に太田四郎（いずれも帝大生で金沢の病院長の子弟）の紹介で入ったもの。やがて手伝いに来た小沢はまと生活を始め、霜川は出て行く。

1903 年（明治 36 年）　6 月末から紅葉の翻訳『鐘楼守』の文飾のため牛込柿ノ木横丁の下宿「紅葉館」へ籠もる。

1904 年（明治 37 年）　5 月、家庭問題から単身で菊坂（文京区本郷）に転居。坂の上の下宿であった。8 月頃、本郷森川町 1 番地（清水橋近傍）に転居して家族と再び同居。清水橋（「空橋」）は西片町と森川町にかけられた陸橋で家は右側橋詰めの崖の中腹だった。

1906 年（明治 39 年）　3 月、小石川富坂へ転居。砲兵工廠の近くで川端玉章邸の前の住居だった。過去に殺人犯の妾が住んでいたことが判明し転居を決意。4 月末、はまが見つけてきた本郷区森川町 1 番地（現：本郷 6 丁目）の家に転居。この地で生涯を終えることになる。

明治 33 年に「読売新聞」に連載した『雲のゆくへ』の成功で作家生活が軌道に乗り始めた秋聲は、向ヶ丘弥生町で三島霜川とその妹二人と共同生活を始める。しかし霜川兄妹の放恣な生活に辟易してそれを解消し、読売退社と大阪・別府行き（いわゆる「西の旅」）を経て、薙城館に戻ったのは「先生や、鏡花、風葉、春葉氏が、牛込にゐたから」であると秋聲は書いている（『思い出るまま』1926 年）。

のち小石川表町で再び三島霜川と同居を始めるが、その家に手伝いに来た小沢はまと生活が始まり、居づらくなった霜川は出て行くことになる。なおこの家は徳川将軍家の菩提寺である伝通院（文京区小石川）裏手にあり、金沢の第四高等中学校時代の同窓が建てた借家である。秋聲の大家だった田中千里は鏡花の幼なじみでもあるが、彼が帝国大学へ通うための学費をまかなうために建てたものであった。田中は帝大卒業後に内務官僚となっている。

その後、牛込柿ノ木横丁の下宿「紅葉館」へ単身で移ったのは、前記の翻訳の文飾の仕事のためであるが、師である紅葉へ結婚を伝えていなかった事情もあるようだ（秋聲のはまとの入籍は紅葉没後の明治 37 年）。さらに子供が生まれ家族が増えてきたために本郷菊坂の家へ単身で下宿し、ようやく明治 37 年夏に家族で本郷森川町の清水橋近傍の家に移った。この清水橋は文京区の旧西片町と旧森川町の間にかけられた陸橋で、「唐橋」

「空橋」とも呼ばれ、もとは清水が流れていたのでこの名が付いたという。樋口一葉も図書館通いに渡った橋で、家族が住んだのは崖の中腹の家だったが、後に同地に住んだ嘉村礒多の「崖の下」の舞台でもある。

次いで家族で転居した小石川富坂の家は砲兵工廠の近く、現在の文京区春日一丁目から小石川二丁目にまたがり後楽園遊園地の裏手あたりで、鳶が多くいたので鳶坂、それが転じて富坂となったという。一家が住んだのは画家・川端玉章邸の前の住居だった。しかし殺人犯の妾が住んでいたことが判明し妻が嫌がったため、すぐにまた転居先を探す必要が生じた。そして本郷森川町一番地のはまの見つけてきた住居に移り、ここが秋聲の終の棲家となったのである。

清水橋（空橋）

森川町の徳田秋聲旧宅

この時期の秋聲の転居の軌跡から見えるのは、家族の増加にしたがって本郷の帝国大学周辺を転々とし、結果的に妻が気に入った森川町に落ち着いたということである。と言うと秋聲には主体性がなく、また偶然の要素が強いように聞こえるかも知れないが、森川町は岡崎本多家の江戸屋敷跡であり、岡崎本多家は加賀八家の本多家とルーツがつながっている。秋聲がのち敷地に同居していた住人の立ち退き騒動を描いた「初冬の気分」（大正 12 年 1 月「中央公論」）に「××男爵家の土地管理所」に仲裁を依頼したとあるのも本多家であろう。

また言うまでもなく帝国大学は加賀前田家の旧屋敷であり、周辺には家臣の土地が多く存在し、そのため明治になって上京者たちが集った場所（貸家、下宿屋等）であったようだ。小石川表町の田中千里の借家もそのような経緯で同地に建てられたのである。さらに、帝国大学は前述の桐生悠々や早川千吉郎（西片町在住で大蔵省から三井銀行、南満州鉄道）、井上友一（早川の義弟で内務省から東京府知事）、小倉正恒（内務省から住友財閥を経て大蔵大臣など）ら大勢の元四高生たちが通った場所でもある。つまり金沢出身の秋聲にとって、土地的にも人脈的にも何かと親しみの深い場所であったのだ。

このように金沢から長岡、そして東京での尾崎紅葉宅（牛込）、博文館（日本橋）、読売新聞（京橋）の通勤圏内に居住し、その後は帝大の周辺に居住し続けた秋聲の転居は、「知」の集積地を起点にした転居の軌跡であったと考えることができるであろう。秋聲の転居の履歴を通して「地縁」と「知縁」を媒介にした「移動」の軌跡が浮かび上がってくるのだ。

おわりに　住所録データベースの課題と可能性

この研究期間の間に研究グループがアーカイブ化した住所録データベースでは、秋聲についてはほぼ森川町一番地の家のデータしか存在しない。これは当然と言えば当然であり、「文壇」が編成されてゆき住所録が必要とされるようになる時代と、秋聲の転居の時代は平行しているからだ。また公刊された「住所録」については、ある程度著名な人物の住所のみが記載されているからだ。特に秋聲は文壇に定着し森川町の家に落ち着いて以降は生涯一度も転居しなかったので、直接的にデータベースから得られる情報は少ない。それ以前、つまり作家として知られるようになる以前、あるいは「文壇」が成立して住所録のようなものが必要とされる時代以前の足取りを追うことは、現状のデータベースからは不可能なのである。

これは現時点での住所録データベースの課題とも言えるが、同時にここから本データベースの可能性も見えてくる。つまり、このような個々の作家の伝記的情報を加えることで、より精緻であると同時に、ダイナミックな知の運動、特に地方と都市部を横断するような動きが見えてくるのではないかということだ。もちろん、それは機械的にできる作業ではないために実現には困難が伴うものではあるだろう。また、見てきたように秋聲の移動は金沢の旧制学校を中心とした様々な人脈と関わっていた。よって作家だけではなく、諸領域の文化人や経済人、官僚、政治家などのデータも含めることで、文学に限らない「知」の偏在や移動に関わる複数の要素を可視化することができる可能性もある。いずれにせよ、本格的なデータ解析には工学的な知識を導入する必要があるであろうが、研究期間内に得られた知見は今後の研究の可能性を開くものであるはずだ。

薄田泣菫宛書簡からみる作家の移動と交流

掛野　剛史

1　はじめに

岡山県倉敷市は、倉敷市連島出身の薄田泣菫（1877-1945）の遺族から寄贈された資料1700点以上を所蔵している。「薄田泣菫文庫」と総称されるその資料体は、2004年11月に薄田泣菫長男の薄田桂氏の長女、次女、三女から寄贈を受けたのが最初で、さらに2007年11月、2008年4月にも追加寄贈を受けた。さらに2010年2月には泣菫の弟薄田鶴二氏の長男から寄贈を受けた。その後も追加寄贈がなされ貴重な資料となっている。

筆者は2009年から2019年にかけて、薄田泣菫文庫研究プロジェクトチームの一員としてこの文庫の調査研究に携わった。資料の多くは薄田泣菫に宛てられた書簡であり、その生涯にわたっての大量の宛書簡が残る。この宛書簡については、すでに『倉敷市蔵　薄田泣菫宛書簡集　作家篇』『倉敷市蔵　薄田泣菫宛書簡集　詩歌人篇』『倉敷市蔵　薄田泣菫宛書簡集　文化人篇』（八木書店、2014～2016年）として3冊の書籍にまとめており、その成果を公表してきたのだが、本稿ではこの宛書簡を資料として、明治大正昭和にかけて薄田泣菫を基点とする作家を中心とした文化人の移動、交流の様相を浮かび上がらせてみたい。

薄田泣菫自身は、詩人として出発しながら、後には大阪毎日新聞社の学芸部長として腕をふるうことになる。彼の人生の展開とともに受け取る書簡も変化していき、全体として一人の文化人の交友関係と移動の様を動態的に捉えることができるだろう。

もちろん資料的な限界もあることは確かである。薄田泣菫には三人の子供がいたが、薄田泣菫文庫が所蔵するものは、そのうち長男が所有していたものに限り、長女、次女が所有していたものは含まれない。その意味では、現在の薄田泣菫文庫が所蔵する資料をさらに上回る膨大な資料が存在し、薄田泣菫文庫の資料はその一部であることが推定される。また後にも触れるが､書簡は特に親しい間柄でやりとりがなされる場合、発信者の住所や、発信年月日を記さないことが多い。書簡をその移動と交流の様を跡づける際には、そうした資料がはらむ落とし穴にも注意する必要があるだろう。

ただこのことを踏まえた上でも、やはり薄田泣菫文庫の資料が上記の問題を考察する可能性を秘めた魅力的な存在であることは間違いない。今後の一層の分析が期待される。

2　薄田泣菫宛書簡の検討

薄田泣菫文庫の資料のうち、前述の『倉敷市蔵　薄田泣菫宛書簡集』全3巻に収録された書簡は564通だが、収録できなかった書簡も含め、現在のところ把握している書簡は1654通ある。この内訳をみると、発信者の住所記載（県名のみなども含む）があるものが1074通で、ないものは580通となる。また、書簡の発信年の記載や消印があり、発信年がわかるものが1352通となる。書簡から移動や交流の様をうかがうには、この二つの情報が必要になるが、発信住所と発信年の二つの情報がともにわかるものは948通になる。これを『薄田泣菫読本』（翰林書房、2019年）で示した薄田泣菫の活動時期によって区分すると以下のようになる。

①出発期　1877-1898（22年間）　12通
②詩人としての絶頂期　1899-1906（7年間）　377通
③模索期　1907-1911（5年間）　192通
④大毎編集者としての活躍期　1912-1925（14年間）　203通

⑤随筆家としての円熟期　1926-1945（20 年間）　153 通
⑥没後（修子宛）　11 通

没後に泣菫の妻宛に送られた 11 通も含むが、②の 7 年間の書簡が最も多い。浦西和彦はかつて、薄田泣菫文庫の書簡について、泣菫が意図を持ってあえて残した書簡であることと述べていたが（「座談会　倉敷市蔵薄田泣菫宛書簡　収集・調査・公開」『倉敷市蔵　薄田泣菫宛書簡集　文化人篇』八木書店、2016 年）、泣菫が自ら書簡を残すにあたって、詩人として活躍した時期の書簡を多く残したということは、彼の自己認識にかかわって少なくない意味を持つだろう。

また、発信地がわかる書簡 1074 通を発信地によって区分すると、国外、外地からが 72 通、国内からが 1002 通となり、青森、山形、茨城、群馬、埼玉、山梨、富山、鳥取、徳島、高知、宮崎、長崎、鹿児島、沖縄を除く 33 道府県から発信されている。この書簡をさらに発信地ごとに細かく分類すると以下のようになる。

東京府からが 462 通（46%）うち、発信年記載あり 416 通（44%）
京都府からが 160 通（16%）うち、発信年記載あり 141 通（15%）
大阪府からが 119 通（12%）うち、発信年記載あり 103 通（11%）
岡山県からが　65 通（6%）　うち、発信年記載あり　54 通（6%）
神奈川県からが 39 通（4%）うち、発信年記載あり　36 通（4%）
兵庫県からが 31 通　（3%）　うち、発信年記載あり　29 通（3%）

東京からの書簡が約半数を占めるのは当然だが、京都や岡山からの書簡が目立つのは泣菫の履歴を裏書きするかのようで興味深い。以下ではこれらの書簡のデータに泣菫の履歴を重ねてみたい。

3　宛書簡の経年変化

薄田泣菫は 1877 年、岡山県浅口郡大江連島町（現　倉敷市連島）に生まれ、地元の小学校、高等小学校に通ったのち、1891 年 9 月　岡山県尋常中学校（岡山市）に入学する。だが翌々年退学し、京都の室町上立売の竹内種太郎宅に下宿し、同志社予備校に通う。その後初めて上京、牛込区（現新宿区）宮比町 90 番地にあった宮内黙蔵（鹿川）の漢学塾聞鶏書院に寄宿する。

この時の「東京牛込下宮比町 9（ママ） 番地　宮内様内」という住所にあてた 1895 年 10 月 19 日着の鹿子木孟郎書簡が薄田泣菫文庫が所蔵する書簡では最古のものである。

その後、麹町区（現千代田区）六番町の漢学者三善正気方に寄宿しており、『新著月刊』に投稿して掲載されたデビュー作「花密蔵難見」を総題とする長短十三篇の詩が掲載される際に「丁酉文社」から送られた 1897 年 5 月 5 日の宛書簡も残っている。ここまでが「出発期」とした 1898 年までになる。

この後、徴兵検査のため間もなく郷里の連島に帰郷。検査で胸部疾患が見つかったためそのまま療養することになった。療養しながら詩作に励む中で、1899 年 11 月、第一詩集『暮笛集』を大阪の出版社、金尾文淵堂から刊行し、同社が刊行していた『ふた葉』の新体詩欄を担当することになる。詩人薄田泣菫の誕生である。

郷里で詩を発表していた泣菫だったが、第二詩集『ゆく春』刊行の打ち合わせのために、金尾文淵堂がある大阪へ向かい、そのまま大阪に在住することになった。

大阪では「大阪市東区南本町 4 丁目 36」の金尾文淵堂や、「東区谷町 8 丁目 190」の本長寺に住む。この時期、『小天地』の編集にもあたったことから、編集者という立場で受け取った書簡も増えている。1903 年 1 月に『小天地』は休刊になり、8 月には「京都岡崎町満願寺東裏　小林方」に転居した。

1904 年 2 月には再び帰郷。1905 年 10 月、京都へ戻る。翌年 11 月、「京都市寺町通鞍馬口下ル高徳寺町」

に転居する。12 月、市川修と結婚。
ここまでが「詩人としての絶頂期」という時期の 1899 年から 1906 年の 7 年間である。この時期の 377 通の宛書簡の発信先は、

東京 162 通（43%）
大阪 67 通（18%）
京都 46 通（12%）
岡山 30 通（8%）

という内訳になり、泣菫の行程を跡づけるかのように、発信者の住所も大阪、京都、岡山という結果になった。大阪の金尾文淵堂から刊行していた『小天地』の編集時期でもあり､関係者からの書簡が増える形になっている。
続いて 1907 年 3 月には、京都の「下長者町室町通り西入ル」に転居し、詩作以外の活動にも乗り出すが、成功をおさめることができず、1909 年秋には生活に窮して故郷に戻っている。「模索期」としたこの時期の宛書簡 192 通の発信先は、

東京 99 通（52%）
京都 29 通（15%）
岡山 19 通（10%）
大阪 10 通（5%）

という内訳となり、以前よりも大阪からの書簡が減っていることは、金尾文淵堂とのかかわりが減少したことの反映だろう。
この後の 1911 年に泣菫は旧知の結城礼一郎から、新しく大阪で創刊された帝国新聞社への誘いを受け、上阪し、兵庫県西宮市川尻 2603 に居を構える。帝国新聞社は半年ほどで退社するものの、翌年大阪毎日新聞社へ入社し、以降は兵庫、大阪を拠点に大阪毎日新聞社の学芸部で活動する。1912 年から 1925 年にかけての「大毎編集者としての活躍期」の宛書簡 203 通の発信先の内訳は、

東京 85 通（42%）
京都 35 通（17%）
神奈川 21 通（10%）
大阪 15 通（7%）

となっている。この時期になって急に神奈川からの発信が増えているのは、大阪毎日新聞社学芸部長として原稿依頼した芥川龍之介や高浜虚子からの返信を反映した形となっている。
パーキンソン病になった泣菫が大阪毎日新聞社を最初に休職したのは 1923 年だったが、その後回復することなく、1925 年に再度休職した。正式には 1928 年に退社したことになっているが、実質的には 1926 年以降は大阪毎日新聞社を離れていたといって良い。1926 年 9 月には住居を西宮市分銅町 23 に移し、戦中の疎開以外は生涯をここで過ごした。疎開のため 1944 年には倉敷市美和町、そして井原町に移り、最後は連島の旧居で息を引き取った。
「随筆家としての円熟期」とした 1926 年から没年までのこの時期の 153 通の発信先の内訳は、

東京 61 通（40%）

京都 29 通（19%）
兵庫 19 通（12%）
大阪 10 通（7%）
岡山 3 通（2%）

となっている。職を離れ自由な立場で随筆集を刊行している時期で、中央文壇とのかかわりも少なくなったことを反映し、東京からの書簡がやや減り、京都、兵庫にいた川田順や菊池幽芳など親しい友人たちの交流が増えたことがわかる。

4　作家の動態反映としての宛書簡

薄田泣菫宛書簡を作家の動態を反映する資料体として、人文知の移動を反映する資料体として考えるという試みは、今後、データの数を増やすこと、また一人の作家だけではない複数の作家のデータを集積する必要があるだろう。

だが、「書簡」という、当時の日常的なコミュニケーションツールとしてのメディアの特性を考えれば、「書簡」が作家の活動実態を反映した資料として重要な意味を持つことは間違いない。もちろん日常的なツールであればあるだけ、親しい間柄のやりとりなどでは、発信地や発信年の記載は省略される傾向にある。また親しい家族や友人とのやりとりと、そうではない間柄の形式的なやりとりでは書簡の内容や形式も異なってくるだろう。したがって、封筒や消印、文面に発信地や発信年がない場合などは、内容から発信地と発信年を推定、確定することなどの作業をすることで、データを増やしていき、より実態を正確に反映したデータとして作り上げていく必要がある。

これまで、薄田泣菫文庫の膨大な薄田泣菫宛書簡は、泣菫と作家達との交流の具体的な様相を明らかにしてきたが、今後こうした作業を行うことで、薄田泣菫宛書簡という資料は、一層の新しい可能性を生み出すことになるだろう。

【資　　料】

「現代文藝百家小伝」

『新潮』明治 43 年 1 月　第 13 巻第 1 号

解題

以下は、雑誌『新潮』第 13 巻第 1 号（明治 43 年 1 月 1 日）に掲載の、「現代文藝百家小伝」の小伝及び現在住所をテキスト化して、掲載したものである。この小伝の前に「目次」（いろは順）、「所載百家国別表」が付され、末尾に以下の文章が掲げられている。

▲本編は歳晩の計画に成り、多忙の際に執筆せるもの也。旁捜探索に勉めしと雖も、多少の誤謬脱漏のなきを保する能はず。且つ彼れに精くして、是に粗なるものあるは、諸種の事情已むを得ざりしによる。唯われ等の小事業が、何らかの裨益を与ふるを得べしとせば、即ち望み足る也。

▲文運の隆盛今まさに空前と称す。伝ふべき人の、何ぞこれに限らん。紙数限りあり、仮に、まさに録すべくして録せざるもの、少なからざるもの、少なからざる也。他日補ふの日ある可きを期す。

小伝の最後に、付された似顔などの図版は掲出した。

なお、本報告書中の小林修「文芸家住所録・住所付き名鑑集成の試み」で触れている『現代文藝百家小伝』（新潮社刊）は、雑誌『新潮』に比して約一月後の発刊である。両者間における記載の異同は少ないとは言いがたい。雑誌の判型は菊判、三段組。単行本は四六半截判、二段組であるなどの違いがあるが、同一箇所の同一活字が同様の切れ字（活字の欠け）の形態が見てとれること、およびこの時期はまだ活字を鋳造しなおして使うことが一般的ではなかったことから、雑誌の組み版活字を流用して単行本を組み直したと判断して間違いないだろう。上記「他日補ふの日ある可きを期す。」を即座に実践したといえる。

岩野泡鳴

淡路の人、名は美衛、明治六年洲本に生る。十九年大阪に遊学し、耶蘇教信者となり、次で一家挙つて父母の生地たる東京に移り、 同年明治学院に入る。二十一年始めて文学に筆を染め、歴史小説新体詩等の詩作をなす。二十一年より四年まで専修学校理財科に学び、傍ら国木田独歩と共に雑誌『文壇』を発行せり。二十五年より二十七年まで仙台東北学院に学び。此の間に耶蘇教を脱す。松島に行きて参禅打座せしことあり。二十七年､新体詩を『女学雑誌』に出しはじめ、また同社より悲劇『魂迷月中刃』を出版し、同年『歌舞伎新報』の編輯に従事す、居ること二年也。三十一年英語学校を麻布に設立す、苦心焦慮為に肺を病む。三十二年病を養うて琵琶湖畔に移り、傍ら英語教師をなす。禅癖已ずして、臨済宗永源寺派管長久松師に参し、また屢々叡山に登つて天台の研究をなす。三十四年詩集『露じも』を出版す。翌年東京に帰り住むに及んで文学的活動期に入り、或は寛、白星、林外等と共に韻文朗読会を開き、或は林外、御風等と東京純文社を起し、韻文雑誌『白百合』を発刊す。三十八年詩集『悲恋悲歌』『海堡技師』等を公にするに及んで、世評漸く動く。次で論文『神秘的半獣主義』を出版して、半獣主義を主張し哲学宗教並に芸術に対する伝習思想の打破につとむ。不幸にして時人の多く顧みる所とならず､四十年『新体詩史』『新体詩作法』を編す、中に自然主義的表象詩の本領を発揮せる章ありて、時論の題目となる。翌年『新自然主義』を発行し、四十二年樺太に行きて蟹の鑵詰業に従事せしと雖、事志と違ひて巨万の大貲を贏つ能はず、同年冬帰る。

氏は自然主義勃興以来、島村抱月、長谷川天渓等と共に論壇一方の将として常に堂々の筆陣を張り、神秘的半獣主義、自然主義的表象主義、心熱主義を主張して、時の文壇の為めに努むる所少からず。又新様式の脚本の発表せるもの数種あり。(現住、府下西大久保百五十八番地)

巌谷小波

近江の人、名は季雄。漣山人、大江小波等の別号あり。明治三年六月東京麹町区平河町に生る。父は当時元老院議官にして書道の名流たりし巌谷一六也。十二歳にして塩谷青山の晩香塾に入り、十六歳にして川田甕江の家に寓し、独逸協会学校に学ぶ。十八歳、杉浦重剛の称好塾に転ず。漢学者の家に生れ漢学者の家に育てるも其嗜好は軟文学に存し、同窓の友、大町桂月、江見水蔭と小説家三幅対の名あり。在塾四ヶ年、其間に於て尾崎紅葉等と相知り、硯友社の一員となる。『妹背貝』等の作によりて、世の認むる所となれり。爾来長篇短篇の世に出てたるもの少なからずと雖も、其本領とする所は少年文学に在り。二十三年早くお伽噺『こがね丸』を公にせしより、少年文学は氏の壇場となり、作る所総べて童幼に熱愛せられ、博文館『少年世界』を刊するや、入りて其主宰となり、以て今日に至る。傍ら俳句を作り、角田竹冷等の秋声会に列して、楽天居小波の俳号あり。三十三年九月、伯林の東洋語学校講師に聘せられて赴き、三十五年十一月帰朝す。『洋行土産』の著以外、文壇に寄与する所あるを見ず。四十二年実業家の渡米するや、記録を嘱せられて其の行を共にせり。

氏、気和にして色温、社交の術に長じて知友朝野に多し。曾て文芸院等設立の議あり、文相知名の文士を其官邸に饗せるが如き、氏の斡旋に待つ所多かりしと云う。

一時後進の誘掖に尽くして、生田葵山、及び黒田湖山、西村渚山等其の門に出づ。現に『少年世界』主筆たるの外、早稲田大学文学部講師、文部省図書課嘱託を兼ぬ。(現住、東京市芝区高輪南町五十三番地)

泉鏡花

加賀の人、名は鏡太郎、明治六年を以て、金沢市下新町二十三番地に生る。父は金属の彫刻を業とし、母は宝生流能楽家の女なりき。父母の遺伝を受けて幼時より芸術の嗜好浅からず、殊に好んで怪譚口碑等を聞くを好む。後京に上りて故尾崎紅葉の門に入る。現に故紅葉門下の人として、文壇に在る人々の中、最も早く同門に入りしものは氏也。後郷里に帰りしが、処女作『冠弥左衛門』の地方新聞に掲載されたるに刺戟されて再び上京、紅葉の門に居る。それより『鐘声夜半録』『義血侠血』『予備兵』『夜行巡査』等の作あり、『義血侠血』は材を日清戦争当時の国民の愛国熱に取りたるものにして、なにがしの名によつて世に出づるや世評漸く喧し。『夜行巡査』に到るりて文名初めて高く、鏡花の名文壇に定まる。『梟物語』の作あり。その傾向に漸次ロマンチツクの俤を帯び、一種の怪談的物譚の風を生じ来る。その文勁健離奇、遠く人の模倣を許さず。筆をつくるところ。意表の修辞法と、印象的の措辞と白紙の上に連なりて、読過すれば恍として、夜煙の行くが如し、此の文心に魅せられざるもの稀なり。紅葉の逝くや小栗風葉と共に、出藍の誉を荷うて、時の文壇の重鎮となり、その一種妖嬌の筆致ますます霊気を帯び来りて、青年士女の崇敬

するもの頗る多く、遂に鏡花崇拝者の一団相集まりて鏡花会なるものを組織するに到る。

職歴は博文館編輯員、及び『新小説』記者たりし外は、唯だ小説を以て家をなせるのみ。著作としては『辰巳巷談』『湯島詣』『照葉狂言』『風流線』『高野聖』等最も有名にしてその他文集には『鏡花集』『春宵読本』『鏡花商品』等あり。（現住、東京市麹町区土手三番町三十番地）

生田長江

伯耆の人、明治十五年三月二十一日、鳥取県日野郡根雨村に生る。大阪桃山学院、東京青山学院中学、第一高等学校を経て、明治三十九年七月、東京帝国文科大学の哲学科を卒業す。在学中、上田敏等の『芸苑』に執筆し後金港堂発行『家庭文芸』の編輯に従事す。成美女学校英語教師となりしが二個年ほどにして退き、万朝報記者となる。四十一年暮れに退きて今日に到る。氏は大学卒業後、諸種の文学雑誌に評論を起稿し、批評界の一方に居る。著作は『文学入門』『外国文学研究法』等にして、別に森田草平等と共に小品文集『草雲雀』を出版したることあり。感化を受けたるは、自ら称して、馬場孤蝶上田敏をはじめ、夏目漱石等の諸氏にして、又友人森田草平、阿部次郎等の影響を受けたるもの極めて大なりといふ。近くニイチエの『ザラトウストラ』の翻訳を上梓せんとして執筆中也。（現住、本郷区千駄木林町百九十三番地）

生田葵山

京都の人、名は盈五郎、明治九年四月、京都市西京御幸橋々畔に生る。生家は造酒を業として大貨を擁す、その祖父は頼山陽等の当時の文人と交はり、代々文字の縁に薄からず。幼年時より青年期に入らんとするとき、故ありて生家頓に没落し、これより放浪的生活を送る。牧場夫、牛乳配達等具さに世の辛酸を嘗む。文字を嗜むによりて後巌谷小波の門に贄を執り、小説を以て聞ゆるに到る。古くより西欧文学の紹介を渉猟して、夙に文壇の新派を以て目せらる。その『自殺』『富美子夫人』『小俳優』『男の声』『虚栄』等は小説中の重なるものにして、嘗てその作『都会』（四十年二月文芸倶楽部所載）の発売禁止により文学対社会の問題、文壇に起りしことあり。明治四十年の後半ごろより屢々病みて筆に親しまず、目下横須賀の僑居に寓す。

馬場孤蝶

土佐の人、名は勝弥、明治四年を以て生る。馬場辰猪の弟也。十歳の時、全家東京に移る。幼児身体脾弱、為めに十一歳にしてはじめて小学校に入る。校は下谷区萱町忍岡小学校也。高等小学二年を以て退きたるのち、医学を修めんことを欲したれども、兄辰猪の勧むる所より、神田の三菱商業学校に入る。一年余にして其の校の廃せらると共に退き、十七年淡路町の開成中学の前身共立学舎に入る。後、第一高等の入学試験を受けたれども、再び応じて再び登らず、二十一年家に不吉の事あり、姻戚の庇下によつて明治学院の二年級に入る。此校にあつて島崎藤村、戸川秋骨と交はり、漸やく文芸と親しむ。二氏と共に明治二十四年六月業を卒へ、直に高知県高知市の私立共立学校に英語教師として聘せらる。二十六年の八月同地を辞して、東京に帰り、日本中学の予科に教鞭を執る。此の間に築地福音協会の牧師フイシヤーに日本語を教へし事あり。二十六年一月より発行されし雑誌『文学界』に初めて新体詩一篇を草す。又、巌本善治主宰する所の『女学雑誌』『評論』等にも寄稿せしことあり。爾後常に『文学界』に関係し、透谷、藤村、天知、秋骨等と共に同誌の同人となる。二十八年八月、近江の彦根中学に聘せられ、二十九年の冬、故ありて辞し、翌年一月京に帰る。同年二月浦和中学に聘せられ、これまた三十年十一月辞任して日本銀行に入る。銀行事務その性癖と合する所少く、三十九年八月之を退く。同年慶應義塾大学の文学科講師となり、四十二年四月より早稲田文科大学特種研究科に最近小説を講ず。

文学に入れる動機は性癖による事勿論なれども幼時のの読書と、青年時代に西欧の書籍を耽読せると、明治学院に学びし所の学科、多くは文学に傾き、その交遊せる戸川、島崎等と共に自ら文学に入りし也。一時文壇を去りしも、明治三十四年頃より新詩社の与謝野寛の頻りに奨するものありて、再び西欧の文学的の書籍を多読すると共に、又その紹介と翻訳とに勉むるに至れりといふ。曾て『明星』に山の人と署して『蒲鞭』の一文を掲げ、盛に当時の翻訳文学者の誤訳を指摘し、勁烈を極めたることあり。文集は三十五年『野守草』、次で三十六年『宿り木』（翻訳文集）を出し、三十八年に『連翹』を三十九年に『泰西名著集』を出版す。新体詩集には『花がたみ』『春駒』等あり、自身のみの作を集めたるにはあらず。四十二年『日々新聞』の客員となり、同紙上にゴルキイの『スパイ』を翻案して『探偵』と題せり。近く梓に上さんとす。（現住、東京市牛込区市ケ谷田町二丁目一番地）

萩原守衛

信濃の人、明治十二年を以て長野県南安曇郡穂高村に生る。始め不同舎に在つて洋画を学ぶ。素朴温厚、風采甚だ揚らず、屢々同窓の嘲笑を受けしも意に介せず、早く、堅実にして容易に抂ぐる能はざるものあるを示せり。巌本善治に知られ、諸種の方面に於て援助を受くること浅さからず、氏亦之に対する慈母を見るが如し。不同舎に学びし頃は、巌本氏管する所の明治女学校（巣鴨）の構内に在り。居室僅に三畳を敷く可く、宛としてマツチ箱を据ゑたるが如し。友人写生の帰途屢々此仮寓を訪ふや、先づ家を抱へて振動せしむれば、氏は中より鈍重なる声を揚げつゝ出で来るが常なりしと云ふ。欧州の中央芸壇に研究せんが為め、米国に労役すること二たび。苦境実に尋常ならざりしと伝ふ。而して其間一人の氏を唱ふる者なく、唯僅に氏の旧知たる小杉未醒等の口によつて其の形貌を推想し得たるものに過ぎざりき。而も飄然帰朝するや、その所論その所作、さながら代表的デカダンにして、横溢せる元気は何事をか成さずんば已まざるの概を示せリ。

氏が絵画より彫刻に転ぜし動機が那辺に在りしやは知る可からざるも、既得の画術が彫刻修行の上に於て莫大なる貢献ありしは事実なる可し。四十二年秋公設展覧会出品の諸作はよく抜群にして新しき技能を発揮して憾無し。また今不断の芸術欲によりて作られつゝある幾多の新作も遠からず中央芸壇に登り、彫刻界の曖昧なる潮流を一掃し去るに値す可きことを信ず。（現住、東京府下新宿角筈八十八番地）

長谷川天渓

越後の人、名は誠也、明治九年十一月二十六日、新潟県刈羽群高浜町字椎谷に生る。上京して元の東京専門学校文学科に入る。坪内大西等の講師につきて学び、同窓には繁野天来、海沢和軒等あり。綱島梁川、林田春潮等と交はる。『早稲田学報』の編輯に従事せしことあり。後入りて博文館に『太陽』の編輯に従ひ、雑誌記者としての文学者となる。雑駁なる文章を記草せる間に漸次修養を積み、自然主義勃興以来、嶄然として評壇に頭角を抬げ、その自然主義の鼓吹にあたりては、『太陽』の文芸欄に於て、月々評論の筆を執り、作家としての田山花袋等と相呼応して、自然派の為めに堂々たる筆陣を張る。時の青年にして、氏の評論を読みて、文学的新感化を受くるもの少からず。著書には『文学訓』『科学的宗教』『文芸観』『自然主義』等あり。『自然主義』最も世に重ぜらる。（現住、東京神田区駿河台鈴木町十二番地）

登張竹風

安芸の人、名は信一郎、明治六年十月、広島県佐伯郡久茂村に生る。優良の成績を以て高等学校を出づるや、直に帝国大学独逸文科に入る。在学中俊秀を以て聞え明治三十年業を卒ゆ。同七月二十五歳、高等官七等に叙せられ、山口高等師範教授に任ぜらる。三十二年東京高等師範に転任を命ぜられて京に上る。当時高山樗牛ニイチエの哲学、人生観を祖述して、論壇を闊歩し英姿伝た颯爽たり。氏その説に薫染せらるゝところ多く、ニイチエの諸書を翻読して、且つ論じ且つ祖述し、文名、俄かに上る。当時『ニイチエ及び二詩人』の著あり、世に行はる。後故ありて自ら学校の教授を辞し、専ら文筆に文筆の人となる。『読売新聞』に時評を掲ぐ。先之雑誌『新声』に関係して之れを止む。蓋し『読売』の時評は、故ありてしばらく文学と絶縁せし氏の復活を意味せるもの也。爾来常に時評を発表せしが幾ばくもなくして『読売』を退き『やまと新聞』に入社し『沈鐘』の訳を連掲せしが、これ又久しからずして退く。後泉鏡花後藤宙外等の薦むる所となりて春陽堂編輯局に入り、『新小説』の時文欄を担当し、宙外と相俟ちて同誌の光彩を発揮す。三十六年来明治大学の講師たり。

文壇に自然主義の唱導せられてより、氏は之を慊らずとし、非自然主義を標榜して『新小説』に其意見を発表し、また宙外、鏡花、孤島等と共に文芸革新会を起して、演説に評論に大に健全雄大なる文学の鼓吹につとむ。氏平生博弁に浩辞、演壇の人としてまた一流たり。文芸革新会の事業、氏の長広舌に負ふところ少からず。著書としては、『あらひ髪』『売国奴』、評論集『舌筆録』あり、上記『沈鐘』はハウプトマン原作、泉鏡花との合訳に成るものにして、最も世に行はる、（現住、東京府下荏原郡入新井村新井宿二一六四）

戸川秋骨

肥後の人、名は明三、明治三年十二月十八日を以て、熊本県玉名郡岩崎村に生る。岩崎村は細川の領地にして父は同藩士也。東京芝の鞆絵小学に入りしも年十三にして退き、大阪に下り、同地の小学に在る事しばらく、同市の中学

にもまたしばらく在学して退き上京す。中学また諸方に入学せしが、神田の成立学舎を最も長しとす。明治二十一年明治学院に入学す。同院にありて、馬場孤蝶、島崎藤村等と交はり、当時坪内逍遙の『書生気質』を読みて漸く文学を愛玩するの志あり。明治学院に在る事四年、自ら生活せざるを得ざるの境遇となりて文筆の人となる。卒業して『女学雑誌』に執筆す。後『文学界』起るに及びその同人となる。曰く透谷、曰く藤村、曰く孤蝶、曰く禿木、曰く氏、皆これその青年文芸思想家の一団なり。二十八年帝国大学英文科選科に入学す。此の間『帝国文学』の編輯に携はり、また『太陽』等に執筆せり。三十一年専選科の業を卒へて山口高等学校に赴任し、三十八年同校の商業学校に変はるまで在任す。此の間殆んど文学上の労作に従はずというて可也。三十八年山口より帰り、翌三十九年より四十年まで米国及び欧洲大陸を漫遊す。四十年より明治大学、高等師範、真宗大学、早稲田大学等に教鞭を執りしが、幾ばくもなくして明治大学と高等師範とを辞せり。

氏の文学的生涯は『文学界』同人たりし頃、西欧文学の影響を受けて清新なる文字を発表せし以来、しばらく山口に閑日月を送り、再び四十年に復活せしが故に、作物上の効果は比較的多からず、唯その一種独特の風刺文字は、悪辣ならざれども鋭く、軽浮ならざれども快活にして、時人の歓迎する所となり、その翻訳また原文の趣を伝へて、信憑すべきもの多し。著書としては『二万三千哩』『時代私観』及び敲戸会同人と共訳せる『猟人日記』等あり、外に翻訳文集『西詞余香』また世に行はる。資性温厚長者の風あり。（現住、東京市外大久保村仲百人町百五十三番地）

徳富蘇峯

肥後の人、名は猪一郎、文久三年熊本県葦水郡水俣村に生る。厳君葦水翁は当時の進歩せる学者にして、伯父に横井小楠あり。七八歳の頃元田東野の塾に入り、十二三歳の頃熊本洋学校に入る。氏が宗教的色彩を帯べる一種の思想家たる可き運命は是処に於て啓かれし也。明治九年京都に出でゝ同志社に学び新島襄氏の偉大なる人格の感化を蒙ること浅からず。後郷に帰り厳君の大江義塾に在りて『将来の日本』を稿し、之を懐にして東京に来る。白の木綿小倉の短袴を穿ち、一破扇を手にし、諸家の門を叩きて干求する所あり。植村正久氏によりて『東京日々新聞』又は『毎日新聞』に入らんとして能はす、漸く田口鼎軒に知られて其書経済雑誌社より刊行せらる。当時に在りては極めて清新なる文体と大胆なる所論とは、天下の称嘆を博し、文名一時に掲る。『国民之友』を創刊せしは、明治二十年春にして、氏齢まさに二十五、新鋭の気を以て政治経済文学宗教の各方面に亘り、大胆縦横の評論を行う。当時存せし総へての評論雑誌を圧倒して独り文壇に雄視す。之れより一時雑誌の名に『友』の字を用ゐるもの紛々続出し、従来の雑誌多く四六判なりしもの、『国民之友』に倣うて悉く菊判となれり。其出版界を聳動せしめたるの状、想見すべき也。殊に純文学の趨勢を観察して新気運の鼓吹に勉め、春夏二期に文学附録を添へて当代作家の粋を集む、鷗外の処女作『舞姫』の如き、同誌に掲げられたるものにして、天下の文人『国民之友』に其名の現るゝを榮となすに至る。次で『家庭雑誌』を出し『英文国民之友』を出し、更に『国民新聞』を出すに及んで、氏の勢力は絶頂に達せり。

日清戦争は『国民新聞』の最も活動せる時にして、而も亦氏が社会の同情に離るゝの機会を作れる時なりき。氏の起つや、熱烈なる平民主義を旗幟となし、之が為めに藩閥政府と見事なる戦を継続し来れり。天下の同情を荷うて青年の崇拝措く能はらざしめたるもの即ち之れによる。而して日清戦争に会し、目のあたり国連膨脹の状を睹るに及んで、十年懐抱の平民主義に代ふるに帝国主義を以てし、挙国一致、軍備拡張の為めには藩閥と政党とは問ふ所にあらずとなすに至る。偶々同郷の先進藤島正健氏に介せられて松方伯に会するや、こゝに一種に悪因縁？　は結ばれ、松隈連立内閣の組織に就いて企画する所あり。二十九年五月、其仕組みたる狂言を筐底に蔵して欧州観光の途に就く。途次露国にトルストイを訪うてその晩餐席上、蒙古来を高吟せる等の逸話は、依然氏を尊崇せる青年の心臓を波うたしめたるが、松隈内閣成りて倉皇帰朝し、入りて内務に参事官たるに及んで、天下の同情俄然として去り、大隈伯一派の辞職後尚ほ薩派と共に留るや、藩閥に降れる変節者を以て目せられ、詬言罵辞雨の如くに降り、終に『国民之友』其他の雑誌を悉く廃刊し、独り『国民新聞』によりて今日に至る。氏今や文芸と何等交渉する所なしと雖も、明治文学の或時代は、氏の熱心なる誘掖鼓吹に負う所ありしを記憶せざる可からず。（現住、東京市赤坂区青山南町六丁目三十番地）

徳冨蘆花

肥後の人、名は健次郎、徳富蘇峯の弟也。明治元年十月二十五日を以て生る。幼年の頃は、父の大江義塾に学びて規則的の学歴を経ず、十七八の頃、横井時雄（当時伊予の今治にありき）の家にありて勉学し、更に京都同志社に入る。青年時代より一種の思想家にして且つ文学者たる可き傾向を示せりき。後兄蘇峯の民友社を樹てゝ『国民之友』を発

行し、一種の自由思想を鼓吹するや、氏も入りて社員に列し、一方『国民之友』に翻訳随筆等を起稿すると共に、コブデン、ブライト等の評伝を、翻訳執筆し、且つ又、自然を愛好して水彩画を学びたる結果、自然の叙景に長じ、紀行、写生文等を草し、その頃『青山白雲』『自然と人生』の著あり、頗る青年間に愛読せらる。後『不如帰』を『国民新聞』に連載し、明治三十三年、之れを一冊となして、出版するや、称讃の声雨の如く、百版を売り尽くして、猶ほ且つ紙価下るときを知らず。日本の青年士女にして、未だ蘆花の名をしらずとも『不如帰』を知らざるなきに到る。後また『思ひ出の記』『黒潮』等を上梓し、声名ますます揚る。小説の述作氏の如く数少くして、氏の如く声誉を得たるもの、未だ有るを聞かざるなり。自然を写せるものとして、『自然と人生』今に世に重ぜられ、別に『青蘆集』あり、主に紀行文を収む。三十九年四月トルストイを訪れんとして聖地ゼルサレムを経て、ヤスヤナ、ボリヤナに到り、ト翁の家に寓するもの十有三日、具さに肝胆を披瀝して帰へる。此行を記せるものに『順礼紀行』あり。先之、氏は悟るところありて、文学者として市井に住むを欲せず、自ら耕して自ら食はんを欲し、東京を去る里余の多摩川水畔に僑居をトし、自ら野に出でゝ紅花黒壌を弄んで、深く人生の帰趣を思ふ。曾てその四周と状況とを記して、垂死の国木田独歩に送りしことあり、情景並び到り、時人をしてその厚情と氏の平生とに感ぜしむ。収めて『二十八人集』にあり。

今や多年文学界に沈黙を守りし氏は、千有余頁の『寄生木』を上梓して、まづその精力と沈潜の力と、述作の量とに人を愕かす。四十二年の末に文壇の天荒を破りし此の『寄生木』は恐らく、『不如帰』作者としての氏の面目を改めて、四十三年の文壇に臨むべし。別に評伝『トルストイ』『コルドン将軍伝』等の著あり。（現住、東京府下北多摩郡千歳村粕谷三百五十六番地）

徳田秋聲

加賀の人、名は末雄、明治四年十二月二十七日、金沢市横山町に生る。第四高等学校にありて桐生悠々等と交はり、文学的作物を耽読す。家君の逝くや、校を退きて上京し、文学的生涯に入らんとせり。幾もなく病みて漂浪し、長岡の新聞社に入り、後再び上京して博文館に入る。此の頃処女作『藪柑子』（文芸倶楽部所載）を発表す。尾崎紅葉の門に入る。泉鏡花、小栗風葉、柳川春葉、藤井某、中山某、田中某当時の同門なり。明治三十年、読売新聞に入社す。同紙上『雲のゆくへ』の長篇小説を掲げて文名漸く定る。

後、自然派勃興の時に際して、頭角著しく現はれ、短篇小説を以て世に聞ゆるに到る。『少華族』『おのが縛』『焔』等は、此の前後の長篇なれども。寧ろ前期の作に属す。最も新様式によつて作せるものに短編集『秋声集』『出産』等あり、近く『新世帯』を出して、新しく長篇の試作を公にす。硯友派全盛の頃、硯友派的の特色を帯ぶること薄かりし氏は、自然派勃興の時に当りて、頓に自家の有るかぎりを発揮して、嶄然として秀出せるの観あり。現に氏が作する所は、自然派の最も代表的短篇にして個々の作品は悉く、氏が従来の文学的生涯を背景として、時人の心を撼揺せずんば止まざるの趣致を生ず。（現住、東京市本郷区森川町一番地）

徳田秋江

備前の人、名は浩司、明治九年五月、岡山県和気郡藤野村に生る。郷里の小学校を卒業後、（中学は半途にして退く）明治二十七年上京して慶應義塾に入りしが、故あり退きて国に帰る。後、父の業を継ぎて、二年間米穀取引所の仲買の家に居り、二十九年の秋、再び上京して国民英学会に入り、後東京専門学校に学ぶ。卒業後博文館に入りて『中学世界』編輯記者となりしが、幾ばくもなくして退き、『早稲田文学』記者、『読売新聞』記者等を勤めしが、何れも暫くにしてやめ、常に評論の筆を執りて今日に到る。

四十年一月より『読売新聞』日曜附録に『文壇無駄話』を掲ぐるや文名始めて大に世に聞え、又常に文壇の問題を惹起しつゝあり。世に印象的批評のはじめなりと称す。又別に短編小説数種あり、氏の期する所は一種の文明批評家的歴史家にして、傍ら文芸宗教哲学に渉らんとするなりといふ。別に翻訳数篇あり、中にトルストイの『生ひ立ちの記』最も世に行はる。氏は常に故高山樗牛を崇拝し、ソーシアル、フイーリングを有すること、世の多くの文芸家と選を異にするものあり。此種の論評また少なからず。

曾て赤城下に住みて夫人をして小間物商を営ましめしが、後牛込区喜久井町に転じ、今は小石川区関口駒井町某方に寓す。平生体力脾弱、神経衰弱を病む。夏期は東京の褥熱を恐れて山水の間に涼を趁ふを常とせり。

土肥春曙

肥後の人　名は庸元。明治二年十月熊本に生る。一家の事情にて二三の小学校に転じ、高瀬中学に入りしも中途に

て退学す。十七年上京、当時の外国語学校に入り、漢学の究極を探らんとして支那語科を選ぶ。校の商業学校に改るに及んで直に去り、郷の先進境野怡雲の勧むる所となり、志望を文学に定め、専門学校の創立せらるゝや之に入学す。氏幼時早く劇の嗜好深く、上京後到る処の劇場月毎に見ざるなく、専門学校に在るの時、其大講堂に脚本朗読会を開きて全校を驚せし事あり、卒業後読売新聞社に入る、二十六年也。後中央新聞に転じ、居ること五年。其間川上音二郎と行を共にして欧米を周遊し、具に泰西演劇の研究を積む。帰来、東儀鉄笛等と計りて自ら新劇を興さんとせしが、時機の来らざるを以て果さず。文芸協会早稲田に起るに及んで、氏は、その劇部活動の中心となり、第一回の試演を牛込清風亭に行ひ、次で紅葉館に行ひ、更に歌舞伎座に公開す。四十年十一月本郷座に『ハムレツト』を演ずるや、氏はハムレツトに扮し、新様の動作台詞を以て異常の賞賛を博し、満都の耳目を集む。後有楽座の興業主任となり、文芸協会演劇研究所の講師を兼ぬ。傍ら脚本の筆を執り、近く其集『社会劇』を公にせり。（現住、東京市麹町区下二番町三十六番地）

沼波瓊音

尾張の人、名は武夫、明治十年十月名古屋に生る。二十八年土地の中学を卒業す、中学在校中国語教師鈴木忠孝の枕の草紙の講義を聞き、深く感ずる所あり、国文学者として起つ可き所縁こゝに成る。二十八年第一高等学校に入り、芳賀矢一の文法文学史等に深き興味を持ち、万葉、古事記、祝詞等の古文学に耽る。三十一年卒業、大学国文科に入る。大野洒竹の指導により、同年筑波会に入り俳諧を知る。三十四年卒業、暫く哲学館の講師となり、同年十月伊賀上野の中学に聘せられて教頭となり、芭蕉遺址蓑虫庵に住む。三十五年十一月職を辞して上京、京華中学及び哲学館に教鞭を執り、三十六年文部省図書課に奉職、四十年一月一日万朝報に入り、爾来新聞記者生活を送りて今日に至る。国文の素深くして誹諧に没頭すること多年、其文促節緩調自ら諧ひ、殊に簡潔明瞢（めいちょう）の趣を短文に見る。国木田独歩、曾て氏を好箇の短編作家なりと称せし事あり。感化を受けたるの書は、古典の外、西鶴、緑雨、鷗外、露伴、一葉等の著作にして『独歩集』出づるや、西鶴と比肩すべき文豪なりと激称し、讃嘆の辞を列ねたりき。

赤門を出でゝ、自然派の文士と交友深く、篤実なる学者にして一面洒落なる俳人たり。三面記者たるの傍ら、大著『源氏物語新釈』の執筆に従ふ。既に世に行はるゝの書に『誹諧音調論』、『芭蕉』、『誹諧奇調集』、『俳句講話』『俳句一万』『俳句研究』等あり。（現住、本郷区西片町十番地ろの八号）

小川未明

越後の人、名は健作、未明は坪内逍遙の名くる所也。明治十五年四月八日、新潟県高田町五分一の士族屋敷に生れ、後上杉の城址春山に移る。尋常小学は岡島小学校、その業を卒へずして高等小学に入り、こゝもまた同級生と衝突すること夥しく、業半ばにして退く。小学時代は専ら音楽唱歌作文を好む。高田中学に入学してよりは、常に教員と衝突し、為めに三たび落第せしことあり。此の間に漢籍を学び漢詩の製作に耽る。中学また半途にして退き、上京して早稲田専門学校に入る。自ら幾度も校を退かんと欲したれども母に沮められて止まる。学校によりて裨益を受けたる処なしと称す。但し在学中、又卒業後最も感化を受けたるは坪内逍遙にして、若し坪内先生なかりせば、感情の狂奔せる自身はいかになりやたるやも知るべからずと、常に自ら語る所也。感情の克己と人格の修養、皆坪内博士に負ふ所多しといふ。早稲田在学中はシエレー、ワーズワース等のロマンチツクの感化影響を受けたりしが、今は新理想主義を以て思想の土台となし、一種嘆美派的傾向を点化す。現に最も耽読する所はアンドレーフ等の露国最近の作家の作也。

氏は自然主義勃興以来、未だその傾向に奔らず、常に新理想主義を標榜し、四十一年以来、評論と並せて文壇に呼号す。一部青年の崇拝を受くるもの深し。処女作は『漂浪児』にして小説集は『愁人』『緑髪』『惑星』也。曾て『早稲田文学』記者となり、後読売新聞社に入り、『秀才文壇』の編輯主任となりしが、四十二年之れを辞す。（現住、東京市牛込区早稲田南町五十二番地）

岡田三郎助

肥前の人、明治二年一月を以て佐賀町に生る。始め大野幸彦の門に学び、後黒田清輝の天真道場に転じて、東京美術学校の洋画科を卒へたり。文部省が第一回の画学留学生を仏国に送らんとするや、氏其選に当る。黒田久米の諸氏は、初旅なる氏を援けて諸種の便宜を与へたり。爾後幾年かにして氏が遠く所作を寄せ来るや、その自画像は白馬会に展列せられ、観る者をして唯訳もなく奇異の感に打たしめたり。当時白馬会のスタイルは、純紫色のみにして後進

書生の如きは、五里霧中に彷徨し、地に投ぜる影部の色素が如何にしても紫色には感ずることなきもメートルの思はくを恐れて心ならずも自ら直覚を偽る如きの愚者最も多きを占め居れるの頃なり。その間にあって岡田氏の画独り脂色を誇り、毛描きの如き繊細実に驚く可きのものありし也。黒田氏等がこの作の前に佇立しつゝ、『岡田もどうしたんだらう』との私語ありしは今に記憶する所也。

氏は奔放也。而もそは極めて柔順なる奔放性にして、彼の腕を扼して怒号する如き豪傑肌にはあらず。蒼白にして長き顔には無精髯自から生じて、寧ろ一種の面白味を持ち、常に微笑を湛ふる其柔和の相誠に親しむ可し。往年巴里に在りしの頃、新参ものゝ一友は薄暮氏をその下宿に訪ひしに、漸く褥を離れて理装これより徐ろに花街に散策せんとするの時なりしと、当年の耽溺実にこれによつて想見ず可しと雖も、会々また尊敬す可き作物の此間より出でざりしにもあらざる也。要するに氏の如きはあらゆる点に於て最も画人的なる素質を有せる人と云ふ可し。氏の寓は、今閑静なる渋谷村にあり。此僻村より電車を利用して上野なる美術学校に通勤しつゝある也。岩村合田等の諸氏と相隣しマンドリン尺八等の妙韻は、会〻農人等の足を留めしむるに足る可しと云ふ（現住、東京市外下渋谷一八三七番地）

岡田八千代

旧姓小山内氏、今、岡田三郎助の妻也。明治十六年十二月、広島市大手町に生る。後上京して麹町区番町に転住するに及び、富士見小学校に入る。閨秀画家榊原蕉園と同窓たりしと云ふ。同校を出でゝ職業学校に刺繍と裁縫とを修め、更に成女学校の特別選科に学ぶ。幼児より劇に対する嗜好深く、三十六年より『歌舞伎』に芹影女史と号し、劇評の筆を執る。女形の姿態服装等の詮穿微細を極め、俳優の見て以て参考とする所多し。之れより女流劇評家の名高まれるが、才思豊かなる女史は、更に小品、小説に筆を及ぼし、『大阪時事新報』に『深緑』と題する長篇小説を掲ぐ。伊井一派の俳優をモデルとなし、劇場及び俳優の裏面を写せるもの也。三十九年十二月二巻に纏めて公にす。三十八年小品集『門の草』上梓。三十九年十二月岡田三郎助に婚す。翌年夏『万朝報』に小説『彷徨』を掲げたるが、故あり半ばにして休載す。近く『恐怖』の著あり。（現住、同前〔東京市外下渋谷一八三七番地〕）

尾上柴舟

美作の人、名は八郎、明治九年八月を以て津山町に生る。東京文科大学国文科の出身也。其の作歌に志せしは、十二三歳の頃にて、祖母の感化与つて力ありしと云ふ。当時同町唯一の歌人たりし神官道直高氏の門に入りて、始めて斯道の研究に従へり。氏は此時小学校に在りしが、同志の士は校を挙げて僅かに二名に過ぎず。然して何れも頼高氏の門人となれり。詩は六義より起ると云ふに基きて、六義会を起し、互に技を競へり。氏が技能は此時より既に萌芽し、複雑なる詠み振りは、一郷の人身を惹きたりき。明治二十三年、十五歳の時、上京して、当時の東京英語学校に入る。ついで東京府尋常中学校に転じ、和歌の外に好んで和文を作り、また優婉の趣を得たり。二十五年八月、江刺恒久の門に入りしが、作歌上に著しく見解を異にせしところあり、出でゝ大口鯛二に就く。同氏の歌風及び其主張は氏の意を満すものありて、少からず其の感化を受くるに至れり。

中学の業を卒へて、第一高等学校に入りてより、同校の教授落合直文の新味ある感化を受けて、其の作歌に清新の風趣を加へたり。新派の名流として、今重きを為せるは、こゝに其の根柢を得たりし也。大学に入りてより、久保猪之吉、服部躬治、菊池駒次等諸氏と共に、いかづち会を起して、短歌革新を唱導し、大学卒業後郷里に帰りて『ハイネの詩』を訳し又金子氏と『叙景詩』を選述して、世に問へり、三十七年、『銀鈴』と題し、始めて歌集を公にす。叙景の作、其大半を占め、まゝ哲理的の作を雑（ママ）ふ。其後、氏の思想に著しき変化を呈し来り、自覚的態度より得たる作を集めて、『静夜』一巻を発表す。四十二年夏更に『永日』を出し、思想の老熟を示せり。今、学習院女子部の教官たり。（現住、東京市小石川区原町百三十三番地）

小栗風葉

尾張の人、名は磯夫、後、加藤家に転籍す、明治八年二月を以て愛知県半田に生る。薬種商小栗半左衛門の子也。幼にして稗史小説を好み、十三四歳の頃、嵯峨の屋主人の『初恋』を読みて感動し、漸やく文芸に興味を覚ゆ。小学卒業後、上京して錦城中学に入る。同校にありて森田思軒の詩経の講義、坪内逍遙の沙翁の講義を聞く。後、高等中学の入試試験を受けて上らず、諸所を放浪す。曾て松本道別と共に英漢数の教授所を開き、以て生活の資となさんとしたりしが、集まり会するもの僅かに一人、遂にその戸を閉づ。それより九州を放浪せしことあり、此は具さに描いて小説『世間師』にあり。先之故尾崎紅葉の門に入り、始めて小説『片靨』を作る。明治二十七八年の頃、一たび郷

里に帰りしが、紅葉の勧むる所となりて再び上京し、郷里より持ち来りし未定稿『亀甲鶴』を完成して上梓し、文名頓に揚る。同門に徳田秋声、柳川春葉、中山白峰あり、紅葉が住宅の裏に『詩星堂』といへる塾を立てゝ其処に居り、此間に『恋慕流し』成る。

紅葉逝きてより文名、先師の跡を嗣ぐの観あり、泉鏡花と共に、時の文壇に併び称せらる。氏は未だ自然主義的思想の興らざる頃ほひ、既に一種近代的官能派の描写に近き筆路を示し、『涼炎』『下士官』等の作ありき。自然主義の勃興するや、氏の作風また多少の転化を来し、その転化の分水嶺として『青春』一篇あり、技巧の妙、修辞の巧緻、夐かに師紅葉を凌ぎ、時の青年士女にしてその文に酔ふもの尠からず。『万朝報』に『天才』を掲ぐるや、頓に作風一変して、近代仏文学の影響少からず、新様の官能的描写人を愕すものあり。

氏の門に真山青果、岡本霊華あり、共に現時の文壇に重ぜらる。明治四十二年初夏に感ずる所ありて郷里半田に帰省し、現に同国師崎の某寺にありて読書潜修に勉む。著書の重もなるものには『恋慕流し』『青春』『天才』『風葉集』『恋ざめ』『終篇金色夜叉』あり。『恋ざめ』は官権の忌憚に触れて、発売を禁止せられ、『終篇金色夜叉』は故紅葉が一代の大作『金色夜叉』の偉業を全うせしもの也。その他の小説著作枚挙に遑あらず。資性極めて恬淡、酒を被ふれば、全く酔ひ尽して己を忘れ、往々紀行逸話を作る。文を草すれば痩骨哭肉、人以て芸術家気質の典型となす。〔住所記載なし〕

小山内薫

東京の人、明治十四年七月二十六日、広島市大手町に生る。名は薫、別に「なでしこ」なる雅号ありしも今は用ゐず。麹町の富士見小学校を出でゝ東京府尋常中学校に入り、第一高等学校の文科より東京帝国大学文科に進み、英文学を修む。在学中雑誌『七人』を刊し詩集『小野のわかれ』を出版せしが、同誌は一年にして廃刊し、『帝国文学』編輯員として二年、庶務委員として一年を仕ふ。三十九年大学卒業、四十年十月より新に雑誌『新思潮』を発刊せしが、これまた幾くもなくして廃刊す。画家岡田三郎助夫人岡田八千代は実に氏の妹也。

著書には『夢見草』『窓』『蝶』あり、別に翻訳数種、又『演劇新潮』の著あり。大学在学中、劇場の内部に通ぜんとして、真砂座の作者となる。而も俳優の頑愚度すべからざるを覚り、自ら劇革新の陳呉たらんとして、市川左団次等と共に自由劇場を創設し、劇壇と文壇とに貢献する所少からず、明治四十二年十一月有楽座に第一回の試演をなし、輿論為めに喧し。（現住、浅草区瓦町二十八番地）

和田英作

薩摩の人。明治七年十二月を以て鹿児島市に生る。岡田氏と同じく大野門に学び、又原田直次郎にも学びしことあり。黒田清輝の門に走りては其画風忽ちに一変せり。氏が未だ美術学校第一期の学生たりし頃、其卒業製作として『渡頭』の大作あり。大体のコンポヂシヨンと云ひ局部描写と云ひ、これを現今の公設展覧会に出品するも尚ほ擬賞の選に洩れざりしならんと思ふまでの佳作なりき。而して間も無く仏国に遊び、コランに就きて造詣浅からず。『思郷』と云ひ『こだま』と云ひ、また『あるかなきかのとげ』と云ひ、何れも十分の「こなれ」を示せり。唯余りに軽淡に過ぎ筆路味はふ可きもの鮮なきは多少慊焉たるものなきに非ずと雖も、こは氏が天稟の然らしむるものにして、亦已むを得ざるものか。

氏は口極めて軽て腰極て低し、唇辺巧に愛嬌笑を湛えて、当世の所謂紳士紳商等に交る。ちよくな面白い人とは、一般に氏に対する評語也。実際画人にして氏程砕け抜きたる社交的人物は、他に之を求むること難し。之れ氏の作に高雅荘重の趣なき理由となす者ある所以にして、兼ねて其余りに呑み込みよき一種の消化力は、所詮氏の大成を妨ぐるなきかを疑ふ者あり。平生、髯髪生ふるも梳らず、蓬々として襟を冒すに任せ、時に人無きに鏡に対つて其汚なさ加減を照す。亦自己の相貌に調和せしむべき一種の美術家的修飾法たるを失はざる也。（現住、東京市麻布区霞町二十六番地）

河井酔茗

和泉の人、名は幸三郎、明治七年五月、堺市北旅籠町に生る。家は呉服商なり。九歳にして父を喪ひ、十七歳にして母を喪ふ。幼少より文芸に趣味を有して、早く家道を嗣ぐに意なく、屢々東京に遊学を企つ。而も永く家事を他人に委すること能はざるを以て、滞京少時にして帰るを常とす。三十四年、竟に家を挙げて出京し、早稲田大学に学ぶ。間もなく退学す。其間十年に渉り氏は雑誌『文庫』の記者として、同誌の詩を選し、「文庫派」と云ふ一の詩風を起せり。

三十八年、女子文壇社に入り、同誌の編輯を主宰す。四十年、詩草社を興し、雑誌『詩人』を発刊せしが、翌年之れを廃刊せり。而して今は引き続きて、『女子文壇』の主筆たり。

氏は早くより詩に於いて名を成せり。新体詩人として、斯界に存在せるの日は最も永く久しきに亘れり。詩の内容と形式とを詩的ならしめたる効は氏の努力に俟つ所多かりし也。其穏雅にして温かみある風趣は、多くの年少詩人を、其の旗下に馳せ参ぜしめたり。氏の詩集二あり、一を『無弦弓』と云ひ、一を『塔影』と云ふ。何れも、氏が特色を発揮せるものにて、当時の氏を偲ばしむるに足る。近時亦多く詩筆を把らず、散文詩を草して、興を遣れるものゝ如し。文集に『玉虫』あり、流麗、称すべし。（現住、東京市赤坂区青山北町五丁目四十七番地）

河東碧梧桐

伊予の人、名は秉五郎、明治四年を以て松山市に生る。中学を卒ふるや、京都に出でゝ第三高等学校に学び、更に仙台第二高等学校に転じ、業半ばにして退く。新俳句の機運勃興するや、専ら之が研究創作に耽り、虚子と並んで子規門下の二秀才と称せられ、三十二年早く『俳句評釈』の著あり。子規が俳句革新の業を了りて文章に転ぜんとし、小説の試作をなせる時、氏亦新作一篇を『国民之友』新年附録に寄せて、観察行文共に評家の推讃を受けしも、其天分の俳句に在るを自覚して、爾来十年亦他を顧みず。三十五年子規没するや、虚子と共に天下を二分して其一を保つの状ありしが、虚子の小説に趨りて次第に俳句に遠ざかるに及び、氏独り四方の嘱望推重を受けて益々研究試練を重ね、始めは純客観趣味なりしもの、今や時代の新傾向を容れて実感を主とするに至る。人となり直情径行、真個俳人の風骨あり、屢々新聞記者生活をなせしも、固より安じ得るの境にあらず。三十九年八月より俳的旅行を企て、足跡天下に洽ねからんとす。目下山陰地方に在り。紀行『日本及日本人』に連載せらる。

川合玉堂

尾張の人、名は芳三郎、別に長流閣主人と号す。明治六年十一月、愛知県葉栗郡外割田村に生る。十五年、父勘七と共に岐阜市に移住す。氏か画才は其の小学時代より発露し、東錦絵を摹して其の妙技驚くべきものありしと云ふ。十五歳の時、竟に画を以て身を立てんと決し、京都に出でゝ望月玉泉の門に入る。是れ絵画の生涯に入れる始め也。二十三年、更に幸野楳嶺の門に入る。二十四年濃尾の震災に当り、氏が家は壊され其父は圧死す、氏帰つて此の惨状に対し、哀痛措く能はず、即ち母を奉じて京都に移住し、これより研鑽益々力む。二十六年母を喪い、二十八年亦師楳嶺を喪ふ。氏は此重なれる傷心の事に次いで、深く芸術の懐疑に陥りしが、偶々第四回勧業博覧会の開かるゝに会し、橋本雅邦描く所の龍虎及び羅漢の図を見て、頓悟する所あり、乃ち翌二十九年春上京、同氏に会うて其の語る所を聴くに及び、尠からざる信念を得、氏が画風は、こゝに著しき変化を呈し来れり。

斯くて氏は雅邦の感化を受くること最も深く、一時は師翁の作に髣髴たるものありしが、漸次蟬脱して、今は独特の妙域に入れり、其の得意とする所は山水の描写に在り。これ氏の性情より来るものにして、其の好む所やがて其の長処を為せり。近時の製作に於て見るも、彼の『二日月』と云ひ、又文部省第一回の展覧会に於ける『片時雨』と云ひ、其の第三回展覧会に於ける『霧』と云ひ、何れも自然の匂ひ饒かなるもの也。殊に『二日月』は、蘊蓄年久しかりし氏をして、一挙に盛名を馳せしめたる作にして、『川合二日月』と京童に迄謳はれたるもの也。氏今文部省美術展覧会審査委員たり。（現住、東京市牛込区若宮町二十九番地）

片上天弦

伊予の人、名は伸、明治十七年二月を以て愛媛県越智郡波止浜村に生る。五年の時、同校の小学校に入る。高等小学三年終了後中学に入学し三十三年卒業す。十七年上京して早稲田の哲学及英文学科予科に入り、二ヶ月にして病の為めに帰国す。三十四年十月再び上京、三十五年再び予科を経て早大文学科に入り、三十九年七月卒業す。中学四年頃より文学を好み、早稲田に入りてよりは坪内、島村、金子等より多少の感化を受く。卒業後は『早稲田文学』の記者となり四十一年夏まで之れに従ひ、後同社員に列す。四十年四月早稲田大学講師となる。

自然主義勃興以来、常に評壇一方の人として重きをなしき。近く自然主義的思想に新にマンチシズム的精神の点化されたる心持によりて、批評は一段の光彩を発揮し、依然評壇の一将たり、中外の注目する所となる。（現住、小石川区高田豊川町四十三番地小野方）

金子薫園

東京の人、名は雄太朗、明治十年十一月神田三河町に生る。幼時父より日本外史、十八史略等の素読を受け、母より和歌ののの口授を受く。十歳、始めて小学に入り、十二歳東京府尋常中学校に入る。好んで論文を作り、之を『少年園』及び『少年文庫』等に寄せて、能文なる中学生の名を博せり。北村紫山、柴東海散士の文を喜び、漢文直訳体の豪健にして感慨淋漓たる姿に擬せしが、一たび落合直文の新しき国文体の作を読むに及んで随喜措く能はず、二十六年其門に入る。之より和歌に潜心して進境日に著しきものあり、三十二年雑誌『新声』の歌を選し、詩名漸く世に現る。三十四年一月、歌集『片われ月』を公にす。当時鉄幹が『明星』に據りて、叙情派の作を発表せるに対し、氏の多く叙景に関する作は、歌壇の注目を惹くに足るものありき。翌三十五年一月、尾上氏と共に『叙景詩』を選述し、氏が歌壇に於ける位置漸く定まる。氏、画家結城素明、川合玉堂等と交友深くして、其作に絵画的要素多し、三十八年四月公にせし第二の歌集『小詩国』は、明かに此の傾向を示せり。其年七月青年歌人の作を選抜して、『凌霄花』を上梓し、翌年四月、第三の歌集『伶人』を出し、四十年三月、第四の歌集『わがおもひ』を出す。而して四十二年に入るや著るしく内省的傾向を帯び来り、其人格の影は蔽ふ所なく発露せらるゝに至る。氏が作歌に一時期を画すべき時也。

氏に前記歌集の外『和歌入門』『和歌新辞典』『新書簡文』等の著あり。短歌研究会を設けて後進の誘掖に勉め、傍ら『文章講義録』に文章作法を講ず。（現住、東京市本郷区湯島六丁目二十七番地）

蒲原有明

佐賀の人、名は隼雄、明治九年三月十五日東京市麹町区隼町に生る。今は廃校となれる平河小学校（後麹町小学校）を卒業して、府立第一中学の築地にありし時代に入学し、二十五年卒業す。卒業後高等中学校入学の準備として物理学校及び国民英学会の文学部に学ぶこと三年、而も高等中学の入試試験は失敗に了り、外国語の実力は国民英学会に於て授けられたるもの其基礎となれり。感化を受けたる人は森鷗外にして、『目覚草』を愛読し、『水沫集』の一部の如きは背誦するに到る。次には故尾崎紅葉にして、友人としては島崎藤村なりといふ。紅葉はその文に於て、藤村はその詩に於て、影響を受くること少なからず、又藤村によりて、田山花袋、林田（ママ）国男等と相知り、遂に文学的生涯に入れり。詩人としての思想の変遷は、当初東洋的、漢詩的の自然観よりして心を動かされしが、後、バイロンの『マンフレツド』等に心酔し、更に一転して豊艶なるキイツの官能的詩篇に憧がれたりしが、ダンテ、ガブリエル、ロセツチの詩篇に接するに到りて、更に大に思想の転化せるものあり。爾来プレラフアイライトブラザーフツドの感化を受けたり。後、田山花袋よりベルレーヌの詩を示さるゝに逢ひて、更に思想上の一転化を来し、象徴主義の傾向を帯ぶるに到る。

氏は藤村、泣菫と共にわが詩壇のエポツクメーカーにして、藤村のセンチメンタルの詩と泣護のクラシカルの詩とに相対映して、常に清新なる運動を起せり。新声社より『草わかば』の出づるや、人々は早くすでにその声調の新様なるに愕きたりき。氏がロセツチ崇拝の時代にありて出せし集『濁絃哀歌』また時の詩壇を動かし、藤村調の外に、別に新様の詩風、詩壇に動きたりき。後氏の詩に象徴の匂ひ浮び来れる時、たまたま上田敏の象徴詩を提唱するあり、世間はその新声に属目しつゝありしが、此の時氏の象徴詩集『春鳥集』一たび出でゝ詩壇の事定まるかの観を呈せりき。後、『有明集』出でゝ其の詩風いよいよ渾円大醇の至境に到れるを示せり。現に詩壇一方の重鎮たり。氏別に散文詩をよくし、その折々の感想記、又は紀行文等、また一種象徴詩派の匂ひを帯びて、清新奇聳の声、味はふに足るものあり。

著者は『草わかば』『独絃哀歌』『春鳥集』『有明集』なり。平生哄笑磊語、人に可しく、後進の撕提に懇ろなり。現にその生地東京市麹町区隼町八番地に住す。

幸田露伴

東京の人、名は成行、慶応三年年を以て生る。郡司大尉の弟にして、文学博士幸田成行、音楽家幸田延子は、氏の弟妹也。幼時犬を懼るゝこと甚しく、腰辺常に頭大の虎皮の巾着を着け、犬を防ぐの禁厭となせる逸話あり。遅塚麗水は少年時代に於ける莫逆の友なりき。電信技手となりて北海道に在ること年余、職を辞して帰京すれば、偶々厳君紙舗を開きて某町に在り、氏をして其店番たらしむ。当時の西鶴通粟（ママ）島寒月等来るに会すれば、店頭西鶴を論じて口角泡を飛ばせし事屢々なりきと云ふ。その処女作を『風流禅天魔』と名づく。構想文章総て京伝張りの洒落本に倣ひたるもの也。尾崎紅葉之を見て大に感じ、某氏に介せられて始めて交を結ぶ。明治二十三年『露団々』を公にして、文名一時に揚り、次で『一刹那』の短篇を草し、更に『風流仏』を出す、其想、文と共に嶄として秀出し、読む者仰いで神来の文字と称す。『一口剣』『縁外縁』『真美人』皆世評喧しく、写実派の領袖尾崎紅葉と相対して、理想派の

巨頭を以て目せられ、之れより常に紅露と併び称せらるゝに至る。『五重塔』に至りては、筆端一種魔鬼の気を帯んで雄渾太酔、真に一世の巨品たり。氏には紅葉の如く直接の門下なしと雖、文壇これ等雄偉の文に化せられて、その文心と其の人格を慕ふるもの頗る多し。多くの小説著作の中、その最も聞ゆるものは『二日物語』『きくの浜松』『ひげ男』『椀久物語』等に、前記の諸作これ也。氏由来博学強記、漢籍に国学に歴史逸史に若くは彫刻俗文学等の変遷沿革に通ぜざるなく、殊に、仏教はその最も造詣深きところにして、氏の思想には印度思想の感化著しきものあり、『縁外縁』『五重塔』『二日物語』『風流仏』等はその仏教思想より転化せられたる産物にして、深遥幽遠の風趣掬すべきものあり。氏の博学はその折々の随筆『欄言』『長語』に現はれ、又『潮まち草』『頼朝』等にも窺ふを得べし。

明治二十九年聘せられて『新小説』の主幹となり、又国光社の美術顧問となれる事あり。近く文壇より退きて京都大学の国文科講師となりしが、造詣深透、頗る衆生の敬迎を受く。而かも日課に束縛せらるゝを快しとせず、再び閑職に就いて文学に親しむべしといふ。氏平生人に遜る篤く、人格渾高、頗る巨人の風あり。また釣を好みて、常に水遊す。釣につきての随筆公にせるもの少からず。事を以て氏と語るもの、その言、鑿々として肯綮を衝くに服せざるなし。（現住、東京市本所区向島寺島村）

鹿子木孟郎

備前の人、明治七年を以て岡山に生る。満谷河合丸山諸氏と相携へて渡欧せざる以前浦和中学校に図書教師たりし頃の氏は、一向に無名の青年画生として、またその所作も毫も振はざりき。同行の三氏は順風を得て仏に渡らんとするに方（ママ）り、独り不如意なりし氏は妙策を案じ、突然書を住友家に致して資を仰げり。約成りて以来アカデミーヂユリアンに在つて刻励一番、恐る可き人の一念はローランスのアトリエ中コンクールの主座をすら占むるの域に達せしなり。これ氏が開眼の端緒にして、住友氏の肖像は氏によつて実に開運のお守護札とも云ふ可き也。而して氏が修めたるヂユリアン系が我が画生等の套襲的なる行り口に一変動を与へしは事実にして、其齎らし帰れる習作デツサンの類能ふ限りの繊細を極め、其木炭画の上に於て尚ほバツグとの関係を察し、浮く浮かぬを論ぜし程なりき。氏が帰朝以後の作『琵琶法師』の如きは、遺憾無きまでに既得の技法を発揮せるものにして、端から端まで丹念の細工稍ナチユール扱ひの気味無きにはあらざりしも、堅実は称す可く、その真面目また捨つ可きに非ず。最近『ノルマンデーの浜辺』に至つて稍その鋳型を脱して自由郷に遊べるやを思ふ。

四十一年三月より京都の工芸学校に教鞭を採る。負け嫌ひの氏は図案に装飾に曾て譲らずと雖も、氏の総てがよく京都のローカルトーンの伴奏者として適す可きかを知らず。氏は巴里に在るの頃より既に遊び僻を以て称せらる、柔和なる我が上方人形はよく氏の怪異なる相貌を味はふ丈の美術的眼力あるや否や。（現住、京都市上京区岡崎町）

上司小剣

大和の人、名は延貴、明治七年十二月十五日、奈良県奈良市に生る。租先以来代々大和奈良手向山神社の神官なり。父は二男なるを以て出でゝ摂津川辺郡多田の神社に奉ず。幼より多田に育つ。殆んど学歴の記すべきなし、平生自ら、笑つて之れを誇りとなすといふ。国歌国文を以て職の如くなせる家に育ちたるが故に、文学は遺伝的に之れを好み、七八歳の頃よりして和歌を作る。十歳の時古事記読む所の『百人一首一夕話』といへる書によりて感化せらるゝこと多し。二十歳の頃紅葉の『多情多恨』に心酔し、最近に到りては田山花袋の諸作、クロポトキンの Autour D'one Vie に得る所多し。『灰燼』『神主』『こんな人』『きりぎりす』等の著作あり、四十二年頃より文壇に知らる。

現に『読売新聞』記者にして、曾ては短文を以て同紙読者の歓迎するところとなり、その寸鉄殺人的の語録、世に認められき。今は一種虚無思想を有すと雖、さまで激烈ならず。描写の筆力、また称するに足る、短篇殊に世評佳也。（現住、東京府荏原郡下目黒村五百五十二番地）

横山大観

常陸の人、名は秀麿、明治元年八月を以て水戸市下市三ノ町に生る。十一年上京、湯島小学校に入り、卒業後、東京府尋常中学校、東京英語学校に普通学を修め、東京美術学校に入り、二十八年卒業す。二十九年、京都美術工芸学校教諭に任ぜられ翌年東京美術学校助教授に転任す。三十一年同校の紛擾事件に処して本官を免ぜらる。尋で日本美術院の創せらるゝや、正員として、岡倉覚三氏の為めに画策する所多し。三十六年、菱田氏と共に印度に遊び、彼の地の古美術を探り来つて、其年秋に開かれたる美術院展覧会に『釈迦逢父』の図を出陳せり。彼の古寺院の壁画に見るが如き一種荘厳の気を伝へて、日本在来の絵画の上に一地歩を占めむとする意気を示せり。翌年又菱田氏と相携へ

て欧米各国に遊び、三十八年帰朝す。四十年、文部省展覧会の審査員に挙げられ、同会に「二百十日」を出品す。洋画の小綺麗なる影響を受けて、氏が好箇の画題たるべき此作は、景趣の大なるものなく、例の雄渾の気なく、斯くて竟に無意味に帰せり。翌年玉成会展覧会に出せる曙色及月色を描けるもの、洋画の影響を受くること愈々多くして愈々氏の特色より遠かりしが、四十二年の文部省展覧会に『流燈』を出すに及んで、始めて氏が鬚眉は明かになれり。印度風の取材に英国式の手法を以てし、自己の特色は遺憾なく発揮せられたり。氏が今後の新しき試みは刮目するに足るべき信ず。

由来美術院派を説く者、先づ指を氏に属す。氏は同派の特色を最もよく代表せる者と言ふを得べし。夙くより日本画の新領土を開かむとし、前人未発の試みを其の制作に企つるや、世は氏等を目して朦朧派の称を以てし、其の突飛なる試みを笑ひたりき。而も氏は自己の欲する所に猛進し、幾多の未成品を製作して、知己の僅少なる世に問へり。頭ありて手なしとは、氏を嘲れる某皮肉家の言なりき。嘲りつゝも刮目して氏が何事をか為さむとするを見むとせり。斯くして氏は世の批難攻撃の只中に立ちて、奮闘を重ねて遂に今日に至れり。氏が過去の歴史は、実に此奮闘の紀念也。（現住、常陸五浦）

与謝野寛

氏は明治三年二月、京都岡崎村（現今は町）真宗本願寺派寺院願成寺の五男に生る。四歳京都吉田小学校に学び、八歳鹿児島名山小学校に学ぶ。五歳より父に従て内典、国書、和歌を学び、十一歳より摂津裕貞寺学林に於て内典、和泉国堺高木秋水、大阪日柳三舟等に就いて、外典及び漢詩を修む。十五歳岡山中学校予備校に入り、十六歳京都同志社に入る。十七歳、京都西本願寺阿弥陀堂に於いて、大谷光尊を戒師として剃髪得度す。二十歳東京に来り、落合直文を師となす。師が唱導せる新国文、新短歌の感化を受けて、別に一旗幟を翻す。当時氏は『二六新聞』に入り、鉄幹の号を署して、同紙上に短歌及新体詩を載せ居りしが、未だ世の耳目を惹くに至らず日清戦役起るや、「雄たけび」の一欄を設けて、自作の長短詩及び江湖同志の作を掲げて、士気を鼓舞す。素より詩的の作物を以て観ること能はずと雖も、そが豪健の調は、世の歓迎する所となり、氏の名漸く著はる。戦後、朝鮮に遊び、帰来『東西南北』を公けにす。虎と太刀を詠ぜるもの、其大半を占めたるの故を以て、虎の鉄幹と称せらる。しかも此集は明かに新派和歌の権輿たるべきもの、創したる新しき調は世に流布せらるゝこと最も弘く、鉄幹調は多数の人の模倣する所となれり。第二の集『天地玄黄』に現はれたる氏は、稍々沈着なる作風を呈せり。三十三年三月、新詩社を創し、雑誌『明星』を発刊す。江湖新しき歌に渇せるの年少、風を望んで氏の誘掖の下に雲集す。氏の夫人晶子女史も鳳氏を名乗りて、来り投じたる一人なりし也。和歌革新の機運漸く熟し来りて、氏の名声甚深を加ふ。後、平木白星等と共に、韻文朗読会を起し、神田の青年会館に試演す。斯くて幾多の挫折障害を冒して、『明星』を刊行し来りしが、四十一年秋、百号を出して、廃刊せり。尋で夫人と共に文学講演会を起して今日に至れり。詩集の重もなるものは、『紫』、『毒草』（夫人と合著）及び近く出でむとする『相聞』也。

氏が当初の志は宗教改革もしくは実業、若しくは政治にありしも、自然文学の人となれるは、家学の感化と、先師落合直文の扶掖とに由れり。猶近き十余年間、氏に直接の教化を与へたるは、齋藤緑雨、上田敏、馬場孤蝶、藤島武二、森林太郎の諸氏なりと云ふ。（現住、東京市神田区東紅梅町二番地）

与謝野晶子

和泉の人、女史は明治十一年十二月を以て、堺市甲斐町に生る。生家の姓は鳳、兄妹七人の内、女史は其の三女也。初め堺市宿院小学校に学び、ついで堺女学校に入る。十二歳頃より国史と小説と俳書とを読み耽り、源氏、栄華、大鏡、蕪村句集など、特に其の愛読する所たり。尚、『柵草子』、『史海』、『めざまし草』、『文学界』等の雑誌、硯友社の小説等亦其の好む所たりし也。

女史始め大阪より発行せし雑誌『よしあし草』に歌稿を出せり。平凡他奇なき作は、後日の天才者を生むべき階梯と見ること能はず。女史にして若し新詩社に入つて、寛氏の助縁を受くること微かりせば、其の天賦の才思を展ばすこと能はざりしなるべし。しかも一たび来つて同社に投ずるや、沈潜せし詩才忽ち迸湧して、底止する所を知らず。世上、女史を目するに鬼才の称を以てし、端倪すべからずと為す。其の始めて『みだれ髪』を出すや、奔放なる詩思は、若き女の情緒を掩ふ所なく発揮して、多くの非議者を出せしが、所詮才情倫を絶つの一事は、万目の等しく認むる所なりき。寛氏の建設せる基礎の上に高閣を築き上げたる者は実に女史にして、女史出でゝ始めて和歌壇上の新運動に一解決を告げたる也。

『小扇』『恋ごろも』出づるに及んで､沈着なる傾向を呈せり。女史は当時既に寛氏に嫁して若き妻たりし也。『舞姫』は女史が技巧の極点に達せし時代を表象し､『夢の華』は脂粉の気を脱して､瀟洒たるものあるを認む。然して､近き『佐保姫』に至りては、絢爛を経たる平淡の作ならざるはなし。

女史は今五人の母なり。家事を掌り、児を育つるの傍、詩作を廃せず、和歌を選評する新聞雑誌十種を超え、文学講演会に寛氏の事業を助く。亦屢々短編小説の作あり、精力益々壮なりと云ふべし。(現住、東京市神田区東紅梅町二番地)

吉江孤雁

信州の人、名は喬松、明治十三年九月、東筑摩郡塩尻村に生る。幼時は郷里にありて学を修め、後稼穡の傍ら読書せしが、遂に志望を遂ぐるを得て上京し、早稲田大学文科に入る。在学中窪田空穂、水野葉舟、小川未明等と交はり、自ら文学的の修養を積み、三十九年同大学卒業後は早稲田中学の教師となり、以て今日に到る。曾て中澤臨川に介せられて国木田独歩の主裁せし近事画報社に入り､『新古文林』の編輯に従事せしことあり､後『趣味』の編輯に関係す。氏の最も壇場とする所は山河自然の景を叙するにあり､『高原』『緑雲』等世に行はる。殊にツルゲーネフ、ビヨルンソン等の自然の叙事に関するものゝ翻訳あり、這般の造詣頗る深し。『ツルゲネフ短篇集』また世の重ずるところとなる。(現住、東京市外西大久保二百五番地)

田岡嶺雲

土佐の人、名は佐代治、明治三年十月、高知市外に生る。幼時、馬琴の小説類を耽読し、既に小説の面白みを解せり。二十三年一月上京して、水産伝習所に入る。翌年八月、其の業を了へて、文化大学漢文科の選科に入る、当時未だ文学者たらむとする志なく、入学試験の比較的簡易なると、読書し得べき便宜あるとに由り、文科を選びたるなると云ふ、二十七年七月卒業、翌年二月より雑誌『青年文』の主筆となる。巻初の時文評論は多く氏の執筆する所にて、熱烈火の如き文字は、情気に満ちたる当時の文壇を刺戟せしこと尠からず。二十九年五月、作州津山の中学校に赴任す。同校に教鞭を執るの傍、依然『青年文』に執筆す。尋いで、同誌と『文庫』と合併するに及び、氏が、健筆に接するの機を失へり。三十年十一月、職を辞して津山を出で、入京、朝報社に入る。翌年五月退社して、水戸の『いばらき』新聞に赴き、同紙を主宰す。翌年二三月頃上京、文集『嶺雲揺曳』を新声社より出す。氏が熱血の迸る所、縦横文を成さずんば止まず。天下の青年、相率ゐて氏が壮烈なる文に趨る。嶺雲宗の若き信徒は、斯くして各地に群を成せり。同年五月、上海なる東亞学堂より聘せられて、任に赴く。居ること一歳、職を辞して、長崎に帰り来り、兄の許に寓す。会々北清の事変に際し、氏は倉皇筆を載せて天津に至る。当時の「従軍記」は宮城来城の『俠文章』中に出づ。帰りて『中国民報』に入社す。翌年末、官吏侮辱罪に問はれて入獄。三十五年二月、出でて『下獄記』を公にす。三十七年十月、同社を退きて上京、翌年二月､『天鼓』を発刊し初む。同年九月、再び渡清して、蘇州なる師範学堂に教鞭を把る。病んで四十年四月帰り来り、水戸なる兄の許に養痾す。同年十一月上京、東亞新報の起るに際し、入つて其紙面を斡す。翌年一月、脊髄を犯され、荏苒久しきに亘つて癒えず。四十二年夏、氏の知友等『むら雲』を編して、其病を慰問す。病中ゴーリキーの作『三人』を訳せり。(現住、東京市外西大久保村百三十五番地)

高浜虚子

伊予の人、名は清、明治七年松山に生る。小学に在る頃、寡言温厚、中学に在りても亦同じ、毎に級の上位を占む。同学綽名して聖人といふ。中学を出でゝ明治二十五年秋遊学の途に上り京都第三高等学校に入る。後同校の変革あり仙台第二高等学校に転ぜり。幾くもなくして退学。東京に出でゝ一時早稲田鬮に籍を置きしも殆んど登校せず、又大学選科に入らんとせしも果たさず。日本人、日本新聞等に筆を採り、後万朝報記者となりしも数月ならずして辞し、三十一年雑誌『ホトヽギス』を発行す。

明治二十四年、尚中学に在りし頃、正岡子規大学生たりしが帰郷して相交遊し、俳句を研究し合せて一般文学を研究す。中学卒業の際校長より将来の目的を徴せられしとき、小説家たらんと明言せりといふ。高等中学を中途にして退ける所以は、普通学を久しく修むるを好まず、且つ学校は自己の天才自己の長所を益々涵養発揮せしむる所以にあらず、却り目的の反対に進むの虞ありとして退きし也。これより文学者たらんとして大に決する所あり。氏は久しく俳句を研究製作し、斯界のオーソリチイたりしに、近年小説に筆を染めて、世の俳人の粉紜を招くと雖、氏が当初の志は却て小説にありしといふ。俳句の書としては『俳句入門』『誹諧馬の糞』等にして、小説には、『鶏頭』『俳諧師』

『続俳諧師』『凡人』等あり。明治四十二年の文壇に在りて氏の『俳諧師』は、その最も首なるものとして、評壇に是非の声高かりき。

今は『ホトヽギス』を刊する傍ら、主として『国民新聞』の文学欄を担当す。（現住、東京市麹町区五番町三番地）

田口掬汀

羽後の人、明治八年一月を以て秋田県仙北郡角館町に生る。小学校を出づるや呉服商の丁稚となり、後自ら裁縫職を営みて失敗し、北海道に赴きて奮闘せしも、事皆成らず。帰りて旅人宿を業となす。其間政治経済の書を自修せしが、秋田市の新聞及び東都の青年雑誌に寄稿を重ぬるに及んで、其天分の文学に在るを自覚し、之より専ら文芸の書を耽読し三十三年春上京して旧の『新声』記者となり文名始めて揚る。後金港堂発行『文芸界』の懸賞小説に当選（人の罪と題す）して、作家たるの手腕を認められ、三十六年十一月朝報社に入社、同紙上に小説『女夫波』を掲ぐるや穏健雅馴にして年少男女に対する教訓を蔵するの故を以て、洽ねく家庭の迎ふる所となり、完了出版して増版十数回に及び、屢々京阪の劇場に演ぜらる。当時家庭小説の呼び声、読書会を圧するに至りしもの、氏及び菊地幽芳等の作物興つて力ありし也。四十一年二月朝報社を退き、同年十月大阪毎日新聞及び毎日電報の聘に応じて入社、爾来専ら新聞小説を草し、傍ら脚本に筆を執る、『女夫波』『伯爵夫人』『怪光』『黒風』『新生涯』等を重もなる著作となす。（現住、東京府荏原郡入新井村）

田山花袋

上野の人、名は録弥、明治四年十二月十三日、上州館林町字外伴木に生る。幼より学を好み、実兄につきて漢籍を学び、館林小学校に入るの外、学歴更になしと雖、青年時代に漢籍並に洋文を収めて含蓄する所深し。十七歳より野島金八郎といへるにつきて英文を学ぶ、（野島は、現にオランダ公使館にあり。）野島は又氏をして文学に入るの導師となり、氏をして文学書類を耽読せしむるにいたる。後博文館に入り、諸種の編輯に従事す。曾ては紀行文家として声名を馳せ、後、殉教的女性的、感歎的の小説を作為し、時の青年を感化してセンチメンタルの要素を深からしむるところ多し。硯友派全盛の頃といへども、時の青年は、同じく氏のセンチメンタルの感化に育ちたるもの頗る多きに至る。日露戦役起るや、博文館写真班の従軍記者となり、南山利得寺を経て遼陽に至り、病を得て帰へる。戦後、俄に自然主義の声喧しきに至れるもの、氏が、『露骨描写』を『太陽』に掲げたるを以て其最初となす。本邦文壇の自然主義運動は、他の二三の作業批評家の手に俟つものなきにあらいずといへども、その原動力たるものは実に氏なり。硯友派全盛の頃、氏はその小説の感化は、青年間に深かりしと雖、一般文壇の人を動かすに到らず、此の間沈潜して西欧大陸の文学を耽読し、得る所多かりしと共に、自家の処世観、人生観にも大に変動を来し、遂に自然主義の唱道となれり。それより以来、氏は専ら『文章世界』の主任記者となり、之れによりて言論を主張すると共に、その製作を発表して時代を動かせり、殊にその自然主義唱道のエポツクメーキングの作として『蒲団』一篇あり、その描写と内容と、悉く在来の作物と選を異にし、為めに喧聒なる世評を喚起せり。之れより諸種の短篇を執筆し、これ等は収めて『花袋集』にあり。後、長篇小説『生』を発表して、新様式の描写を示し、又『妻』を発表して、最近印象派の傾向を示せり。四十二年に入りて『田舎教師』の作あり、自ら印象的描写の試作なりといふ。

日露戦役の後暫くにして起りたる自然主義の唱道者として、而してその試作を発表するの努力に於て、猶ほ又一歩深く印象主義の傾向に進まんとするに於て、常に文壇の先頭に立ちて、健闘しつゝあるは実に氏也。自然主義勃興以来、文壇の中心に居る人、前後頓にその位置を換へて、新人の起り来るもの頗る多し、而してその感化を与ふるの最も多かりしもの又此人と言はざるべからず。

別に随筆を集めたるものに『インキ壺』一巻あり、以て氏の人生観、芸術観を窺ふに足る。（現住、東京府下代々幡村字代々木百三十三番地）

竹内栖鳳

名は恒吉、元治元年を以て京都御池油小路に生る。家は料理店なりし也。幼時より画を好み祖母に伴はれて、土田営林に就いて学ぶ。営林の父亦画家にして、景文の弟子なりき。其家に景文の描く所の巻物二三を蔵せるを見て氏は乞うて之を手本とせり。十八歳、当時の大家故幸野梅嶺の門に入りて、研修するに及び、漸く氏が非凡の技倆は顕はれ来る。山元春挙、川合玉堂、菊池芳文、都路華香等皆同門の後進也。氏の父は年老いて、多忙なる家事を処理し一家を経営するの煩に絶へず、屢々氏に強ふるに画筆を折つて、家事に努むべきことを以てす。氏即ち師の許より帰り

来れば、諸種の労役に服し、務めて俗事に接触するも、暇あれば必ず画筆を執りて、其決心の動かすべからざるを示せり。父死して姉の家業を統ぶるや、師は専心画事に耽くるを得、之れより業大に進み、その名亦漸く揚る。京都美術学校の教諭に任ぜられ、今なほ其職に在りて後進子弟を誘掖せり。師は斯くて欧洲に遊び、具さに泰西美術を視察し、帰りて其画風に一転化を来せり。三十五年の秋、東京美術院の展覧会に『古都の秋』を出品し、羅馬古城の敗墟を写して、憑弔に堪へざらしめき。洋画の妙趣を参酌して、新しき邦画を建設せんとする意気や、洵に特筆すべきものあり。翌年秋、研精会に『晩靄』を出し、コローの画風を酌んで、氏独特の妙味を伝へたり。斯くて氏が新しき試みは、著々として効果を呈せり。四十年十月、文部省美術展覧会の審査員に挙げられ、其第一回の展覧会に『雨霽』を出し、第二回に『飼はれたる猿と兎』を。第三回に『あれ夕立に』を出陳し、氏が手腕の大なると権威ある作風とは、遺憾なく発揮せらる。氏に依つて邦画の前途は悲観すべきものにあらざることを證據立てられたり。

雅邦翁没せざりし日、翁に擬するに、西都唯一任の氏を以てする人ありき。然れども翁は為すべきことを為し果てゝ前途はたゞ空也。氏の識量豊かに、新しき希望の光り海の如きに比して、当らざるも亦甚しきことを嗤ひたりき。翁没してより、氏に擬するに寺崎広業を以てするものあり、年配と地位とに於いて、東西其比を同しうするが如きも、其の天分の相違に至つては、二氏の間大なる溝渠を穿たざるべからず。氏は新時代の大家として、妄りに他の追随を許さず。寔に明治芸術界稀に看るの巨匠也。（現住、京都市御池通油小路西入）

坪内逍遙

美濃の人、名は雄蔵、曾て春の屋おぼろの号あり。安政六年五月を以て岐阜県加茂郡太田村尾張代官所に生る。十歳の時父と共に名古屋在に帰農す。明治九年東京に遊学して開成学校に入り、政治経済学を専攻し、更に東京大学文科に進み、十三年之れを卒業す。文学的生涯に入りしは明治十八年、文学論『小説神髄』を公にせしに始まる。氏は之によりて芸術の至上目的は人生の真相を描くにありて、他に善悪是非の含意なきを證明す。これ吾邦に於ける文芸革新の最初の磬鐘にして当時西欧清新の文学すでに識者の咀嚼する所となりて、文芸上の新開眼また自ら来るべきの勢なりきと雖、その之れに一歩進んで、早くすでに文芸の新趣を唱道して、多年の迷夢を攪破せしこと、また実に氏が眼識の超凡にして自ら信ずること頗る篤きにあらざるよりは、焉んぞ得て斯の如くならむ。此書の世に布くや、之れが典範且つ試作として公にせられたるものは『当世書生気質』一篇なり。その何等道学的の羈絆なく、性格の描写未だ従来の小説に全くこれなかりしものを示して、天下の耳目を一新せり。後東京専門学校の早稲田に創設せらるゝや、入りて此処に教鞭を取る。はじめは法科政科文科共にこれが教授の任にあたりしが、後全く文科の将帥となり明治二十六年『早稲田文学』を創刊し、之れが編輯を督して新文学の唱道、新進文学者の誘導等、吾が邦文芸の発展に努むること、具に相至る。文壇に早稲田派の目の起ること之を濫觴となす。曾て『近松研究会』を起して諸文星を会し、また生徒を率ゐて詳さに研究す。結果は『近松の研究』に収められ、現に世に行はる。二十六年より翌年にかけて『早稲田文学』に『我邦の史劇』なる論文を発表し、夢幻劇を排す。此の事よりして端なく、『しがらみ草紙』の鷗外漁史と論戦を闘はすことゝなり、氏の小羊漫言と、鷗外の山房論文と、相俟ちて鼓旗相当り、明治文壇ありて以来の一大論戦たりしこと、今猶ほ人の知る所也。明治二十八年脚本『桐一葉』、『早稲田文学』に現はれ、翌年に到りて完結す。評壇ために騒然たり。ついで又『牧の方』表はれ、氏の作劇の技、漸く世評定まる。しばらくにして又『新著月刊』に『杜鵑孤城落月』現はる。三十七年十一月『新楽劇論』を出して西洋のオペラと我邦の能と歌舞伎とを折衷したる新案劇を唱道し、その試作として『新曲浦島』著はる。世評また喧聒。先之『早稲田文学』刊を止め、氏はまた一方に倫理学者として、早稲田中学の教頭となり、早稲田専門学校に教鞭を執る傍ら同中学にありて、倫理の講義をなせり。『通俗倫理談』今に世に行はる。後之を辞して、専ら早稲田大学の文科に教鞭を執る。

氏の文学上の功勲と、教育上の効績と、何ぞ斯の如きに止まらん。詳さには之れを語るの日、また語るの人、他に之れあらむ。三十九年『牧の方』を東京座に、また同年『桐一葉』を同座に演し、『新曲浦島』についての、楽劇『常闇』また場に上ぼさる。今や氏数万の大資を投じて、其宅に舞台を設け、日夜子弟を督して、吾が邦の劇壇に新しき或物を寄与せんことを企つ。且つ氏は夙に英のシエーキスピヤーの劇を研究し、シエーキスピリアンとして、世界的の学究たるのみならず新興の泰西劇作家たるヘンリツク、イプセン、バーナードシヨー等の劇を研究すること深く、常に早稲田大学に之を講ず。著書には上に記せるもの外、『新曲カグヤ姫』小説『シーザー奇談』文集及び講演集『文学その折々』『梨園の落葉』『小羊漫言』『文芸と教育』『倫理と文学』『作と評論』『英文学史』等あり、その他頗る多し。（現住、東京市牛込区大久保余丁町百十二番地）

塚原渋柿

江戸の人、幼名直太郎、後靖と改む。嘉永元年三月市ケ谷合羽阪上（今の市ケ谷仲町）に生る。家代々幕臣たり。幼年時代を兵馬倥傯の間に送くり、維新後徳川家に従うて駿河に移り、選ばれて沼津兵学校の資業生となる。明治三年藩命を以て薩摩に遊び、帰りて静岡の集学所に入り、人見寧、梅澤敏の諸氏に就て武技を修む。一たび某地方の学校教員となり、明治七年横浜毎日新聞の編輯に従ふ。偶々同新聞の新聞条例に触るゝや、氏は署名人たるの故を以て禁獄十ヶ月に処せらる（自宅禁獄也）十一年東京日々新聞社に入る、同新聞の主筆は福地桜痴也。氏は是より先き成島柳北の知を得、今又当年操觚界の一流たる桜痴と親しく接するを得、二氏によりて文章上の指導を受けたること浅からず。十五年朝鮮京城の変あるや、特派せられて赴き、『入韓紀実』の著あり。爾来同新聞の小説欄を担当して三十七年に至る。氏諸家の旧記に委しく、応仁以後所謂戦国時代の武士道に於いて頗る得る所あり、武士の動作言語を写して躍々真に迫る。東京日々新聞は永く政府の機関として官吏教員等を重もなる読者となせるが故に、所謂人情小説の盛んなりし当時に於ても、読者は氏の時代物を愛誦して変らざりき。三十七年毎日電報起るや、聘せられて其の社員となり、以て今日に至る。著書頗る多し、中に就いて『山崎合戦』『小牧合戦』『由利正雪』等最も世に行はる。

氏齢已に六旬を超えて健康毫も衰へず、矍鑠壮者を凌ぐの語は、氏に於いて誇張せる形容に非らず。性磊落、守る所固うして曾て官職に就かず。謂らく余や戊辰の役賊名を被ふる者須らく草莽の氓を以て身を終へんのみと。目下筆を執りつゝある『徳川三百年』は、氏が畢世の心血を賤がんとするものなるべし。（現住、麹町区紀尾井町九番地）

内藤鳴雪

伊予の人、名は素行、弘化四年四月十五日江戸芝三田一丁目旧松山藩邸に生る。松山藩の士族也。十一歳の時父に伴ひて松山に帰る。幼時剣を学びしも、自ら得意とせず、却て読書を好む。松山藩学明教館に、十一年より十七年までを文武の修行に送る。後、松山藩主の近習小姓に徴せられ、慶応の末年まで之れを奉ず。傍ら漢詩を作り、読書に耽る。藩の嗣君に従て京都に遊ぶことあり、之れより、天下騒然、王政維新となる。藩政の為めに朝敵となり、一事は籠城したりしが、のち恭順の事に決し、危く一命を得たり。明治二年より同三年まで、専ら芝居道楽に耽る。後ち帰国して藩の権小参事に任ぜられ、学制改革の事に従ひ、程朱学のみなりしを改めて、漢書の外、西洋の書籍を入るゝ事となせり。明治三年斬髪。明治四年藩政全廃、職を解かれて東上し英学の志望ありしも故ありて果さず、遂に帰藩、同五年、学制頒布となり、学務取締に任ぜられ、小学設置の事に携はる。松山市及び周囲の学校を設立するにつきても与かりて力あり。後愛媛県置かるゝや、六年愛媛県属官となり、学務を担当して専ら中学師範等の学校設立の事に与かる。爾来学校の視察の為めに東奔西走す。明治十三年文部省へ転任、家族と共に東上し、今日まで東京に住す。後高等官となる諸書を渉猟して自家独特の宇宙観を立つ。

二十四年脳を病みて藩をやむ。之れより先旧藩主の設立せる旧藩の初世を収容する寄宿舎の監督となり、その頃此処に在りし正岡子規と共に交遊し、文学を研究す。遂に、その子規の創めたる俳句に化せられて、句作をなすに到る。日本派の漸次世間に認めらるゝに至るや、氏亦世の重んずる所となる。子規の没して俳壇の割拠的形成漸く成るや、氏は唯一人の調和者として、将又後進の指導者として、選評に、著述に、評釈に、太だ努むる所あり。現に四種の新聞と、二十種の雑誌に関係を有す。

その著す所『俳句独習』『俳句作法』『鳴雪俳話』『老梅居雑著』『元禄二十家俳句評釈』『芭蕉俳句評釈』『蕪村七部集評釈』『老梅居俳句問答』等あり。老いて愈々健、壮者を凌ぐの概あり。夙に徒歩主義を唱道し、自ら徒歩主義会を組織し、閑ある毎に山家を跋渉して快となす。少量の酒を嗜み、常に三オンス入りの壜に多少を入れて、随処に酌む、由て世に三オンス翁の名あり。（現住、東京市本郷区真砂町十八番地）

長沼守敬

陸中の人、安政四年九月、一ノ関に生る。少壮早く河村清雄等と前後して伊太利に学ぶ。而も学資の欠乏は氏をして心安く芸苑に身を措くの余裕あらしめず、ヴエネチヤ東洋語学校に日本語を教へ、或はまた感興を無視せる醜俗なる依頼物に従ふ等、あらゆる苦楚を嘗めし結局堪へ難きの窮迫は氏をして終に自殺の決意を抱かしむるに至り、ピストルは危うくも氏が咽喉を見舞はんとさへしたりき。此のピストルの一條は氏の生涯を通じて有名なる語り草となりて、今尚ほ存する也。

氏は甚正直にして剛毅なり。是を以て権謀を悪む事甚しく、五姓田芳柳の如きは終に氏の鉄拳を喰ふ事あまたゝび

なりしと伝へらる。近年老いしが如くにして、その新作一向公にせらるゝ無しと雖、氏がアトリエを訪ふものは間々老熟せる小なる胸像等を見るを得可く、野心無き安らかなる氏の胸中には寧ろ超人的なる将た真に芸術家的なる温情の流動せるあるを見る。

最も世人の記憶に存せる氏の作物としては、毛利忠正及各枝藩主の銅像なる可し。今や亀山に安置せられて永へに藩公の偉蹟と共に残れり。又明治美術会当時に於て出品せられたる西洋小児の胸像は、吾人をして最も深く敬仰せしめしものにして、彼当時大熊、藤田等甘口なる諸氏の間に立つて超然不言の教訓を垂れしは、独氏ありしのみと云ふも誤なかるべし。氏の相貌は高雅上品也、人をして毫も苦心惨澹に因する酸苦の跡を認めしめず。酒を嗜みては角立てる三角眼を流して、滑稽洒落、而もその間悪口皮肉の毒言を憚らず。大家の如きは実に馬鹿呼はりせられて見る影なかしりことあり。曾て占めし美術学校教授の職の如き氏に於ては屁の如きのみ。（現住、東京市小石川区表町百九番地）

中村春雨

岩見の人、名は吉蔵、明治十年、津和野町に生る。代々旅宿を業とす。郷里の小学を出でゝ十六七歳山口県の中学に入学し、半途之れを退きて静岡にありて法律を研究す。後病を得て帰国せしが、癒えて大阪に出で、二十歳の頃下級官吏となる。其の間あらゆる苦楚を嘗めて、他年文学上に雄飛すべき人格の基礎を作る。二十九年高須梅溪等と共に雑誌『よしあし草』を発刊す。明治三十二年京に上りて、広津柳浪の門に贄を取り、その家にありて詞藻の学を専攻し、傍ら『新声』に評論の筆を執る。同三十二年早稲田大学哲学科に入学し、三十五年之れを卒業す。校にある頃すでに文名世に聞え、『無花果』大阪毎日新聞の懸賞小説に当選して、春雨の名、徳冨蘆花と相俟ちて光明小説家の班に列し、『小羊』『白鳩』等の作また世に歓迎せらる。可憐にして信仰ある婦女少年を主人公となして、筆致また清楚也。

明治三十九年六月洋行す。米国に行きてプリンストン、、ユニヴアシチイに入り、ドラマチツク、リテラチユアー、及びクリスチヤンレソジヨンを研究し、一年にしてマスター、オブ、アーツとなる。次でニユーヨークに移りブルクリンに行きなどして、一年半の間、劇の研究に従事す。後、大西洋を横ぎつて見聞の為めに英国ロンドンに留まる。二三ケ月にして独逸ベルリンに行き、日本倶楽部にありて劇を研究するもの亦一年有半。明治四十二年十二月帰朝す。

氏の著書としては以上に記せる小説の外、『国務大臣』『密航婦』その外数種の作あり。別に基督教に関せる著書として、『新約物語』『旧約物語』等あり、又伯林滞在中に執筆せしアンドレーフの『信仰』の翻訳あり。然れども最後のものを除くの外は、皆洋行前の著書にして、今日の氏を測るべからず、今や氏は滞欧中の蘊蓄せるものを齎らして、日本の新劇壇及び文学上に一大功果を齎らさんとする也。〔住所記載なし〕

中村不折

信濃の人、名は鉾太郎、慶応二年七月を以て京橋区八丁堀に生る。五歳の時一家を挙げて故郷なる信州高遠の山村に移る。小学校に入りて僅に一年余、家道頽廃して退校の已むなきに至り、或は商店の小僧となり或は菓子屋の職工となり、傍ら暇あれば幼時より深き嗜好ありし画事に耽る。十九歳の頃小学校の助教師となり、数学及び絵画を教ふ。上京の志を抱き貯蓄三十金に上るや、之を携えて小山正太郎の門に入る。一ケ月の生活費僅に一円五十銭。辛酸具に嘗むること六年余、『日本新聞』の分身たる『小日本』の挿画を担当するに至りて始めて小康を得たり。是実に明治二十七年の事也。此間正岡子規と相知る。日清戦役に際し軍司令部附として渡清し、半歳有余を清韓の跋渉に費せり。爾来盛名いよいよ揚り出版物の表紙挿画等氏の独占に帰せる状あり。而も益々生計を節して貯蓄に意を用ゐ、三十四年自費を以て仏国に留学するに至れり。依然たる苦学生、普通留学費の半額を以て生活し、研鑽一日も怠らず、プリー及び賞金百フランを得るの傑作を出し、三十八年の春帰朝す。

帰朝後『建国粗業』『白頭翁』等の大作あり、常に囂々の世評を迎ふ。世人は之を以て展覧会向きの大作に過ぎずとなす者少なからず、恐らくは氏に在りて満足すべき作に非ざる可し。氏の作物の幾多を想起して其芸術史を按ずるに寧ろ洋行以前に於ける作物中に氏の個性及氏の技術傾向の遺憾なく発露せられたるもの多かりしを想ふ。『黄葉村』若しくは『淡烟』の如き、筆路迫らずして自ら気格を備へ、而して典雅簡朴の風得易からざるものありし也。唯夫れ不撓不屈は氏の生涯を通ずる信条也。将来の飛躍必ずや大に見る可きもの有らん也。目下大平洋画会研究所の教員たり。アカデミーヂユリアンに於て自ら受けたる教育法を些の修飾なく授くるが故に、学生等の裨益受くる少なからずと云ふ。（現住、東京市下谷区中根岸三十一番地）

中村星湖

甲斐の人、名は 将為、明治十七年二月、山梨県南都留軍河口村に生る。中学卒業上京し叔父の家に寄食し、早稲田文科大学に入る。在学中学者たらんか作家たらんかに煩悶する事数々、四十年四月『少年行』を『早稲田文学』懸賞募集に応じて長谷川二葉亭の選ぶ所となり、之れより自信出でゝ作家たらんと決心す。はじめは泉鏡花の作を耽読したりしが、後に藤村を崇拝しその影響を受くること少からず、個人としては中島孤島の師導する所多かりしといふ。在学中島村抱月の眷顧を得、卒業後は抱月を助けて『早稲田文学』記者となり、以て今日に到る。作は『少年行』『半生』を上梓し、別に『影』あり、『東京毎日新聞』に連載せりき。他に短篇『行路病者』『一切の事』『つなぎ糸』等あり、四十二年の秋ごろより文壇一部の重望を寄せらるゝに至る。氏の作は自ら語る所の如く、頗る島崎藤村の作の影響を受け、純自然派の俤あり、描写の筆に長じ、又長篇を揮灑するの技倆を有す。時に翻訳を執筆して『早稲田文学』に掲ぐ。（現住、東京市牛込区弁天町七十九番地）

永井荷風

東京の人、明治十二年十二月、小石川区金富町に生る。幼時より文芸を嗜む、二十歳の頃外国語学校の支那語科に入りしが間もなく退き、諸種の芸術を学ぶ。講談師三遊亭夢楽、松林伯知等の門に弟子たりしことあり。先之美術学校に入らんとせしが、家に許さざる故ありて之れを止め、後、高等学校工科の試験に応ぜしが、登らずして止む。又尺八を覚えんとして、名人荒木古童の門に入り、その免許を得。後漸く文芸に親しみて、広津柳浪の門に入り、柳浪と合作の小説をはじめて『文芸倶楽部』に掲ぐ。之れ文壇に進むの出発点也。二年にして歌舞伎座に入り、福地桜痴居士の門人となる。

後全く文学に心を潜むるに到り、『地獄の花』賞に上りて世に出づるや、文名頓に高く次で『夢の女』を上梓す。是等の作、当時の文壇にありて清新の姿致多く、すでに輓近主義文芸の俤を帯ぶ『女優ナヽ』の梗概また世に重ぜらる。後、正金銀行員として米国に行き次で仏国に遊ぶ。仏国にありては具さに諸ろの芸術殊に音楽詩歌を研究して、帰朝するや『あめりか物語』一巻を上梓し、一種新芸術の香気、辺幅に溢して、清新なる情緒の声、時の文壇を愕かせり。次で『仏蘭西物語』を上梓せしが、官権の忌憚に触れて発売を禁止せられ、小説集『歓楽』また禁止の厄に合う。

近事『荷風集』の出版あり、世に行はる。明治四十二年一月の『新潮』に『祭の夜がたり』を出して以来、殊に名声錚々たり。目下『朝日新聞』に『冷笑』を連載す。（現住、東京市牛込区大久保余丁町七十九番地）

中島孤島

信州の人、名は茂一、明治十一年十月、東京浅草区に生る。十三歳その郷里に帰り、信州上田にて中学の業を卒ゆ。二十九年上京して元の早稲田専門学校に入り、三十二年同大学文学科を、優秀の成績を以て卒ゆ。正宗白鳥等と同窓にして、相並んで秀才の聞え高し。それより文筆を以て業となし、二三の雑誌に関係せしことあり、今は三省堂百科辞典編輯部にあり。明治二十九年『早稲田文学』の再興するや、入りて其記者たりしが、合はずして去り、後、非自然派の批評家として立ち、時の論豪と屢々議を闘はせり。著書には『新気運』『山鳩』等あり。（現住、東京市牛込区赤城元町三十六番地）

夏目漱石

東京の人、名は金之助。慶応三年正月六日牛込区喜久井町に生る。神田の錦華小学校を出で、一ツ橋中学校に入り、之れが業を卒へて三島中洲翁の二松学舎に入る。此処にありて具さに漢文漢詩を研究せり。後大学予備門に入り、芳賀矢一、正木直彦、水野錬太郎、等その同窓たり。二十三年九月帝国大学工科建築家に入る。後勧むる人ありて文科に転ぜり。二十六年七月之れが業を卒ふ。在学中故正岡子規と交はり、俳句を勧められて句作する事尠なからず、傍ら漢詩を作る。二十八年四月正岡子規の介する所となりて伊予松山の中学に赴任し、居る一年にして熊本高等学校に転任を命ぜらる。三十三年九月、教授在任のまゝ英国ロンドンに留学し、三十六年一月帰朝す。同年四月帝国大学助教授兼第一高等学校教授となる。四十年故ありて、共に、之れを辞し、『朝日新聞』の招聘する所となりて同社に入り、以て今日に到る。先之明治三十八年雑誌『ホトトギス』に小説『わが〔ママ〕輩は猫である』を掲ぐるや、その洒脱軽滑の筆力に加るに博渉宏学の識見豊かなる諷刺は、深く時人の感歎して迎ふる所となり、次いで『倫敦塔』『薤露行』『坊ちゃん〔ママ〕』『草枕』等を草して文名益々昇り、一時独歩、藤村と共に三家併び称せられて文壇の重鎮となる。氏は英

国十八世紀文学に通ずること精しく、また漢籍の造詣頗る深し。

著書には小説『わが輩(ママ)は猫である』『漾虚集』『鶉籠』『虞美人草』『草合』『三四郎』『坑夫』等あり、四十二年『朝日新聞』に『それから』を連掲し、同年清韓に遊びて、又同紙に『清韓(ママ)ところどころ』を連載す。学術評論には『文学論』『文学評論』あり、共に世に行はる。(現住、東京市牛込区早稲田南町七番地)

上田敏

東京の人、曾つて柳村の号あり。旧幕臣上田銅二の長男にして、明治七年十月、京橋区築地に生る。父は詩文典籍に通暁し、叔父太郎乙は蘭学創唱者の一人也。氏此血統を受け幼時早く読書に耽る。甫めて八歳、父と共に静岡に移り居ること数年、明治十九年上京し爾来東京英語学校、第一高等学校等に学ぶ。此間故田口鼎軒の援助を受くる所多し。二十七年文科大学に入り英文学を専攻す。是れより先き、藤村、孤蝶と相知り、『文学界』に執筆する所ありしが、『帝国文学』に屢々評論を掲げて、穏健精緻の論調、早く世の認むる所となる。三十年同大学卒業、尋で大学院に入る。此年高等師範学校教授に任ず。古代英詩及び近世英文学仏文学の研鑽に耽くるの傍ら、常に文学雑誌に筆を絶たず。早く文集『みをつくし』論文集『文芸論集』等の著あり。三十六年以後、泰西近代文学の影響は各方面に及ぼして、詩壇亦新傾向の動くや、氏は最も其紹介研究に勉め、雑誌『明星』に、主としてフランス近代の象徴詩を訳して掲ぐ。後之を『海潮音』と題して上梓す。時の詩人にして其感化暗示を蒙らざるもの少し。更に、馬場孤蝶等と共に、雑誌『芸苑』を発行し、泰西新芸術の紹介に勉むる所ありしが、暫らくにして廃刊す。

後帝国大学文科大学助教授となり、四十一年海外留学を命ぜられ、滞留一年有余、親しく彼の地の文豪と交を訂して四十二年秋帰朝、直ちに京都大学文科大学教授に任ぜらる。氏は真摯なる学者にして亦忠実なる文人也。従来の文芸の新運動に与り関せるもの少なしとせず。教授の職は永く氏と離るゝこと無かる可しと雖も、溌溂たる文壇の新潮流を黙視し得べき人にあらず。近く掲げられんとする『国民新聞』の長篇小説は、奈何の面目を以て吾人に臨むべき乎。亦是れ興味ある事実也。著書は前記の外、『耶蘇』、『最近海外文学』『詩聖ダンテ』等あり。(現住、京都市上京区岡崎町)

内田魯庵

東京の人、名は貢、明治元年九月上野車阪に生る。氏の博覧強記は文壇に其匹を絶つ。而して是れ転生の読書熱の然らしめたるものにして、幼時漢籍、小説、草双紙類を熟読し、八犬伝の如きは七八歳の頃より十六七歳に至るの間、通読三回に及びしと云ふ。屢々小学校を半ばにして退き、三四の学校に入りしも、貸本屋通ひは日課の状なりしを以て其成績よからず。始めは政治家たらんとし、後軍人、医師たらんとし、更に建築家に志望を転じて修養する所ありしも、後又々実業家たるべく決して某商会に入り、立身の階梯を此処に作らんとせり。当時坪内逍遥の『小説神髄』既に公にせられ、美妙、紅葉等の新作頻々出でゝ、文壇少壮者の手に落ちたるの時也。氏偶美妙の作を読んで深く感じ所感を録し私信として美妙に送れるが、月を経て『女学雑誌』に掲げられ、幾もなく聘せられて同誌の記者となれり。

当時の『女学雑誌』は一面文芸評論の重きをなせるものにして、氏が一片の私信は、文壇の人たる可き所縁を作れる也。次で美妙、紅葉等と交を訂し、長谷川二葉亭と相知る。地方に退きて大に修養を積まんとして、偶々厳君の逝去に会して果さず、ドストイエフスキーの作を訳せる『罪と罰』は、氏が一家扶養の義務に苦しみながら筆を執れるものにして(二十五年)、一般の愛読する所とならざりしも、現実描写の点に於いて創作界を益したること少なからず。後『文学者となる法』を著し、当時の作家に対し、縦横の諷刺痛罵を加へたることあり。社会小説を要求する声漸く高まるや、『暮の二十八日』を『新著月刊』(三十一年三月)に掲げて、取材構想総て新意に成れるを示し、次で『浮き枕』『片鶉』『霜くづれ』等の作あり、何れも冷かに社会の欽陥を諷刺せるもの也。当時氏は『文芸倶楽部』の時文評論に筆を執りつゝあり、これ等の作、都べて其主張せる小説論を事実に具体せるものなりき。博文館『太平洋』を発刊するや、氏は毎週の紙上、諷刺を主とする短篇を掲げ後之を『社会百方面』と題して公にせり。爾来丸善書籍株式会社に入り亦多く筆を執らずと雖も、叩けば必ず其抱懐を洩らし、叩けば必ず其抱懐を洩らし、隠然評論界の重きをなす。四十一年十一月トルストイの『復活』を訳し、四十二年十月シエンキーウキツの『二人画工』を公にせしが、官権の忌む所となり発売禁止の厄に逢ふ。(現住、東京市牛込区砂土原町二丁目六番地)

昇曙夢

薩摩の人、名は直隆、明治十一年七月十七日、鹿児島県大島郡大島芝村に生る。二十七年小学校を卒へ、翌年鹿児島に出で、希臘正教派の牧師故高屋氏の門に学ぶ。同年上京し、駿河台伝教学校に入り、翌年正教進学校に転ず。在

学七年間、日課以外普ねく文芸科学哲学の書を渉猟し、殊に好んで露西亜文学を研修す、在学中また雑誌『使命』『新声』『裏錦』『新小説』等に寄稿して文名漸く揚る。此のころ既に評伝『ゴーゴリ』の著述に従事し又ツルゲネフの名篇『草場』等の訳あり。独逸語専修学校に独逸語を修めしも、亦此時の事也。尚在学中夏季休暇を利用して東北に一回関西に一回徒歩旅行を企て帰来大に得る所あり、斯くて三十六年優等を以て神学校を卒業し、直ちに挙げられて同校講師となり、爾来今日に到る。卒業後露国留学を企てゝ成らず、二三年間は哲学に行かんか、文学に行かんか、自己の使命ある所に悶えたりしが、世人目して文学者となせるを以て、何時しか哲学の志望を絶ち、生涯露国文学の紹介を以て任ずるに到れり。幼時より文学を嗜み、早く既にプーシキン、ゴーゴリ、ツルゲネフ等の諸作に親しみ、又二葉亭の『片恋』其他蘇峰氏の著書、故樗牛、柳村、抱月等の評論に接して多大の感化を受く。著書は『ゴーゴリ』（三十七年）『露西亜文学研究』（四十年）翻訳にては『白夜集』（四十一年）等にして、氏の露西亜文学の翻訳は、わが翻訳界のオーソリチイなり。職は神学校の外、数種の新聞雑誌に関係し近くはまた早稲田文科大学特種研究科の露語科講師に聘せらる。（現住、東京市牛込区市ケ谷田町二丁目二十二番地）

大塚楠緒子

東京の人、文学博士大塚保治の妻也。一ツ橋女学校、明治女学校に学ぶ。又佐々木弘綱に就いて和歌を修め、続いて息信綱に師事す。竹柏園の社中に在つて、最も古く、且つ勢力ある人也。和歌、新体詩、小説、何れも女性として一通り堪能せり。女史が文学的生涯に入りてより年久しく、女流作家として許され来れる日は、決して短き期間となさず。其の作物に際立ちたるもの少きは、女史多年の努力に対し、物足らざるも甚しと云ふべし。思ふに之れ才の累ひするに由らざるか。才人の常として一処に力を集めむとせず、詩作多方面に亘つて、一も究極せざるが如き傾きあり。而も女史は近時之れを自覚せしか、専心小説に筆を著けて、一転化を計らんとするものゝ如し。短篇小説集に『晴小袖』あり、女史が作風を窺ふに便也。（現住、東京市本郷区西片町十番地）

大町桂月

土佐の人、名は芳衛、明治二年一月、高知県高知市北門筋に生る。始めは軍人たらむとし、更に政治家たらんとせしも、漸く長じて自己の天分を解するに及び、文学を以て、身を立つるに決す。第一高等中学校を経て、大学国文科に至るまで、好んで文筆を執る。佐々木伯に知られて『明治会叢誌』に論文を寄稿せしは、主として当時の事にして、少壮論客の名は早く儕輩の間に聞え亘れり。『帝国文学』の起るに及び、初号に美文『病院』一篇を掲ぐ。漢文脈に国文脈を加味し、尚、一味の洋式を添へて絢爛目を奪ふが如き筆致に、いたく当時の青年の欲する所に投じたりき。氏は同誌の記者として一方評論の筆を揮ひ、一方又武島羽衣等と共に新体詩を草す。古典の匂ひ豊にして、形式の美くしきを喜べる傾向ありき。幼稚なる詩壇は赤門派と唱へて、氏等の作を歓迎せり。二十九年、大学を卒業してより、文名漸く高く『帝国文学』の外『八紘』『青年文』等に評論を草す。三十年、羽衣等と共に『花紅葉』と題し、美文韻文を集めたるものを公にす。美文の名之れより世に騒がしく、氏の文を模倣し謳歌する者、益々多きを加ふ。翌年更に単独にて同種の文集『黄菊白菊』を出し文名愈々揚る。三十二年出雲の簸川中学に赴任し、留まること年余、帰りて博文館に入り、雑誌『太陽』及び『中学世界』に評論の筆を執る。

幾くもなくして、『太陽』を辞せしも、『中学世界』は依然評論の筆を継続して今日に至る。其の言ふ所、常に自己経験の上に立脚して青年を教ふるが如き態度と、文章平明にして理義明徹、人格の蔽ふ所なきが如くなるとに、青年読者の心は期せずして氏が作物に向ひ、作物を通して、氏が人格に憧憬する者多きを加へ来れり。其の著片々たるもの多きも、一冊又一冊、今や積んで等身の高さに及ぶ。其青年間に大なる勢力を建設せるは驚く可きものあり。三十九年の頃より文芸講演会を起して、弁舌を習練す。口吃して、よく言ふこと能はざりし氏は、今や一種の雄弁家となれり。最近の著書に『桂月書翰』『源氏と平氏』『月影集』等あり。文章やゝ平淡に失して精彩を欠くと雖も、氏の面目は益々躍如たるものあり。（現住、東京市小石川区雑司ケ谷原町百十四番地）

黒田清輝

薩摩の人、慶応二年六月を以て鹿児島市に生る。華胄の出、黒田清綱の甥にして又其養嗣子也。もと政客たらんとして仏国に遊学す。会々一友に拉せられて某画家のアトリエを見るに及んで漸く画事に親しみ始む。斯くして自己天稟の全く此に存するを自覚するや、権利義務の乾燥文字に換ふるにパレツトを以てするに至る。その第一階梯よりしてこれを彼の地に修めたる同氏に、我国の変則極まれる不純画術に累せられし跡無き洵に当然の事と云はざる可から

ず。十幾年を彼地に送つて帰朝すれば当時唯一の洋画家たる明治美術会は宛ら養育院の如く、唖あり盲あり跛あり聾あり、而も一方月並運座の臭味は筋骨逞しき青年を痿えしむる甚だしく、会頭幹事と称せらるゝ官人輩は威容を整へてこれに臨み、泰西芸術云々と説く。白馬会一派が黒田氏の手によつて成れる、洵に其数なりと云ふ可き也。爾来一作毎に声名を増し、一歩毎に地盤を鞏うし、東京美術学校の洋画科は全く氏が薬籠中のものにして、官費留学生派遣の採否は氏が一顧一眄の間にありとまで伝へらる。而も現代洋画界の泰斗は依然として氏也、絵らしき絵、西洋画らしき西洋画を描くものは氏の外に求めて多くを得可からず。氏が官学派の勢力を一身に擁して傲然美術会に臨むもの、亦黙視せざる可からざるの理由ある也。（現住、東京市麹町区鞏鞏平河町六丁目）

窪田空穂

信濃の人、氏は通治、明治十年六月、長野県東筑摩郡和田村に生る。氏が短歌の生涯に入りしは、四十一二年の交、雑誌『新声』『文庫』に小松原はる子の名を以てせしに始まる。清新にしてうら若き情思に富める趣は、既に此頃より顕はる。三十三年秋、新詩社に入り翌年三月『明星』に「草笛」と題し、母の喪に詠めるものを出せしより、鉄幹、晶子以外、別に地歩を占むるの作家として、漸く重きを同誌に為しき。当時氏は既に上京して、早稲田大学文学科に在り。同年夏、同社を退きて、中澤臨川、蒲原有明等と雑誌『山比古』を起し、頻りに詩趣ある散文を公にせり。三十七年の夏、文学科の業を卒へ、電報新聞社に入る。翌年夏、歌集『まひる野』を公にす。歌壇に新声を寄与したる氏は、晶子、薫園に次いで、斯壇一方の雄と称せらる。三十九年二月、『文章世界』出づるに及び、氏は其の和歌選者に挙げられて今日に至る。同年夏、水野葉舟と名を列ねて、歌集『明暗』を出し、一段の進境を示せり。四十一年三月、『短歌評釈』を出し、翌年三月『短歌作法』を公にす。何れも氏が摯実なる研究の跡を窺ふに足る。氏は今『婦人くらぶ』を主宰し、傍ら、小品及び小説を物して、短歌に表はれたる如き情趣を寓せり。（現住、東京市牛込区南榎町十五番地）

草野柴二

美作の人、姓は若杉、名は三郎、明治八年十一月を以て岡山県北和気村に生る。司法官たる兄に従うて四方に移り、小学を岡山、松山、名古屋に過し、中学を名古屋、仙台に送れり。始め絵画に嗜好深く美術学校に入らんとせしも、故ありて断念し、高等学校に入るや文科を選べり。当時『文庫』に葉桜新樹の名を以て美文を寄せ、優麗なる詞藻は、当時の少壮文人の間に喧伝せられたり。大学英文科に入りしも、学費豊かならざるの故を以て一年にして退き、中学教員となる。後若杉の家を嗣ぐに及んで、再び大学に復するを得たり。卒業後越後新発田の中学校に赴任し、居ること数年、其間専らモリエルの脚本を訳し、諸種の雑誌に掲ぐ。後之を集めて出版せしが、風俗壊乱の故を以て発売を禁止せらる。『モリエル全集』即ち是れ也。四十年上京、日本大学其他に教鞭をとり、傍ら主として小説を草す。著書に、『ヂヨンブル及其郷士』『近代文学訳註叢書』等あり。（現住、東京府下淀橋町柏木九十二番地）

柳川春葉

東京の人、名は専之、明治十年三月下谷区二長町の市村座付近の家に生る。祖先の故郷は国木田独歩を出せる播州龍野也。明治十九年牛込に移りて今日に至る。小学の業を卒ふるや、静岡県人の創立にかゝり、榎本武揚を校長とせる育英中学に入る。（当時麹町区飯田町に在り）後間もなく同校の商業科に転じ、居ること二年にして退く。此間撃剣を伊庭想太郎に学ぶ。早く文字を草し、屢々尾崎紅葉の是正を受くる所ありしが、十八歳の頃、入りて其門に列る。傍ら国民英学会に於いて語学を修む。三十年春陽堂に入りて雑誌『新小説』の編輯に従事す。処女作『夢の夢』の長篇を『読売新聞』に掲げたるは、其翌年にして、齢漸く二十二歳、世は此少壮作家の前途の測るべからざるものあるを慶せり。三十三年大阪より発行せる雑誌『小天地』に『都振り』を掲ぐ、これ氏が短篇に筆を執れる始めにして、爾来其平明穏健の短篇は氏の壇場たり。春陽堂に居ること七年にして、『新小説』を辞し、専ら創作に従事す。声名いよいよ揚り、硯友社に在りて、風葉鏡花に次ぎ、秋声に雁行すと称せられしが、自然主義の潮流文壇を蔽ふの頃より、氏は次第に新しき傾向に遠ざからんとするの状あり。而も其作新聞読者の歓び迎ふる所となり、『女の望』『操』其他、新聞の為に草せるもの少なからず。四十一年の春、伊井喜多村等の聘に応じて其座付作者となり、脚本の筆を執る。四十二年十月、曾て一たび其社員たりしことある。『やまと新聞』に入りて専ら小説を担当して今日に至る。趣味頗る広く嗜好各方面に亘る、劇を好み相撲を好み野球を好み、居室書画骨董を以て掩はれ、楣間に古槍あり机下に河鹿の声を聞く。著書の重もなるは『母の心』『やどり木』『春葉集』『女の望』等となす。（現住、東京牛込区東五軒

町五十三番地）

山田美妙

東京の人、名は武太郎、明治元年七月を以て神田柳町に生る。八年芝の鞆絵学校に入る。五年にして之れか業を卒ゆ。神童の称あり。幼よりして故尾崎紅葉と交はり遊ぶ。十三年一月内幸町東京府第二中学に学び、十八年大学予備門に入る。歌人たる祖父の感化を受け、十歳前後にして夙に文学を好みしが、既に進みて大学予備門に入るや、文芸上の嗜好の日に深きを加ふると、思想の日に向上し自恣すると共に、学校の日課の羈絆を快しとせず、十九年十二月之を自ら退く。先之、石川江斎（ママ）の門に遊びて漢詩を研究せしが、尾崎紅葉また同門にして相琢磨す。年少に比して造詣する所頗る深く、常時漢詩人として立つの志ありきと云ふ。その後『八犬伝』を読みて純文学上の嗜好及び研究心起り、後遂に『八犬伝』一輯全部九巻を暗記し、燈に背きて朗々之れを誦す。十七八歳の頃頻りに韻文を属し、紅葉また緑山外史の号を以て新体詩を作る。而も之を世に出すに術なく、悶々之を久うせしが、一日金玉出版所を訪ねて漸く『新体詩選』の出版を諾されて帰るや、大道靡き開くの感ありて狂喜措く所を知らず、直に奔りて紅葉を訪ね、之れを語れば、紅葉躍然立ち上りて机上の雑書雑紙を抛ち、吾等文豪すでに稿料を得たり、須く明窓浄几に座せざるべからずと、且つ躍り、且つ書斎を整頓して、狂歓遂に涙下るに到る。而してその『新体新選』の稿料実に二円五拾銭。

後、尾崎紅葉、石橋思案、丸橋（ママ）九華等と共に硯友社を組織し『我楽多文庫』を作る。十九歳言文一致を唱道し、当時今の一木内務次官岡田文部次官等と共に編輯発行せし婦人雑誌『いらつめ』に依りて之を主張す、世の嘲笑する所となる。二十一年金港堂の『都の花』に聘せられてその編輯を督す。時に世間漸く新趣味の文芸と言文一致との熱高く、志す所漸く成らんとせしが、『我楽多文庫』を離れ『都の花』に去つて以来、相好からざりし紅葉の雅俗折衷体の小説を出すや、多少の頓挫を来せりき。明治二十一年『国民の友』に『胡蝶』を掲げて、中に裸美人の画を挿み、且つ曲線美を唱道す、是に於てか世上之れを批議する者頗る多く、延いて氏の名声を傷くるに到る。時に『読売』に一論客あり、氏の曲線美論を賛じて之を助け、西欧の事例を引きて論ずること実に侃々、久しくその誰なるかを知らざりしが、後独逸より帰朝せし森鷗外なるを知りきといふ。

後金港堂より発兌せし雑誌『文』に関係せり。二十一年以後二十五年に到るまでは、改進新聞、国民新聞、立憲自由新聞、大和新聞等に関係し、常に小説の創作に従ふと共に、傍ら『日本大辞書』の編纂に従事せり。二十六年よりは、終始『大辞書』の編纂に従うて遂に今日に到る。著書としては三百余種ありて、氏自身に於ても既に嘗騰として記せずといふ。氏は言文一致の主唱者にして、日本文章の一大革命者たるのみならず、新日本の文芸の漸く曙光に入らんとする時に際して、小説に、韻文に、はたまた裸体画論に、悉く一歩を時代に先んじて着手したる明治文芸界の一大恩人也。（現住、東京市本郷区上富士前町十五番地）

山路愛山

江戸の人、名は弥吉、元治元年十二月を以て浅草に生る。家は代々幕府天文方を務め、数学者の家也。維新の際、父は戦争に赴きしを以て、祖父に伴はれて静岡に移る。小学の上等三級を卒るや、師に就て漢学を修むること一年、（明治十二年也）小学校の助教を勤め、更に静岡県警察本部の傭となる。後上京して東洋英和学校に学び、一年有余にして退学す。二十三年夏より翌年夏迄遠江の袋井にて耶蘇教の伝道に従事す。再び上京、雑誌『護教』の主筆となるに及んで、愛山の名始めて操觚界に表はれ、二十五年民友社に入るや、文名益々表はる。当時主として史論を草し、『荻生徂徠』『新井白石』（十二文豪）等を著はす。北村透谷と人生問題に就いて数回の論戦を交へし外、論難縦横、よく八面の敵に応酬して倦む所なかりき。後末松謙澄の下に在りて、毛利家の歴史編纂に従ふこと二年余、之を辞して『信濃毎日新聞』の主筆となり、傍ら単独にて雑誌『独立評論』を発刊す。地方にては雑誌経営の困難甚しきを以て二十九年帰京す、渋谷に居を卜して今日に至る。日露戦争起るや育英舎の『戦争実記』を編し、親しく渡韓せることあり。爾来専ら『独立評論』の編輯に従ひ、屢々嘱に応じて地方公演に赴く。

其文、曾ては奇気横溢し、短句勁節、老気秋に横はるの概ありき。今や平明穏健、奈何なる題目も、氏の筆に入りて一篇通俗講話となる。優に老成の域に在りて婦女尚ほ読むを難んぜず。幕人の子を以て困厄の中に其進路を開拓せるの人なるが故に、一片の侠気あり、屢々人の急に赴く。著書は前記の他『豊太閤』『源頼朝』『足利尊氏』『支那思想史』『社会主義管見』『現代金権史』等其重もなるものとす。（現住、東京府下中渋谷宇田川九百二番地）

山崎紫紅

名は小三、明治八年三月横浜に生る。横浜戸部小学校に学びたる以外、何等の学歴なく、独学自習を事となし、家に万巻の書を蔵す。知友皆横浜の小図書館と称す。早く『文庫』に新体詩を投じて、少壮詩人の名あり。中頃脚本に興味を持ち、主として之が創作に耽る。『上杉謙信』の一篇を『明星』に掲ぐるや、俳優伊井蓉峰之を真砂座の二番目として演ず。三十九年五月にして、氏が劇界に知らるゝ始め也、間もなく劇場の内部に通ぜんとして、伊井一派の座付作者となる。而も氏の長所は史劇に在るを以て、左団次と相知り明治座の為に脚本を草するに及んで声名大いに揚る。『破戒曽我』『女歌舞伎』等最も好評あり。脚本集に『七ツ桔梗』『史劇十二曲』あり。中心人物の性格心理の描写に勉め、強ひて舞台の約束を離れずして、一派の新味溢るゝものあるを見る。日蓮に渇迎すること深く、脚本に之を材とせるものあるの外、韻文『日蓮上人』『大日蓮華』及び『法華経物語』等の著あり。（現住、横浜市戸部町二丁目四十番地）

松原至文

伊勢の人、名は致遠、本願寺の宿老赤松連城師の諸葛武侯が寧静致遠の訓より取りて名〔ママ〕けたる也。明治十七年十月二十九日三重県員弁郡梅戸井村字大井田に生る。父、名は源諦。生里の小学と北海道函館の小学を相半ばして業を卒へ、後伊勢の五瀬鬘にありて漢籍を修むる事六年。十八歳東京高輪仏教中学に入る。翌年、校長排斥運動の首魁となりてその校を追はれ、江州彦根の中学に入る。『近江新聞』の歌壇選者となる。此学校もまた同級生六名を殴打したかどによりて逐はれ、従つて近江新報を辞し、京都に放浪す。三十六年同地吉田中学に業を卒へ上京し、更に高輪中学に入りて翌年業を終ゆ。三十七年早稲田大学英文科に入る、此年雑誌『文庫』記者小島烏水に拾はれて同誌評論記者となる。翌年同誌の変革ありて烏水の勧めにより雑誌『新声』の記者となる。翌年これまた平ならざる所ありて辞し専ら翻訳の筆を執る。同年秋、相馬御風の介する所によりて雑誌『新潮』の評論記者となり、月々文芸批評の筆を執る。四十二年七月『東京毎日新聞』の一面主任となり、新に文芸欄を設け今日に到る。著はす所『尾崎紅葉評伝』『近世大陸文学史』『小品文範』等にして他に宗教に関する書『新時代の仏教』あり。（現住、東京市牛込区早稲田鶴巻町五番地）

松居松葉

陸前の人、名は真玄、明治三年二月を以て仙台市に生る。小学を経て中学に入りしは、十識の春にして、年齢や詐りて入学試験を受けたる也。十四歳の秋病を得て退学し呉服店の丁稚となる。十八歳より英語経済を学び、二十一歳の頃、自ら商業を営む。偶々宮崎三昧の『わが亡妻』を読むや、深く感ずる所あり、之れより作家たらんとするの志を抱き、上京、坪内逍遥の門に趨り其指導の下に研鑽大に勉む、始めて『早稲田文学』の起るや、氏其編輯の任に当る。巌谷漣、尾崎紅葉諸氏の扶掖を受くること亦少なからず、後『万朝報』に入り、記者生活を送ること十年、氏の天分は此間に著るしく発揮せられたり。翰を揮ふ飛ぶが如く、堆積せる雑報の材料を一瞥の下に甑別取捨するに曾つて誤ることなく、一に事実を根拠として精細明快に之を伝ふ。小説の著数十種を以て数へて、而も評家の大なる注目を贏ち得ざりしに反し、其管する朝報三面は、世の最も憚る所となれり。

早く劇界に注目して、先代左団次との黙契成り、『悪源太』其他の脚本を頻々明治座に上場せしめ、文士物を劇に上すの端緒を開けり。三十九年海外劇場視察の為め欧洲に赴き、作者俳優等と深く交を結び、四十年八月帰朝、『万朝報』に演劇改良案を数十日に亘りて連載し、明治座の為に脚本『遠藤盛遠』を草す。演ずる者は、氏と前後して渡欧せる市川左団次也。左団次は氏に計りて劇界内部の情弊を根本より一掃せんとし、急激なる改革を施すや、劇は清新の場景に満つるを以て称せられしも、固陋なる芝居者の反噬に会ひ、可惜改革の企図も忽ちにして挫折し、之れより左団次は、孤立の地位に陥り、氏も亦快々として楽まず。偶々病を得るに及び、万朝報を退きて駿河清水港に静養すること一年有余、癒えて三越呉服店に入り、四十二年十一月伊井川上の為めに脚本『ボンドマン』を草し、本郷座に演ぜしむ。自ら商估を以て居り、再び文壇に出でずと云ふ。氏の如きをして新聞社会以外に居らしむるは、人物経済の宜しきを得ざるの甚しきもの也。著書に、小説脚本の類頗る多し。（現住、東京府下豊多摩郡大久保村十六番地）

真山青果

陸前の人、名は彬、明治十一年九月仙台市に生る。中学を仙台と東京と相半ばして終る。二十九年高等学校医学科に入り、幾ばくもなくして退き、三十二年布哇行を企てて成らず、医学専門学校に入る、これもまた卒業半ばにして退き、これより放浪するもの数年、此の間、石巻病院の眼科助手たりしことあり。南小泉村にありて医業に従事せし

もまた此間の事に属す。後私立中学の教師となり、物理と博物とを教ふ。再び上京せるは明治三十六年十二月、佐藤紅緑の家に居る。後小栗風葉の門人となる。『新潮』の編輯に携はりしことあり。

明治四十年、『南小泉村』を『新潮』に発表して文名頓に上る。自らは藤村の『水彩画家』風葉の『未青年』によりて、真に文学的開眼の縁にあひたりと称す。文学的生涯に入りての氏の歴史は短かしと雖も、かゝる短日月の間に氏の如き名実ともに併せ成し得たるものは匹儔稀なり。氏の第一小説集は『青果集』にて、中に収められたる『茗荷畑』『第一人者』最も聞え、第二集は『奔流』にして、『家鴨飼』『癌腫』また有名なり。四十二年『明治四十二年』を著はし、『南小泉村』を上梓す。

文を成せば勁烈にして芳醇、加ふるに想の湧くこと滾々、時の青年は氏を目して天稟の人となす。曾て国木田独歩が瀕死の枕頭に侍して、看護懇篤を極め、その床上の説話を綴りて『病状録』一巻を編む。（現住、相模、酒匂）

正宗白鳥

備前の人、名は忠夫、明治十二年三月三日、岡山県和気郡伊豆村字穂浪に生る。郷里の小中学を卒業後、上京して東京専門学校文学科に入り、中島孤島等と共に卒業す。故樗牛の氏[ママ]を以て生徒中の秀才なりと称したることは有名なる逸話なり。卒業後『読売新聞』に入り、以て今日に到る。幼より読書を好み、青年時代には内村鑑三、植村正久等より宗教上の感化を受く、然れども耶蘇教信者にあらず。『読売新聞』記者としては、曾て『大学生々活』の続きものを草して世を驚せしことあり、目下同紙日曜附録を担当す。

田山花袋等の自然主義を主張するや、氏の作物は、恰かも自然派的傾向を帯びたるを以て、文名頓に籍甚となり、真山青果と共に並び称せられ、時の青年よりは一種の虚無的思想の人として崇めらる。著者は『白鳥集』『紅塵』『第二白鳥集』『二家族』『何処へ』等にして、何れも世に行はる。人生の題目氏の短編小説に入れば、一種深刻の色を帯んでその核心を抉出し来る、蓋し現代特異の作家也。平生寡言沈黙、云へは必ず人の肺腑を貫く、之れを以て時人、氏の人となりを恐れて相避くるの称あり。（現住、東京市本郷区東片町百十九番地）

後藤宙外

羽後の人、名は寅之助、慶応二年十二月を以て、羽後国仙北郡堀田村字田の尻に生る。父は三郎右衛門、母は斎藤氏、名を定といふ。十歳平鹿郡横手町の根岸学校に通ふ、十四年の秋、故ありて家族と共に上京し、爾後数年間、家産の没落の為めに、浮浪生活、労働生活をつゞけ、会々郷里に行き、或は姻戚に身を寄せなどして二十四歳にいたる。同年姻戚の同情によりて再び上京し、早稲田専門学校の英語専修科を経て文科学に入り、二十七年夏業を卒ゆ。前期『早稲田文学』の記者たりしが、間もなく『新著月刊』の経営に携はり、同誌廃刊の後、一二の新聞に係し、同三十一年より『新小説』の時文に執筆しはじめ、翌三十二年の暮より春陽堂に籍を置いて、専ら『新小説』の編輯に従事し、遂に今日に到る。自然主義勃興後、非自然主義を標榜して『新小説』時文欄に堂々の筆陣を張り、傍ら創作に努めて感情主義、理想主義の文芸を鼓吹し、文芸革新会を起して、諸処に演説をなし、登張竹風等と共に気焔を挙ぐ。此等の評論を集めたるものに『非自然主義』一巻あり、又曾て早稲田卒業後島村抱月等と共に論文集『風雲集』を出せしことあり、これ氏の文名の挙りし始め也。創作には『裾野』『陽炎集』『月に立つ影』『白露』『新機軸』『思ひざめ』『名倉山』其他数巻あり。

曾て久しく郷里猪苗代湖畔に住せしが、後相州鎌倉に移り住み、今は上京して、芝区二本榎町一丁目十九番地に住す。

小島烏水

讃岐の人、名は久太、明治七年十二月を以て、高松市に生る。後一家の横浜に移るによりて同地横浜商業学校に学び、卒業後横浜正金銀行員となり、奉仕十余年、昇進して同行預金係長となる。曾て滝沢晩暁に推されて『文庫』記者となり、評論を草すると共に、紀行文に独壇の名を擅にし、三十二年『扇頭小景』を出して文名俄かに揚る。後『文庫』の青年間に勢力を得るや、河井酔茗、五十嵐白蓮、伊良子清白、横瀬夜雨、千葉江東、松原至文等と共に、同誌に倚りて文芸批評の筆を執りて、文壇文庫派の首領を以て目さる。自らは嗜好の赴く所よりして山岳研究者を以て任じ、毎年夏期、銀行の休暇を利用して、信飛境の連山を踏破し、之れが研究と感想とを叙したる紀行、報告、日誌等の類頗る多し。文芸上の論文集には『烏水文集』『銀河』『木蘭舟』等あり、評論の文に一新機軸を出す。山水論には『日本山水論』『山水美論』あり、紀行には『不二山』『山水無尽蔵』『雲表』等あり、今は五年計画を以て『日本アルプス』の著に着手しつゝあり。性来才情秀絶、之く所として可ならざるなく、一たび研むるところ徹底せずんば止ま

ず、筆を執れば巧辞警句、滾々として湧くが如し。別に歴史論に特技を有すと雖、余力の及ばざるものあるを以て多く此間に筆を着けず。時に美術批評に筆を染むと雖、専門雑誌に発表して、頗る韜晦す。

信飛境の連山中、一万尺内外の山岳にして、研究的に登山したるもの、氏を以てその嚆矢となす。山岳会を設立して、『山岳』を発行す。博文館『日本山岳誌』は実に氏の訂正増補する所也。（現住、横浜市西戸部町八百九十八番地）

小杉天外

羽後の人、名は為蔵、慶応元年を以て秋田県仙北郡六郷町に生る。郷里にありて漢籍を学びしが、明治十九年上京し、故ありて郷里に帰り、自由民権の叫ばれし頃、政治上の運動に加はり、諸方に演説せることあり。二十四年再び上京して諸方流浪、具さに人世の苦酸を嘗む。その始めて小説に筆を染めしは同二十四年の『砕骨録』にして、同年の暮また諷刺小説『改良若旦那』を著はす、翌二十五年『狂菩薩』を出し、常に諷刺小説に筆を染め、続いて『改良若殿』『珈琲店』等を出せり。氏始め紅葉を訪ねて顧られず、鷗外を叩いて亦顧られず、緑雨を叩くに到つて、直ちに知己の遇を得、現に緑雨の交情は氏の今猶ほ感荷忘るる能はざる所也といふ。後病んで苦楚層ね到る。此の間を以て『近江新報』に小説を連載し僅に薬餌に親しむを得たることありしが、その一回の報酬実に二十五銭。後『蛇苺』を出すや、世評漸く高く、爾前の風刺的筆致全く痕を絶ち、当時の柳浪等の感化を受けて写実小説の風あり。更に『はつ姿』を出すや、氏独特の写実の筆、夐然群を抜きて、精妙巧緻、相及ぶ者あるなし。『はつ姿』の続篇として『恋と恋』等あり、また『はやり唄』には色情狂の遺伝を写して、写実派の泰斗ゾラの俤を髣髴せるものありと言はれ、一面、悪写実の風ありと評せらる。其他『新学士』『新夫人』『女夫星』等いづれも世評喧聒、『魔風恋風』を出すに到つて、青年子女の氏が筆力に酔ふもの夥しく、洛陽の紙価を高からしめて魔風恋風なる新造語、当時の流行語となる。

先是氏は病を獲て、相州小田原に僑居し、久しく其家にありて、小説を執筆せしが、明治四十年『コブシ』の『読売』に連載せられ、その稿漸やく了りて『長者星』の続いて同紙に顕はれんとせし頃、東京に上りて家す。『コブシ』『長者星』共に世の人気を集めて、写実の筆致ますます熟練精緻を極め来る。『長者星』完結以来は二三の短篇に筆を取りし以来、全く長篇の作なく、明治四十二年より雑誌『無名通信』を発行して之れが経営に当る。

氏の小説、自然主義の名未だ文壇に唱道せられざるに当りて、早く既に官能的描写を試みしこと、小栗風葉と共に、わが文学史に記せざるべからざるところ。その描写会話の洗練渾熟精緻に至りては、当時すでに第一人と称せられき。氏由来長篇に長じて短篇に短也、頃者雑誌の経営に腐心して時々の短篇以外に筆を染めざること、深く時人の惜しむ所也。（現住、東京市芝区白金台町一丁目十番地）

江見水蔭

岡山の人、名は忠功。明治二年八月を以て岡山市一番町に生る。学問の趣味深かりし家庭の感化を受けて、幼時早く絵本草双紙の愛読者たりき。十四歳にて栃木県に在る頃、水滸伝を読んで深く興を覚え、小説を作らんとするの志望此時に胚胎す。十五歳の時帰京して杉浦重剛の称好塾に入り、塾生たりし大町桂月、巌谷漣等と共に、小説の製作を競へり。美術学校の創設せらるゝや、杉浦氏の慫慂により美術家たらんとし、入学試験を受けたるも合格せず、失敗の反動は生来の冒険熱を刺戟し、万巻の書を読むこと能はずんば、寧ろ天下を踏破せんと壮語し、飄然全国漫遊の途に就けり。是れ明治二十一年也。而も当時紅葉、美妙等少壮文士によりて硯友社の団結成り、文芸勃興の機運大に動く、西芳菲山人等亦氏の入社を勧むるに及んで、即ち是に入り、二十二年郷里に在つて『旅絵師』を描き、硯友社の機関雑誌たる『文庫』に公にせり。其後の七八年間は硯友社員として創作の筆を怠らざりしが、当時の創作界が理想派と写実派とに別るゝや、氏は前者の主張を以て、詩的短篇に興味を持ち、田山花袋、太田玉茗等と共に雑誌『小桜縅』を発行し、事実に於いて、硯友社と歩趨を異にせり。二十七年『中央新聞』に入り、日清戦争を材とせる短篇を連日掲載して歓び迎へられ、後『読売』に転じ、更に『神戸新聞』に赴き、帰京して博文館の『太平洋』編輯に従事し、巌谷漣の洋行中『少年世界』を主宰し、日露戦役起るや、『二六』に入りて戦事小説を草せしが、此処も席暖かならざるに退けり。著作頗る多しと雖も、氏の長所は単〔ママ〕篇に在り。『絶壁』『水の声』『炭焼』等、何れも実際と空想とを巧みに織り合はしたる所に独特の技巧を見る。殊に三十二年頃公にせる短篇『女房殺し』は、深刻小説の名を冠せられて、称賛の声喧しかりき。回首十年、今や文壇の中心に遠ざかること著るしきも、其軽快なる冒険的小説は、尚ほ多くの読者を有して、東都の新聞、氏の小説を見ざるの日殆ど無し。（現住、府下南品川小倉山稲荷境内）

饗庭篁村

江戸の人、名は与三郎。安政二年八月を以て下谷竜泉寺町に生る。滑稽洒落、江戸時代の通人の画影独り氏によりて見るを得るが如きも、而も氏の前半生は好個立志伝中の材たり。早々中村敬宇の西国立志伝を読みて感奮し、二十歳虎ノ門の読売新聞社に入りて文選の事に従ひ、不撓不屈、当時の新聞社会の免れ難かりし誘惑に克ちて、よく独学を怠らざりき。蓋し氏の読書癖は天分也。幼時、某氏八犬伝を好むも読むの煩はしきに堪へず、氏をして代り読ましめ、一冊の読賃天保銭一枚を与ふ。氏忽ち四五冊を読飛ばして、天保銭四五枚を贏ち得るを喜びしと云ふ。而して氏が小説に対する深き嗜好は、此八犬伝によりて養はれたる也。二十年前東京朝日に入りて今日に至る、新聞社員生活をなすこと実に三十六年に及ぶ、其始めて小説を朝日新聞に掲ぐるや、下絵の注文極めて煩はしきを厭ひ、小説は文を以て事を叙するもの、挿画の力を借るを要せずとなす。新聞社之を困るしみ、百方慰諭するに及んで、已むを得ず其上に断り書きして曰く、「此画は敢へて小説の挿画にあらず、小説が挿画の説明をなすのみ」と洒落なる氏の一面、尚ほ且つ斯くの如き頑強の真骨頂ある也。徳川文学に造詣する所深く、東京専門学校の文学科に近松を講ぜることあり『近松評釈』『むら雀』等に於て其一端を知るべき也。

小説の筆を執ること前後二十年、著作頗る多しと雖も、趣味形式共に元禄時代の俗文学を継承せるものにして、短篇には罪のなき諷刺物多し。今や全く小説に遠かり、坪内逍遙、東儀鉄笛と共に朝日新聞に劇評を草す。天下の俳優、皆孺子教ふ可しの態度を持って蔑み、其周到なる詮穿と巧妙なる揶揄とは、他に看るべからず。氏本名は与三郎、篁村の外、別に竹の舎の称あり。幼時早く慈母に別れ魚商竹村某の妻によつて養はる。氏其恩を永く記せんが為め、其雅号皆竹に縁ある文字を用ゐしと云ふ。情に敦きは其天性也。（現住、東京市本所区向島小梅百七番地）

寺崎広業

羽後の人、慶応二年二月を以て秋田市に生る、父を広知といひ、世々秋田藩の重臣たり。維新後、家道衰頽して、少時氷を売り餅を鬻ぎて僅に口を糊せりと云ふ。後乳母長谷川氏の家に寄食して素麺乾饂飩の製造を助け、夜間読書の寸暇を得るを以て、唯一の楽みとなせり。常時秋田に狩野派の画家小室恰々斎あり、氏は之に就いて学ぶの便宜を得て、天稟の画才を展ぶるを得たり。進境驚くべきものありて、氏の画は近郷某々の家の襖屏風に揮灑せらるゝを見るに至る。斯くの如くにして氏は僅かなる報酬を得たるも未だ以て糊口の資を充たす能はず、即ち郡役所の雇となり、或は登記所の吏員となり、傍ら斯道の研鑽を怠らず。会々同県の書家にして四条派の名手たる平福穂庵に知られ、東京に出でゝ、其家に寄食す。穂庵没後、名山大水の間に画思を養ふこと年あり、帰つて東陽堂発行『風俗画報』の挿画を描き、或は小説の口絵を物し、傍、支那及び吾国の古画を研究して、自家の発展に努む、二十二年、勧業博覧会に始めて其作を出陳して、名声漸く著はる。二十九年、東京美術学校教授に任ぜられしが、同校の改革に際し、岡倉覚三等と共に出でゝ日本美術院を創す。氏が此後作に見るべきもの多く、一作出づる毎に、名声揚れり。三十四年、再び美術学校教授に任ぜられ、今なほ其の職にあり。四十年文部省美術展覧会の創せらるゝや審査員に挙げらる。其第一回展覧会に出陳せし『大仏開眼』は大幅にして労苦一方ならざりしも、荘厳の気に乏しく、生命ある作にはあらざりき。第二回に山家の月を描きたるは、申訳けに過ぎず。斯くして昨年第三回に『渓四題』を描くに及んで、やゝ氏の健在を明らかにし得たり。

由来氏は東京の画界に在つて名をなす事最も古く、今や其名声と技倆とに於て氏と比肩する者僅に川合玉堂一人あるのみ。才思極めて豊かにして、達筆其匹を見ず。今後の発展必ずや注目すべきものあるべし。（現住、東京市神田区上白壁町五番地）

秋田雨雀

陸奥の人、名は徳三、明治十六年十二月二日、青森県南津軽郡黒石町に生る。氏生まれたるとき、父すでに両眼の明を失ひき。幼時郷里の漢学者小野川某吉田某等につきて漢籍を学び、旁ら稗史小説を耽読す。十五歳弘前の中学に入る。その校にあるのとき、島崎藤村の詩集を得て欣び読み、文芸上の刺戟を受く。厳君は氏の医師たらん事を望みしが、早稲田大学へ入るに及んで、漸く文学上の嗜好深く友人片上天絃等の感化影響によりて遂に文芸に志すに到れり。大学卒業後『文芸百家全書』の編輯に従事し、その業了りて『早稲田学報』の編輯記者となる。著作多からずと雖、文芸上の主観内容ともに一味清新の姿致を有して同人間の推唱する所となる。短篇数種また脚本一二の作あり。（現住、東京府下高田村雑司ヶ谷三十四番地）

佐藤紅緑

陸奥の人、名は治六、明治七年七月を以て弘前市親方町に生る。殺伐なる土地の感化を受けて幼時粗暴の行為多く、好んで『経国美談』『水滸伝』を読み、形、牡丹に似たる黒子を背に探せし逸話あり。而も此間尚ほ小説を耽読し新刊物は洩らす所なかりしと云ふ。中学を四年にて退き、二十歳の春上京、郷国の先進陸羯南を尋ねて其玄関番となる。法学院に入りしも、粗暴の故を以て一週間にして逐はれ、更に国学院に入りて、又同じ理由の下に退学す。屢々筆を執らんとして、小説を遊戯文字となす羯南の阻む所となる。二十一年始めて『日本新聞』に入り、校正に従事する傍ら議会見聞記等を草す。これ新聞生活をなせる始めにして、正岡子規と相知りて、始めて俳句を作れるも此際也。後『報知新聞』の政治記者となり、北清事変起こるや、特派せられ戦地に赴き、挺身兵と共に進み屢々危険を冒す。帰来『従軍記者決死隊』の著あり。此間俳句の研究創作を怠らず、所謂日本派の天下を風靡するや、氏亦一方の驍楚を以て推され、其著『俳句小史』『俳句新註』『滑稽俳句集』『俳句修辞法』等皆世に行はる。

始めは志望政界に在り、広く政界の知名の士に交はる所ありしが、故ありて断念し、『読売』『万朝』等の三面記者となる。日露戦役後新文芸の機運大に動けるの時、モーパツサンの作を耽読して、久しく潜める創作熱を刺戟せられ、三十九年夏、早く肉を描ける『花慈姑』の短篇あり。翌年『中央公論』紙上〔ママ〕『行火』を公にするや、文名一時に揚る。氏の家に久しく真山青果の寓せるを以て、青果の代作に非ずやとなす者ありき。次で『鴨』『死人』『人と犬』等の作あり、描写放胆に過ぎて往々評家の顰蹙を買ひ、肉の為に肉を描く者なりとの非難漸く囂しきに至るや、暫く小説に筆を絶つて専心脚本を草す。之より先き俳優高田喜多村等の嘱に応じて『俠艶録』を書き、巧に観客多数の好尚に投ぜるの故を以て俳優に喜ばれ、四十年一月新派の座付作者となり、四十二年夏に至る。著書は前記俳書の外、短篇小説集『椙』及び『三聖俳句選』あり、近く『イプセン傑作集』出づ可しと云ふ。（現住、東京市小石川区茗荷谷町五十二番地）

坂本文泉子

因幡の人、名は四方太、明治六年二月三日、鳥取市東町に生る。幼時醇風小学校を出でて、十七歳郷里の中学に入る。二年にして退き大阪市に遊び、十八年京都に転じ中学程度の予科に入学し第三高等中学に進む。二十七年仙台の第二高等学校に行き、学ぶこと二年、河東碧梧桐、高浜虚子、大谷繞石等と同窓同級たりき。碧梧桐、虚子は已に俳句に志せしを以て、繞石と共に此二人につきて俳句を学ぶ。同校は本科に在学し、文学を以て志望とせり。二十九年この業を卒へて、帝国大学国文科に入学し、屢々正岡子規の門を叩きて俳句を学ぶ。後子規の写生文を唱道するに至りて多く写生文に傾く。三十二年、大学卒業後、明治学院、京北中学、哲学館大学等に教鞭を執り、三十三年職を帝国大学図書館に奉ず。一昨年之れを辞して帝国大学助教授となり、早稲田大学に国文学科講師を兼ぬ。

著書としては、虚子と合著の『帆立貝』あり、先之、『俳文評釈』を出して名あり、文壇上の職歴は『ホトヽギス』に関係して今日に到るまで終始渝らず。氏常に写生文を唱道して、その淡遠にして清楚たる筆致、同好者の頻りに重ずる所也。時々、諸種の文芸雑誌に写生文に関する評論を発表し、また『ホトヽギス』『国民新聞』等に文芸上の意見を掲ぐ。他に小説の作あり、明治四十二年小説『夢の如し』を上梓す。（現住、東京市本郷区駒込神明町四百三十七番地）

相馬御風

越後の人、名は昌治、明治十六年七月十日新潟県糸魚川町字大町に生る。土地の高等小学校三年にして退き、十四年高田中学に入学す。明治三十四年四月卒業、その在学中、文芸の趣味を解し、国語の講師文学士下村千王伎に従つて和歌を習ふ。中学卒業後は或は土地の新聞に入り、或は京都に行き、或は東京に行きて漂遊す。初めて佐佐木信綱に逢ひたるもその頃にして、同時に文学を以て身を立てんと決するに至れり。その後又京都に行き、真下真泉と交はりて、勧められて新詩社に入る。再び東上して早稲田に入学す。明治三十六年新詩社を去り、岩野泡鳴、前田林外等と共に詩歌専門の雑誌『白百合』を発行す。三十九年早稲田大学英文科を卒業し、成美女学校に教鞭を執りしが翌年十月退く。同じ年第一歌集『睡蓮』を発行し、『早稲田文学』記者となる。四十二年九月より島村抱月を助けて、早大文学科特志研究科のツルゲネフ研究を担当す。著書は『睡蓮』『御風詩集』アンデルセンの短篇集『花と鳥』ツルゲネフ『その前夜』及び『父と子』の翻訳、ゴルキイの短篇訳『ゴルキイ集』あり。最近、最も感化を受けたるものに独歩の小説、抱月の評論ありと、自ら称せり。

氏に忘るべからざるは、口語詩の唱道也。其自作の口語詩の価値如何は別問題とするも之れが為めに日本在来の詩歌の約束を自由にし、その内容につきても一般の覚醒を促すに足るものありき。又自然主義勃興以来常に評論に詩歌に小説に、問題ある毎に必ず剥啄の声を絶たず、貢献する所頗る多し、近くまた徹底自然主義的の創作あり、『新潮』

に掲げたる小説『群集』は代表作なりといふ。（現住、東京市小石川区高田老松町四十三番地）

佐野天聲

駿河の人、名は喜三郎、明治十年五月二十四日、静岡県富士郡大宮町に生る。角田浩々歌客の弟也。祖父は曾て地球儀を作りて水戸烈公に嘉納せられ、後、町民塗炭の苦を救はんとして獄に囚はれし当時の町名主桜岳先生佐野与市にして、父は日本人中最も早く断髪して綿羊の飼養、牛乳の搾取、仏国葡萄の栽培に腐心し、十年間屋根換へも畳換へもせざる家に住みて顧る所なかりし稀世の畸人佐野鍬太郎也。

郷里の小学を出て、郷にありて、老母にかしづきつゝ勉学す。十九歳の頃京に上り、彫刻家たらんとして、師に就いて学ぶ。後、病を獲て帰国し、数年間郷里に止まる。明治三十一年京に上りて刀を捨てゝ筆の人となり毎日新聞社に入る。後之れを退きて三十三年早稲田大学英文科に入る。二年半にして退き、専ら劇を以て家をなさんとす。著書としては脚本『大農』あり、『都新聞』の懸賞に応じて当選せしもの、本郷座に上場せらる。外に脚本『不死の誓』及び小説数種あり。目下家政上の故を以て大阪に滞在中。

佐々醒雪

尾張の人、名は政一、明治五年五月京都吉田村尾州屋敷に生る。現に京都大学有るの地にして、其講堂近く茂れる樫の樹は、氏が幼時に戯れに植ゑたるものなりと云ふ。山科小学校より吉田小学校に転じ、更らに平安義黌に学ぶ。是れ旧藩士族の子弟を養へる所也。在学中今の桑港領事水野氏と懇を結び、其勧めによりて大阪高等中学校に入る。大学に進むや志望政治科に在りしも、厳君逝去の為め早く業を卒ふ可きの事情あり、即ち最も簡易なる国文科を選ぶ。而も一面に於て和歌俳句等の深き嗜好之れを導くものありし也。在学中『帝国文学』創刊せらるゝや、時文評論に筆を執りて、桂月等と共に早く少壮評論家の尤を以て称せられ、傍ら嶺雲等と共に『青年文』の評論を草す。二十九年卒業、直に第二高等学校に迎へられて教鞭を執り、三十五年職を辞して金港堂に入り、雑誌『文芸界』を主宰す。尨然たる大巻にして現代作家の粋を集むると共に、新進文士の推奨に勉むる所あり、文壇の耳目を聳動せしめたるが、故ありて、同誌を去り、後和田英作と共に『家庭文芸』を編す。続刊僅に半歳にして病に罹り入院中、発行者の無断休刊を発表するに会ひ、幾くもなく金港堂を辞す。三十九年帝国大学講師となり、四十年高等師範学校教授に任ぜられ、傍ら早稲田大学国学院大学等に教鞭を執りて今日に至る。

学殖深遠、殊に徳川文学に於て多く比肩する者あるを見ず、『近松評釈、天の網島』、『うづら衣註釈』『俗曲註釈』等皆其蘊蓄の一端を洩らせるものにして、何れも世に行はる、現時の文壇に就いては、黙して多く語らずと雖も、叩けば鑿々心（ママ）ず肯綮に中つるの言あり。近く『日本情史』を著はす。（現住、小石川大塚窪町二十四番地）

笹川臨風

東京の人、名は種郎、明治三年八月七日を以て、神田明神下末広町に生る。家世々幕臣たり。父に従うて幼時四方に移り、小学時代を東京、大阪、名古屋等に送り、名古屋中学校を卒業するや、暫らく東京英語学校に学び更に第三高等学校に入り、二十六年帝国大学に入る。少壮早く治国平天下の志を抱き、一たび経世家たらんとせしも、資治通鑑、日本外史、仏国革命史を耽読するに及び、歴史家たらんとするの志を起し、水戸学の聖典たる新論、回天詩史等の感化を受くること亦浅からず、大学の三年を国史科に送る事となれり。而も二十九年七月業を卒ふるや、当時赤門文士の気を吐くべき『帝国文学』の既に有るも、氏は田岡嶺雲、小柳司気太、白洋〔ママ〕鯉洋等の少壮漢文学者と共に『江湖文学』を起して、時文評論に筆を執り、傍ら『支那戯曲小史』『支那文学史』等の著あり、雄健奔放の趣味を喜べる氏は、漢文科出身者と相許して、常に稜々の気を誇るの観ありき。後、毛利家編輯所に聘せられて、防長回天史の編纂に従事し、完了後栃木県立宇都宮中学校長に任ぜられ、在職、三十四年六月より四十年十二月に至り、頗る令聞あり。四十一年一月より三省堂発行『日本百科大辞典』の編輯に当り、旁ら明治大学講師として今日に至る。著書は前記の外『雨糸風片』『元禄時勢粧』『時代と人物』等あり。（現住、東京市本郷区西片十番地）

佐佐木信綱

明治五年六月、三重県鈴鹿郡石薬師村に生る。父を弘綱と云ひ、歌壇の名流を以て目せられき。氏は父業を継いで、繁栄一層加ふ。明治十二年東京に出て、同十七年東京大学古典科に入り、同二十一年其の業を卒ふ。二十九、三十年の交、『めざまし草』の紙上に新意ある作を連載し、一方与謝野鉄幹等の活動と共に、新しき機運を造りしは、注目

すべき事象とす。其後は、特筆すべき製作に接せず、唯諄々として、後進を誘導せる一事やがて氏の大なる事業たる也。古への大宮人を見るが如き悠長なる風采は、あらゆる人を親和せしめずむば止まず。其風采と伴うて、氏の歌はめて円満也。新旧両派の間に介在して、多くの人心を吸収するに妙を得たり。而して氏の教養の範囲は、主として上流社会に在り、所謂貴婦人と称するもの、氏に就いて学ばざるは尠なし。氏が風采の都雅なると、社交の術に長ぜると、その歌風の平明なるとは、氏の勢力を上流に馳するに最も適切なるを得たる也。春秋二期に竹柏会大会を開くや集まる所の人、雲鬢花の如き上流の美姫を以て満たされ、衣香鬟影、人を艶殺せしむるものあり。

氏が第一の歌集『おもひ草』を出せしは、三十六年なりき。歌壇の新しき機運は、氏の此集を容るゝべく余りに進歩せり。出づべくして出でざりし此集の発表に対して、世の注目はやゝ冷淡に失せりき。而して氏亦歌人として存在せむよりは歌学者としてのより多き効果を得べきことを自覚して、近年意を此方面に注ぎ、三十八年以来東京文科大学に歌学史を講ぜるは、氏が取るべき新しき事業としても、尤も聡明なる企て也。尚、近く、『歌学論叢』『日本歌選』の編述あり。（現住、東京市神田区小川町一番地）

北原白秋

筑後の人、名は隆吉、明治十八年二月を以て福岡県柳河沖の端に生る。氏は幾んと学歴と云ふものなし。三十七年三月上京、早稲田大学の文科に籍を置きしが、半途にして退学せり。三十七八年の交、雑誌『文庫』に「全都覚醒の賦」及び『絵草紙店』を出して、文庫派詩人の尤と称せらる。後、新詩社に入りて、『明星』誌上、官能の匂ひ饒かなる作を出すこと多く、独特の詩味は同誌の一特色を為せり。四十一年一月、与謝野寛と作詩上見解を異にする所ありて同社を退き、翌年一月『スバル』起るに及び、同誌に其の所作を公にす。同年三月、詩集『邪宗門』一巻を出す。所謂官能的の匂ひは、其の極点に達し、世之れを喜ぶもの喜はざるもの相半ばす。而も氏が詩名は漸く揚り来れり。同十月、『スバル』を離れて長田秀雄等と共に『屋上庭園』を創刊し『東京景物詩』を草す。氏は一面短歌を試み、新詩社に籍を置きし当時既に其作を公にせしが、未だ特色を為す能はざりき。四十二年五月、其所作を『スバル』短歌号を出すに及んで、長詩以外短歌の立場を明かにすることを得たり。氏が長詩に見るが如き濃厚の詩味なくして、其の瀟洒なるは、別様の風趣を覚えて、歌壇の注目を惹くものありき。（現住、東京市牛込区神楽町二丁目二十二番地）

結城素明

東京の人、名は貞松。明治八年十二月を以て本所に生る。明徳小学校を卒業してより絵画に志し、美術学校に入るべき準備として、川端玉章に師事す。二十五年九月、学校に入学、三十年七月、卒業す。在学中、『ゆく春』を絵画共進会に出陳し、新進秀才の誉れを博す。続いて、卒業製作『兵庫行』を出して其特色ある画風は、世の等しく認むるところとなれり。当時美術院派の、覚束なき理想を主として、朦朧、糊塗するが如き弊を慨し、飽くまで自然を尚んで写実的の風趣を唱へ、无声会を立て、三十二年秋、其第一回の展覧会を開く。福井江亭、島崎柳塢等、氏と志を同じうして同会に據りたれど、旧式なる頭脳は、氏が新運動の真意を解すること能はず、平福百穂及び半途より入りたる石井柏亭の二人のみ氏と馳騁して、同会の旗幟を明かにせり。当時氏は日本画に資せむ為め、洋画を研究せり。一回又一回、同会の作品は世の注目を惹くに至る。然して、氏の作は常に其の中心たり。三十三年十二月、一年志願兵として、竹橋なる近衛兵営に入る。翌年十二月、伍長となりて営を出づ。三十五年九月、美術学校助教授に任ぜられ、寺崎、下村二教授と共に、日本画科を担当し、今日に至る。三十七年、日露戦を交ふるや、氏は召集せられて、再び兵営に入りて留守師団附となり、翌年秋戦終るに及んで、除隊せらる。三十九年春初め、居を府下千駄ヶ谷に卜し、妻を迎ふ。四十年春、勧業博覧会に『蝦蟇仙』を出し、洒脱警抜の筆致場中の一異彩たるを失はず。同年秋公設展覧会に『無花果』を出し、无声会に秋の野趣深き小品数点を列す。前者は模様的の作にて、意匠描写共に氏が新意を出せるもの後者は自在の筆力に自然の憧憬の浅からざるを示せるものにして、中に欝たる大木の彼方遠く田野の開けるを写せるは、大村西崖之を評して、蕪村華山を合体して洋行せしむれば、必定斯る作を得べしと云へり。蓋し至言也。（現住、東京市外千駄ヶ谷八百四十一番地）

満谷国四郎

明治七年、岡山に生る。鹿子木氏と其郷国を同うす。暫らく五姓田門に在りしも、転じて不同舎に入り、石川寅治と相並んでその技を磨けり。不同舎中最も早く其存在を認められしは中村不折にして、其最も遅かりしは即ち氏也。而して二氏共に苦学の径路を一にす。その渡欧費の如き、亦不折と相似たるの辛酸によりて蓄積せられたりし也。而

も氏は穏健なる常識家也、不折に見るが如き、せツぱ詰りたる酸苦の跡は、氏の相貌中より読み得ざる可く、また其遊学方法も格別の悔恨なくして了れるに似たり。氏が作物に対する世人の最も古き印象は彼の明治美術会時代に於ける『林大尉の戦死』なる可し。常識的にして俗に分りのよき氏が作風はよく俗衆に投じ得て彼等をして思はずもその前に佇立せしむるに足る。『かりそめのなやみ』の如き、また『戦話』の如き『軍人の妻』の如き、何れもこの径路中ならざるは莫き也。

曾て国木田独歩と相許して、近時画報社の為に挿画の筆を揮ひたることあり。現に太平洋画会研究場に教鞭を執る。低声含糊、其言要を得ざるの故を以て教生屢々不平を洩す額飽くまで禿げ抜け、眼飽くまで窪めるの異相を見て、動もすれば陰険の質なりとする者あるも、貌を以て人を計る可からずの語は、氏に在りて真理也。寡黙温和、よく人に謙るは其性也。（現住、東京市外日暮里）

水野葉舟

東京の人、名は盈太郎、明治十四年十月十五日、下谷区徒士町に生る。幼時九州にありて中学を卒業し、後京に帰りて早稲田大学高等予科に入る。はじめ文学者たらんと志しゝが、故ありて同大学政治経済科に入り、事業家たらんとす。然れども性癖の然らしむるところ、卒業の頃ほひより再び文学に戻るに到りしが、その動機は実に高村光太郎がミレの逸話を語り、一方に実世間的事業に携はりながら、一方に芸術の製作に随ふの真摯ならざるを説たるを聞きて感奮興起し、遂に全然他方面の事業を抛て文芸に専心するに到れる也。四十一年の春頃より一般文壇に知られ、小説の著作少なからず。また別に小品文をよくし、小品文作家として文壇に一家をなす。此種の集には『あららぎ』あり『響』あり『悪夢』あり、『響』最も聞ゆ。曾て短歌新体詩等をよくし、その集に『明暗』あり、小説集には最近の作『微温』あり。（現住、東京市外西大久保百五十四番地）

三宅雪嶺

加賀の人、名は雄二郎、文学博士。万延元年を以て金沢市新堅町に生る。七歳にして漢籍の素読を受け、十二歳仏語学校英語学校等に学ぶ。明治八年名古屋の愛知英語学校に転じ、翌年上京、開成学校に入る。故あり中途退学して士官学校に入らんとせしことあり。十三年東京大学文学部に入り、十六年卒業。大学編輯所に居ること数年、更に文部省編輯局に入りしが、吏人の風と和する能はずして之を辞す。二十一年同志と共に政教社を起して雑誌『日本人』を発刊し、当時の欧化熱に反抗して国粋の顕彰を力説す。一代の人心始めて醒めたるもの、主として氏の力多きに居る。傍ら『日本』『江湖』『国会』等の諸新聞に関係し、後『日本』には、陸実氏と並んで社論を草することゝなれり。二十四年、南洋諸島を巡航し、三十五年には欧州を周遊せり。陸氏没後『日本』の組織変更するや、氏之を辞して『日本人』を『日本及び日本人』と改題し独力経営、今日に至る。曾て京都大学文科大学長を以て擬せられたるも、辞して就かざりきと云ふ。

氏、卒然之を望めば、漠焉として茫乎たり。識量高爽にして志守する所甚だ高く、政教社を持続する実に二十年、前後入りて社員たりし者、皆昂々の気を負ふの徒、而も独り氏に師事して負かず。著書には『我観小景』最も早く現はれ、近著『宇宙』は学術界稀有の大著として知らる。（現住、東京市赤坂区新阪町八十二番地）

三木露風

名は操、明治二十二年六月を以て、播州龍野に生る。十一二歳の頃、始めて新体詩と和歌とを試みて雑誌『少国民』に寄稿し、後、『新声』『文庫』等の愛読者となりて、文学に熱中せり。父は氏をして医師又は商人たらしめむとせしも、氏は此意嚮に肯んぜざりき。十七歳の時、土地の中学三年にして退校を命ぜられ、転じて岡山の閑谷黌に学ぶ。始めて国を離れ、父家を出でゝ詩に親しむの自由を得たるのみならず、谿谷の岡山の自然によりて感化を受けたる事浅からず。第一の詩集『夏姫』は、当時の思ひでを語るもの也。翌年激しき恋愛に落ちて学資の途を絶たれ、出でゝ『美濃新聞』に身を托せり。其間一度或女と婚したりしも、別れて同社を退き、上京す。徳田秋声、三島霜川の保護を受けて、当時労作一編を雑誌『芸苑』に掲げて、詩名漸く昇る。氏が早稲田の文科に籍を置きたるも此頃の事也。爾来詩作と修養とに努め、優しく濃やかなる調べは、詩壇の新声として迎へらるゝに至る。四十二年、秋、詩集『廃園』を公にして詩壇に於ける位置こゝに定まる。近く亦『廃園』以後の集を出すべく目下製作に余念なしと云ふ。（現住、東京市牛込区袋町十二番地）

三島霜川

越中の人、名は才二、明治九年四月、富山県西蠣波郡麻生村に生る。幼時より稗史小説を愛読したりしが、十七八歳の頃、二葉亭の『あひびき』を読んで感ずる所あり、十九歳の時、断然小説家たらんとして之を父に計る。その家、代々医を業とせるを以て、之を許るされず、止むなく私かに家を出でゝ京に上り某処に下宿して、携ふる所の金子全部を以て、文芸書類を買ひ集め、日夜之を耽読す、これその文学的生涯の最初也。当時最も感化を深くせられたるものは、森鷗外の『水沫集』内田不知庵の『罪と罰』等にして、森田思軒の『懐旧』も愛読せりと云ふ。翌年、厳君、氏の志望を容れて文学者たる事を許し、学資を送る事を約されたるを以て大に安じたりしが、僅かに二週日にして飛電あり、倉皇郷に帰れば厳君すでに亡く、喪心言ふ所を知らず、然も厳倉人に言を遺して曰く、才二をして大文学者たらしむる為めに予は一切を犠牲にせんと、氏此の言に感奮して、爾来いかばかりの苦境に陥るも遂にその素志をかへず、遂に今日に到る。氏の文学的生涯の最初の恩人は桐生悠々にして、氏が暗黒時代にあつて、よく之れを助導し得たるもの、悠々の厚情ならずんばあらず。処女作は『一つ岩』也。後『人民新聞』に入りて始めて文学的生活をなし爾来幾多の小説あり、其秀出せるものに『山霊』『孤巌』『スケツチ』『村の病院』『平民の娘』『虚無』等外数篇也。氏平生、垢面蓬頭、月を閲して一たびも梳らず、恬然として筆を嘗め紙を展べて常に苦吟これ事とす。（現住、東京市本郷区駒込動坂町百十番地）

新海竹太郎

磐城の人、明治四年を以て会津若松に生る。故浅井氏が根岸に在るの頃、氏は屢々行いてその画談を傾聴し、終に門に入つて油絵を学ぶ。弥生町なる氏のアトリエは一時浅井門下の研究場となり裸体のモデル女が見上ぐるばかりの銅像原型の前に据ゑられし事もありき。怪しきデツサンに加ふるに無経験なる色彩は混濁度を失ひ、終に筆を停めしと雖も、尚ほ門下の劣才某々等に勝れるものありし也。而して氏の彫刻家として世人の知る所となりしは極めて近年の事に属す。往年北白川宮殿下御銅像原型を作りし頃は、殆んど中央芸壇とは交渉なかりしものゝ如く、太平洋画会幹部の一員として活動を始めたるの頃より、稍見る可きの作出で、新聞社の植字工は無意識に新海竹太郎の活字を拾ひ出し始めたる也。『ゆあみ』以前の作は不快なる日本木彫風を脱し得ざりしも、本郷彌生町なる氏が仮普請的大アトリエに於て、北白川宮殿下の御乗馬に斧を揮ふを見し人は、実に急転直下立ちところに、或る新傾向に触れし氏が機敏に驚嘆せざるを得ざらき。

酒徒としての氏は甚奇行に富む。故小坂象堂、中村不折等と道途屢々熾んに政談を試む。根岸某旗亭の主人一廉の政客と誤まり認め、深夜酒を暖めて歓待せしなど、その類也。（現住、東京市本郷区向ヶ岡弥生町三番地）

島村抱月

石見の人、名は瀧太郎、号抱月は蘇東坡が『前赤壁賦』中の「抱明月長終」の句より取りしもの也。明治四年一月十日、島根県那賀郡小国村に生る。父は佐々小姓、家の衰ふるや、父母に従つて諸方に転住し、後、浜田町に止まる。同地の小学を卒へて、自活の傍、漢、数、英の三学を修め、明治二十二年京に上りて当時私立の商業学校に入り、中学課程を履修す。傍ら、東京物理学校に及び、故イーストレーキの日本英学院に通ひて補習す。二十四年当時の東京専門学校文科に入り、二十七年卒業。先之、明治二十三年故ありて、島村姓に入籍す。明治三十五年三月、早稲田大学留学生として藤原奨学金により英独留学の途に上り、オクスフォード大学及びベルリン大学に学び、三十八年九月帰朝す。職歴としては、学校卒業後、前の『早稲田文学』記者、『新著月刊』記者、『読売新聞』記者、三省堂編輯所員、早稲田中学教員等を経て、今は早稲田大学講師たり。明治二十八年結す、妻は島村家の養女也。

氏は自ら「予をして文芸に向はしむるに最も力ありし一は、初期の『国民之友』なるべし」といふ。氏の早稲田文科を出づるや、同校に文科ありて以来の秀才として、後藤宙外等と共に、直ちに時の文壇に出で、評論に創作に大に勉む。当時の論文を集めしものに『風雲集』一巻あり、宙外等と共著す。而して氏の海外留学中は、恰もわが文壇の将に一転化せんとせる時に際し、猶ほ多少の沈滞を免れざりしが、氏の帰朝するや、会々日露戦後に際し、文壇此時を以て一大転化を試みたりき。氏は即ちまづ久しく倒れたる『早稲田文学』を起し、同時に文芸協会を設立し『早稲田文学』再刊の劈頭に「囚はれたる文芸」の一文を草して、ロマンチツクの文芸の清新なるを説くや、文壇の視目、実に斯人に集まるの観ありき。爾来、文芸の評論は云ふまでもなく美学の紹介に、美術の評論に、常に文壇の風潮の先頭に立ち、或は之れが批評是正につとめ、その自然主義勃興に際するや、自然主義論を草して、自然主義の未だ世

に解せられざるを明解是正し、一方は青年文学者の指導誘掖につとむる等、時の文壇に貢献するところ頗る大。現に『早稲田文学』の主幹たり。著書は『新美辞学』『風雲集』『漢詩講義』『滞欧文談』『其女』『乱雲集』『近代文芸の研究』等にして、その小説類また少からず。（現住、東京市牛込区薬王寺前町二十番地）

島崎藤村

信濃の人、名は春樹、明治五年二月十六日、長野県西筑摩郡馬籠村に生る。家君正樹氏の命により九歳のとき東京に遊学す。泰明小学、共立学校等を経て、二十歳時の明治学院を卒業す。同学院にありて馬場孤蝶等と交はる。後、『女学雑誌』に関係し『文学界』の編輯に携はる。透谷、天知、秋骨、孤蝶等その同人也。二十五歳東北学院講師として仙台に赴き留まること一年、二十八歳小諸に赴き、七年を山の上に送る。此の間『若菜集』『夏草』『落梅集』等の著あり、詩名世に普ねく、時の青年の渇仰する所となる。後『藤村詩集』に収めて一巻となす。氏が小諸にある間に中央の文壇は漸次動揺しはじめて、自然主義的思想、及び自然派の作品漸やく世に現れんとせり。氏此の時『破戒』の未定稿を携へて東京に出で、時代の文芸、未だ混沌として、新興の気運の仄かに揺動せんとせる間に向つて、此作を投ず。評壇ために騒然たり。幾くもなく自然主義的思想と、自然派の作品は、一代の風を形作りて、氏は田山花袋、国木田独歩等と共に、此派の小説家の首なるものとなる。明治四十一年の秋『春』を刊行す。自然主義を行き尽して、印象主義に入らんとするの傾向を示す。其他『弟子』『一夜』等短篇数種あり。

その他の事歴としては、明治女学校、小諸義塾に教鞭を執りしこと、『透谷全集』を編みしこと等にして、又、その明治三十六七年の頃、未だ自然派の作品の勃興なき時にあたりて、『旧主人』『藁草履』『水彩画家』等の自然派的傾向の作品を以て世を愕かせしことを記せざるべからず。目下、東京浅草区新片町一番地に住居す。此処にありて時感を集めたるものに『新片町より』あり。

下村観山

東京の人、名は晴三郎、明治六年を以て生る。父は象牙彫刻師として令名ありき。氏は九歳の頃より既に画才を顕はし、後年異材たるの実を示せり。狩野芳崖に就きて、其技を磨くに及び著しき進境あり。美術学校に入りてよりは橋本雅邦に師事す。二十七年、同校を卒業し直ちに助教授に挙げらる。三十一年、同校の変動に際し、退きて日本美術院の創立に力を致し、同院の正員として重きをなす。三十四年、寺崎広業と共に再び美術学校の教授に任ぜられ、三十六年英国に留学す。留まること二ヶ年半にして帰朝す。四十年、文部省美術展覧会の審査員に挙げられ、同年第一回の展覧会に『木の間の秋』を出陳して、光琳に加ふるに一味の洋式を加へ然して自家の新味を以てせり。濃厚なる色彩美の目に訴ふる感覚は、渾然として人を酔しむるものあり。栖鳳の『雨霽』と対して、当時邦画の双璧と称せらる。四十一年、玉成会に『大原行幸』と題し、絵巻物に擬したる製作を公にす。而も描法は従来の絵巻物と離れて、新趣味を加へたれど、毫も其時代の精神を失はず、色彩豊潤にして、気魄重厚、今人の技倆、古へを蔽ふものあり。藤岡博士は当時の『中央公論』に於いて、文部省展覧会に於ける栖鳳の『飼はれたる猿と兎』と対比して、其の傑出せる作なることを激賞せり。翌年秋、玉成会に『小倉山』を出して、独特の歴史画に、其の妙技を揮ふ。しかも、此作『木の間の秋』と『大原行幸』の後に出でたるものとしては、一段の精進を欠きたるが如き憾みなくむばあらず。氏自身としても、之を文部省の展覧会に出品せざりしは、さまで会心の作にあらざりしを知る可し。氏が今後の努力は、邦画の模様美を発揮する点に在り。此点に於て氏は幾んと独壇の観あり。氏寡言にして、未だ嘗て書簡の筆を執りたることなし。想ふに氏は独りを楽むの人なるべく、滞在中、日々多く一室に閉居し、亦毛布を敷いて、日本画を揮灑し、美術館を訪ふことさへ稀なりしと伝ふ、（現住、常陸国五浦）

広津柳浪

筑後の人、名は直人。文久元年六月を以て長崎に生る。家世々久留米有馬藩に隷し、医を業となす。九歳にして肥前田代在の親戚に寓して漢籍を学ぶこと二年。長崎の自明小学校に転じ、更に東京に出でゝ番町小学校に入る。明治九年歳まさに十四也。次で医たらんとして独逸語を修め、外国語学校に入り、更に大学予備門の医学部に入る。十六歳の暮也。後病んで学を廃し商人たらんとして大阪に赴き、商業会議所の書記となり、十三年、二十歳の時上京、農商務省の吏となりしが幾くもなくして辞し、地方に放浪せり。二十年山内画仙に介せられて『東京絵入新聞』に小説を草せしは、その文学的生涯に入りし始めにして、題して『女子参政権蜃気楼』と云ひ、一回七十五銭の報酬を得しといふ。翌年博文館に入りて雑誌『大和錦』の編輯に従事し始めて言文一致体の作『ふたおもて』を同誌に掲ぐ。故

尾崎紅葉と相知りて硯友社に入り、屢々『我楽多文庫』に執筆す。此間博文館を辞して読売新聞社に入りしも、僅に一日にして退社す。『新著百種』に『残菊』を出すや早く其得意の深刻なる観察を示して、盛名一時に揚り、之れより柳浪の名世の重ずる所となる。爾後『五枚絵姿』『いとし子』『糸の乱れ』等の作を経て、二十八年五月の『文芸倶楽部』に『黒蜥蜴』を掲ぐるや、当時の評家が要求せし深刻小説の旨に合し、文壇の謳歌を一身に荷ふ。次で、『今戸心中』出で『河内屋』出づるに及んで、文名絶頂に達し、露伴、一葉以外氏に追随する者なしと称せらる。後『畜生腹』『異り種』『青大将』等の作あり。凄惨なる人生の一面を描いて、共に佳作に数へらる。三十二年後には『紫被布』『縁不縁』等ありて盛名を持続せり。爾来主として新聞小説を草して今日に至る。

職歴は、前記の他、『東京中央新聞』（後の中央新聞）『都』『改進』『東華日報』等に入社せしことあり、何れも一年又は二年に満たずして退けり。（現住、東京市麻布区霞町二十二番地）

平田禿木

東京の人、名は喜一、明治七年二月を以て江戸橋々畔に生る。十八年共立学校に入り、次いで第一高等中学校に入学す。島崎藤村、馬場孤蝶等諸氏と共に、雑誌『文学界』を起せしは、実に同校在学中の事なりし也。廿八年病んで同校を起〔ママ〕き、後英人アツクレエ女史に就きて、英文学、古典語を研究す、氏が多くの述作を公にせしは此間の事也。三十四年、東京高等師範学校教師に任ぜられ、三十六年一月、英国へ留学を命せらる。牛津大学にて研究三年、三十九年六月帰朝す。学習院教授を経て、四十二年秋、第三高等学校に赴任せり。

旧『文学界』に拠りて年少俊秀の文人一団を為せるが中に、氏は特に秀でたる人として迎へられ、西欧の文人詩家の懐かしき筆の匂を移したるが如き新味ある其文致は、当時の青年の心を躍らしめたりき。氏今や平安京裡風常に春を吹くが如き中に在り。静に筆を執つて多年の蘊蓄を傾倒せるものを公にすべしと伝ふ。亦文壇の為に慶すべし。〔住所記載無し〕

樋口龍峡

信濃の人、名は秀雄、明治八年五月を以て長野県飯田町に生る。第一高等学校を経て、東京帝国文科大学哲学科に入り、二十三年卒業す。専ら社会学を修む。嘗て一度は社学心理の研究に入りしより、謂ゆる社会意識、特に時代思想なるものゝ根底に於いて、感情的要素の意外に時代思想に重要なる部分を占むるを知り、一代人心の帰嚮に於て、倫理教育以上に文芸的情緒思潮が重大なる関係を有するを思ひ、且つは嗜好の赴く所、文芸の事に興味を有するに到る。而も要は時代精神の問題にありて文芸そのものは、寧ろ賓位たりとは、氏の自ら称する所也。嘗て『帝国文学』及び『哲学雑誌』を主宰す。自然主義の勃興するや、氏は之を慊らずとして、文芸革新会に投じ、演説に文章に、大に之れが攻撃につとむ。自ら文士を以て任ぜずと雖も、世間氏を以て非自然派の批評家として目するもの多し。議論まゝ聞くべきものあり。（現住、東京市小石川区白山御殿町百十番地）

菱田春草

信濃の人、名は三男治、明治七年九月を以て長野県下伊那郡飯田村に生る。二十八年東京美術学校の業を卒へてより、奈良高野京都地方の古美術の研究に従ひ、其趣味性を饒多ならしめたり。三十一年日本美術院の創せらるゝや、氏は、下村、横山諸氏と共に其の正員に挙げらる、美術院派の特殊の画風を示して、新意を邦画界に注ぎ来れる功労は、氏の努力亦与つて効あり。

三十六年、横山大観と共に印度へ渡り、彼の地の古美術を探りて、翌年帰朝す。尋いで同氏と共に欧米各国に遊び、泰西美術を研究して三十八年帰朝す。氏は此頃頻りに水彩画風の作を試みたりしが、多く小品にて、力あるものにはあらざりき。

四十年秋、岡倉氏及び下村、横山二氏と共に、常陸の五浦に移住し、万里の海風に、其の画恩を養ひしが、四十二年春出でゝ、東京の西郊代々木に来り、武蔵野の風光に接するに至れり。同年秋の文部省展覧会に出せし「落葉」の作は、氏が此の新しき生活の中に得たる第一の収穫にして、其精細なる描法と、新意に富めることの深きを知らしめたり。（現住、東京市外代々木百六十番地）

森鷗外

陸軍軍医総監、医務局長、従四位勲二等功三級、医学博士、文学博士。石見の人、名は林太郎、万延元年石州鹿足

郡津和野字横堀に生る。明治五年父に伴はれて東京に出で、本郷壱岐殿坂の進文学舎に入り独逸語を学ぶ。十三歳東京医学校に入り、明治十年、東京医学校の東京大学医学科に改正せらるゝや、即ちその本科に入る。十四年業を卒ゆ。時に氏僅に二十歳。同年十二月陸軍軍医副となり、十六年十月独逸留学を命ぜらる。ライプチツヒ大学及び、ミュンヘン大学を経て、二十年四月伯林に行く。其間医学上の研究を発表せるもの少なからず。同年七月伯林を発して英仏を経由し、九月八日帰朝、直ちに軍医学舎（今の陸軍々医学校）の教官となる。日清戦争には、一等軍医正を以て従軍し、後、軍医監に進み、近衛師団、第十二師団、第一師団等の軍医部長となり、日露戦役に従軍して殊功あり。四十年十一月遂に軍医総監に進み、陸軍省医務局長となる。

氏の文学上の功労は今茲に縷説するを用ひず、独逸留学より帰り、『舞姫』一篇を作りて世を愕かしてより、常に日本文学界の先頭に立ち、曾ては雑誌『めざまし草』『しがらみ草紙』等を刊行して、時の文壇を裨益すること少からず。理想没理想に関して、『早稲田文学』の坪内逍遙と論陣を張り、その『山房論文』の声価、森然として一王国を形造れりき。論文美学、小説、翻訳等、皆悉く文壇の先駆先覚たらざるはなかりき。論文を集めたるものには『つき草』『かげ草』あり、翻訳には、『水沫集』『即興詩人』あり、詩集には『うた日記』あり。美学上著述翻訳には『審美極致論』『審美新設』『審美綱領』あり、脚本の翻訳には『一幕物』あり。公務の余業として文芸に従事し、その精力の旺絶、かくの如し、詩人愕かざるもの稀也。近時『スバル』同人を助けて、時に小説を公にす。曾て『キタ、セクスアリス』なる自家の性欲史を発表して、発売禁止となり、時論為めに喧しかりき。今の文壇の人、多くは氏の感化影響を被らざるものなく、その泰西新文学を移植したるも、又清新なる文芸上の趣味を鼓吹したるも、皆多くは氏に負ふ所也。（現住、東京市本郷区千駄木町二十二番地）

森田草平

美濃の人、名は米松、明治十四年を以て長良川河畔に生る。別に白楊、二十五絃等の号在り。七歳小学に入り、十五歳之れが業を卒へて直に上京、攻玉舎に入る。二十六歳東京帝国大学文学科を卒業す。曾て一葉、紅葉、鷗外等の作、巣林子の戯曲を読みて感化を受け、文学を以て立たんとするの志あり。後新詩社同人と交はりて『明星』に散文を掲ぐ。明治三十年平塚明子と携へて塩原に遊び、世間氏の素志を誤まりて、此事満都の褒貶に上りし事あり。故ありて妻子を郷里に還し、深く沈潜して事の終始を小説に作るの意あり。その稿『煤煙』成るや、之れを『東京朝日新聞』に連掲す。之れによりて文名頓に上り、青年大学派の俊秀を以て目さる。『煤煙』は塩原行の弁護にあらずして、真摯なる芸術上の述作也。四十二年秋東京朝日新聞社に入り、新に文芸欄を起して之れが記者となり、屢々文芸評論を掲ぐ。（現住、東京市牛込横寺町正定院）

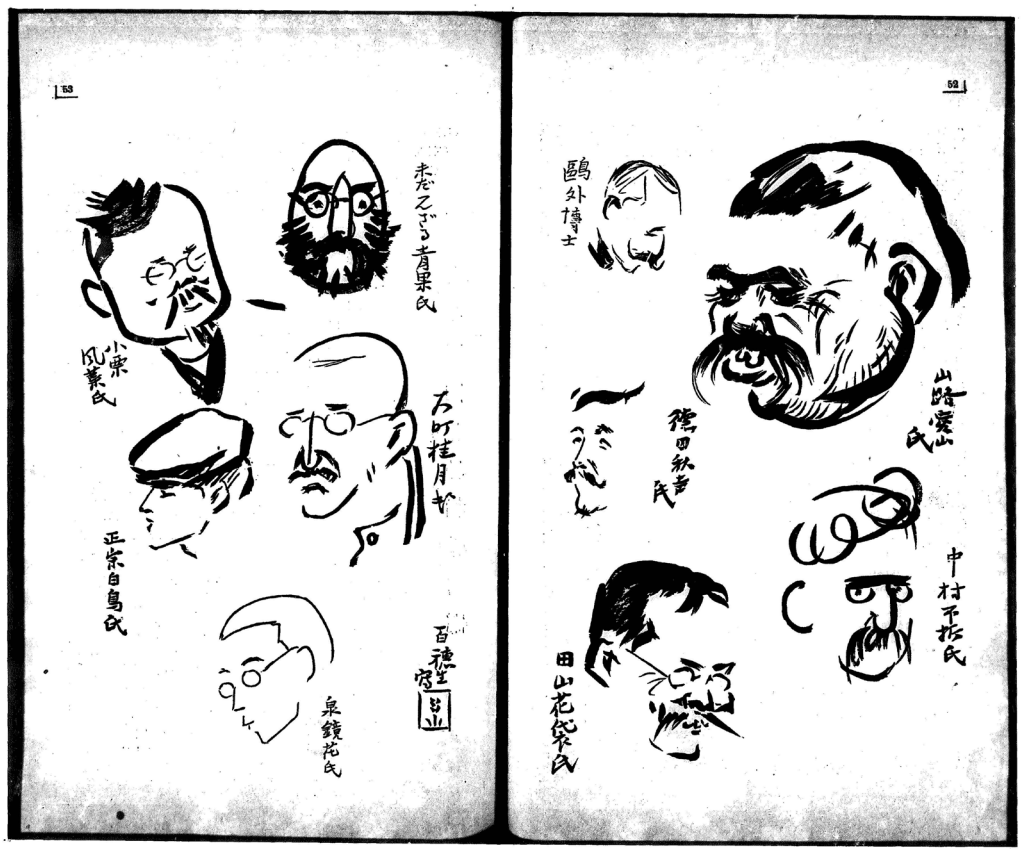
瀬沼夏葉

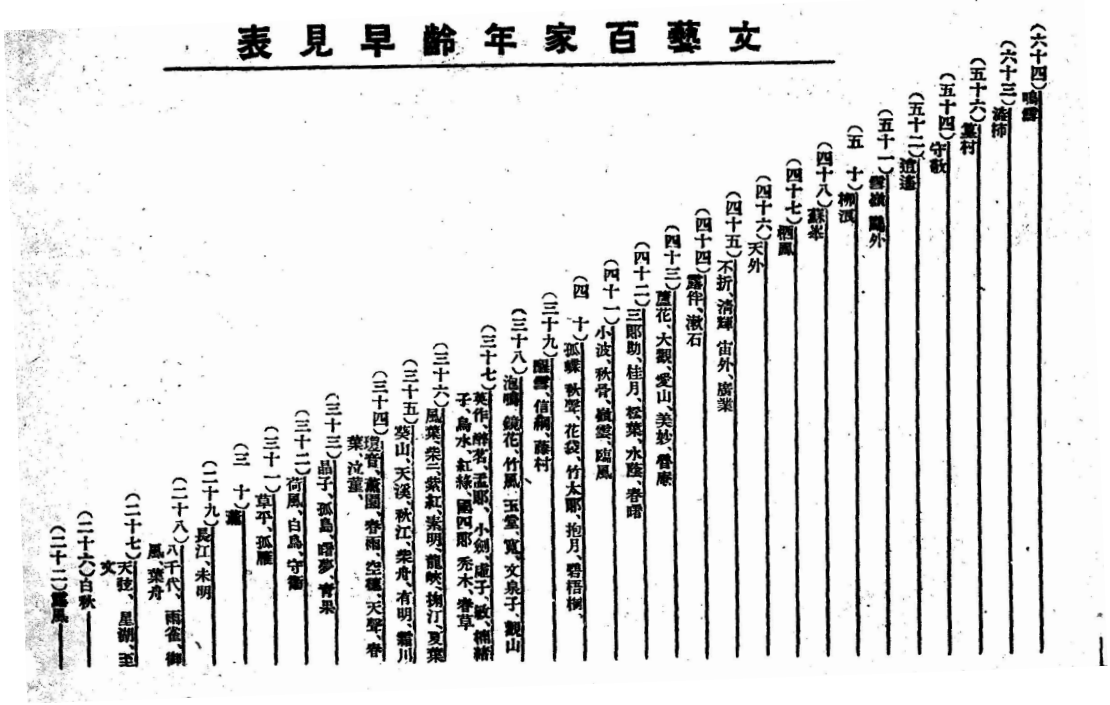
上野の人、名は夏子、明治八年十二月を以て高崎市に生る。神学士恪太郎の妻也。家は町家なれど、出でゝ病身なる母と共に其の里方なる某藩士のお濠外の閑居に育ちぬ。九歳の時、母を喪ひ、十二歳の時、天主教ニコライ師の勧めにて、一人東京に出でゝ、女子神学校に入る。十八歳、同校の業を卒へて教師となる。『罪と罰』を読み、『片恋』を読み、『アンナ、カレニナ』の梗概を聞きて、露西亜文学に親灸せむことを企つ。其後偶然の機会にて故尾崎紅葉に師事し、『アンナ、カレニナ』を訳して是正を受く。四十一年、チエホフ、傑作集を訳出し、閨秀翻訳家を以て聞ゆ。四十二年春、露国に遊び、秋帰朝す。女史は自ら露国文学の紹介者を以て居り、今後益々此方面に向つて、努力すべしと云ふ。（現住、東京市神田区駿河台甲賀町十二番地）

薄田泣菫

備中の人、名は淳介。明治十年五月十九日を以て備中国浅口郡連島村に生る。氏に学歴と称すべきもの幾んど無し。自ら『小生は斯様の課税なきを幸福と存じ候』といへり。二十六年、十七歳の秋、郷を出でゝ京都に来り翌年春東京に上り、四ケ年余を上野図書館に通ひて、自修に努む。此間氏が修得したる知識は文芸の諸般に亘りて、精を極めしと云ふ。日本の古典に潜心して、後日其の詩作に影響を及ぼすに至れるもの、想ふに此間の一事業たりしなるべし。三十一二年頃『新著月刊』『新小説』等に新体詩を公にするや、島崎藤村の長かりし全盛に次いで、詩壇はこゝに尖才気鋭の年少詩人を見るを得たり。才情キーツに似て、触るゝ所、詩思横溢せざる無し。目を聳てつゝ一世の人心翕然として氏の一身に集る。三十二年『暮笛集』を出し、三十四年『ゆく春』を公にするや、詩壇彼を迎へて一流の地に置けり。其第三の集『二十五絃』は著しく沈著の風を帯び来れるを示し、新詩壇の覇権を握らむとするに至る。

三十九年『白羊宮』を出せるが、技巧に過ぎて、『暮笛集』当時の情想は見るよしなく、文字を洗錬し、尊重するの余り、古典的の匂ひを生じ来れり。斯くて、其の思想は次第に氏より遠ざかりて、一方新進秀才の乗ずべき気運は開かれたり。氏も亦漸く作詩に倦みて、頻りに小品に耽り、四十一年春『落葉』と題せる小品集を出し、又近く小説を草せりと雖も、其力を籠めたる割合に、反響共に大なるを得ず。氏が本領は竟に詩作にある乎。而も氏の詩は既に或処まで行き著きたる也。奈何にして舵首を廻らすべきか。才人徒爾にして止まざる可きを信ず。（現住、京都市上京区下長者町室町通）





住所録データベース

凡例

1. 本研究プロジェクトで蒐集した住所録資料およびそのテキスト化データを以下の基準を元に一覧化して掲出したものである。
2. 掲出する情報は、人名、年齢、住所、資料番号とした。
3. 掲出した人名は『日本近代文学大事典』に掲載されている人名に限定し、配列もそれに準じた。
4. 人名の表記は、各住所録資料に掲出された表記を優先させた。なお、新旧漢字は通例に準じた。
5. 年齢は『日本近代文学大事典』の生年（西暦）と住所資料の発行年（西暦）の差を示した。
6. 住所の記載に際して、東京に限って東京府下・東京市外などは省略し、丁目・番地・号などは、略記し算用数字に変更した。
7. 資料番号は、下記を参照されたい。

記

資料番号　住所資料一覧

1 「東京現住著作家案内」明治 25 年　金港堂書籍会社
2 「言文一致会の会員名簿」明治 35 年
3 『文章世界』第 2 巻 4 号「現代文学者小伝」 明治 40 年 4 月　博文館
4 『文章世界』第 3 巻 2 号「改訂現代文学者小伝」 明治 41 年 2 月　博文館
5 『新潮』第 13 巻 1 号「現代文藝百家小伝」 明治 43 年 1 月　新潮社
6 『文章世界』第 5 巻 2 号「現代文士録」 明治 43 年 2 月　博文館
7 『文章世界』第 7 巻 3 号「現代文士録」 明治 45 年 2 月　博文館
8 『文章世界』第 8 巻 4 号「現代文士録」 大正 2 年 3 月　博文館
9 『文章世界』第 13 巻 1 号「現代文士録」 大正 7 年 1 月　博文館
10 『文章世界』第 13 巻 1 号「現代美術家録」 大正 7 年 1 月　博文館
11 『新文章日記大正 11 年』大正 10 年 11 月 5 日　新潮社
12 『文芸日記大正 12 年』大正 11 年 9 月 5 日　新潮社
13 『文芸日記大正 13 年』大正 12 年 9 月 5 日　積善館
14 『新文章日記大正 14 年』大正 13 年 11 月 5 日　新潮社
15 『新文芸日記 1926 年』大正 14 年 11 月 1 日　新潮社
16 『新文芸日記 1927 年』大正 15 年 11 月 10 日　新潮社
17 『新文芸日記昭和 4 年』昭和 3 年 11 月 15 日　新潮社
18 『新文芸日記昭和 5 年』昭和 4 年 11 月 12 日　新潮社
19 『文芸年鑑昭和 6 年』昭和 6 年 3 月 5 日　新潮社
20 『昭和 14 年朝日年鑑』昭和 13 年 10 月 10 日　朝日新聞社
21 『文芸家協会会員名簿』昭和 16 年

人名	年齢	住所	資料番号
饗庭篁村又号竹のや（饗庭与三郎）	37	北豊島郡西大久保村349	1
饗庭篁村	52	本所区向島小梅町107	3
	53		4
	55		5
	55		6
	57		7
	58		8
	63	牛込区赤城下町81	9
	67	牛込区赤城下81	12
	68		13
青木月斗	59	大阪天王寺区北山町13	20
青木健作	29	千葉県成田町横町	7
	30		8
	35	小石川区大塚坂下町69	9
	39	小石川区大塚坂下町79	12
	40	井本方	13
青野季吉	36	代々木西山谷235	16
	38	代々木初台576	17
	39		18
	41	西原937	19
	48	世田谷区世田谷3-2	20
	51	世田谷区世田谷3-2241	21
青柳有美	34	京橋区八官町24 巌本善治方	3
	35		4
	37		6
	39		7
	40		8
	45	東大久保357	9
	49	名古屋市東区七間町4-17	12
	50		13
	65	兵庫県宝塚中洲松風園第二号	20
赤木桁平	7	下谷区上野桜木町17	9
	30	大阪市東区農人橋2-2	11
赤松月船	32	杉並町天沼117	18
	34	杉並町天沼156	19
赤松麟作	40	大阪市北区北梅田町4-1	10
	44	大阪市北区北梅田町412	12
	45		13
秋田雨雀	25	高田村雑司ヶ谷34	4
	27		5
	27	高田村雑司ヶ谷24	6
	29	高田村雑司ヶ谷22	7
	30		8
	35		9
	38		11
	39	高田町雑司ヶ谷22	12
	40		13
	41	高田村雑司ヶ谷22	14
	42		15
	43	高田町雑司ヶ谷22	16
	45	高田雑司ヶ谷22	17
	46		18
	48		19

人名	年齢	住所	資料番号
秋田雨雀	55	高田村雑司ヶ谷34	20
	58		21
秋庭俊彦	27	荏原郡品川町260 清光院	7
	28		8
	33	上大崎79 飯島方	9
	37	世田ヶ谷三宿50	12
	38		13
	41	玉川村字等々力 等々力農園	16
	43	多摩川村等々力65	17
	44	多摩川村等々力山谷65	18
	46	玉川村等々力65	19
芥川龍之介	26	横浜市汐入町580尾鷲方 及び、田端435	9
	29	田端435	11
	30		12
	31		13
	32		14
	33		15
	34		16
朝倉文夫	35	下谷区谷中天王寺町20	10
	39		12
	40		13
浅野晃	40	杉並区永福町128	21
浅原六朗	31	杉並町阿佐ヶ谷693	16
	33	三鷹村字下連雀48	17
	34		18
	36	三鷹村下連雀48	19
	43	渋谷区千駄ヶ谷4-795	20
	46		21
朝比奈知泉	40	麹町区三番町10	2
	45	荏原郡大井村	3
	46		4
蘆原英了	31	麹町区六番町13-2	20
足立源一郎	33	奈良市高畑裏大道	12
	34		13
足立直郎	45	世田谷区北沢3-975	21
渥美清太郎	39	小石川区原町10	19
姉崎嘲風	34	小石川区指ヶ谷町78	3
	35		4
	37		6
	39		7
	40		8
	45	小石川区白山御殿町117	9
	49		12
	50		13
阿武天風	36	牛込区山吹町79	9
阿部次郎	29	下谷区上野桜木町28	7
	30		8
	35	東中野町桐ヶ谷1018	9
	38	中野町桐谷1018	11
	39	中野桐ヶ谷1018	12
	40		13
	43	仙台市良寛院町44	16
	45		17
	46		18
安倍季雄	61	小石川区茗荷谷町18	21
阿部知二	28	小石川区竹早町82	19

人名	年齢	住所	資料番号
阿部知二	35	杉並区荻窪2-99	20
	38		21
安倍能成	29	麹町区富士見町2-32	7
	30		8
	35	神奈川県鵠沼藤ヶ谷	9
	39	小石川区小日向水道町	12
	40	92	13
	43	京城東崇洞京城帝国大学法文学部気付	16
網野菊	28	奈良市鵠伽町	17
	29		18
新井紀一	33	千住中組1003	13
	34	北千住中組1003	14
	35		15
	36		16
	38	板橋町中丸425	17
	39		18
	41		19
荒木巍	36	杉並区天沼2-372	21
有島生馬	36	麹町区下六番町10	9
	39	相州鎌倉極楽寺新渡戸邸内	11
	40	現代文士録に詳し	12
	41		13
	42	麹町区下六番町10	14
	43		15
	44	麹町区下六番町9	16
	46	麹町区下六番町10(外遊中。留守宅)	17
	47	麹町区下六番町9	18
	49	麹町区下六番町10	19
有島武郎	40	麹町区下六番町10	9
	43		11
	44		12
安藤徳器	39	世田谷区若林町548	21
飯島正	27	世田ヶ谷下北沢973	18
	29	世田ヶ谷町下北沢新屋敷975	19
	36	世田谷区北沢3-957	20
	39	世田谷区北沢3-975	21
飯塚友一郎	29	牛込区若松町1	13
飯田蛇笏	53	山梨県東八代郡境川村	20
飯田豊二	30	淀橋町柏木628 解放座事務所内	17
	31	淀橋町柏木628	18
	33	淀橋柏木大町1038	19
五十嵐力	33	小石川区小日向台町3-63	3
	34		4
	44	巣鴨町宮下1616	9
	48		12
	49		13
生田葵山	31	赤坂区青山南町6-48	3
	32		4
	34	横須賀の僑居に寓す	5
	34	赤坂区青山南町6-48	6
生田葵	36	赤坂区青山南町6-48	7
	37		8
	42	中渋谷字宇田川870	9

人名	年齢	住所	資料番号
生田葵	46	世田ヶ谷村池尻519	12
	47		13
	50	世田ヶ谷町代田39	16
	55		19
	65	世田谷区下代田町193	21
生田春月	26	牛込区天神町53	9
	29		11
	30		12
	31		13
	32		14
	33		15
	34	牛込区弁天町133	16
	36		17
	37		18
生田長江	25	記載なし	3
	28	本郷区千駄木林町193	5
	28		6
	30	本郷区根津西須賀町2	7
	31		8
	36	本郷区森川町1　牛屋横178	9
	39	麹町区上六番町32	11
	40		12
	41		13
	42	牛込区榎町50	14
	43		15
	44	相州鎌倉長谷稲瀬川167	16
	46		17
	47	神奈川県鎌倉長谷稲瀬川167	18
	49	市外代々木山谷314	19
生田蝶介	23	麹町区紀尾井町3 諏訪館方	7
	24	麹町区三番地10 後楽軒	8
	29	浅草区今戸町6	9
	33	下谷区上野町2-2	12
	34		13
	42	千駄ヶ谷穏田胡蝶ヶ丘	19
生田花世	43	牛込区天神町53	19
	53		21
井汲清治	31	麹町区三年町2 森方	13
	34	麻布区市兵衛町2-47	16
	36	淀橋柏木371	17
	37		18
	39	東調布町下沼部843	19
	49	大森区田園調布2-843	21
池田大伍	37	京橋区築地3-15	12
	38		13
	40		15
	41		16
	43		17
	44		18
	46		19
	56	京橋区築地4-6	21
池谷信三郎	28	下落合1639	17
	29	牛込区田町3-19	18
	31	東大久保14	19

人名	年齢	住所	資料番号
池辺三山	48	牛込区市ヶ谷谷町122	7
池辺義象	46	京都府上京区吉田町	3
	47		4
	49		6
	51		7
伊沢修二	51	小石川区小日向台六天町50	2
石井研堂	42	下谷区下根岸町25	3
	45		6
	47		7
石井鶴三	31	田端282	10
	35		12
	36		13
石井柏亭	36	日暮里渡辺町字筑波台	10
	40	日暮里渡邊町字筑波台	12
	41		13
石川欣一	34	四谷区大番町19	18
	36		19
	46	大阪府豊能郡箕面村桜井6	21
石川啄木	26	小石川区久堅町74-46	7
石川達三	33	世田谷区玉川奥沢町3-118	20
	36		21
石川寅治	43	小石川区丸山町五番地	10
	47	滝野川字中里425	12
	48		13
石川半山	35	麹町区三番町83	3
	36		4
	38	清国北京松樹胡同	6
	40	清国北京西城松樹胡同	7
	41	下渋谷117	8
石榑千亦	69	日本橋区本石町3-4-1	20
石黒敬七	44	小石川区久堅町74	21
石坂洋次郎	38	世田谷区玉川奥沢3-7	20
	41		21
石坂養平	33	埼玉県大里郡奈良村字中奈良2055	9
	36	埼玉県大里郡奈良村中奈良	11
	37	埼玉県大里郡奈良村大字中奈良	12
	38		13
思案外史（石橋助三郎）	25	小石川区金富町50	1
石橋思案	40	小石川区金富町50	3
	41		4
	43		6
	45		7
	46		8
	51		9
	55		12
	56		13
忍月居士又号　萩の門、福洲学人（石橋友吉）	27	中根岸町36	1
石橋忍月	42	長崎市磨屋町41	3

人名	年齢	住所	資料番号
石浜金作	25	本郷区駒込林町11 永	14
	26	宮方	15
	27	駒沢町深沢642	16
	29	麹町区三年町2	17
	30	駒沢町642	18
	32	駒沢町深沢642	19
石原純	57	杉並区下高井戸2-557	20
石丸梧平	36	上駒込染井847	12
	37		13
	40	千葉市寒川新宿1306	16
	42		17
	43		18
	45		19
	55	千葉市中学校坂左入り	21
石原和三郎	37	牛込区白銀町35	2
泉鏡花	34	相州辻子	3
	35		4
	37	麹町区土手三番町30	5
	37	相州辻子	6
	39		7
	40		8
	45	麹町区下六番町11	9
	48	麹町区下六番町13	11
	49	麹町区下六番町11	12
	50		13
	51	麹町区下六番町13	14
	52		15
	53		16
	55		17
	56	麹町区六番町13	18
	58	麹町区下六番町13	19
	65		20
泉斜汀	27	北海道札幌	3
	28	相州逗子	4
	30	小石川区久堅町	6
	32	千駄ヶ谷町540	7
	33		8
磯萍水	27	横浜市横浜市常盤町5-74	3
	28		4
	30		6
	32		7
	33		8
	38	南品川東広町565	9
板垣鷹穂	44	淀橋区上落合2-599	20
板垣直子	45	渋谷区代々木初台町606	21
井田絃声	32	大井町北浜川1092	9
一戸務	37	滝野川区上中里町62	21
一色醒川	33	本所区駒込千駄木町27	6
伊藤永之介	28	阿佐ヶ谷602	19
伊藤銀月	36	下谷区上根岸町94	3
	37		4
	39		6
	42		8
	47	四谷区永住町3	9
	51	神田区今川小路2-15	12
	52		13
伊東月草	42	保谷村下保谷	21

人名	年齢	住所	資料番号
井東憲	31	駒沢町上馬527	16
	33	駒沢町上駒引沢527	17
	34	静岡市五番町7	18
	36		19
	46	荒川区日暮里3 鶯谷ｱﾊﾟｰﾄ三号館81	21
伊藤左千夫	44	本所区茅場町3-18	4
	46		6
	48		7
	49		8
伊藤松宇	79	小石川区関口町芭蕉庵	20
伊藤整	36	杉並区和田本町714	21
伊藤貴麿	31	高田町大原1526	14
	32		15
	33	下落合438	16
	35		17
	36		18
	38	上荻窪488	19
	48	杉並区上荻窪1-8	21
伊藤松雄	28	上渋谷135	13
	31	長野県上諏訪町湖畔	16
	33		17
	34		18
	36	東大久保464	19
	46	淀橋区上落合1-412	21
伊東六郎	30	下谷区西黒門町23	9
稲岡奴之助	34	記載なし	3
	35	淀橋町字柏木996	4
稲垣足穂	25	明石市大明石1204	15
	26	西巣鴨新田817 池内舞踏場	16
	28	西巣鴨新田817	17
	29	西巣鴨新田781 池内舞踏場内	18
	31	西巣鴨町新田817 池内方	19
稲毛詛風	31	小石川区小日向台町3-77	9
	35		12
	36		13
乾信一郎	32	赤坂区青山高樹町14	20
	35		21
犬養健	27	東中野1700	13
	28		14
	29		15
	30		16
	32		17
	33		18
	35	四谷区南町88	19
	45		21
犬田卯	37	杉並町成宗113	17
	38		18
	40		19
井上勇	28	目下外遊中	18
井上剣花坊	40	芝区下高輪町55	6
井上哲次郎	47	小石川区表町109	2
	52		3
	53		4
	55		6

人名	年齢	住所	資料番号
井上通泰	41	麹町区内幸町1-3	3
	42		4
	44		6
	72	渋谷区青葉町10	20
井上康文	26	池袋1033	13
	29	四谷区三光町	16
	32	四谷区三光町1	18
	34	野方町上沼袋73	19
	44	杉並区荻窪中通町47	21
井上頼圀	63	麹町区麹町2-14	2
伊原青々園	37	赤坂区青山南町5-37	3
	38		4
	40		6
	42		7
	43		8
	48		9
	52		12
	53		13
	56		16
	58		17
	59		18
	61		19
	68		20
	71		21
伊福部隆輝	25	滝野川町字西ヶ原553	13
	28	滝野川町字西ヶ原554	16
	30	野方町新井宿313	17
	31	野方町字新井313	18
	33	滝野川町字滝野川大原752	19
井伏鱒二	33	井荻町下井草1810	19
	40	杉並区清水町24	20
今井邦子	41	千駄ヶ谷町638	19
	48	杉並区千駄ヶ谷3-527	20
	51	渋谷区千駄ヶ谷3-526	21
今井達夫	37	大森区馬込町東2-908	21
今井白楊	21	牛込区通寺町16 青野方	6
	23	牛込区早稲田町41 早稲田館方	7
	24		8
今野賢三	32	井荻村上荻窪648	15
	33		16
	35		17
	36	上荻窪648	18
	38	荻窪648	19
伊良子清白	30	記載なし	3
岩崎昶	35	豊島区池袋1-787	20
岩崎純孝	27	世田ヶ谷太子堂56	17
	28		18
	30	世田ヶ谷太子堂54	19
岩田烏山	33	北品川城南社	3
	34		4
岩藤雪夫	29	杉並町高円寺23原方	19
岩野泡鳴	34	赤坂区台町13	3
	35		4
	37	府下西大久保158	5
	37	赤坂区台町13	6
	39		7

人名	年齢	住所	資料番号
岩野泡鳴	40	赤坂区台町13	8
	45	巣鴨町1082	9
撫象子（巌本善治）	29	麹町区三番町67	1
巌本善治	44	京橋区八官町24	3
	45		4
漣山人（巌谷季雄）	22	麹町区平川町5-26	1
巌谷小波	37	芝区高輪南町47	3
	38	芝区高輪南町53	4
	40		5
	40		6
	42		7
	43		8
	48		9
	52		12
	53		13
	56		16
	58		17
	59		18
	61		19
巌谷大四	26	芝区高輪南町53	21
宇井無愁	32	麹町区富士見町1-7-9 ﾀｲｶﾞｰﾋﾞﾙｱﾊﾟｰﾄ	21
上田万年	35	浅草区向柳原町2-1	2
	40		3
	41		4
	43		6
	45		7
	46		8
上田広	36	千葉市亀井町90 浜田方	21
上田敏	33	本郷区西片町10-に44	3
	34		4
	36	京都市上京区岡崎町	5
	36	本郷区西片町10-に44	6
	38		7
	39		8
上野山清貢	29	下渋谷1798	10
	33	北海道旭川区近文三線1	12
	34		13
臼井大翼	53	大森区新井宿2-1636	20
臼田亜浪	39	代々木北山谷175	9
	52	中野新町3790	19
	59	中野区西町40	20
薄田斬雲	30	韓国京城南山町2 武藤仙蔵方	3
	33	千葉県山武郡片貝村	6
	35	牛込区矢来町3 山里	7
	36		8
内ケ崎作三郎	30	小石川区原町75	3
	31		4
打木村治	37	杉並区井荻3-93	21
内田百閒	40	牛込区市ヶ谷仲之町39 佐藤方	18
	49	麹町区土手三番町37	20
不知庵主人（内田貢）	24	神田区猿楽町5 板垣方寓	1

人名	年齢	住所	資料番号
内田魯庵	39	麹町区四番町	3
	40		4
	42		6
	44		7
	45		8
	50	淀橋町柏木371	9
	53		11
	54		12
	55		13
	58		16
	60	大久保百人町384	17
内村鑑三	46	淀橋町字角筈	3
	47		4
	49		6
内海月杖	35	小石川区白山御殿町	3
	36		4
	38		6
	40		7
	41		8
内海泡沫	28	播磨国揖保郡揖西村	7
	29		8
宇野喜代之介	29	長野県上諏訪町新井	13
宇野浩二	30	下谷区上野桜木町17	11
	31		12
	32		13
	33		14
	34		15
	35		16
	37		17
	38	下谷区桜木町17	18
	40	下谷区上野桜木町17	19
	47	下谷区上野桜木町18	20
	50	牛込区神楽町都館内	21
宇野四郎	36	神奈川県鎌倉町坂-下176	18
	38	神奈川県鎌倉坂-下176	19
宇野千代	27	馬込村中井1578 尾崎方	14
	28		15
	29	大森馬込字中井1578 尾崎方	16
	31	大森馬込字中井1578	17
	32		18
	34	世田ヶ谷町山崎1405	19
	41	四谷区大番町104	20
宇野信夫	37	浅草区橋場町3-1-10	21
生方敏郎	28	小石川区原町27 星野半次郎方	6
	30	小石川区雑司ヶ谷119	7
	31		8
	36	小石川区原町13	9
	39	小石川区林町58	11
	40		12
	41	小石川区音羽町3-21	13
	44		16
	46		17
	47	野方町上沼袋316	18
	49	野方上沼袋316	19

人名	年齢	住所	資料番号
生方敏郎	59	小石川区原町13	21
梅沢和軒	36	小石川区小日向台町2-26	3
	37		4
	39		6
梅原龍三郎	30	北品川733	10
	34		12
	35		13
海野十三	41	世田谷区若林町179	20
	44		21
江口渙	31	下谷区谷中清水町1	9
	34	下谷区上野桜木町17	11
	35		12
	36	小石川区宮下町4 大石方	13
	37	代々幡町笹塚府営住宅	14
	38		15
	39	武蔵野村安養寺住宅地51	16
	41	武蔵野村安養寺住宅地	17
	42		18
	44	吉祥寺町615	19
悦田喜和雄	29	宮崎県児湯郡木城村第一新しき村	15
	33	宮崎県児湯郡新しき村	18
江戸川乱歩	32	牛込築土八幡町34	16
	34	戸塚源兵衛179	17
	35	戸塚町源兵衛179	18
	37	戸塚源兵衛179	19
	44	豊島区池袋3-1626	20
	47	豊島区池袋町3-1626	21
江南文三	25	本郷区弓町2-10 三好方	7
	26		8
海老名弾正	51	小石川区林町42	3
江馬修	23	本郷区森川町1 新坂369	7
	24		8
	29	代々木初台607	9
	32	代々木初台609	11
	33		12
	34		13
	35		14
	36		15
	37	代々木初台608	16
	39		17
	40		18
	42	代々木初台609	19
水蔭（江見忠功）	23	牛込区北町41	1
江見水蔭	38	南品川町小倉山稲荷境内	3
	39		4
	41	府下南品川小倉山稲荷境内	5
	41	南品川町小倉山稲荷境内	6
	43		7
	44		8
	49	品川小倉山252	9
	62		19
円地文子	26	神奈川鎌倉町材木座275	19

人名	年齢	住所	資料番号
円地文子	36	中野区江古田4-1559	21
大泉黒石	28	雑司ヶ谷442	12
	29		13
	32	落合町下落合744	16
	34	高田町雑司ヶ谷108	17
	35	長崎町大和田2028	18
	37	高田町鶉山1501	19
大江賢次	33	淀橋区柏木5-1180	20
	36		21
大木惇夫	36	吉祥寺431	19
	43	豊島区目白町2-1569	20
	46		21
大久保作次郎	28	下谷区谷中初音町4-141	10
	32	落合村下落合540	12
	33		13
大隈俊雄	30	赤坂区氷川町42	19
大熊信行	45	高岡市池之端	20
大倉桃郎	31	麹町区下二番町3	6
	33	麹町区元園町1-7	7
	34		8
	52	阿佐ヶ谷893	19
	62	杉並区阿佐ヶ谷4-893	21
大鹿卓	43	杉並区高円寺4-537	21
大下宇陀児	33	牛込区東五軒町31	18
	35	西巣鴨町宮仲1902	19
	42	豊島区雑司ヶ谷5-712	20
	45		21
大須賀乙字	31	下渋谷1824	7
	32		8
	37	小石川区高田老松町48	9
大杉栄	33	巣鴨村宮仲2583	9
	37	神奈川県鎌倉町	12
	38	本郷区駒込片町 近藤栄蔵方	13
大関柊郎	36	四谷区花園町98	16
	39	麹町区元園町1-7	18
	41		19
太田玉茗	36	埼玉県北埼玉郡羽生町	3
	37		4
	39		6
	41		7
	42		8
大田黒元雄	45	杉並区東萩町20	20
	48	杉並区東荻町20	21
太田千鶴夫	35	渋谷区永住町20	21
大谷句仏	63	大森区池上徳持町333	20
大谷繞石	32	本郷区曙町11	3
	33		4
	35		6
	37		7
	38		8
	43	金沢市市川岸町8	9
	47	金沢市池田町三番町2	12
	48		13
太田水穂	34	小石川区原町12	6
	36	小石川区三軒町2	7
	37		8

人名	年齢	住所	資料番号
太田水穂	42	小石川区三軒町2	9
	46	田端283	12
	47		13
	55	田端282	19
	62	滝野川区田端283	20
大塚楠緒子	32	本郷区西片町10-い84	3
	33		4
	35		6
大槻憲二	37	杉並町阿佐ヶ谷609	17
	38		18
	40	本郷区駒込動坂町327	19
如電居士（大槻修二）	47	浅草区北富坂町25	1
大槻文彦	55	下谷区	2
	60	日暮里村元金杉258	3
	61		4
	63		6
	65		7
	66		8
大坪草二郎	31	神田区淡路町2-9	19
	41	牛込区柳町33	21
大貫晶川	25	神奈川県橘樹郡高津村二子	7
	26		8
大庭柯公	50	四谷区愛住町48	12
	51		13
乙羽庵主人（渡辺又太郎）	23	京橋区新富町1-1 野村方寓	1
大町桂月	38	西大久保村108	3
	39		4
	41		6
	43		7
	44		8
	49	小石川区雑司谷108	9
	52	小石川区雑司ヶ谷町108	11
	53		12
	54		13
大村嘉代子	47	下谷区上野桜木町29	19
	57	静岡県田方郡中郷村大場	21
大森眠歩	32	池上雪ヶ谷818	19
大宅壮一	28	吉祥寺四軒寺593	17
	29	吉祥寺569	18
	31		19
	38	世田谷区野沢町1-7	20
大和田建樹	50	牛込区早稲田南町13	3
	51		4
	53		6
岡栄一郎	32	本郷区湯島天神町1-98	12
	33	本郷区森川町1 公威館	13
	36	小石川区大塚坂下町58	16
	38		17
	39		18
	41	下谷区中根岸町59	19
岡鬼太郎	35	麻布区西町	3
	36		4
	46	麻布区西町23	9

人名	年齢	住所	資料番号
岡鬼太郎	50	浅草区今戸町29	12
	51		13
	59	荏原郡東調布町田園都市170	19
	66	大森区田園調布3-41	20
岡倉由三郎	34	本郷区蓬莱町7	2
岡沢秀虎	27	牛込区弁天町96	18
岡下一郎	34	麹町区三番町28 戦旗社気付	18
岡田三郎	31	外遊中	11
	32	雑司ヶ谷水久保143	12
	33	目下仏蘭西留学中	13
	34	雑司ヶ谷水久保143	14
	35	長崎村大和田2131	15
	36	長崎村大和田2153	16
	38	牛込区矢来町40	17
	39		18
	41	相州茅ヶ崎町雲雀ヶ岡住宅地	19
	48	芝区愛宕山1-43 愛山荘	20
	51	雑司ヶ谷水久保143	21
岡田三郎助	41	下渋谷1837	5
	49		10
	53		12
	54		13
岡田真吉	38	鎌倉市大町名越2338	21
岡田禎子	39	牛込区赤坂下町88	21
岡田正美	31	麹町区飯田町6-22	2
	36		3
	37		4
	39		6
岡田八千代	24	麻布区新堀町7	3
	25		4
	27	下渋谷1837	5
	27	麻布区新堀町7	6
	29		7
	30		8
	35	渋谷伊達跡1837	9
	38	下渋谷伊達跡1837	11
	39	下渋谷1837	12
	40		13
	48		19
	55	牛込区神楽坂2-20「蜂窟房」内	20
	58	渋谷区伊達町96	21
緒方流水	34	上渋谷	3
	35		4
	37		6
岡野馨	48	豊島区池袋2-1097	21
岡麓	61	渋谷区代々木山谷185	20
岡村柿紅	31	浅草区猿屋町9	7
	32		8
	37	芝区高輪北町30	9
	41	芝区高輪北町50	12
	42		13
岡村千秋	28	小石川区大塚窪町41	7
	29		8

人名	年齢	住所	資料番号
岡村千秋	34	小石川区茗荷谷町52	9
	38		12
	39		13
岡本一平	32	赤坂区青山北町6-55	10
	36	芝区白金三光町293	12
	37		13
岡本かの子	42	赤坂区青山高樹町3(目下外遊中。留守宅)	19
	49	赤坂区青山高樹町3	20
岡本綺堂	40	麹町区元園町1-27	7
	41		8
	46		9
	49		11
	50		12
	51		13
	52	大久保百人町301	14
	53	麹町区麹町1-1	15
	54		16
	56	麹町区元園町1-27	17
	57		18
	59		19
	66	目黒区上目黒1-112	20
岡本太郎	30	赤坂区青山高樹町3	21
岡本霊華	29	牛込区東榎町20	7
	30		8
岡落葉	39	高田村雑司ヶ谷上り屋敷1147	10
	43	高田町雑司ヶ谷1147	12
	44		13
小川芋銭	50	茨城県稲敷郡牛久村	9
小川煙村	30	麹町区有楽町3-1	3
	31		4
	33		6
	35		7
	36		8
	41		9
小川千甕	36	本郷区駒込動坂町327	9
	40	巣鴨町1126	12
	41		13
小川未明	25	牛込区下戸塚町5	3
	26		4
	28	牛込区早稲田南町52	5
	28	牛込区下戸塚町5	6
	30		7
	31		8
	36	牛込区天神町23	9
	39		11
	40		12
	41	小石川区雑司ヶ谷町76	13
	42		14
	43		15
	44		16
	46		17
	47		18
	49	杉並町高円寺512	19
	56	杉並区高円寺1-1626	20
翁久允	41	目黒町駒場905	18
	43		19

人名	年齢	住所	資料番号
翁久允	53	大森区調布町鵜ノ木209	21
沖野岩三郎	45	小石川区宮下町58	11
	46		12
	47	下落合	13
	50	落合村下落合1510	16
	52	下落合1510	17
	53		18
	55	下落合151	19
	62	淀橋区下落合3-157	20
	65	小石川区宮下町58	21
荻原井泉水	28	麻布区新堀町3	7
	29		8
	34		9
	37		11
	38		12
	39	麻布区宮村町37	13
	40	麻布区新堀町3	14
	41		15
	42		16
	44		17
	45		18
	47	相州鎌倉町材木座光明寺上大聖閣	19
奥村博史	33	田端445	12
	34		13
小栗風葉	32	牛込区矢来町3 山里67号	3
	33		4
	35	記載なし	5
	35	牛込区矢来町3 山里67号	6
	37		7
	38		8
	43	豊橋市南新起(羽根井)	9
	46	豊橋市外花田村羽根井中郷	11
	47	豊橋市南新起 (羽根井)	12
	48		13
	49	豊橋市外花田村羽根井中郷	14
小栗虫太郎	37	世田谷区太子堂370	20
尾崎一雄	29	中高井戸町2	17
	30		18
	39	下谷区上野桜木町20	20
尾崎喜八	31	平塚村下蛇窪160	13
	39	京橋区四日市町5	19
	46	杉並区荻窪1-128	20
紅葉山人(尾崎徳太郎)	25	牛込区横寺町47	1
尾崎徳太郎	35	牛込区横寺町47	2
尾崎士郎	26	大森馬込村中井1578	14
	27		15
	28		16
	30		17
	31		18
	33	大森新井宿源蔵ヶ原2862	19
	40	品川区大井出石5069	20

人名	年齢	住所	資料番号
尾崎士郎	43	品川区大井出石町5069	21
小山内薫	26	浅草区須賀町2	3
	27		4
	29	浅草区瓦町28	5
	29	浅草区須賀町2	6
	31		7
	32		8
	37	麻布区森元町1-27は-3	9
	40	四谷区坂町5	11
	41		12
	42		13
	43	大阪市南区天王寺悲田院町1920	14
	44	四谷区南寺町7	15
	45		16
	47		17
大仏次郎	32	神奈川県鎌倉材木座	18
	34	神奈川県鎌倉町雪ノ下428	19
	41		20
	44	鎌倉市雪-下428	21
小沢愛圀	31	芝区白金三光町325	9
押川春浪	31	牛込区納戸町22	3
	32		4
	34		6
	36		7
	37		8
尾瀬敬止	37	板橋町35-原	16
	40	神奈川県北鎌倉円覚寺前	18
	42	相州鎌倉町円覚寺前	19
織田一磨	36	小石川区高田豊川町37	10
	40	小石川区高田豊川町58	12
	41		13
小田嶽夫	38	杉並区馬橋3-283	20
織田正信	38	目黒区三田46	21
落合浪雄	52	長崎町荒井1717	19
尾上柴舟	31	小石川区原町133	3
	32		4
	34		5
	34		6
	36		7
	37		8
	42	小石川区原町115	9
	45		11
	46		12
	47		13
	50		16
	55	小石川区白山御殿町127	19
	62	小石川区白山御殿山127	20
小野忠孝	33	蒲田区本蒲田3-15 蒲田ﾋﾞﾙ18室	21
小野浩	32	代々木山谷111	16
小野美智子	32	代々木初台479	12
	33		13
尾山篤二郎	29	巣鴨村池袋762	9
	33	本郷区動坂町120	12

人名	年齢	住所	資料番号
尾山篤二郎	34	日本橋区桧物町9 短歌雑誌社気付	13
	37	名古屋市東区新出来町2-50	16
	39	日本橋区桧物町紅玉堂内	17
	40		18
	42	日本橋区檜物町紅玉堂内	19
海音寺潮五郎	37	渋谷区代々木上原1215	20
	40		21
海賀変哲	36	麻布区霞町6	3
	37		4
	39		6
	41		7
	42		8
	47	麻布区霞町1	9
賀川豊彦	34	神戸市北本町6-220	12
	35		13
	53	世田谷区上北沢2-603	21
角田浩々歌客	38	大阪市外西成郡下三番	3
	39		4
	41		6
	43		7
	44		8
葛西善蔵	34	相州鎌倉山の内建長寺内宝珠院	11
	35	神奈川県鎌倉山建長寺	12
	36	内宝珠院方	13
	37	本郷区弓町西城館内	14
	38	世田ヶ谷三宿122	15
	39	世田ヶ谷三宿111	16
鹿島孝二	36	滝野川区滝川町410	21
鹿地亘	28	四谷新宿1-8 坂井ﾋﾞﾙ内戦旗社気付	19
片岡鉄兵	31	兵庫県武庫郡魚崎町川西荒川方	15
	32	雑司ヶ谷金山339	16
	34	落合町葛ヶ谷15	17
	35		18
	37	兵庫県阪急沿線夙川甲南荘	19
	44	杉並区荻窪2-99	20
	47	杉並区清水町124	21
片上伸	28	西大久保村340	7
	29		8
	34	e/o Jakanese Consulate General, Moscow, Russ'a. (留守宅)西大久保294	9
	37	西大久保312	11
	38		12
	39	西大久保217	13
	40	外遊中	14
	41	和歌山県日高郡御坊町島283	15
	42	巣鴨宮下1613	16
片山孤村	28	現に仙台第二高等学校教授	3
	29		4

人名	年齢	住所	資料番号
片山孤村	31	現に仙台第二高等学校教授	6
	33		7
	34		8
	39	京都市吉田町中大路22	9
	43	京都市吉田町中大路26	12
	44		13
勝本清一郎	29	田端609	17
	30	目下外遊中	18
	32	四谷区塩町1-13(目下独逸に遊学中。留守宅)	19
	39	四谷区塩町1-13	20
勝承夫	39	品川区南品川4-490	21
加藤朝鳥	32	淀橋角筈十二社	9
	35	小石川区白山前町4 光用気付	11
	36	南洋、瓜哇、ﾊﾟﾀﾋﾞﾔ	12
	37	高田町156	13
	40	玉川村瀬田1171	16
	42	上戸塚上ノ台697	17
	43		18
	45	玉川村瀬田1171	19
加藤介春	33	福岡市養巴町14	9
	37		12
	38	福岡市薬院東川端	13
	41		16
加藤一夫	31	中野町1729	9
	34	中野大塚1729	11
	35	中野町桐ヶ谷1030	12
	36		13
	38	吉祥寺2757	15
	39	武蔵野村吉祥寺2757	16
	41	神奈川県都築郡新治村中山大六天	17
	42	神奈川県都築郡新治村中山	18
	44	神奈川県都筑郡新治村大六天	19
	54	中野大塚1729	21
加藤籌子	29	豊橋市花田村字羽根井	7
	30	中郷	8
加藤武雄	30	牛込区矢来町3 旧殿17	9
	33	牛込区矢来町3	11
	34	牛込区矢来町3 旧殿17	12
	35		13
	36	牛込区矢来町1-48	14
	37	北多摩郡砧村喜多見台成城学園住宅地	15
	38	北多摩郡砧村喜多見台	16
	40	砧村喜多見台	17
	41		18
	43	砧村成城学園前	19
	50	世田谷区成城344	20
	53	牛込区矢来町3旧殿	21
加藤咄堂	42	四ッ谷山谷108	7
	43		8
加藤弘之	66	麹町区上二番町44	2
仮名垣魯文〔俗姓俗名を以て称す〕	63	京橋区新富町6-10	1

人名	年齢	住所	資料番号
金谷完治	40	麹町区九段2-3	21
金子薫園	31	本郷区湯島6-27	3
	34		5
	34	大久保村仲百人町316	6
	36	牛込区甲良町20	7
	37		8
	42	牛込区矢来町3 旧殿2	9
	45	牛込区矢来町3	11
	46	牛込区矢来町3 旧殿2号	12
	47		13
	48	高田町1371	14
	49		15
	50		16
	52		17
	53		18
	55		19
	62	杉並区神明町74	20
金子筑水	37	牛込区弁天町176	3
	38		4
	40		6
	42		7
	43		8
	48	牛込区新小川町3-1	9
	52	牛込区下宮比町9	12
	53		13
金子光晴	28	牛込区赤城元町11	13
	31		16
	33	杉並町高円寺609	17
	34	目下外遊中	18
金子洋文	29	代々木大山1044	13
	30	井荻村上荻窪648	14
	31		15
	32	上荻窪648	16
	34		17
	35		18
	37	井荻上荻窪648	19
	44	杉並区井荻町1-037	20
	47	杉並区井荻町1-67	21
加能作次郎	27	牛込区早稲田鶴巻町37 日進館方	7
	28		8
	33	牛込区南榎町57	9
	36		11
	37		12
	38		13
	39		14
	40	牛込区加賀町2-33	15
	41	牛込加賀町2-33	16
	43	牛込区市ヶ谷加賀町2-33	17
	44		18
	46	牛込区薬王寺町83	19
	56	牛込区南榎町57	21
上泉秀信	34	井荻町下井草1810	19
神近市子	43	落合町上落合469	19
	50	淀橋区上落合1-407	20
上司延貴	28	読売新聞社	2
上司小剣	33	荏原郡目黒村366	3

人名	年齢	住所	資料番号
上司小剣	34	荏原郡目黒村366	4
	36	荏原郡下目黒村552	5
	36	荏原郡目黒村366	6
	38		7
	39		8
	44	下目黒412	9
	47	下目黒村412	11
	48	下目黒412	12
	49		13
	50	下目黒村412	14
	51		15
	52	下目黒412	16
	54		17
	55	馬込町洗足3837	18
	57		19
	64	大森区北千束町619	20
	67	下目黒412	21
神谷鶴伴	33	日暮里村元金杉1100	3
	34		4
	36		6
	38		7
	39		8
加宮貴一	24	本郷区駒込千駄木町59	15
	25	本郷C駒込千駄木町59	16
	27	本郷区駒込千駄木町59	17
	28		18
	30	本郷区駒込千駄木59	19
	40	本郷区駒込千駄木町59	21
嘉村礒多	32	牛込区矢来町46 中村武羅夫氏方	18
	34	牛込区矢来町46 中村武羅夫方	19
亀井勝一郎	34	府下吉祥寺2761	21
亀屋原徳	43	世田谷区経堂849	21
茅原華山	37	今は、米国にあり	3
	38		4
	48	亜米利加に滞留中	9
	52	大井町1292	12
	53		13
河井酔茗	33	青山原宿209	3
	34		4
	36	赤坂区青山北町5-47	5
	36	青山原宿209	6
	38		7
	39		8
	44	雑司谷1144	9
	48	雑司ヶ谷上り屋敷1144	12
	49	相模平塚海岸	13
	52	神奈川県平塚町海岸栗本別荘	16
	54		17
	55	中目黒1480	18
	57		19
	64	目黒区中目黒4-1480	20
	67	目黒区中目黒2-580	21
川合仁	41	杉並区阿佐ヶ谷3-298	21
川上喜久子	37	鎌倉市浄明寺宅間谷	21
河上徹太郎	36	品川区五反田5-78-1	20
	39		21

人名	年齢	住所	資料番号
眉山人（川上 亮）	23	本郷区春木町2-4	1
川上眉山	38	牛込区矢来町47	3
	39		4
	41		6
川口松太郎	32	大阪市西成区南海道2-2	19
	39	目黒区中目黒1-1	20
	42		21
川崎長太郎	27	下戸塚525 法栄館内	17
	28		18
川崎備寛	37	本郷区菊坂町菊富士ホテル内	17
	38	南品川浅間台1501	18
	40		19
川島順平	38	渋谷区代々木原町1177	21
川島つゆ	49	渋谷区代々木富ヶ谷1374	21
川尻宝岑〔俗姓俗名を以て称す〕	50	日本橋区若松町12	1
川路柳虹	24	本郷区千駄木町57 受静館方	7
	25		8
	30	小石川区水道町46	9
	33	牛込区白銀町35	11
	34		12
	35	上落合581	13
	36		14
	37		15
	38		16
	40	相州鎌倉町阪-下22	17
	41	神奈川県鎌倉町材木座371	18
	43	神奈川県鎌倉町林木座371	19
	50	淀橋区上落合2-569	20
	53	牛込区白金町35	21
吉村繁俊	23	本所区南二葉町31	7
	24		8
	29		9
	33		12
	34		13
河竹繁俊	37	中渋谷宇田川850	16
	39		17
	40	中渋谷松寿54	18
	42	渋谷町松寿56	19
	52	世田谷区成城町485	21
古河黙阿弥（吉村新七）	76	本所区南二葉町31	1
川田順	42	兵庫県御影町掛田	14
	44	兵庫県御影町字掛田	16
	56		20
川端康成	25	本郷区千駄木町38 牧瀬方	14
	26		15
	27	神田今川小路1-4 金星堂気付	16

人名	年齢	住所	資料番号
川端康成	29	大森馬込小宿1390	17
	30	下谷区上野桜木町44	18
	32	下谷区上野桜木町49	19
	39	神奈川県鎌倉町二階堂325	20
	42	鎌倉市二階堂325	21
川端龍子	33	大森新井宿1395	10
河東碧梧桐	34	目下全国行脚中	3
	35		4
	37		6
	39		7
	40		8
	45	下谷区上根岸町74	9
	49	摂津国芦屋海岸	12
	50	四谷加賀町9	13
	58	牛込区加賀町1-9	19
川村花菱	47	幡ヶ谷旗洗池	19
	57	渋谷区幡ヶ谷本町1-10	21
河盛好蔵	39	杉並区天沼2-400	21
神崎武雄	35	牛込区矢来町46	21
神田乃武	45	麹町区飯田町3-29	2
蒲原有明	31	麹町区隼町8	3
	32		4
	34		5
	34		6
	36		7
	37		8
	42	中野町字大塚1782	9
	46	神奈川県鎌倉町二階堂325	12
	47		13
	55	静岡市鷹匠町2-4	19
	62		20
木々高太郎	41	渋谷区竹下町12 林方	20
	44	目黒区上目黒5-2537	21
菊田一夫	33	目黒区自由ヶ丘78	21
菊池寛	30	京橋区時事新報社内	9
	33	小石川区中富坂7	11
	34	小石川区中富坂町7	12
	35		13
	36	高田雑司ヶ谷金山339	14
	37		15
	38	麹町区下六番町	16
	40	麹町区内幸町大阪ﾋﾞﾙ内 文藝春秋社	17
	41	麹町区内幸町 大阪ﾋﾞﾙ内 文藝春秋社	18
	43	麹町区内幸町 大阪ﾋﾞﾙ文藝春秋社内	19
	50	豊島区雑司ヶ谷1-392	20
	53	小石川区中富坂4	21
菊池大麓	47	麹町区永田町文部大臣官舎	2
菊池幽芳	37	大阪北区中ノ島2	3
	38		4
	40		6
	42		7
	43		8
	48	摂津西宮町夙川	9

人名	年齢	住所	資料番号
菊池幽芳	52	兵庫県武庫郡芦屋字平田	12
	53		13
	61	兵庫県武庫郡本山村森	19
	71	兵庫県武庫郡本山村字森	21
木崎好尚	42	大阪北区中ノ島宗是町	3
	43		4
	45		6
岸上質軒	47	本郷区湯島天神町1-67	3
岸田國士	35	杉並町天沼50	15
	36	阿佐ヶ谷477	16
	38	松沢村上北沢1175	17
	39	杉並町天沼426	18
	41	杉並町天沼山下426	19
	48	杉並区松庵南町20	20
	51		21
岸田劉生	27	神奈川県鵠沼海岸松本別荘内	10
	31	神奈川県鵠沼海岸松本別荘第四号	12
	32		13
貴司山治	32	吉祥寺534	19
	42	府下吉祥寺町534	21
木蘇穀	31	碑衾村衾鉄飛125	14
	32		15
	33	碑衾村衾125	16
	35	碑衾町衾125	17
	36		18
	38	碑衾町鉄飛125	19
北尾亀男	33	赤坂区新町5-33	15
	34		16
	36		17
	37		18
	39		19
	49	麻布区谷町4	21
北川千代	37	入新井町新井宿新田338 高野研究所内	19
北林透馬	34	横浜市中区石川町5-191	20
	37		21
北原白秋	23	大阪府東区天王寺堂芝町5625-9	4
	25	牛込区神楽町2-22	5
	25	大阪府東区天王寺堂芝町5625-9	6
	27		7
	28		8
	33	本郷区動坂町364	9
	36	相州小田原町十字2-325	11
	37	相模国小田原十字2 伝肇寺内	12
	38	相模国小田原天神山	13
	39	相州小田原町十字2-325	14
	40		15
	41	相州小田原十字町天神山	16
	43	世田ヶ谷町若林237	17
	44		18
	46	世田ヶ谷若林237	19
	53	世田谷区成城19	20

人名	年齢	住所	資料番号
北村喜八	31	本郷区千駄木町47	18
	33	本郷区千駄木町48	19
	43	本郷区駒込千駄木町48	21
北村小松	27	矢口町小林229	17
	28		18
	30	矢口町蓮沼127	19
	37	大森区南千束町140	20
	40		21
喜多村進	42	世田ヶ谷太子堂本村107	19
北村寿夫	34	砧村成城学園前	18
	36		19
	46	杉並区下高井戸4-944	21
木下尚江	38	上州伊香保	3
	39		4
	41		6
	43		7
	44		8
木下杢太郎	27	本郷区動坂町358	7
	28		8
	33	奉天新市街四六条	9
	37	奉天新市街平町10	12
	38	在仏	13
	41	名古屋市東区武平町2-16	16
	43	仙台市光禅寺通4	17
	44		18
	46		19
	53	仙台市市ヶ坂6	20
木下利玄	32	淀橋柏木404	9
	36	神奈川県鎌倉町大町名越1337	12
	37		13
木村毅	28	千葉県市川町市川新田	12
	29		13
	31	西大久保203	15
	32		16
	34	西大久保203(外遊中。留守宅)	17
	35	西大久保203	18
	37	西大久保47	19
	44	淀橋区戸塚町4-691	20
	47		21
木村庄三郎	26	芝区高輪南町30	17
	27		18
	29		19
木村小舟	26	下谷区中根岸町94	3
	27		4
	29		6
	31		7
	32		8
木村荘八	25	本郷区森川町１仲通り287	10
	29	本郷区森川町１仲通287	12
	30		13
木村荘太	29	大崎町桐ヶ谷741	9
	33	山中大井町4357	12
	34		13
木村鷹太郎	37	淀橋町柏木309	3

人名	年齢	住所	資料番号
木村鷹太郎	38	淀橋町柏木309	4
	40		6
	42		7
	43		8
	48		9
	52	戸塚町字諏訪179	12
	53		13
木村富子	41	浅草千束町2-423	19
	51	浅草区千束町2-423	21
木村幹	42	巣鴨町巣鴨1072	19
清沢洌	51	大森区調布嶺町2-921	21
清見陸郎	26	本郷区湯島両門町1 谷中屋方	7
	27		8
	45	巣鴨町3-26	19
桐生悠々	34	大阪府東区天王寺堂芝町5625-9	3
	35		4
	37		6
陸実	45	下谷区上根岸町86	2
陸羯南	50	下谷区上根岸町16	3
陸直次郎	40	豊島区雑司ヶ谷1-63	20
	43	豊島区雑司ヶ谷町1-63	21
草野貞之	41	赤坂区青山南町3-60	21
草野柴二	32	新潟県新発田泉町5	3
	33		4
	35	淀橋町柏木92	5
	35	新潟県新発田泉町5	6
	37		7
	38		8
	43	埼玉県熊谷町仲町361	9
	47	名古屋市東区東外堀町2-4	12
	48		13
草村北星	28	小石川区表町09	3
	29		4
	31		6
	33		7
	34		8
楠田敏郎	41	牛込市ヶ谷河田町11	19
楠山正雄	26	牛込区新小川町3-22	6
	28	牛込区西五軒町41	7
	29		8
	34	四谷区舟町20	9
	37		11
	38		12
	39		13
	40	麻布区材木町30	14
	41	麻布区霞町19	15
	42		16
	44		17
	45		18
	47	麻布区霞町19-3	19
久津見蕨村	52	日暮里村元金杉134	7
	53		8
	58	小石川区宮下町22	9
	62		12
	63		13
邦枝完二	30	麹町区隼町5	12
	31		13
	32	大久保百人町301	14

人名	年齢	住所	資料番号
邦枝完二	34	大久保百人町301	16
	36		17
	37		18
	39	麹町区平河町4-7	19
	46	麹町区二番町2-4	20
	49	麹町区二番町2	21
国枝史郎	42	愛知県知多郡新舞子碧翠園	18
	44	愛知県知多郡新舞子碧翠園8号地	19
	54	大森区新井宿2　栄楽荘	21
国木田独歩	36	芝区桜田本郷町17	3
	37		4
国木田虎雄	23	相州鵠沼海岸中屋別荘	15
国木田治子	31	赤坂区田町7-1	6
久野豊彦	32	愛知県知多郡大野町洞仙寺境内	17
	33	芝区白金三光町307	18
	35	杉並町阿佐ヶ谷547	19
窪川鶴次郎	38	淀橋区戸塚町4-575	21
窪田空穂	30	牛込区榎町1	3
	31		4
	33	牛込区南榎町15	5
	33	牛込区榎町1	6
	35		7
	36		8
	41	高田村雑司ヶ谷471	9
	44	小石川区雑司ヶ谷町88	11
	45	雑司ヶ谷亀原4	12
	46		13
	47	小石川区雑司ヶ谷町88	14
	48		15
	49	小石川区雑司ヶ谷88	16
	51		17
	52		18
	54		19
	61	小石川区雑司ヶ谷町88	20
久保田万太郎	23	浅草区田原町3-10	7
	24		8
	29	浅草区駒形町61	9
	32	浅草区北三筋町14	11
	33		12
	34		13
	35	日暮里渡邊町筑波台	14
	36		15
	37	日暮里渡邊町筑波台1032	16
	39	日暮里町1089	17
	40		18
	42		19
	49	芝区三田小山町6	20
	52	浅草区駒形14	21
久保天随	32	巣鴨町上駒込13	3
	33		4
	35		6
	37		7
	38		8

人名	年齢	住所	資料番号
久保天随	43	巣鴨町上駒込14	9
熊谷守一	38	日暮里渡辺町 三河屋方	10
	42	日暮里渡邊町 三河屋方	12
	43		13
久米桂一郎	52	荏原郡大崎町上大崎631	10
	56		12
	57		13
久米正雄	27	本郷区本郷5-21 荒井方	9
	30	本郷区本郷5-43	11
	31	本郷区本郷5-30	12
	32		13
	33		14
	34	相州鎌倉大町蔵屋敷	15
	35		16
	37	相州鎌倉町雪の下406	17
	38	神奈川県鎌倉町雪の下406	18
	40	神奈川県鎌倉塔の辻206	19
	47	鎌倉町二階堂	20
	50	本郷区本郷5-43	21
倉島竹二郎	39	豊島区駒込4-15	21
倉田白羊	37	千葉県北条町	10
	41	千葉県北条町六軒町	12
	42		13
倉田百三	33	大森子母沢1038	14
	34	大森子田沢1038	15
	35	神奈川県藤沢町612	16
	37	神奈川県藤沢町元町556	17
	38		18
	40	牛込区柳町22	19
	47	大森区新井宿4-11089	20
	50	大森区新井宿4-1109	21
蔵原惟人	26	芝区芝公園十二号地4	17
	27	芝公園十二号地4	18
	29	芝区芝公園12-4	19
九里四郎	32	四谷区舟町12	9
	36		12
	37		13
栗原古城	26	本郷区弥生町3-と9 渡辺方	4
	28	本郷区弥生町3-ほ16	6
	30		7
	31		8
	36		9
	40		12
	41		13
厨川白村	38	京都市二条通川東疏水西へ入る	9
	41	京都市岡崎町広道下南御所町40	11
	42	京都市岡崎町広道南御所町40	12
	43		13
涙香小史（黒岩周六）	30	麹町内幸町1-5	1

人名	年齢	住所	資料番号
黒岩涙香	45	麻布区笄町174	3
	46		4
	48		6
	50		7
	51		8
	56		9
黒島伝治	30	中野町3512	17
	31	杉並町高円寺493	18
	33	高円寺456	19
	43	香川県小豆郡苗羽村	21
黒田湖山	29	千駄ヶ谷村隠田4	3
	30		4
	32		6
	34		7
	35		8
	40	代々木南山谷295	9
黒田重太郎	35	京都市上京区下鴨泉川町4	12
	36		13
黒田清輝	44	麹町区平河町6	5
	52	麹町区平河町6-14	10
	56		12
	57		13
黒田鵬心	27	下谷区谷中清水町17	7
	28		8
	33	赤坂区青山北町7-2	9
	37	青山北町7-2	12
	38		13
畔柳芥舟	36	本郷区西片町10-に31	3
	37		4
	39		6
桑木厳翼	33	京都府愛宕郡下鴨村22	3
	34		4
	36		6
	44	牛込区北町34	9
	48		12
	49		13
群司次郎正	26	京橋区築地3 世界の動き社	19
古泉千樫	32	赤坂区青山南町6-108	9
	36		12
	37		13
小泉鉄	35	下渋谷372	11
	36	下渋谷373	12
	37		13
小出楢重	35	大阪市南区鍛冶屋町50	12
	36	大阪市南区鍛治屋町50	13
小絲源太郎	31	下谷区上野元黒門町20 書室、日暮里谷町中本992	10
甲賀三郎	36	渋谷町栄通1-43	18
	38		19
	45	渋谷区栄通1-43	20
	48	渋谷区北谷町38	21
郷田恵	36	兵庫県川辺郡伊丹市忠田町326-18	21
露伴子（幸田成行）	25	下谷区谷中村145	1
幸田露伴	40	寺島町1716	3

人名	年齢	住所	資料番号
幸田露伴	41	寺島町1716	4
	43	本所区向島寺島村	5
	43	寺島町1716	6
	45		7
	46		8
	51	向島寺島村1736	9
	54	下向島村1736	11
	55	向島寺島村1736	12
	56		13
	59	小石川区表町34	16
	61	小石川区表町66	17
	62	小石川区表町79	18
	64	小石川区表町66	19
	74	小石川区表町79	21
幸堂得知（鈴木利平）	49	下谷区上野広小路町13	1
幸堂得知	64	下谷区上根岸町122	3
	65		4
幸徳秋水	36	大久保村百人町84	3
	37		4
	39		6
河野桐谷	33	高田村36	7
	34		8
	39	牛込区下戸塚町7	9
河野義博	41	山梨県東山梨郡加納岩村	19
	51	山梨県東山梨郡加納岩町	21
萱野二十一〔郡虎彦〕	28	海外留学中	9
	32	目下海外留学中	12
	33		13
小金井君子〔俗姓俗名を以て称す〕	22	本郷区駒込千駄木町21	1
小金井喜美子	37	本郷区駒込曙町16	3
	38		4
	42		7
	43		8
国府犀東	34	浅草区橋場町158	3
	35		4
	37		6
	39		7
	40		8
国分青厓	81	渋谷区代々木山谷185	20
木暮亮	45	淀橋区下落合1-438	21
小酒井不木	36	名古屋市中区御器所町北丸屋82	16
	38		17
小島烏水	34	横浜市西戸部896	3
	35		4
	37	横浜市西戸部町898	5
	37	横浜市西戸部896	6
	39		7
	40		8
	45	横浜正金銀行桑港支店内	9
	49		12
	50		13

人名	年齢	住所	資料番号
児島喜久雄	51	豊島区目白3-3553	20
小島勗	29	幡ヶ谷750	18
	31	本郷区弓町1-26 大成館	19
小島徳弥	26	下戸塚656	14
	28	下戸塚626	16
	30		17
	31	戸塚626	18
	33	下戸塚626	19
	43	目黒区原町1213	21
小島政二郎	28	下谷区下谷町1-5	12
	29		13
	30	下谷区上根岸町111	14
	31		15
	32		16
	34		17
	35		18
	37	神奈川県鎌倉町塔の辻156	19
	44	大森区新井宿1-2310	20
	47		21
小杉天外	43	相州小田原	4
	45	芝区白金台町1-10	5
	45		6
	47	芝区君塚町	7
	48		8
	53	芝区白金三光町460	9
	64		18
	66	神奈川県逗子町桜山	19
小杉未醒	37	北豊島郡滝野川村田端155	10
児玉花外	33	小石川区音羽町6-30	3
	34		4
	36		6
	38		7
	39		8
	44	牛込区納戸町3 鈴木方	9
尾島菊子	33	赤坂区仲の町5	7
	34		8
	39	大久保百人町329	9
小寺菊子	43	大久保百人町329	12
	44		13
	52		19
	62	淀橋区百人町3-329	21
小寺健吉	31	大久保百人町329	10
	35		12
	36		13
小寺融吉	31	中野町上ノ原760	16
	36	中野上ノ原760	19
	46	淀橋区百人町3-373	21
後藤末雄	32	本郷区弥生町3は-3	9
	36	本郷区弥生町3 は-3号	12
	37		13
後藤宙外	41	岩代国摩耶郡三ツ和局	3
	42	区戸口	4
	44	芝区二本榎町1-19	5
	44	岩代国摩耶郡三ツ和局	6
	46	区戸口	7

人名	年齢	住所	資料番号
後藤宙外	47	岩代国摩耶郡三ツ和局区戸口	8
	52	秋田県仙北郡六郷町大町28	9
小林鍾吉	41	507五〇七	10
	45	中野町上野原962	12
	46		13
小林多喜二	26	小樽市若竹町18	18
	28		19
小林徳三郎	34	芝区白金今里町25	10
	38		12
	39		13
小林秀雄	36	神奈川県鎌倉町扇ヶ谷403	20
	39	鎌倉市扇ヶ谷403	21
小林愛雄	29	本郷区湯島6-10	6
	31	本郷区弥生町3-ほ20	7
	32		8
	37	本郷区向岡弥生町3は-7	9
	41	本郷区向岡弥生町3 は	12
	42	-7号	13
小堀甚二	27	中野西町3598	17
	28	杉並町高円寺667	18
	30	杉並高円寺667	19
小牧近江	32	鎌倉砂子坂	16
	34	相州鎌倉町砂子坂	17
	35	神奈川県鎌倉町稲村ヶ	18
	37	崎	19
小松清	41	杉並区井荻1-118	21
小宮豊隆	28	本郷区森川町1 宮裏	7
	29	柳瀬方	8
	34	赤坂区青山南町6-108	9
	37		11
	38		12
	39		13
	42	仙台市東北帝国大学文	16
	44	学部気付	17
	45	仙台市東北帝国大学部気付	18
	47	仙台市北二番町	19
	54	仙台市北二番町68	20
小宮山明敏	27	世田ヶ谷町若林28	18
	29		19
即真居士又号 天香外史・桂花散人（小宮山桂介）	37	赤坂区氷川町27	1
小山いと子	40	豊橋市旭町356 池本恭児方	21
古屋芳雄	36	山梨県東山梨郡加納岩村	16
近藤経一	24	神田区南甲賀町10	11
	25		12
	26		13
	27	四谷区塩町1-3	14
	28		15

人名	年齢	住所	資料番号
近藤経一	29	四谷区塩町1-16	16
	31	麻布区笄町26	17
	32		18
	34		19
近藤元	22	千葉県安房郡岩井村高崎	7
	23		8
今東光	27	牛込区白銀町27 草間方	15
	28	本郷西片町10 ろ-6号	16
	30	本郷区西片町10 ろ-6号	17
	31	本郷区西片町10 ろ-6	18
	33	本郷西片町10-6	19
近藤浩一路	38	本郷区温島新花町103	12
	39	本郷区湯島新花町103	13
今日出海	35	渋谷区金王42	20
	38		21
西条八十	26	神田区神保町3	9
	30	小石川区駕籠町46	12
	31	淀橋町柏木433	13
	32	外遊中仏国巴里日本大使館気付	14
	33		15
	34	淀橋町柏木433	16
	36		17
	37		18
	39		19
	46	淀橋区柏木3-377	20
	49	淀橋区柏木3-337	21
斎藤五百枝	37	巣鴨2231	10
斎藤弔花	30	東京日々新聞	3
	31		4
	33		6
	41	大阪府泉北郡浜寺公園	9
斎藤茂吉	36	長野市 県立長野病院精神病科内	9
	40	長崎市東中町54	12
	41		13
	43	赤阪町青山南町5-81	15
	44	青山南町5-81 青山脳病院	16
	46		17
	47	青山南町5-81	18
	49	赤坂区青山南町5-81	19
	56	赤坂区南青山町5-81	20
	59	赤坂区青山南町5-81	21
斎藤与里	33	小石川区雑司ヶ谷町91	10
	37	大阪市外天王寺村1075	12
	38		13
斎藤龍太郎	32	長崎町大和田2021	17
	33		18
	35		19
	45	豊島区椎名町3-2008	21
正直正太夫（齋藤賢）	25	本所区緑町3-43	1
酒井朝彦	47	中野区野方町1-610	21
阪井久良岐	39	麹町区富士見町6-10	4
	41		6
	43		7
	44		8

人名	年齢	住所	資料番号
堺利彦	36	淀橋町字柏木3-4-3	3
	37	淀橋町字柏木343	4
	39	目下千葉監獄に入獄中	6
	41	四谷区左門町13	7
	42		8
堺枯川	47	麹町区麹町8-24 事務所、麹町区有楽町1-4 売文社	9
堺利彦	50	麹町区麹町8-24	11
	51		12
	52		13
酒井真人	33	小石川区音羽町2-20	19
榊山潤	38	小石川区大塚窪町24ろ-3	20
	41	小石川区大塚窪町24-へ-3	21
坂崎坦	54	淀橋区西大久保町2-201	21
阪中正夫	30	杉並町阿佐ヶ谷606	19
嵯峨のやおむろ 又号北邙散士（矢崎鎮四郎）	29	赤坂区丹後町36	1
矢崎嵯峨の屋	55	西大久保273	9
	59		12
	60		13
坂本紅蓮洞	56	牛込区弁天町6-7	12
	57		13
坂元雪鳥	39	本郷区駒込林町218	9
坂本繁二郎	36	池袋大原1429	10
	40	西巣鴨町池袋大原1378	12
阪本繁二郎	41	西巣鴨町池袋大原1378	13
崎山猷逸	27	杉並町天沼379	17
	28		18
桜井鷗村	35	麹町区四番町83	3
	36		4
桜井忠温	59	世田谷区砧町喜多見台415	20
桜井天壇	28	本郷区森川町1牛屋横町54	3
	29		4
	31		6
	33		7
	34		8
	39	名古屋市熱田東町玉の井	9
	43		12
	44		13
桜田常久	44	府下南多摩郡町田町本町1739	21
笹川臨風	37	宇都宮字鶴田	3
	38		4
	40		6
	42		7
	43		8
	48	本郷区西片町10-44	9
	52		12
	53		13
佐々木邦	48	渋谷町豊分1	19

人名	年齢	住所	資料番号
佐々木邦	55	渋谷区豊分町1	20
	58		21
佐々木孝丸	31	上落合189	18
	33	麹町区隼町11	19
佐佐木千之	23	世田ヶ谷三宿385	15
	24	世田ヶ谷町三宿385	16
	26	駒沢新町136	17
	27		18
	29		19
佐左木俊郎	26	北多摩郡砧村喜多見台	16
	28	千歳村下祖師ヶ谷	17
	29		18
	31		19
佐佐木信綱	35	神田区小川町1	3
	36		4
	38		5
	38		6
	40		7
	41		8
	46	本郷区西片町10い-16	9
	50	本郷区西片町10 い-16	12
	51	号	13
	54	本郷区西片町10	16
	56	本郷区西片町10 いの1	17
	57	6	18
	59	本郷区西片町10い16	19
	66	本郷区西片町10	20
ささきふさ	32	佐佐木茂索方	18
	34	麹町区紀尾井町3	19
佐々木味津三	28	中野町3300	14
	29		15
	30		16
	32	杉並町高円寺東原659	17
	33		18
	35	杉並町高円寺659	19
佐佐木茂索	28	牛込区天神町13	12
	29		13
	30	牛込区弁天町13	14
	31	中目黒990	15
	32		16
	34	相州鎌倉扇谷寿福寺内	17
	35	神奈川県鎌倉扇谷寿福寺内	18
	37	麹町区紀尾井町3	19
	47	麹町区平河町2-15	21
笹本寅	39	府下小金井町1392	21
窪川稲子	34	淀橋区戸塚町4-593	20
佐々醒雪	35	日暮里村元金杉151	3
	36		4
	38	小石川大塚窪町24	5
	38	日暮里村元金杉151	6
	40		7
	41		8
佐藤紅緑	33	小石川区音羽町9-18	3
	34		4
	36	小石川区茗荷谷町52	5
	36	小石川区小日向茗荷谷町52	6

人名	年齢	住所	資料番号
佐藤紅緑	38	小石川区茗荷谷町52	7
	39		8
	44		9
	48	大阪市外住吉公園	12
	49		13
	54	兵庫県武庫郡鳴尾村字西畑	17
	55		18
	57	兵庫県武庫郡鳴尾村西畑	19
	64	兵庫県武庫郡鳴尾村西畑2-2	20
佐藤惣之助	34	神奈川県川崎町砂子	14
	35		15
	36	神奈川県川崎町砂子2-26	16
	38	神奈川県川崎市砂子1-26	17
	39		18
	41	川崎市砂子1-26	19
	48	大森区雪ヶ谷686	20
	51	大森区雪谷403	21
佐藤信衛	36	鎌倉市極楽寺姥谷	21
サトウハチロー	26	西巣鴨堀ノ内987	18
	28		19
	35	本郷区弥生町2,は-18	20
	38	本郷区弥生町2-は-18	21
佐藤春夫	26	住所不定。自ら云う『身を雲煙の安きに置けり』と。	9
	29	上目黒氷川593	11
	30	和歌山県新宮町	12
	31	上目黒氷川593	13
	32	四谷区西信濃町2	14
	33	和歌山県新宮町徐福町	15
	34	小石川区音羽町9-18	16
	36	小石川区関口町207	17
	37		18
	39		19
	46		20
佐藤緑葉	26	下渋谷570	7
	27		8
	32	牛込区原町3-28	9
	36	牛込区原町3-25	12
	37		13
里見弴	30	麹町区山元町1-7	9
	33	四谷区右京町13	11
	34		12
	35		13
	36	麹町区下六番町10	14
	37		15
	38	相州鎌倉大町蔵屋敷	16
	40	相州鎌倉町西御門65	17
	41	神奈川県鎌倉町西御門65	18
	43	神奈川県鎌倉町西御門65 麹町区下六番町10	19
	50	神奈川県鎌倉町雪ノ下大倉	20
	53	四谷区右京町13	21

人名	年齢	住所	資料番号
里村欣三	26	杉並町高円寺611	17
	27		18
	29	杉並町高円寺608	19
佐野天声	30	記載なし	3
	31	上総国市原郡八幡町	4
	33	大阪に滞在中	5
	33	記載なし	6
	35	駿河国富士郡大宮町	7
	36		8
寒川鼠骨	34	下谷区上根岸町41	4
	36		6
	38	下谷区上根岸町38	7
	39		8
沢村胡夷	26	京橋区築地2-30	6
山宮允	26	四谷区北伊賀町17	9
	30	岡山市内山下石山10	12
	31		13
	49	目黒区芳窪町914	21
塩井雨江	38	北豊島郡高田村大字雑司ヶ谷328	3
	39		4
塩田良平	42	杉並区和田本町1027	21
潮山長三	39	野方上沼袋205	19
志賀矧川	45	赤坂区霊南坂町34	4
	47		6
	49		7
	50		8
志賀直哉	29	赤坂区三河台町27	7
	30		8
	35	千葉県我孫子町弁天山	9
	38		11
	39		12
	40		13
	41	京都市外山科村大字竹鼻字立原	14
	42	奈良市幸町	15
	43	京都市外山科村大字竹鼻字立原	16
	45	奈良市幸町	17
	46	奈良市上高畑	18
	48		19
式場隆三郎	43	市川氏国分寺字新山国府台病院	21
繁野天来	34	愛知県三河国岡崎連尺小学校前	4
岩田豊雄〔獅子文六〕	36	和田堀町和泉50	18
	38	中野町雑色617	19
	48	渋谷区千駄ヶ谷2-474	21
柴田勝衛	30	中渋谷17	9
	33		11
	34		12
	35		13
	36		14
	38		16
	40		17
	41		18
	43	渋谷町金王37	19
柴田流星	28	麹町区永田町2-28	3
	29		4

人名	年齢	住所	資料番号
柴田流星	31	麹町区永田町2-28	6
	33		7
	34		8
渋川驍	36	杉並区成宗1-95	21
渋沢秀雄	49	大森区田園調布3-57	21
島木赤彦	42	雑司ヶ谷亀原五	9
	46	麹町区下六番町27 佐々木方	12
	47		13
	48	麹町区下六番町20 佐々木方	14
	49		15
島木健作	38	鎌倉市扇ヶ谷441	21
島崎藤村	35	浅草区新片町1	3
	36		4
	38		5
	38		6
	40		7
	41		8
	46	芝区桜川町2 若林方	9
	49	麻布区飯倉片町33	11
	50		12
	51		13
	52		14
	53		15
	54		16
	56		17
	57		18
	59		19
	66	麹町区六番町13-10	20
	69		21
島田三郎	55	麹町区六番町31	3
	56		4
島田清次郎	22	新潮社気付	11
	23	本郷区千駄木町開盛館	12
	24	新潮社気付	13
島田青峰	44	牛込区若松町81	16
	46		17
	47		18
	49	牛込区若松町82	19
島村民蔵	24	神田区岩本町5	7
	25		8
	30	高田村元巣鴨3568	9
	34	牛込区早稲田町55	12
	35		13
	38		16
	40		17
	41		18
	43		19
島村荼三	28	小石川区大塚町69	7
	29		8
島村滝太郎	31	牛込区納戸町	2
島村抱月	36	牛込区薬王寺前町20	3
	37		4
	39		5
	39		6
	41		7
	42		8
	47	牛込区横寺町 芸術倶楽部内	9

人名	年齢	住所	資料番号
清水良雄	27	本郷区西片町10は-18	9
	31	本郷区西片町10 は-18	12
	32	号	13
子母沢寛	49	大森区山王1-2611	21
下田歌子	48	麹町区永田町1-6	2
	53		3
	54		4
霜田史光	33	雑司ヶ谷東通608	18
	35	本郷区森川町124 竜生館	19
下中弥三郎	24	兵庫県神戸市葺合郡生田町3-1	2
下村為山	53	小石川区白山御殿町127	10
下村悦夫	35	和歌山県新宮川	18
	37	和歌山県新宮町	19
下村海南	66	大森区田園調布2-22-2	21
下村観山	37	常陸国五浦	5
下村千秋	33	杉並町阿佐ヶ谷842	16
	35		17
	36		18
	38	西荻窪881	19
	45	杉並区山王1-2611	20
	48	杉並区阿佐ヶ谷6-166	21
十一谷義三郎	28	本郷区弥生町30 ト-47森方	15
	29	本郷区弥生町三と-47	16
	31	本郷区駒込曙町2-10	17
	32	本郷区駒込千駄木町50	18
	34		19
十菱愛彦	34	杉並町高円寺609	19
採菊散人（条野伝平）	60	神田区猿楽町15	1
白井喬二	37	中野町朝日ヶ丘	16
	39		17
	40	砧村喜多見台	18
	42	中野町朝日ヶ丘	19
	49	世田谷区代田1-763	20
	52	世田谷区下馬2-1091	21
白石実三	26	水戸工兵第十四大大隊	7
	27	第三中隊	8
	32	代々木初台540	9
	35	代々木初台534	11
	36		12
	37		13
	40		16
	45		19
白河鯉洋	33	南京江南高等学堂にあり	3
	34		4
	36		6
	38		7
	39		8
素木しづ	23	神奈川県小田原早川かめや旅館内	9
白滝幾之助	45	大森町字山王2810	10
	49		12
	50		13

人名	年齢	住所	資料番号
白柳秀湖	24	目黒村大字下目黒366	4
	26	目黒村大字下目黒731	6
	28	目黒731	7
	29		8
	34	芝区伊皿子町42	9
	38	大井町滝王寺4503	12
	39		13
	54	品川区大井滝王子4503	20
白鳥省吾	28	小石川区高田老松町28 老松館方	9
	31	雑司ヶ谷亀原57 黒瀬邸内	11
	32	雑司ヶ亀原57 黒瀬邸内	12
	33	雑司ヶ谷亀原57 黒瀬邸内	13
	34	雑司ヶ谷亀原59	14
	35		15
	36		16
	38	雑司ヶ谷亀原61	17
	39		18
	41	高田町雑司ヶ谷亀原61	19
	48	小石川区高田豊川町42	20
	51	雑司ヶ谷亀原57 黒瀬邸	21
新庄嘉章	37	中野区鷺宮1-170	21
新城和一	27	滝の川町西ヶ原67	9
	31	代々木山谷96	12
	32		13
新村出	26	本郷区駒込曙町15	2
吹田順助	35	鹿児島市清水町163	9
	39	山形市新築仲通	12
	40		13
鉄腸居士（末広重恭）	43	芝区琴平町3	1
末松謙澄	52	芝区西久保城山町4	3
	53		4
菅忠雄	26	千駄ヶ谷原宿271	15
	29	相州鎌倉裏停車場前	17
	30	神奈川県鎌倉裏停車場前	18
	32	神奈川県逗子町久木白山	19
	42	鎌倉市二階堂大塔宮裏	21
菅原寛	39	京橋区木挽町1-14	19
杉浦翠子	53	渋谷区伊達町17	20
杉浦非水	42	下渋谷伊達跡1855	10
杉谷代水	34	相模国逗子亀井	4
	36		6
	38	相模国逗子桜山	7
	39		8
杉捷夫	37	豊島区長崎2-33	21
杉敏介	30	麹町区富士見町松葉館	2
杉村楚人冠	40	荏原郡入新井村新井宿	7
	41		8
	46	荏原郡入新井宿	9
	50		12

人名	年齢	住所	資料番号
杉村楚人冠	51	荏原郡入新井宿	13
杉森孝次郎	41	代々木新町11	12
	42		13
杉山平助	43	目黒区緑ヶ丘2301	20
	46		21
鈴木悦	26	大久保村59	7
	27		8
	32	京橋区滝山町 東京朝日新聞社内	9
鈴木氏亨	43	高田町大原1592	17
	44		18
	46	高田町巣鴨代地3531	19
	56	豊島区池袋2-1166	21
鈴木泉三郎	31	神奈川県大磯町小千口方	14
鈴木善太郎	38	北品川一本木345	12
	39		13
	42		16
	44	北品川一本木1345	17
	45		18
	47	北品川一本木345	19
	57		21
薄田泣菫	30	京都市寺松通り鞍馬下る高徳寺町	3
	31		4
	33	京都市上京区下長者町室町通	5
	33	京都市寺松通り鞍馬下る高徳寺町	6
	35		7
	36		8
	41	兵庫県西宮町夙川尻	9
	45		12
	46		13
	52	兵庫県西宮市分銅23	18
	54		19
	61	西宮市分銅町23	20
鈴木天眼	40	永崎にあり	3
	41		4
	43		6
鈴木彦次郎	30	大森谷中785	17
	31		18
	33	大森山王2558	19
	43	大森区入新井6-93	21
鈴木三重吉	26	本郷区森川町1 柳瀬方	4
	28	千葉県成田町字谷津	6
	30	赤坂区青山南町4-22	7
	31		8
	36	高田村上り屋敷3559	9
	39	目白上り屋敷	11
	40	高田上り屋敷3559	12
	41		13
	44	高田町上り屋敷3572	16
	46	高田町上り屋敷3559	17
	47		18
	49	西大久保4611	19
須藤鐘一	32	大井町4732	9
	35	大井町4484	11
	36	日本橋区本石町博文館編輯部	12
	37		13

人名	年齢	住所	資料番号
須藤鐘一	38	大井町4484	14
	40		16
	42		17
	43		18
	45		19
	55		21
南翠外史（須藤光暉）	35	京橋区築地1-3	1
須藤南翠	50	記載なし	3
	51		4
	53		6
	55		7
	56		8
	61	赤坂区槍町6	9
陶山務	46	世田谷区世田谷町1-254	21
陶山篤太郎	36	川崎市砂子町1-56	19
諏訪三郎	29	西巣鴨堀之内176	15
	32	西巣鴨町堀ノ内176	17
	33		18
	35	千葉県市川町平田217	19
	45	小石川区大塚坂下町72	21
関口次郎	45	渋谷区幡ヶ谷本町2-336	20
	48		21
関根正直	47	本郷区守川町1	3
	48		4
瀬戸英一	39	大森入新井町山王2778	19
瀬戸義直	29	田端70	9
瀬沼夏葉	32	神田区駿河台北甲賀町12	3
	33		4
	35	神田駿河台甲賀町12	5
	35	神田区駿河台北甲賀町12	6
	37		7
	38		8
芹沢光治良	41	中野区小滝町52	20
	44		21
千家元麿	33	池袋下り谷132-2	11
	34		12
	35		13
	36	大井町滝王寺4480	14
	37	長崎村北荒井489	15
	38	長崎村大和田2179	16
	40	長崎町北荒井489	17
	41	落合町葛ヶ谷640	18
	43	長崎町西原3735	19
骨皮道人（西森武城）	31	浅草区蔵前片町20	1
相田隆太郎	26	世田ヶ谷太子堂313 太子館内	15
	27	山梨県北巨摩郡上手村	16
	29	市外松沢村松原644 小林方	17
	30	松沢村松原644 小林方	18
	32	馬込町出穂山3482	19
相馬御風	24	小石川区関口駒井町1	3
	25		4

人名	年齢	住所	資料番号
相馬御風	27	小石川区高田老松町43	5
	27	小石川区関口駒井町1	6
	29		7
	30		8
	35	新潟県糸魚川町	9
	38		11
	39		12
	40		13
	41		14
	42		15
	43		16
	45		17
	46		18
	48	新潟県糸魚川町大町52	19
	55		20
相馬泰三	33	青山南町7-8 松友館	9
	36	牛込区横寺町37	11
	37	牛込区横寺町36	12
	38		13
	39	池袋丸山1671 松井方	14
	40		15
	41	神奈川県中郡大磯町	16
	43		17
	44		18
	46	神奈川県大磯町神明町	19
園池公致	39	相州鎌倉町名越1 大宝寺裏	15
大藤治郎	31	西荻窪	16
田岡嶺雲	37	今は清国にあり	3
	38		4
	40	西大久保村135	5
	40	今は清国にあり	6
	42		7
	43		8
高垣眸	33	青梅町仲町321	19
高倉輝	40	上田市別所温泉､気付	19
高桑義生	37	目黒三田36	19
	47	京都市右京区嵯峨今堀町22	21
高嶋米峰	37	小石川区原町6	7
	38		8
高須梅溪	27	牛込区神楽町2-14	3
	28		4
	30		6
	32		7
	33		8
	38	牛込区弁天町6-3	9
	41	牛込区弁天町6	11
	42	千葉県姉ヶ崎町新町	12
	43	牛込区弁天町6-2	13
高須芳次郎	44	牛込区南榎町57	14
	45		15
	46		16
	48	牛込区南榎57	17
	49	牛込区南榎町57	18
	51	松沢村上北沢510	19
高瀬文淵	43	本郷区西須賀町1	3
	44		4

人名	年齢	住所	資料番号
高田保	31	赤坂区台町77 根岸方	16
	33		17
	34		18
	36	赤坂台町77根岸方	19
	43	大森区入新井1-2300	20
高田蝶衣	26	淡路国津名郡釜口村字里	7
	27		8
	32	兵庫県津名郡釜口村字里	9
	36	神戸市楠町4-225-3	12
	37		13
高津鍬三郎	38	本郷区駒込西片町10	2
鷹野つぎ	34	世田ヶ谷太子堂350	14
	35		15
	36	世田ヶ谷町太子堂350	16
	38		17
	39		18
	41	世田ヶ谷太子堂313	19
	51	中野区沼袋町281	21
高橋邦太郎	31	下谷区上野花園町14	18
	33		19
	43	下谷区花園町14	21
高橋新吉	37	高知県中村町南京町152	20
高浜虚子	33	麹町区富士見町4-8	3
	34		4
	36	麹町区五番町3	5
	36	麹町区富士見町4-8	6
	38		7
	39		8
	44	牛込区船河原町12 及び相州鎌倉原の台	9
	47	牛込区市ヶ谷船河原町12	11
	48	牛込区船河原町12	12
	49		13
	50	丸の内ﾋﾞﾙﾃﾞﾝｸﾞﾎﾄﾄｷﾞｽ社内	14
	52	神奈川県鎌倉原ノ台	16
	54	神奈川県鎌倉町原ノ台	17
	55		18
	57		19
高浜長江	35	下渋谷村265	6
高間惣七	29	京橋区四日市町13	10
	33	西巣鴨町88	12
	34		13
高見順	31	大森区大森2-137	20
高村光雲	66	本郷区駒込林町155	10
	70		12
	71		13
高村光太郎	29	本郷区駒込林町155	7
	30		8
	35	本郷区駒込林町25	9
	38		11
	39		12
	40		13
	43		16
	45		17

人名	年齢	住所	資料番号
高村光太郎	46	本郷区駒込林町25	18
	48		19
高群逸枝	37	上荻窪269	19
高安月郊	39	京都市寺町荒神口	4
	41	本郷区東片町	6
	43	本郷区西片町10	7
	44		8
	49	本郷区駒込西片町10	9
	53	本郷区西片町10	12
	54		13
	62	本郷区西片町10に2	19
高山林次郎	31	本郷区西片町10	2
瀧井孝作	30	京都市外山科御陵百花園前	14
	31	奈良市北天満町	15
	32	奈良市上高畑町	16
	34		17
	35		18
	37	八王子市子安町47	19
	44	八王子市子安町923	20
	47		21
田口掬汀	32	芝区高輪南町43	3
	33		4
	35	荏原郡入新井村	5
	35	芝区高輪南町43	6
	37		7
	38		8
	43	本郷区弥生町2は-19	9
	47	本郷区弥生町2-19	12
	48		13
	66	秋田県角館町	21
竹越和夫	36	兵庫県西宮市外阪急甲八園 3-8	21
竹越三叉	42	大久保村14	3
	43		4
	45		6
	47		7
	48		8
竹柴其水（岡田新蔵）	45	京橋区南八丁堀1-17	1
武島又次郎	30	本郷区森川町	2
武島羽衣	35	小石川区原町16	3
	36		4
武田鶯塘	36	赤坂区仲ノ町7	3
	37		4
	39		6
	41		7
	42		8
	47	赤坂区仲の町7	9
仰天子（武田 頴）	38	芝区備前町9 久和家方寓	1
武田仰天子	54	本所区相生町5-30	4
	56	牛込赤城下町32	6
	58	牛込区東榎町20	7
	59		8
	64	南品川南馬場320	9
竹田敏彦	47	目黒区平町199	20

人名	年齢	住所	資料番号
竹田敏彦	50	目黒区平町80	21
武田麟太郎	27	麹町区内幸町1 商興ﾋﾞﾙ往来社気付	19
	34	麹町区二番町10-5	20
竹友藻風	47	兵庫県武庫郡甲東村仁川	20
竹貫佳水	32	千駄ヶ谷村穏田4	3
	33		4
	35		6
	37		7
	38		8
	43	青山穏田4	9
武野藤介	29	杉並町天沼469	17
	30		18
	32	杉並町阿佐ヶ谷天沼469	19
武林盛一	30	小石川区宮下町7	6
武林無想庵	32	小石川区宮下町7	7
	33		8
	38		9
	42	目下在仏中	12
	43	神奈川二之宮中平方	13
	46	仏蘭西	16
	48	目下在巴里	17
	49		18
	51	在巴里	19
竹久夢二	34	下渋谷伊達跡	10
	38	本郷区菊坂菊富士ﾎﾃﾙ	12
	39	本郷区菊阪菊富士ﾎﾃﾙ	13
田郷虎雄	40	荏原区平塚8-1179	21
太宰施門	29	本郷区森川町1 牛屋横179	9
	33	本郷区森川町1 牛屋横179	12
	34	京都市上京区三本木あづまや内	13
田島淳	33	横浜市小港町98	19
	43	横浜市中区根岸町3-128	21
田代倫	36	牛込区新小川町3-19 宝生館	13
多田鉄雄	25	西大久保236	7
	26		8
	54	渋谷区幡ヶ谷笹塚1230	21
多田不二	33	調布村下沼部堀越705	16
	35	調布町下沼部堀越705	17
	36		18
	38	荏原郡東調布町下沼部705	19
	48	世田谷区奥沢町2-211	21
橘外男	44	杉並区馬橋2-240	20
辰野九紫	39	茨城県古河町	19
	46	本郷区弥生町3,は-11	20
	49	中野区高根町12	21
辰野隆	53	板橋区石神井立野町912	21
立野信之	28	杉並町成宗54	19
	35	豊島区巣鴨3-13	20

人名	年齢	住所	資料番号
田中喜一	43	下日暮里元金杉151	6
	45		7
	46		8
田中王堂	51	三河島喜楽園内 尾藤方	9
	54	小石川区原町106	11
	55		12
	56		13
田中介二	26	西大久保73	7
	27		8
田中貢太郎	42	小石川区茗荷谷町95	12
	43		13
	46		16
	48	碑衾町碑文谷1546	17
	49	碑衾谷碑文谷1546	18
	51	碑衾町碑文谷1367	19
	58	目黒区原町1367	20
田中純	28	本郷区台町21 閑翠館	9
	31	相州鎌倉長谷大仏前574	11
	32	相州鎌倉町長谷大仏前	12
	33	相州鎌倉町小町364	13
	34	本郷区菊坂町菊富士ホテル	14
	35	相州鎌倉町長谷142	15
	36	相州鎌倉由井ヶ浜	16
	38	神奈川県藤沢町鵠沼海岸	17
	39		18
	41	神奈川県藤沢町鵠沼	19
田中総一郎	32	兵庫県西宮市外夙川甲南荘	19
田中艸太郎	3	目黒三田35	16
田辺茂一	36	淀橋区角筈1-826	21
谷川徹三	43	杉並区東田町1-57	20
谷崎潤一郎	32	小石川区原町13	9
	35	横浜市本牧宮原883	11
	36	相州小田原十字3-706	12
	37	横浜市本牧宮原883	13
	38	兵庫県武庫郡本山村北畑	14
	39		15
	40		16
	42		17
	43		18
	45	兵庫県武庫郡本山村岡本	19
	52	兵庫県武庫郡精道村打出下宮塚	20
	55	本郷区駒込曙町10	21
谷崎精二	28	日本橋区蛎殻町1-2	9
	31	牛込区弁天町6	11
	32		12
	33		13
	34		14
	35		15
	36		16
	38	牛込区喜久井町21	17
	39		18
	41		19

人名	年齢	住所	資料番号
谷崎精二	48	牛込区原町1-67	20
	51	牛込区海天町6	21
田村三治	29	中央新聞社	2
田村松魚	33	今は米国桑港にあり	3
	34		4
	36		6
	38		7
	39		8
田村俊子	28	下谷区谷中天王寺町17	7
	29		8
	34	下谷区谷中天王寺町34	9
田村西男	33	神田区多町1-4	7
	34		8
	52	池上町石川上ノ台187	19
	62	神田区台所町14	21
田山花袋	35	代々幡村大字代々木132	3
	36		4
	38	代々幡村字代々木133	5
	38	代々幡村大字代々木132	6
	40		7
	41		8
	46	代々木山谷132	9
	49	代々幡村代々木132	11
	50	代々木山谷132	12
	51		13
	52	代々幡村代々木132	14
	53		15
	54	代々木山谷132	16
	56		17
	57		18
徳田秋江	31	牛込区喜久井町20	3
	32		4
	34	小石川区関口駒井町	5
	34	牛込区喜久井町20	6
近松秋江	36	牛込区喜久井町20	7
	37		8
	42	牛込区赤城元町16 長生館方	9
	45	深川区新安宅町32 藤原方	11
	46	本郷区追分町83 昇栄館	12
	47		13
	48	中野町上野原952	14
	49		15
	50	市外東中野上ノ原952	16
	52	東中野上ノ原954	17
	53		18
	55	中野町上ノ原954	19
	62	中野区上ノ原町30	20
麗水生（遅塚金太郎）	26	芝区愛宕下町4-1	1
遅塚麗水	41	芝区神明町25	3
	42		4
	46		7
	47		8
	52	淀橋町角筈148	9
	65		19
茅野蕭々	27	京都市新町上立売上ル	6

人名	年齢	住所	資料番号
茅野蕭々	29	京都市新烏丸荒神口下る頭町9	7
	30		8
	35	麻布区本村町118	9
	39	芝区三田綱町1	12
	40		13
	48		19
茅野雅子	32	京都市新烏丸荒神口下る頭町9	7
	33		8
	42	芝区三田綱町1	12
	43		13
	51		19
	58	荏原区中延1071-1	20
千葉亀雄	29	本郷区真砂町20	3
千葉江東	30	本郷区真砂町20	4
	32		6
千葉亀雄	34	本郷区真砂町20	7
	35		8
	40	京橋区南佐柄木町7	9
	43	大井町字庚塚4866	11
	44		12
	45	大井町宇庚塚4866	13
	46	大井町字庚塚4842	14
	47		15
	48	兵庫県西-宮市外夙川甲南荘	16
	50	大井町庚申塚4842	17
	51	大井町庚塚4842	18
	53	大井町庚申塚4842	19
千葉掬香	40	下谷区中根岸町12	6
	42	記載なし	7
	43	下谷区中根岸町13、14,15番地	8
	48	下谷区中根岸町13	9
	52		12
	53		13
千葉胤明	74	四谷区南町9	20
張赫宙	36	中野区新山通3-26	21
塚越停春	43	本郷区千駄木林町146	3
	44		4
	46		6
	48		7
	49		8
塚原健二郎	36	吉祥寺758	19
	46	府下吉祥寺町野田北758	21
渋柿園主人　又号　しかま、蓼洲（塚原靖）	44	芝区南佐久間町2-2	1
塚原渋柿	59	麹町区紀尾井町9	3
	60		4
	62		5
塚原蓼洲	62	麹町区紀尾井町9	6
	64		7
	65		8
辻潤	42	大岡山127	16
	44	大岡山127(外遊中。留守宅)	17

人名	年齢	住所	資料番号
辻潤	45	大岡山127	18
	47	荏原郡中延1089	19
津田青楓	38	小石川区関口台町34	10
	42		12
	43	小石川西関口台町34	13
土田杏村	31	京都市上京区新町頭	12
	32		13
	35	京都市新町頭	16
	37	京都市上御美前通堅町	17
	38	京都市新町頭	18
	40		19
土屋文明	48	赤坂区南青山5-51	20
	51	赤坂区青山南町5-51	21
綱島梁川	34	牛込区大久保余丁町48	3
角田喜久雄	32	浅草区山谷町1-1	20
	35	浅草区山谷1-1	21
椿貞雄	26	相州鵠沼海岸林別荘8	12
	27		13
坪内士行	31	麹町区三年町2 佐藤別宅内	9
	35	大阪府下箕面村桜井	12
	36		13
	44	大阪府豊能郡箕面村桜ヶ丘	19
	54	牛込区小川町2-10 江戸川ｱﾊﾟｰﾄ	21
春のや朧又号　逍遙学人（坪内雄蔵）	33	牛込区大久保余丁町112	1
坪内雄藏	43	牛込区大久保余丁町112	2
坪内逍遙	48	牛込区大久保余丁町12	3
	49		4
	51	牛込区大久保余丁町112	5
	51	牛込区大久保余丁町12	6
	53		7
	54		8
	59	牛込区余丁町11	9
	62		11
	63		12
	64		13
	67		16
	69		17
	70		18
	72	牛込区余丁町114	19
坪田譲治	38	高田狐塚866	17
	39		18
	41	高田町狐塚866	19
	48	豊島区雑司ヶ谷6-866	20
坪谷水哉	45	牛込区北山吹町29	3
	46		4
	48		6
	50		7
	51		8
	56	牛込区北山伏町29	9
津村京村	33	代々木初台539	16

人名	年齢	住所	資料番号
津村京村	38	代々木初台603	19
鶴田知也	29	杉並町天沼174	19
寺尾幸夫	42	世田ヶ谷町池尻369	19
寺崎広業	44	神田区上白壁町5	5
寺崎浩	34	牛込区若松町137	20
	37	牛込区若林町137	21
土肥春曙	38	麹町区下二番町36	3
	39		4
	41		5
	41		6
	43		7
	44		8
土井晩翠	36	仙台市大町2-141	3
	37		4
	39		6
	41		7
	42		8
	47	仙台市本荒町21	9
	51		12
	52		13
	60		19
	67		20
	70		21
東儀季治	33	牛込区中町35	2
東郷青児	21	小石川区茗荷谷町73	10
	25	蒲田大字北蒲田1493	12
	26		13
	44	世田谷区北沢2-196	21
戸川貞雄	30	神奈川県平塚町新宿馬入松原	14
	31		15
	32	神奈川県平塚町新宿1504	16
	34	神奈川県平塚町新宿馬入松原	17
	35		18
	37	神奈川県中郡平塚新宿1504	19
	47	平塚市新宿1504	21
戸川残花	52	小石川区久堅町58	3
	53		4
戸川秋骨	37	豊多摩郡西大久保村152	3
	38		4
	40	大久保村仲百人町153	5
	40	豊多摩郡西大久保村152	6
	42		7
	43		8
	48	西大久保66	9
	52		12
	53		13
	61	井荻下荻窪371	19
土岐哀果	27	芝区浜松町1-15	7
	33		9
	36		11
土岐善麿	39	下目黒804	14
	40		15
	41		16
	43		17
	44		18
	46	目黒町下目黒804	19

人名	年齢	住所	資料番号
土岐善麿	53	目黒区下目黒4-804	20
	56	目黒区下目黒4-801	21
徳川夢声	44	杉並区天沼1-139	20
	47	杉並区天沼1-138	21
徳田末雄	31	読売新聞社	2
徳田秋声	36	本郷区森川町1　南堺裏210	3
	37		4
	39	本郷区森川町1	5
	39	本郷区森川町1　南堺裏210	6
	41		7
	42		8
	47		9
	50	本郷区森川町1 南堺裏210	11
	51		12
	52	本郷区森川町１南堺裏210	13
	53	本郷区森川町1 南堺裏210	14
	54		15
	55		16
	57	本郷区森川町1 南堺裏	17
	58		18
	60	本郷区森川町１南堺裏210	19
	70	本郷区森川町124	21
徳田戯二	60	麻布区市兵衛2-46	19
	70	滝野川区上中里町62	21
徳富愛子	67	府下千歳村粕谷	21
徳富蘇峯	44	赤坂区青山南町6-30	3
	45		4
徳富蘇峰	47	赤坂区青山南町6-30	5
徳富蘇峯	47	赤坂区青山南町6-30	6
	49		7
	50		8
	55		9
	59		12
	60		13
	78	大森区山王町1-623	21
徳冨蘆花	39	北多摩郡千歳村粕谷356	3
	40		4
	42		5
	42		6
	44		7
	45		8
	50		9
	53	北多摩郡千歳村356	11
	54	北多摩郡千歳村粕谷356	12
	55		13
徳富健次郎	58	北多摩郡千歳村粕谷356	16
徳永直	32	西巣鴨宮仲2500	19
	42	世田谷区世田谷3-2415	21
戸沢姑射	34	下総国布佐町相島	3
	35		4
	37		6
	39		7
	40		8
戸張孤雁	40	下谷区谷中七面坂下日暮里122	12

人名	年齢	住所	資料番号
戸張孤雁	41	下谷区中谷七面坂下日暮里122	13
登張竹風	34	荏原郡入新井村新井宿2164	3
	35		4
	37		5
	37		6
	39		7
	40		8
	45	仙台市片平町58	9
	49		12
	50		13
富沢有為男	36	牛込区天神町86	20
富田砕花	22	下渋谷136	7
	23		8
	28	代々木字上原梅原茶園内	9
	32	池袋下神999 久保田彝方	12
	33	池袋下神999 久保田彝方	13
	34	兵庫県武庫郡芦屋 田島方	14
	36	兵庫県武庫郡芦屋茶屋芦屋	16
	38	兵庫県武庫郡芦屋村	17
	39	田島方	18
	41	兵庫県武庫郡芦屋茶屋芦屋	19
	48	兵庫県武庫郡精道村打出	20
鳥谷部銑太郎	37	報知新聞社	2
鳥谷部春汀	42	麹町区下二番町2	3
	43		4
豊島与志雄	28	本郷区駒込千駄木町49	9
	31		11
	32	本郷区千駄木町49	12
	33		13
	34	本郷区駒込千駄木町57	14
	35		15
	36	本郷区千駄木町57	16
	38		17
	39		18
	41	本郷区千駄木57	19
	48	本郷区千駄木町57	20
	51	本郷区駒込千駄木49	21
内藤水翟	27	本郷区森川町1	6
内藤濯	29	本郷区真砂町151	7
	30		8
	35	本郷区動坂町86	9
	39	本郷区菊坂町86	12
	40		13
	45	大森町不入斗269	17
	46	大森町不入斗267	18
内藤湖南	41	京都市岡崎町宮ノ脇98	3
	42		4
	44		6
	46		7

人名	年齢	住所	資料番号
内藤湖南	47	京都市岡崎町宮ノ脇98	8
内藤鋹策	30	小石川区白山御殿町33	9
	34	小石川区白山御殿町32	12
	35		13
	43	北多摩郡千歳村烏山	19
内藤辰雄	31	田端653	14
	38	西巣鴨町宮仲2761	19
内藤鳴雪	60	本郷区真砂町18	3
	61		4
	63		5
	63		6
	65		7
	66		8
	71	麻布区笄町175	9
	75		12
	76		13
直木三十五	37	麹町下六番町10	17
	38		18
	40	麹町区紀尾井町3	19
永井荷風	28	米国紐育正金銀行に支店あり	3
	29		4
	31	牛込区大久保余丁町79	5
	31	米国紐育正金銀行に支店あり	6
	33		7
	34		8
	39	牛込区余丁町79	9
	42	麻布区市兵衛町1-6	11
	43	京橋区築地2-30	12
	44	麻布区市兵衛町1-6	13
	45		14
	46		15
	47		16
	49		17
	50		18
	52	麻布区市兵衛1-6	19
	59	麻布区市兵衛町1-6	20
長井金風	40	中野町打越	4
	42	目白台岡部子爵邸内	6
	44	高田村雑司ヶ谷345	7
	45		8
中内蝶二	32	牛込区佐内坂町19	3
	33		4
	35		6
	37		7
	38		8
中川一政	29	西巣鴨町向原	12
	30		13
中河与一	28	東中野塔ノ山399	15
	29	東中野上ノ原767	16
	31	砧村成城学園前	17
	32		18
	34	千歳村下祖師ヶ谷	19
	41	世田谷区祖師ヶ谷1-1331	20
	44	世田谷区祖師ヶ谷2-1331	21
仲木貞一	26	牛込区市ヶ谷富久町118	7
	27		8

人名	年齢	住所	資料番号
仲木貞一	32	赤坂区田町4-16 佐々木方	9
	36	赤坂区新町2-3	12
	37		13
	40	目黒町下目黒675	16
	42	目黒町下目黒680	17
	43		18
	45	岩淵町稲付字梅ノ木1203	19
中里介山	44	高尾妙音谷	18
	53	市外高尾妙音谷両隣塾	20
中沢弘光	44	豊多摩郡戸塚村字諏訪18	10
	48	豊多摩郡戸塚町字諏訪	12
	49	18	13
中沢臨川	30	小石川区竹早町82	4
	32	麹町区元園町1-27	6
	34		7
	35		8
	40	長野県松本市白板 日本電気化学工業会社松本工場内	9
中島清	35	麹町区永田町2-1	9
	40	目白旭出51	13
	43	戸塚町諏訪25 有隣館	16
	45	吉祥寺公園萬助橋側	17
中島健蔵	38	淀橋区十二社262	21
中島孤島	29	小石川区小日向水道町92	3
	30		4
	32	牛込区赤城元町36	5
	32	小石川区小日向水道町92	6
	34		7
	35		8
	40	小石川区高田老松町28	9
	44		12
	45		13
湘烟女史（中島俊子）	29	○○○○○○○○○番地〔不明又は非公開の意力〕	1
永瀬義郎	31	下谷区上野桜木町17	12
	32		13
仲田勝之助	32	日本橋区平松町11	9
	36		12
	37	深川区西大工町18	13
永田衡吉	48	世田谷区三軒茶屋町11	21
永田龍雄	41	麹町区飯田町2-6	19
中谷徳太郎	26	深川区木場町11	7
	27		8
	32		9
長田秀雄	27	麹町区飯田町6-3	7
	28		8
	33	本郷区西片町1は-19	9
	36	小石川区関口台町26-29	11
	37		12
	38		13
	39	本郷区曙町8 ろ-2	14
	40		15
	41	本郷区駒込曙町8	16

人名	年齢	住所	資料番号
長田秀雄	43	牛込区北山伏町34	17
	44	牛込区横寺町59	18
	46		19
	56	麹町区飯田町3の22	21
永田寛定	56	淀橋区下落合3-1360	21
長田幹彦	25	麹町区飯田町6-3	7
	26		8
	31	牛込区神楽町1-2	9
	34	麹町区飯田町3-22	11
	35		12
	36	牛込区中町31	13
	37		14
	38		15
	39		16
	41	牛込区南山伏町11	17
	42		18
	44		19
	51	四谷区東信濃町10	20
	54		21
中塚一碧楼	31	高田村大原1527	9
	35	高田町大原1527	12
	36		13
	44	駒沢町新町90	19
長塚節	33	茨城県結城郡岡田村大字国生	7
	34		8
中戸川吉二	25	巣鴨宮下1879	11
	26		12
	27		13
	28		14
	29	相州鎌倉大町1181	15
	30	相州鎌倉笹目	16
	32	相州鎌倉扇谷泉谷298	17
	33	神奈川県鎌倉扇谷泉谷298	18
	35	麹町区富士見町2-29	19
	42	豊島区巣鴨7-1879	20
	45	本郷区本郷5-40	21
中西伊之助	33	淀橋柏木656	16
	35		17
	36	淀橋町柏木656	18
	38		19
中西悟堂	36	井荻町上井草1267	19
梅花道人（中西幹男）	26	浅草区山川町1	1
中野重治	27	杉並町高円寺25	18
	29	滝野川町田端445	19
	39	世田谷区世田谷2-1172	21
中野実	37	牛込区早稲田町34	20
	40		21
中野好夫	38	杉並区井荻3-111	21
花痩（中村壮）	25	神田区表神保町1	1
中村春雨	33	記載なし	5
中村吉蔵	35	今は、BB英国にあり	7
	36		8
	41	巣鴨字宮仲1969	9
	44	巣鴨宮仲1969	11

人名	年齢	住所	資料番号
中村吉蔵	45	巣鴨宮仲1969	12
	46		13
	47		14
	48		15
	49	巣鴨字宮仲1969	16
	51	西巣鴨町宮仲1969	17
	52		18
	54	巣鴨宮仲1969	19
	61	豊島区西巣鴨2-1969	20
	64	巣鴨宮仲1965	21
中村憲吉	37	広島県双三郡布野村	16
	42	広島県双三郡布野村上布野	19
中村孤月	37	牛込区天神町53	9
	41	田端18	12
	42		13
中村星湖	24	神田区三崎町3-1	4
	26	牛込区弁天町79	5
	26		6
	28		7
	29		8
	34	神奈川県鶴見在生麦字岸 杉山神社前	9
	37	神奈川県鶴見在生麦	11
	38	神奈川県鶴見在 生麦	12
	39	字岸290	13
	40	豊多摩郡井荻村上井草	14
	41		15
	42	井荻村上井草1070	16
	44	井荻村上井草1470(目下外遊中)	17
	45	井荻村上井草1456	18
	47		19
中村彝	31	下落合新田454	10
	35	落合新田464	12
	36		13
中村白葉	28	赤坂区青山北町6-42	9
	31		11
	32		12
	33		13
	36	駒沢新町431	16
	38		17
	39		18
	41		19
	51	世田谷区新町3-431	21
中村不折	44	下谷区中根岸31	5
	52	下谷区上根岸町125	10
	56		12
	57		13
中村正常	30	本郷区湯島1-4 大和ﾊｳｽ	19
	37	杉並区下高井戸1-251	20
中村武羅夫	35	相州鵠沼海岸	11
	36	相州藤沢町鵠沼	12
	37		13
	38	相州藤沢町字辻堂	14
	39		15
	40	相州藤沢町辻堂海岸	16

人名	年齢	住所	資料番号
中村武羅夫	42	相州藤沢町辻堂海岸	17
	43	神奈川県藤沢町辻堂海岸	18
	45	神奈川県辻堂	19
	52	神奈川県藤沢町辻堂	20
	55	神奈川県藤沢町辻堂西海岸45	21
中本たか子	26	亀戸町7-224	18
	28		19
中山義秀	41	世田谷区世田谷2-1439	21
永代静雄	32	四谷区舟町35	9
	36	小石川区原町91	12
	37		13
長与善郎	30	下渋谷160	9
	33	相州鎌倉町大町辻149	11
	34	相模国鎌倉町字大町辻149	12
	35		13
	36	相州鎌倉町扇谷泉ヶ谷298	14
	37		15
	38	赤坂区青山南町5-33	16
	40	赤坂区青山南町5-32	17
	41		18
	43	麻布区飯倉3-15	19
	50	目黒区下目黒2-191	20
桃水痴史（半井洌）	32	麹町区平河町6-2	1
半井桃水	48	麹町区飯田町6-18	4
	50		6
	52	牛込区若宮町37	7
	53		8
	58		9
	62	牛込区若宮町32	12
	63		13
夏目漱石	40	本郷区西片町10-ろ7号	3
	41		4
	43	牛込区早稲田南町7	5
	43	本郷区西片町10-ろ7号	6
	45		7
	46		8
名取春仙	32	京橋区越前掘2-1	10
鍋井克之	33	牛込区南榎町12	11
	34	牛込区矢来町3 山里42号	12
	35	牛込区矢来町三山里42	13
波山不規夫	25	札幌区大通西4 北海ﾀｲﾑｽ社	7
	26		8
楢崎勤	25	赤坂区表町2-10	16
	27		17
	28		18
	30		19
	40	牛込区赤城元町16	21
成瀬正一	26	c/o M.N. Mac Laren 533 West 112st. New York City.	9
	30	芝区白銀三光町473	12
	31	芝区白銀三光町473(在仏)	13

人名	年齢	住所	資料番号
成瀬無極	28	京都府下鴨村102	7
	29		8
	34	京都市動物園北通	9
	38	京都市岡崎法勝寺町15	12
	39		13
	47	京都市中京区室町丸太町下ル	19
南江二郎	29	京都府亀岡町字河原町及び京都市小山下総町47	19
南江治郎	39	大森区山王1-2740	21
南部修太郎	29	麻布区新竜土町12	11
	30		12
	31	麻布区新竜王町12	13
	32	麻布区新竜土町12	14
	33	赤阪区新町4-18	15
	34	赤坂区新町4-18	16
	36	麻布区新竜土町12	17
	37		18
	39		19
新居格	38	杉並町高円寺811	16
	40		17
	41		18
	43		19
	50	杉並区高円寺町3-316	20
	53	杉並区高円寺3-317	21
西川勉	24	下谷区谷中初音町2 初音館方	9
西出朝風	28	石川県大聖寺町耳聞山	7
	29		8
西宮藤朝	27	牛込区赤坂下町55 陽光館方	9
	30	小石川区音羽9-18	11
	31	小石川区音羽町9-18	12
	32		13
	35	田端55	16
西村渚山	29	千駄ヶ谷町原宿191	3
	30		4
	32		6
	34		7
	35		8
	40	荏原郡碑文谷村柿の木坂2384	9
	44	下渋谷147	12
	45		13
西村酔夢	28	本郷区東竹町8	3
	29		4
	31		6
	33		7
	34		8
	39	牛込区矢来町8-13	9
	43		12
	44		13
西村天囚	42	大阪府大阪市北区松ヶ枝町213	3
	43		4
	45		6
	47		7
	48		8

人名	年齢	住所	資料番号
西村陽吉	26	日本橋区檜物町9	9
	30	日本橋区元大工町1	12
	31		13
	34	神奈川県鶴見町142	16
	39	横浜市鶴見区鶴見町142	19
新田潤	37	赤坂区伝馬町2-8 半田方	21
新渡戸稲造	40	台湾総督府	2
	45	小石川区小日向台町1-75	3
	46		4
丹羽文雄	34	淀橋区下落合2-617	20
	37		21
額田六福	36	高田町大原1526	16
	38	市外杉並町阿佐ヶ谷小山289	17
	39	杉並町阿佐ヶ谷小山289	18
	41	杉並町阿佐ヶ谷289	19
	51	杉並区阿佐ヶ谷3-289	21
沼波瓊音	30	本郷区西片町10-21	3
	31		4
	33	本郷区西片町10ろ-8	5
	33	本郷区西片町10-21	6
	35		7
	36		8
	41	本郷区動坂町327	9
	45	本郷区弥生町3 は8号	12
	46		13
能村潔	41	奈良市法蓮町北1-1343	21
野上臼川	27	巣鴨町上駒込334	6
	29		7
	30		8
野上豊一郎	38	日暮里渡邊町1040	11
	39		12
	40		13
	43	日里暮渡邊町1040	16
野上弥生子	25	巣鴨町上駒込334	6
	27		7
	28		8
	33	小石川区指ヶ谷町7	9
	36	日暮里渡邊町1040	11
	37		12
	38		13
	39		14
	40		15
	41		16
	43		17
	44		18
	46		19
	53	荒川区日暮里渡辺町1040	20
野口雨情	28	牛込区若松町61	6
	30	本郷区千駄木町27 佐藤方	7
	31		8
	40	田端351	12
	41		13
	42	吉祥寺町787	14

人名	年齢	住所	資料番号
野口雨情	43	吉祥寺787	15
	44	吉祥寺山都小路	16
	46		17
	47		18
	49	吉祥寺787	19
	56		20
謫天情仙（野口一太郎）	25	本郷区弓町1-26	1
野口米次郎	32	小石川区久堅町68	3
	33		4
	37		7
	38		8
	46	中野原865	11
	47	中野町字原865	12
	48		13
	49		14
	50		15
	51		16
	53		17
	54	中野字原865	18
	56	中野町原865	19
	63	中野区桜田町41	20
野沢純	37	杉並区和田本町815	21
能島武文	27	代々幡町幡ヶ谷853	15
	28	幡ヶ谷853	16
	30		17
	31		18
	33	幡ヶ谷855	19
野島辰次	36	中目黒751	17
	37		18
	39	中目黒582	19
	49	四谷区坂町19	21
野尻抱影	33	下渋谷1913	9
	37	荏原郡駒沢新町	12
	38		13
昇曙夢	29	牛込区讃井坂町15	3
	30		4
	32	小石川区雑司ヶ谷原町114	5
	32	牛込区讃井坂町15	6
	34		7
	35		8
	40	牛込区若松町102	9
	43		11
	44		12
	45		13
	46		14
	47		15
	48		16
	50	神奈川県鎌倉稲村ヶ崎	17
	51		18
	53	神奈川県鎌倉町稲村ヶ崎527	19
	63	鎌倉市稲村ヶ崎527	21
野村愛正	31	牛込区通寺町37	12
	32		13
	40	吉祥寺565	19

人名	年齢	住所	資料番号
野村愛正	50	杉並区吉祥寺町565	21
野村胡堂	49	神奈川県鎌倉極楽寺538	19
	56	世田谷区宇奈根795	20
	59	杉並区上高井戸3-808	21
野村隈畔	34	巣鴨1191	9
	38	小石川区宮下町21	12
灰野庄平	31	小石川区丸山町19	9
	35		12
	36		13
	39		16
	44	小石川区大塚坂下町79	19
芳賀矢一	35	独国（留学中）	2
	40	小石川区音羽町3-23	3
	41		4
	43		6
	45		7
	46		8
	51		9
	55	小石川区竹早町32	12
	56		13
萩野由之	47	本郷区駒込蓬口町7	3
	48		4
	50		6
萩原恭次郎	32	前橋市外上石倉	19
萩原朔太郎	32	前橋市北曲輪町69	9
	36	前橋市石川町28	12
	37		13
	38		14
	39	田端311	15
	40	相州鎌倉町材木座481	16
	42	馬込町平張1321（目下外遊中）	17
	43	馬込町平張1320	18
	45	前橋市北曲輪町71	19
	52	世田谷区代田1-635	20
萩原蘿月	34	仙台市石垣町2	9
	38	小石川区竹早町115	12
	39		13
硲伊之助	23	本所区向島請地町62	10
	27	小石川区雑司ヶ谷町91	12
	28		13
橋口五葉	38	赤坂区台町77	10
	42	赤坂区台町74	12
	43		13
土師清二	35	兵庫県宝塚新温泉川下	17
	36		18
	38	牛込区南町27	19
	45	四谷区右京町34	20
	48		21
橋田東声	32	大森八景坂2294	9
	36		12
	37		13
	38		14
	40		16
	42		17
	43		18
橋爪健	26	小石川区小日向台町3-	16

人名	年齢	住所	資料番号
		93	
橋爪健	28	神奈川県藤沢町鵠沼海岸	17
	29		18
	31	代々木西原951	19
橋本英吉	31	杉並町阿佐ヶ谷681	18
	33	深川区猿江裏町95	19
橋本邦助	34	巣鴨村1898	10
橋本青雨	29	小石川区原町10	3
	30		4
	32		6
	34		7
	35		8
長谷川かな女	54	浦和市岸区東町3626	21
長谷川幸延	37	板橋区大谷口町740	21
長谷川しぐれ	31	京橋区新佃西町3-5	6
	33		7
	34		8
	39	神奈川県鶴見花香苑	9
長谷川時雨	43	神奈川県鶴見花香苑	12
	44		13
長谷川しぐれ	47	麹町区中六番町3	16
長谷川時雨	49	牛込区市ヶ谷左内町31	17
	50		18
	52		19
	59	赤坂区檜町3	20
	62	赤坂区榎町3	21
長谷川伸	44	大崎桐ヶ谷829	17
	45		18
	47		19
	57	芝区二本榎西町3	21
長谷川天渓	31	神田区駿河台鈴木町12	3
	32		4
	34		5
	34		6
	36		7
	37		8
	42	芝区神谷町28	9
	45	芝区神谷町25	11
	46		12
	47		13
	50		16
	52		17
	53		18
	55	上大崎789	19
長谷川如是閑	47	東中野937	12
	48		13
	49		14
	50		15
	51		16
	53		17
	54		18
	63	中野区上ノ原町6	20
	66	中野区上ノ原6	21
長谷健	37	豊島区池袋1-94	21
畑耕一	30	赤坂区桧町6 乃木坂倶楽部内	16
	32		17

人名	年齢	住所	資料番号
畑耕一	33	本郷元町 文化ｱﾊﾟｰﾄ内	18
	35	本郷区元町 文化ｱﾊﾟｰﾄﾒﾝﾄ内	19
	45	牛込区小川町2-10 江戸川ｱﾊﾟｰﾄ 1号館18	21
秦豊吉	26	四谷区仲町3-19	9
	29	麹町丸の内三菱査業課	11
	30		12
	34	独逸遊学中	16
	36	大森山王2781	17
	37		18
	39		19
	49	品川区大井金子町5862-5	21
波多野精一	30	牛込区市ヶ谷仲町6	3
幡谷正雄	32	巣鴨町宮仲2326	18
服部嘉香	24	大久保村百人町145	6
	26		7
	27		8
	32	牛込区破損町1	9
	36	大阪市外粉浜村634-1	12
	37		13
服部躬治	32	記載なし	3
	33		4
	35		6
	37		7
	38		8
馬場孤蝶	38	牛込区弁天町122	3
	39		4
	41	牛込区市ヶ谷田町2-1	5
	41	牛込区弁天町122	6
	43	牛込区市ヶ谷田町2-1	7
	44		8
	49		9
	52	牛込区市ヶ谷本村町15	11
	53		12
	54		13
	57	小石川区水道町2-18	16
	59	小石川区水道端町2-18	17
	60		18
	62	小石川水道端2-18	19
馬場恒吾	63	四谷区寺町101	20
浜尾四郎	33	四谷区左門町30	18
浜田広介	38	東調布町上沼部663	19
浜野修	44	杉並区阿佐ヶ谷1-836 共栄荘ｱﾊﾟｰﾄ	21
浜村米蔵	41	世田ヶ谷町下北沢877	19
	48	本郷区真砂町32	20
浜本浩	48	杉並区阿佐ヶ谷1-760	20
	51	杉並区井荻2-25	21
林倭衛	27	牛込区築土八幡町21	12
	28		13
林信一	32	牛込早稲田南町10	16
	47	牛込区袋町6 神楽坂ｱﾊﾟｰﾄ別館	21
林田春潮	33	赤坂区青山南町1-36	3
	34		4
	36		6

人名	年齢	住所	資料番号
林田春潮	38	赤坂区青山南町1-36	7
	39		8
林二九太	42	麻布区竜土町63	20
林房雄	25	杉並町高円寺65	17
	26	杉並町高円寺40	18
	28		19
	35	神奈川県鎌倉町浄明寺宅間谷	20
	38	鎌倉市浄明寺宅間谷	21
林芙美子	35	淀橋区下落合4-2133	20
	38		21
林和	31	青山原宿63	9
	35		12
	36		13
	44	和田堀町和田58	19
葉山嘉樹	32	上荻窪722	16
	34	杉並町高円寺649	17
	35	杉並町高円寺39	18
	37		19
	44	長野県上伊那郡赤穂村1948	20
原阿佐緒	43	記載なし	19
原奎一郎	39	芝区芝公園七号地8	21
原田譲二	23	小石川区雑司ヶ谷町100 白石方	4
原田実	28	牛込区若松町67 至誠館方	9
	32	小石川区高田老松町30	12
	33		13
原久一郎	36	長崎村五郎窪3885	16
	38	長崎町五郎窪3885	17
	39		18
	41		19
	51	豊島区長崎南町3-3897-1	21
抱一庵主人（原余三郎）	26	京橋区元数寄屋町2-40 浮橋方寓	1
春山行夫	36	中野区高樹町28	20
	39	中野区高根町28	21
番匠谷英一	46	豊島区目白町4-43	21
半田良平	35	巣鴨町宮下1623	12
	36		13
樋口龍峡	32	小石川区白山御殿町110	3
	33		4
	35		6
	37		7
	38		8
	43	小石川区白山御殿町10	9
久板栄二郎	33	上落合460 日本ﾌﾟﾛﾚﾀﾘｱ作家同盟気付	19
久松潜一	47	板橋区小竹町2277	21
日高只一	49	杉並町阿佐ヶ谷1	17
	50		18
	52		19
	62	杉並区阿佐ヶ谷5-1	21
人見東明	25	小石川区高田老松町47	4
	27	雑司ヶ谷村500	6

人名	年齢	住所	資料番号
人見東明	29	小石川区雑司ヶ谷町1	7
	30		8
	39	高田町若葉町18	12
	40		13
日夏耿之介	28	大森山王2779	9
	32	大森山王2720	12
	33		13
	34	大森入新井山王2720	14
	35		15
	36	阿佐ヶ谷696	16
	38	杉並町阿佐ヶ谷873	17
	39		18
	41	杉並町馬橋360	19
	48	杉並区阿佐ヶ谷6-117	20
火野葦平	34	福岡県若松市山手通2 玉井金五郎方	21
平出修	34	神田区神保町2	7
	35		8
平川虎臣	38	中野区本町通6-2	21
平木白星	31	本郷区菊坂町39	3
	32		4
	34		6
	36		7
	37		8
平田禿木	34	下谷区桜木町26	3
	35		4
	37	記載なし	5
	37	下谷区桜木町26	6
	39		7
	40		8
	45	田端108	9
	49		12
	50		13
	58	本郷区曙町22	19
平塚明子	32	滝の川上中里150	9
	36	田端445	12
	37		13
平塚らいてう	45	砧村喜多見成城	19
平野万里	23	東京工科大学在学中	4
	25	横浜市根岸町875	6
	27		7
	28		8
平野零児	44	麻布区富士見町43	21
平林英子	39	杉並区高円寺1-506 中谷方	21
平林たい子	23	中野西町3598	17
	24	杉並町高円寺667	18
	26		19
	36	記載なし	21
平林初之輔	29	田端27	11
	30	牛込区原町1-23 長田方	12
	31		13
	32	田端67 小島方	14
	33	小石川区雑司ヶ谷144	15
	34	小石川区小日向台町2-18	16
	36	小石川区水道端町1-12	17

人名	年齢	住所	資料番号
平林初之輔	37	小石川区水道端町1-12	18
	39		19
平福百穂	41	上目黒585	10
平山蘆江	46	牛込区富久町113	17
	47		18
	49		19
	56		20
	59	埼玉県飯能町東雲亭内	21
広瀬操吉	36	練馬町羽根沢3440	19
	46	麹町区麹町3-2	21
広瀬哲士	35	中野町937	9
	39	中野町168	12
	40		13
	48	上荻窪437	19
広津和郎	27	神奈川県鎌倉町名越安養院内 及び麹町区永田町3-30 永田館	9
	30	本郷5 八重山館内	11
	31	豊多摩郡野方村字新井	12
	32	530	13
	33	牛込区神楽町2 神楽館内	14
	34	牛込区矢来町3 芸術社内	15
	35	大森馬込村字中井	16
	37	大森馬込村字東913	17
	38	牛込区北山伏町48	18
	40	世田ヶ谷町世田ヶ谷2019	19
	47	淀橋区西大久保1-445	20
	50	牛込区袋町都館支店	21
柳浪子（広津直人）	31	牛込区矢来町3字中丸52	1
広津柳浪	46	麻布区霞町22	3
	47		4
	49		5
	49		6
	51		7
	52		8
	57	神奈川県鎌倉町名越安養院内	9
	61	神奈川県鎌倉町大町八	12
	62	雲神社前	13
深尾須磨子	43	麹町区三番町76	19
	50	渋谷区千駄ヶ谷5 新宿ﾊｳｽ	20
	53	四谷区麹町11-18 大和館	21
深田久弥	35	神奈川県鎌倉町二階堂599	20
	38	鎌倉市二階堂歌ノ橋手前	21
福井久蔵	35	麹町区元園町2-2	2
福士幸次郎	29	小石川区茗荷谷町55 佐藤方	9
	32	田端543	11
	33		12
	34	深川区松村町5	13

人名	年齢	住所	資料番号
福士幸次郎	35	青森県板柳町	14
	36		15
	37	青森県中津軽郡新和村字女子	16
	39	府下世田ヶ谷太子堂西山485	17
	40	野方町上高田236	18
	42		19
	49	豊島区長崎仲町1-2440	20
	52	下谷区谷中坂町 臥竜館内	21
福田清人	37	杉並区成宗2-720	21
福田琴月	32	内藤新宿番衆町2	3
	33		4
	35		6
	37		7
	38		8
福田正夫	25	神奈川県小田原町新玉3	9
	29	神奈川県小田原在石橋	12
	30		13
	31	世田ヶ谷下北沢809	14
	32		15
	33	世田ヶ谷下北沢809 佐藤住宅地	16
	35	世田ヶ谷下北沢809	17
	36		18
	38		19
	45	世田谷区大原町1154	20
	48	相州小田原在石橋	21
福田夕咲	24	小石川区金富町17 水上方	6
	26	京橋区越前堀1-4 精華堂内	7
	27		8
桜痴居士又号 夢の屋	51	日本橋区築地1-3	1
福永恭助	49	神奈川県鎌倉町扇ヶ谷239	20
	52	鎌倉市扇ヶ谷239	21
福永挽歌	26	下渋谷226	7
	27		8
	36	中渋谷47	12
	37		13
福本日南	50	福岡市外住吉	3
	51		4
	53		6
	55		7
	56		8
	61	小石川区指ヶ谷147	9
	65		12
藤井真澄	35	北多摩郡狛江村字和泉	14
	36		15
	37	京都市上京区大将軍鷹司町	16
	39	狛江村和泉930	17
	40		18
	42	北多摩郡狛江村930	19

人名	年齢	住所	資料番号
藤沢古雪	33	牛込区払方町25	4
	35	小石川区関口台町34	6
	37		7
	38		8
	1918	千駄ヶ谷町856	9
藤沢清造	37	上荻窪606	16
	39		17
	40		18
	42	本郷区千駄木町96 愛晟館	19
藤沢桓夫	24	本郷区森川町1 泰明館内	17
	25	四谷区大番町80 松田伊之介気付	18
	27	長野県諏訪郡富士見高原療養所	19
	37	大阪市南区竹屋町9	21
藤島一虎	46	品川区西大崎4-781	21
藤島武二	51	本郷区駒込曙町15	10
	55	本郷区曙町15	12
	56		13
藤代素人	39	小石川区原町12	3
	40		4
	42		6
	44		7
	45		8
藤陰隠士（藤本真）	17	神田区猿楽町2	1
藤森淳三	28	杉並町阿佐ヶ谷687	15
	29	阿佐ヶ谷603	16
	31	杉並町阿佐ヶ谷小山84	17
	32	長崎町西向2519	18
	34		19
藤森成吉	29	小石川区雑司ヶ谷町115 日本少年寮前	11
	30	小石川区雑司ヶ町115	12
	31	小石川区雑司ヶ谷町115	13
	32		14
	33	小石川区雑司ヶ谷115	15
	34	小石川区雑司ヶ谷町115	16
	36		17
	37		18
	39	中新井村2230 岡倉方	19
	46	豊島区池袋2-1243	20
	49	外高田村鶉山1503	21
二葉亭四迷（長谷川辰之助）	28	神田区中猿楽町9	1
二葉亭四迷	43	本郷区西片町10に34	3
	44		4
舟木重信	28	中渋谷51	11
	29		12
	30		13
舟橋聖一	24	下落合435	17
	25		18
	27		19
	34	淀橋区下落合1-435	20

人名	年齢	住所	資料番号
舟橋聖一	37	淀橋区下落合1-435	21
古沢安二郎	29	牛込区横寺町36	19
	39	杉並区和泉町404	21
古谷綱武	33	杉並区東田町2-154	21
北条秀司	39	麻布区笄町155	21
保篠龍緒	39	小石川区大塚窪町27	19
星野天知	45	鎌倉笹目	3
	46		4
星野麦人	41	牛込区築地町12	9
	45	牛込区築土町12	12
	46		13
細越夏村	26	岩手県盛岡市内加賀野小路3	6
	28	牛込区矢来町8	7
	29		8
細田源吉	30	牛込区戸塚町13	11
	31	牛込区下戸塚町13	12
	32		13
	33	豊多摩郡上荻窪655	14
	34		15
	35	西荻窪655	16
	37	上荻窪655	17
	38		18
	40	井荻町西荻窪655	19
	47	杉並区西荻窪2-123	20
	50		21
細田民樹	29	牛込区北町41 大正館方	11
	30	牛込区北町41大正館	12
	31	牛込区北町41 大正館	13
	32	池袋1241	14
	33	千葉県大原町在御室山崎別荘	15
	34	東中野1063	16
	36	吉祥寺山谷2658	17
	37		18
	39		19
	46	吉祥寺2658	20
	49	杉並区吉祥寺町山谷2-658	21
堀内新泉	34	下谷区谷中三崎町11	3
	35		4
	37		6
	39		7
	40		8
	45	本郷区駒込千駄木町245	9
堀木克三	33	本郷区森川町1-1 常盤木館内	15
	34	相州大磯	16
	36	相州大磯町	17
	37	神奈川県大磯町	18
	39	目黒目黒ﾎﾃﾙ内	19
堀口大学	26	中渋谷南平台56	9
堀口大學	30	南米ﾌﾞﾗｼﾞﾙ日本公使館	12
	31	南米ﾌﾞﾗｼﾞﾙ日本公使館	13
	33	小石川区小日向水道町108	15
	34		16

人名	年齢	住所	資料番号
堀口大學	36	小石川区小日向水道町108	17
	37		18
	39		19
堀口大学	46	牛込区新小川町江戸川ｱﾊﾟｰﾄ	20
	49	牛込区新小川町2-10 江戸川ｱﾊﾟｰﾄ	21
紫山人　又号　煙亭（堀 正之）	25	京橋区南槙町3　竹下方寓	1
堀紫山	40	芝区宮本町30	3
	41		4
	43		6
	45		7
	46		8
堀辰雄	27	本所区新小梅町2-1	19
本荘可宗	40	和田堀町和田1104	19
本庄桂輔	40	豊島区池袋町3-1459	21
本多顕彰	43	杉並区天沼1-286	21
本間久雄	26	小石川区高田豊川町37	7
	27		8
	32	小石川区高田老松町17	9
	35		11
	36		12
	37		13
	38	小石川区雑司ヶ谷町144	14
	39		15
	40		16
	42		17
	43		18
	45		19
前島密	67	小石川区関口町207	2
前田晁	33	牛込区通寺町11 赤城館	7
	34		8
	39	目白上り屋敷狐塚	9
	42	目白上り屋敷狐塚865	11
	43	高田町狐塚	12
	44		13
	45	目白上り屋敷狐場865	14
	47	下荻窪370	16
	49		17
	50		18
	52		19
香雲山人（前田健次郎）	51	下谷区御士町1-35	1
前田河広一郎	36	小石川区雑司ヶ谷町119 渋谷方	14
	37	千葉県大原町	15
	38	杉並町高円寺611	16
	40	中野西町3588	17
	41	杉並町高円寺620	18
	43		19
前田曙山	36	芝区三田松阪町38	3
	37		4
	39		6
	41		7

人名	年齢	住所	資料番号
前田曙山	42	芝区三田松阪町38	8
前田鉄之助	42	杉並区永福町279	20
前田夕暮	27	麹町区飯田町326 片井方	6
	29	西大久保201	7
	30		8
	35	西大久保224	9
	38	西大久保128	11
	39		12
	40		13
	41		14
	42		15
	43		16
	45		17
	46		18
	48		19
	55	杉並区荻窪1-165	20
前田林外	43	芝区三田松阪町38	3
	44		4
	46		6
	48		7
	49		8
	54	神田区三崎町3-1	9
	58	神田三崎町3-1	12
	59		13
牧野信一	28	下谷区上野桜木町1377	14
	29	杉並町阿佐ヶ谷754	15
	30	阿佐ヶ谷754	16
	32	相州小田原町新玉町2	17
	33	神奈川県小田原町新玉町2-400	18
	35	大森山王2685	19
槇本楠郎	43	杉並区吉祥寺378	21
正岡容	37	江戸川区小岩町3-1617	21
正岡芸陽	26	大阪市東区小橋東の町48	3
	27		4
	29		6
	31		7
	32		8
正木不如丘	44	長野県諏訪郡上諏訪町	19
	51	長野県上諏訪町湖心荘	20
	54		21
正富汪洋	29	赤坂区青山高樹町14-1	6
正富由太郎	31	代々木名教学校校宅	7
	32		8
正富汪洋	37	中渋谷614	9
	41		12
	42		13
	45	阿佐ヶ谷603	16
	47	代々木富ヶ谷1455	17
	48		18
	50		19
	60	杉並区上高井戸3-786	21
正宗得三郎	39	中野町大字中野1745	12
	40	中野町大字中野1754	13
正宗白鳥	28	本郷区森川町1 幸田方	3
	29		4
	31	本郷区東片町119	5

人名	年齢	住所	資料番号
正宗白鳥	31	本郷区森川町1 幸田方	6
	33		7
	34		8
	39	麻布区我善坊町10	9
	42	岡山県和気郡伊里村穂浪	11
	43		12
	44		13
	45	神奈川県大磯町台町	14
	46		15
	47		16
	49		17
	50		18
	52		19
	59	大森区南千束町237	20
松居松翁	56	長崎村荒井1721	16
	58	長崎町荒井1721	17
	59		18
	61	長崎荒井1902	19
松井柏軒	41	京橋区銀座2-12	3
	42		4
	44		6
	46		7
	47		8
松岡譲	27	牛込区早稲田南町7 夏目方	9
	35	京都市鹿ヶ谷桜谷町74	16
	37	大井町元芝813	17
	40		19
松崎天民	24	大坂市北区曽根崎新地3-62	2
	44	中渋谷839	12
	45		13
松島剛	48	赤坂区青山南町3-53	2
松永延造	30	横浜市扇橋1-1	15
	31	横浜市扇町1-1	16
	33		17
	34		18
松原至文	23	小石川区雑司ヶ谷町119	3
	24		4
	26	牛込区早稲田鶴巻町5	5
	26	小石川区雑司ヶ谷町119	6
	28		7
	29		8
二十三階堂主人（松原岩五郎）	26	神田区今川小路1-1 小松崎方寓	1
松原二十三階堂	41	本郷区駒込千駄木林町85	3
	42		4
	44		6
松原至大	48	世田谷区玉川奥沢町3-237	21
松村英一	33	小石川区大塚坂下町82	12
	34		13
	37		16
松村みね子	50	大森町新井宿1352	17
	51		18
	53		19
松本雲舟	40	西巣鴨宮仲2847	12
松本雲舟	41	西巣鴨宮仲2847	13
松本苦味	28	本宅:日本橋区中洲町39 別宅:本所区松井町1-24	9
	32	日本橋区中州町39	12
	33		13
松本恵子	50	中野区城山町17	21
松本泰	31	大正5年再度渡英、今尚ほ滞在中	9
	35	芝区二本榎西町2	12
	36		13
	44	中野町東中野2405	19
松山省三	34	京橋区日吉町20	10
	38		12
	39		13
真船豊	36	神奈川県藤沢町鵠沼7327	20
間宮茂輔	27	馬込村中井1543	16
	29	碑衾町衾59	17
	30		18
	32		19
	42	世田谷区世田谷2-1162	21
真山青果	30	戸塚村字源兵衛138	4
	32	相模酒匂	5
	32	相模国酒匂	6
	34	横浜市外本牧村原1052	7
	35		8
	40	牛込区矢来町62	9
	44		12
	45		13
	47	牛込区中里町25	15
	48		16
	50	小石川区第六天町48	17
	51		18
	53		19
	60		20
丸岡明	34	渋谷区穏田1-12	21
丸山晩霞	51	本郷区駒込神明町14	9
	55		12
	56		13
三上於菟吉	31	牛込区矢来町三山里21	12
	32		13
	34	麹町区中六番町3	15
	35		16
	37	牛込区左内町31	17
	38		18
	40	牛込市ヶ谷左内町31	19
	47	赤坂区檜町3	20
	50		21
三上秀吉	48	世田谷区経堂町228 緑雲荘	21
美川きよ	38	麹町区六番町2-3	20
三木清	41	杉並区高円寺5-539	20
	44	杉並区高円寺4-539	21
三木竹二（森篤次郎）	25	本郷区駒込千駄木町21	1
柳塢亭主人	26	芝区南佐久間町1-1	1

人名	年齢	住所	資料番号
（右田寅彦）			
三木露風	19	小石川区雑司ヶ谷町87 目白館	4
	21	牛込区袋町12	5
	21	牛込区袋町12 信陽館方	6
	23	大久保村百人町121 松	7
	24	田方	8
	29	池袋475	9
	32	北海道上磯郡石別ﾄﾗﾋﾟｽﾄ修道院内	11
	33	北海道上磯郡当別ﾄﾗﾋﾟ	12
	34	ｽﾄ院内	13
	37	戸塚町諏訪206	16
	39	吉祥寺牟礼582	17
	40		18
	42		19
	49	市外三鷹村牟礼582	20
三島章道	25	千駄ヶ谷町762	12
	26		13
	44	渋谷区千駄ヶ谷4-539	21
三島霜川	31	巣鴨町上駒込28	3
	32		4
	34	本郷区駒込動坂町110	5
	34	巣鴨町上駒込28	6
	36		7
	37		8
	42	池袋字本村	9
水木京太	35	赤坂区氷川町27	18
	37		19
	44		20
水谷準	34	牛込区小川町江戸川ｱﾊﾟｰﾄ	20
水谷竹紫	36	牛込区早稲田鶴巻町2-1	9
	40	大森新井宿1487	12
	41		13
	49	牛込区余丁町103	19
水谷不倒	49	牛込区天神町26	3
	50		4
	52		6
	54		7
	55		8
	60	牛込区津久戸町6	9
水谷まさる	37	西荻窪上井草1380	19
	47	杉並区井荻町3-2	21
水野成夫	42	杉並区永福町426	21
水野仙子	22	代々木初代607	6
	24	渋谷189	7
	25		8
	30	上大崎336 川浪方	9
水野広徳	63	世田谷区三軒茶屋143	20
水野葉舟	24	西大久保村新田495	3
	25		4
	27	西大久保154	5
	27	西大久保村新田495	6
	29		7

人名	年齢	住所	資料番号
水野葉舟	30	西大久保村新田495	8
	35	荏原郡蛇塚村蛇窪152	9
	38	荏原郡平塚村蛇窪152	11
	39		12
	40		13
三角寛	35	豊島区雑司ヶ谷1-367	20
	38		21
水守亀之助	35	牛込区矢来町3	11
	36	牛込区早稲田鶴巻町110 新免方	12
	37		13
	38	牛込区矢来町三中の丸2	14
	39		15
	40		16
	42	牛込区矢来町66	17
	43	牛込区弁天町60	18
	45		19
溝口白羊	26	千駄ヶ谷町425	3
	27		4
	29		6
	31		7
	32		8
	37	荏原郡駒沢村201	9
三井甲之	27	本郷区森川町1 桜館方	6
	29	牛込区市ヶ谷甲良町15	7
	30		8
	35	山梨県中巨摩郡松島村	9
	39		12
	40		13
三石勝五郎	36	本郷区駒込林町142 桝方	14
三津木春影	26	本郷区龍岡町33長栄館方	3
	27		4
	29		6
	31		7
	32		8
三津木貞子	39	小石川区雑司ヶ谷町112 手塚方	12
	40		13
満谷国四郎	36	日暮里	5
	44	北豊島郡日暮里村128	10
	48	落合村下落合753	12
	49		13
光用穆	31	小石川区白山前町4	9
三富朽葉	21	牛込区筑土前町31	6
	23	牛込区津久戸町31	7
	24		8
水上滝太郎	31	大阪市東区島町1-7 白樫くに方	9
	34	芝区白金三光町435	11
水上瀧太郎	35	芝区三田4-31	12
	36		13
水上滝太郎	37	麹町区下六番町	14
	38	麹町区下六番町29	15
	39		16
	41		17
	42		18
	44		19
	51	麹町区富士見町1-18	20
湊邦三	43	渋谷区代々木本町743	21

人名	年齢	住所	資料番号
		鳳友荘	
南川潤	28	大森区山王2-1845	21
南薫造	35	代々木山谷	10
	39	大久保百人町263	12
	40		13
南新二（谷村要助）	57	浅草区田中町9	1
三宅幾三郎	29	牛込区市ヶ谷台町8	16
	31		17
	32	牛込区市ヶ谷富久町83	18
三宅克己	44	豊多摩郡淀橋町柏木407	10
	48	淀橋柏木407	12
	49		13
花圃女史又号　ひさご（田辺龍子）	24	麹町区下二番町50	1
三宅花圃	39	赤坂区新坂町82	3
	40		4
	42		6
	44		7
	45		8
三宅三郎	40	麻布区霞町5	21
三宅周太郎	32	大阪毎日新聞社会部内	14
	33	四谷区大番町80	15
	34	四谷区塩町1-19	16
	36	四谷区麹町10-7	17
	37	麹町区麹町10-17	18
	39	高円寺馬橋244	19
	46	豊島区池袋3-1637	20
	49	豊島区池袋町3-1637	21
三宅青軒	43	芝区今入町26	3
	44		4
	46		6
	48		7
	49		8
三宅雄二郎	48	赤坂区新坂町82	4
三宅雪嶺	50	赤坂区坂町82	5
三宅雄二郎	50	赤坂区新坂町82	6
三宅雪嶺	52	赤坂区新坂町82	7
	53		8
	58		9
	62	代々木初台5548	12
	63		13
三宅やす子	36	牛込区若松町105	16
	38	砧村成城学園前	17
	39		18
	41		19
湖処子　又号西口隠者（宮崎八百吉）	28	牛込区市ヶ谷富久町105	1
宮崎湖処子	43	北豊島郡滝野川村中里262	3
	44		4
	46		6
	48		7
	49		8

人名	年齢	住所	資料番号
三昧道人（宮崎璋蔵）	33	南豊島郡日暮里村元金杉村1072	1
宮崎三昧	48	南葛飾郡寺島村42	3
	49		4
	51		6
	53		7
	54		8
	59	千駄ヶ谷町591	9
宮島新三郎	29	牛込区原町3-59	11
	30		12
	31		13
	32	西大久保20	14
	33	外遊中	15
	34	大久保町字西大久保20（英国留学中。留守宅）	16
	36	西大久保20	17
	37	高井戸町松庵143	18
	39	高井戸字松庵143	19
宮嶋資夫	38	牛込区戸山町24	14
	39		15
	40	牛込区若松町138	16
	42	牛込若松町138	17
	43		18
	45	記載なし	19
宮地嘉六	37	本郷区駒込坂下町115町田方	11
	38		12
	39		13
	40	滝野川西ヶ原732	14
	41		15
	42	滝野川304	16
	44	滝野川御代之台1346	17
	45	落合町葛ヶ谷15	18
	47		19
宮原晃一郎	40	下渋谷619	12
	41		13
	44	弦巻供養塚622-6	16
	46		17
	47	神奈川県鎌倉町塔之辻197	18
中條百合子	19	本郷区駒込林町21	9
	22		11
	23	本郷区駒込片町10	12
	24		13
	25	赤坂区青山北町1-8	14
	26	小石川区高田老松町58	15
	27	駒沢新町府営住宅地	16
	29	駒沢新町府営住宅地（外遊中）	17
	30	駒沢新町府営住宅地	18
	32	本郷区菊坂町菊富士ホテル	19
宮本百合子	42	豊島区目白3-3570	21
宮本和吉	29	麹町区富士見町2-32	7
	30		8
三好十郎	36	杉並区方南町517	20
三好達治	38	神奈川県鎌倉町極楽寺561	20

人名	年齢	住所	資料番号
武川重太郎	25	本郷区上富士前町3 平和館内	16
	27		17
	30	赤坂区青山南町5-93 北斗星内	19
	40	芝区日本榎2-3	21
武者小路実篤	27	麹町区元園町1-38	7
	28		8
	33	千葉県我孫子局区内根戸	9
	36	宮崎県児湯郡木城村高城	11
	37	宮崎県児湯郡木城局区内新しき村	12
	38		13
	39	宮崎県児湯郡木城村高城	14
	40		15
	41	奈良市新門町	16
	43	麹町区下二番町4	17
	44	下落合1731	18
	46	千歳村祖師ヶ谷441	19
	53	三鷹村牟礼359	20
武藤直治	33	巣鴨町宮仲1623	18
弦斎居士（村井寛）	29	深川区福住町9	1
村井弦斎	47	相模国平塚停車場前	6
	49		7
	50		8
	55	神奈川県平塚町	9
村岡花子	48	大森区新井宿6-613	21
ちぬの浦浪六（村上信）	27	本所区元町15	1
村上浪六	42	下谷区下根岸町82	3
	43		4
	45		6
	47		7
	48		8
	53		9
村松梢風	40	神田区材木町2	18
	42		19
	52	渋谷区千駄ヶ谷2-424	21
村松正俊	31	麻布区富士見町43	16
	33		17
	34		18
	36	渋谷町永住19	19
村山知義	27	上落合186	17
	28		18
	30		19
	37	淀橋区上落合1-186	20
	40		21
室生犀星	29	田端163	9
	32	田端523	11
	33	田端571	12
	34		13
	35	金沢市川岸町12	14
	36	田端571	15
	37	田端608	16
	39	金沢市池田町4-22	17
	40	大森馬込村谷中1077	18

人名	年齢	住所	資料番号
室生犀星	42	大森馬込町谷中1077	19
	49	大森区馬込東3-763	20
室伏高信	30	大森不入斗471	12
	31		13
	49	渋谷区代々木西原896-53	21
望月百合子	41	新京特別市百草胡同307	21
本山荻舟	50	京橋区南鞘町5	19
	60	品川区南品川2-412	21
百田宗治	28	巣鴨町2-50	11
	31	大阪府下住吉公園西子居南	14
	32	世田ヶ谷下北沢809 福田方	15
	33	中野2756	16
	35	中野桃園3342	17
	36		18
	38	中野桃園39	19
	45	中野区小淀町31	20
	48		21
森岩雄	30	渋谷町羽沢98	18
	32	千駄ヶ谷町原宿220	19
鷗外漁史（森林太郎）	30	本郷区駒込千駄木町21	1
森鷗外	45	本郷区千駄木町22	3
	46		4
	48		5
	48		6
	50		7
	51		8
	56		9
	59		11
	60		12
森槐南	44	赤坂区青山南町6-102	3
	45		4
	47		6
森川葵村	21	下谷区入谷町116	6
	23		7
	24		8
森暁紅	36	浅草区旅籠町1-4	9
	40	浅草区須賀町2	12
	41		13
森口多里	26	牛込区弁天町110	9
	30	神田区小川町1 白土方	12
	31		13
森下雨村	39	小石川区小日向台町3-105	18
	48	市外吉祥寺615	20
思軒居士（森田文蔵）	31	下谷区下根岸町398	1
森田信義	34	神戸市北野町3-8	19
	44	世田谷区成城町251	21
森田草平	29	牛込横寺町正定院	5
	29	牛込区横寺町正定院	6
	31	牛込区矢来町62	7

人名	年齢	住所	資料番号
森田草平	32	牛込区矢来町62	8
	37		9
	41		12
	42		13
	43	西巣鴨町字堀の内982	14
	44	小石川区表町109	15
	45	小石川区水道端町2-64	16
	47	神奈川県鎌倉材木座358	17
	48	神奈川県鎌倉町一の鳥居	18
	50	神奈川県鎌倉町1229	19
	57	目黒区上目黒1-143	20
	60	牛込区矢来町62	21
森田たま	44	牛込区矢来町41	20
森田恒友	37	代々木山谷111	10
	41		12
	42		13
森本巌夫	29	長崎村荒井1735	16
	31	長崎町荒井1735	17
	32		18
	34	碑文谷171	19
森本覚丹	45	淀橋区西落合3-931	21
矢口達	29	牛込区若松町131	9
	33	高田町高田1554	12
	34	池袋大原1378	13
	42	井荻町上井草1431	19
安井曾太郎	30	高田村字高田1673	10
	34	高田町字高田1673	12
	35		13
八杉貞利	26	本所区横網町	2
保高徳蔵	42	浅草区茅町2-12	19
安田徳太郎	43	赤坂区青山南町1-4	21
安成貞雄	25	四谷区荒木町10	6
	27	麹町区三番町9 小金館	7
	28	方	8
	33	麹町区三番町64 第一福四万館	9
	37	赤坂区青山北町5-43	12
	38		13
安成二郎	32	大久保百人町212	9
	36		12
	37		13
	40	杉並町阿佐ヶ谷277	16
	42		17
	43		18
	45		19
	55	大久保百人町213	21
矢田挿雲	46	通信、報知新聞宛	17
	47	通信、報知新聞社宛	18
	49	大森不入斗471	19
矢田津世子	31	淀橋区下落合4-1986	20
柳川春葉	30	牛込区東五軒町9	3
	31		4
	33	牛込区東五軒町53	5
	33	牛込区東五軒町9	6
	35		7
	36		8

人名	年齢	住所	資料番号
柳川春葉	41	牛込区北町37	9
柳敬助	37	北豊島郡雑司ヶ谷村374	10
	41	雑司ヶ谷374	12
	42		13
柳沢健	29	横浜市西戸部町池の坂郵便局官舎第一号	9
	32	兵庫県武庫郡芦屋茶屋芦屋	11
	33	兵庫県武庫郡芦屋 目下仏国留学中	12
	34	新井町入新井宿34	13
	35	在仏国、日本大使館	14
	37	目下外遊中	16
	39	会津若松市浄見寺町1 柳沢良三方(目下巴里大使館勤務中)	17
	40	会津若松市栄町3-1 柳沢良三方	18
	42	田端533 柳沢良衛方	19
	52	兵庫県武庫郡芦屋茶屋 田島方	21
柳田国男	32	牛込区市ヶ谷加賀町2-16	3
	33		4
	35		6
	37		7
	38		8
柳原燁子	46	高田町3626	19
宮崎燁子(柳原白蓮)	56	豊島区目白3-3630	21
柳宗悦	29	千葉県我孫子町南作及び東京麹町区富士見町2-4	9
	32	麹町区富士見町2-4	11
	33	千葉県我孫子町南作	12
	34	赤坂区高樹町12-7	13
	37	京都市吉田神楽岡3	16
	39		17
	40		18
	42		19
龍渓居士(矢野文雄)	42	赤坂区表町3-2	1
矢野龍渓	57	千駄ヶ谷2-1	3
	58		4
山岡荘八	34	世田谷区若林町110	21
山縣悌三郎	44	北豊島郡巣鴨町字上駒込村189	2
山上貞一	32	大阪市天王寺区松ヶ鼻81	19
	42	兵庫県武庫郡瓦木村新田字甲子園口561-2	21
山岸荷葉	31	日本橋区浜町2-12	3
	32		4
	34		6
	36		7
	37		8

人名	年齢	住所	資料番号
山岸荷葉	42	日本橋区浜町2-132	9
山岸光宣	62	世田谷区北沢4-404	21
山崎斌	34	大阪市東淀川区十三東の町143	16
	39	上大崎506	19
	49	赤坂区榎町4 草木屋	21
山崎楽堂	33	牛込区築土八幡町24	9
山崎紫紅	33	横浜市戸部町2	4
	35	横浜市戸部町2-40	5
	35	横浜市戸部町2-41	6
	37		7
	38		8
	43		9
	47		12
	48		13
	51		16
	56	横浜市中区戸部町2-18	19
山路愛山	43	中渋谷字宇田川902	3
	44		4
	46	中渋谷宇田川902	5
	46	中渋谷字宇田川902	6
	48		7
	49		8
山田清三郎	30	雑司ヶ谷金山339	16
	32	杉並町高円寺61	17
	33	落合町上落合791	18
	35	上落合791	19
	45	杉並区成宗1-43	21
山田珠樹	48	鎌倉市雪-下東御門799	21
美妙斎主人（山田武太郎）	24	神田区平永町9	1
山田武太郎	34	北豊島郡王子村	2
山田美妙	39	王子字岸842	3
	40		4
	42	本郷区上富士前町15	5
	42	王子字岸842	6
山中峯太郎	46	北豊島郡中新井村587	19
山内封介	41	和田堀町和田904	18
山内義雄	31	相州鎌倉町長谷向原	15
	32	相州鎌倉深沢笛田	16
	34	下谷区上野桜木町38	17
	35	神奈川県鎌倉深沢村笛田	18
	37	神奈川県鎌倉町長谷287	19
	47	牛込区新小川町2-10 江戸川ｱﾊﾟｰﾄ	21
山村耕花	32	北品川本宿12	9
山村暮鳥	34	水戸市鷹匠町	9
	37	福島県平町外北好間上野	11
	38	茨城県磯浜明神町鬼坊	12
	39	裏別荘	13
山本鼎	36	田端500	10
	40	日暮里1060	12
	41		13
山本周五郎	38	大森区馬込町東3-843	21

人名	年齢	住所	資料番号
山本修二	47	京都市左京区北白川伊織町87	21
山本有三	34	本郷区駒込神明町322	11
	35		12
	36		13
	37	牛込区市ヶ谷台町20	14
	38		15
	39	吉祥寺野田南	16
	41	吉祥寺野田南1820	17
	42		18
	44	吉祥寺1820	19
	51	三鷹村下連雀91	20
	54	府下北多摩郡三鷹村下連雀91	21
山本露葉	29	下谷区中根岸町69	4
	31		6
	33		7
	34		8
	39		9
山脇信徳	36	本郷区駒込林町1 鳳林館	12
	37		13
湯浅克衛	28	中野区本郷町29 笠原方	20
	31	中野区宮里11	21
結城素明	35	千駄ヶ谷841	5
	43	本郷区西片町10へ-4	10
行友李風	54	大阪市西成区玉出本通1-58	19
	61	大阪市西成区玉出新町通2-14	20
	64	大阪府西成区玉出新町通2-14	21
横井時雄	45	大坂市大坂新報社	2
横瀬夜雨	29	茨城県真壁郡大宝村	3
	30		4
	32		6
	34		7
	35		8
	40	茨城県真壁郡大宝村字横根	9
	44		12
	45		13
	51	茨城県真壁郡大宝村	18
	53		19
横溝正史	27	小石川戸崎町46 博文館気付	18
	36	長野県上諏訪町湖柳町747	20
横光利一	26	小石川区餌差町34 野村方	14
	27	中野上町2802	15
	28	麹町区下六番町 文藝春秋社気付	16
	30	杉並町阿佐ヶ谷290	17
	31	世田ヶ谷町下北沢145	18
	33	世田ヶ谷下北沢145	19
	40	世田谷区北沢2-145	20
	43		21
横山健堂	40	本郷区駒込神明町343	7

人名	年齢	住所	資料番号
横山健堂	41	本郷区駒込神明町343	8
	46	本郷区駒込神明町364	9
	50	本郷区駒込神明町341	12
横山健堂	51	本郷区駒込神明町341	13
横山大観	42	常陸五浦	5
横山美智子	33	渋谷区代々木大山1059	20
	36	渋谷区代々木大山町1059	21
与謝野晶子	29	千駄ヶ谷村549	3
	30		4
	32	神田区東紅梅町2	5
	32	千駄ヶ谷村549	6
	34		7
	35		8
	40	麹町区富士見町5-9	9
	43		11
	44		12
	45		13
	46		14
	47		15
	48	下荻窪370	16
	50		17
	51		18
	53		19
	60	杉並区荻窪2-119	20
与謝野寛	34	千駄ヶ谷村549	3
	35		4
	37	神田区東紅梅町2	5
	37	千駄ヶ谷村549	6
	39		7
	40		8
	45	麹町区富士見町5-9	9
	49		12
	50		13
	53	下荻窪370	16
	55		17
	56		18
	58		19
吉井勇	24	麹町区飯田町30	6
	26	相模国鎌倉長谷快々亭	7
	27	方	8
	32	千駄ヶ谷町902	9
	35	相州片瀬西方新屋敷	11
	36	四谷区内藤町1	12
	37		13
	38	淀橋町角筈430	14
	39	相州鎌倉町長谷原ノ台	15
	40	淀橋町角筈420	16
	42	麹町区平河町5-14	17
	43	渋谷町金王35	18
	45	麹町区下六番町10	19
	52	静岡市中田町2-41	20
吉植庄亮	42	千葉県印旛郡本埜村	16
	47	千葉県印幡郡本埜村	19
	54	千葉県印旛郡本埜村下井34	20
吉江孤雁	27	牛込区榎町1	3
	30	西大久保205	5

人名	年齢	住所	資料番号
吉江孤雁	38	仏国巴里大使館気付	9
	41	日暮里渡邊町1040	11
	42		12
	43		13
吉江喬松	44	日暮里渡邊町1040	14
	45		15
	46	相州鎌倉長谷558	16
	48	相州鎌倉坂ノ下原ノ台238	17
	49	神奈川県鎌倉町長谷238	18
	51		19
吉川英治	37	上落合553	18
	39	芝公園	19
	46	赤坂区表町3-24	20
	49		21
吉田甲子太郎	37	馬込東1000	19
	47	大森区馬込町東2-1075	21
吉田絃二郎	32	本郷区駒込林町216	9
	35	滝ノ川町286	11
	36	滝の川286	12
	37		13
	38	巣鴨町3-7 石井方	14
	39	本郷区駒込林町216	15
	40		16
	42		17
	43		18
	45		19
	52	世田谷区玉川瀬田町546	20
吉田暎二	30	千葉県市川町平田172	19
	40	中野区上高田1-76 芙容荘	21
吉田白甲	29	中田端156	6
	31	田端116	7
	32		8
吉野臥城	32	本郷区根津須賀町20	4
	34	本郷区弓町1-2	6
	36	本郷区弓町1-21	7
	37		8
吉屋信子	26	本郷区根津片町14	12
	27		13
	28	本郷区駒込林町196	14
	30	下落合2108	16
	32	下落合2108(目下外遊中。留守宅)	17
	33	下落合2108	18
	35		19
	42	牛込区砂土原町3-18	20
	45		21
学海居士（依田百川）	59	神田区小川町1	1
依田学海	74	神田区小川町1	3
	75		4
依田秋圃	53	目黒区上目黒4-2128	20
米川正夫	27	露都ﾍﾟﾄﾛｸﾞﾗｰﾄﾞ在留中	9
	30	柏木1012	11
	31		12

人名	年齢	住所	資料番号
米川正夫	32	柏木1012	13
	33		14
	34	中高井戸35	15
	35	高井戸村中高井戸35	16
	37	高井戸町中高井戸35	17
	38		18
	40	中高井戸35	19
	50	杉並区西高井戸2-30	21
米光関月	33	下谷区根岸笹の雪横町	3
	34		4
	36		6
	38		7
	39		8
万鉄五郎	33	小石川区西原町1-8	10
萬鉄五郎	37	相模国茅ヶ崎天王山木村別荘	12
	38		13
蘭郁二郎	28	鎌倉市小町333 遠藤敏夫方	21
龍胆寺雄	28	目白文化村目白会館内	18
	30	杉並町高円寺43	19
	37	神奈川県小田急沿線中央林間市	20
	40	神奈川県小田急沿線中央林間都市	21
若月紫蘭	39	本郷区西片町10	9
	43		12
	44	小石川区駕籠町115	13
若松しづ子（巌本かし子）	28	麹町区三番町67	1
若山喜志子	41	沼津市市道町	18
	43		19
	50	豊島区雑司ヶ谷1-23	20
若山牧水	23	牛込区原町2-59 阿久津方	4
	25		6
	27	下渋谷750佐藤方	7
	28		8
	33	巣鴨町天神山1250	9
	36	静岡県沼津在楊原村	11
	37	静岡県沼津町在 楊原	12
	38	上村香貫	13
	39	沼津市千本浜	14
	40		15
	41	沼津市市道町	16
和気律次郎	30	大阪府下浜寺公園 毎日倶楽部	9
	34	奈良市登大路 田村千代方	12
	35		13
	43	大阪市天王寺区上汐町1-23	19
若山牧水	53	西宮市昭和通98	21
鷲尾雨工	46	牛込区戸山町7	20
	49	淀橋区諏訪町6	21
鷲山第三郎	48	大森区北千束町618	21
和田英作	36	麻布区霞町26	5
	44	麻布区笄町8	10
	48		12
	49		13

人名	年齢	住所	資料番号
和田三造	35	赤坂区台町3	10
	39		12
	40		13
和田伝	31	原町田 南大谷	19
渡辺一夫	40	本郷区真砂町24	21
渡辺霞亭	43	大阪市東区玉造唐居町	3
	44		4
	46		6
	48		7
	49		8
	54	大阪市玉造唐居町166	9
	58		12
	59		13
渡辺均	37	大阪市北区堂島北町35	19
	47	大阪市南区南炭屋町16	21
渡辺黙禅	61	牛込区白銀町29	19
	71	板橋区板橋3-406	21
綿貫六助	46	練馬羽沢3510	16
	51	長崎町3846	19
渡部審也	43	中渋谷425	10
	47	渋谷315	12
	48		13
渡平民	25	六郷村高畠644	13
和辻哲郎	29	神奈川県高座郡藤沢村鵠沼藤ヶ谷	9
	32	芝区三田綱町1	11
	33		12
	34		13
	35	中野町1018	14
	37	京都市上京区若王子神苑内	16
	39	京都上京区鹿谷寺前22（目下外遊中。留守宅）	17
	40	京都市左若王寺神苑内	18

【付録】

近代作家住所データベースの集計方法

山岸　郁子

近代作家住所データベースの集計方法

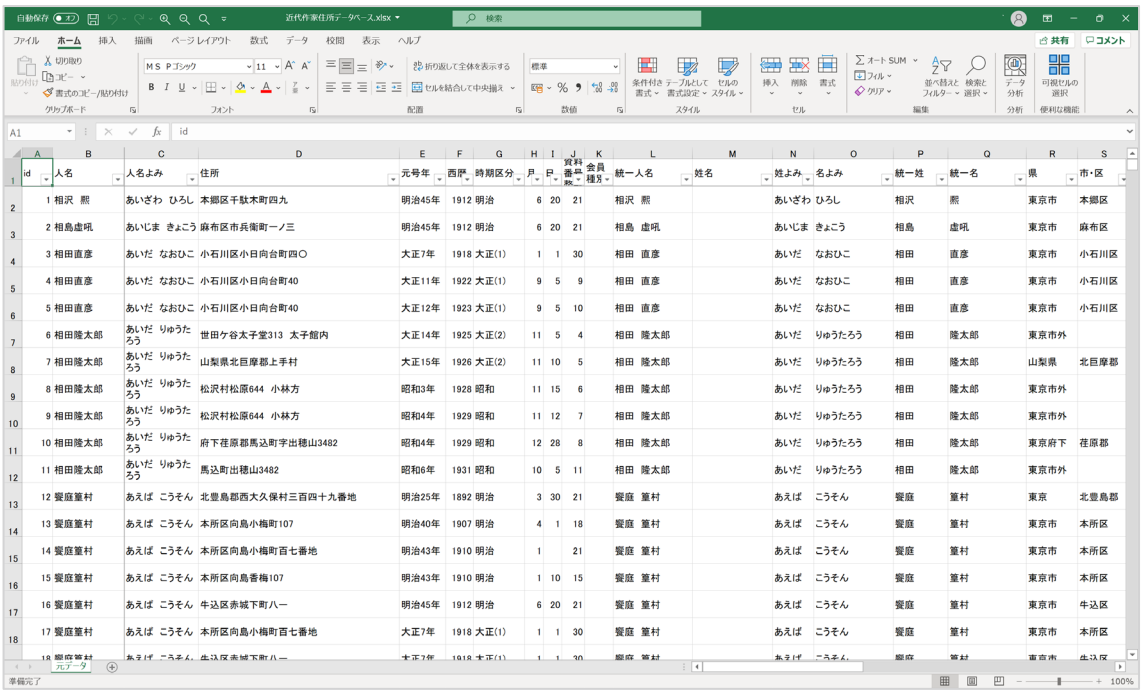
以下では、近代作家データベースを Microsoft Excel で集計する方法について説明する。使用するソフトウェアは Windows 版 Excel であるが、Mac 版でも概ね同じ操作で集計することができる。

なお、住所データベースは 73 頁にある資料番号 1〜3、5、11〜21 の段階で作成している。

①ピボットテーブルの作成

近代作家住所データベースのファイルを開くと以下のような画面となる（図１）。データベースは 33 項目（列）×8384 件（行）のデータとなっている。34 列目（AH 列）より右にあるのはデータの定義リストである。

図１　近代作家住所データベース

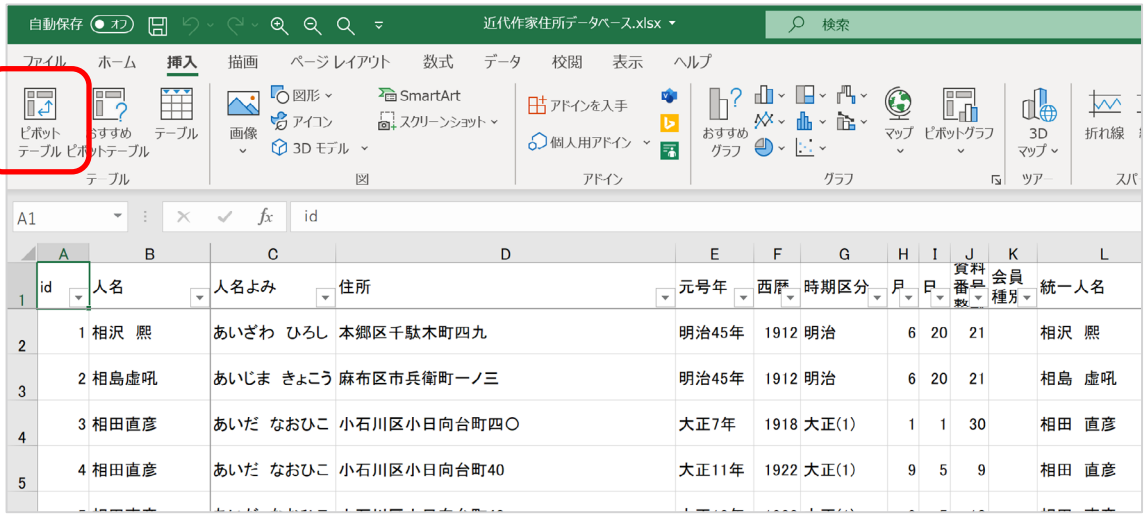


id	人名	人名よみ	住所	元号年	西暦	時期区分	戸	戸	資料番号	会員種別	統一人名	姓名	姓よみ	名よみ	統一姓	統一名	県	市・区
1	相沢　熙	あいざわ　ひろし	本郷区千駄木町四九	明治45年	1912	明治	6	20	21		相沢　熙		あいざわ	ひろし	相沢	熙	東京市	本郷区
2	相島虚吼	あいじま　きょこう	麻布区市兵衛町一ノ三	明治45年	1912	明治	6	20	21		相島　虚吼		あいじま	きょこう	相島	虚吼	東京市	麻布区
3	相田直彦	あいだ　なおひこ	小石川区小日向台町四〇	大正7年	1918	大正(1)	1	1	30		相田　直彦		あいだ	なおひこ	相田	直彦	東京市	小石川区
4	相田直彦	あいだ　なおひこ	小石川区小日向台町40	大正11年	1922	大正(1)	9	5	9		相田　直彦		あいだ	なおひこ	相田	直彦	東京市	小石川区
5	相田直彦	あいだ　なおひこ	小石川区小日向台町40	大正12年	1923	大正(1)	9	5	10		相田　直彦		あいだ	なおひこ	相田	直彦	東京市	小石川区
6	相田隆太郎	あいだ　りゅうたろう	世田ケ谷太子堂313　太子館内	大正14年	1925	大正(2)	11	5	4		相田　隆太郎		あいだ	りゅうたろう	相田	隆太郎	東京市外	
7	相田隆太郎	あいだ　りゅうたろう	山梨県北巨摩郡上手村	大正15年	1926	大正(2)	11	10	5		相田　隆太郎		あいだ	りゅうたろう	相田	隆太郎	山梨県	北巨摩郡
8	相田隆太郎	あいだ　りゅうたろう	松沢村松原644　小林方	昭和3年	1928	昭和	11	15	6		相田　隆太郎		あいだ	りゅうたろう	相田	隆太郎	東京市外	
9	相田隆太郎	あいだ　りゅうたろう	松沢村松原644　小林方	昭和4年	1929	昭和	11	12	7		相田　隆太郎		あいだ	りゅうたろう	相田	隆太郎	東京市外	
10	相田隆太郎	あいだ　りゅうたろう	府下荏原郡馬込町字出穂山3482	昭和4年	1929	昭和	12	28	8		相田　隆太郎		あいだ	りゅうたろう	相田	隆太郎	東京府下	荏原郡
11	相田隆太郎	あいだ　りゅうたろう	馬込町出穂山3482	昭和6年	1931	昭和	10	5	11		相田　隆太郎		あいだ	りゅうたろう	相田	隆太郎	東京市外	
12	饗庭篁村	あえば　こうそん	北豊島郡西大久保村三百四十九番地	明治25年	1892	明治	3	30	21		饗庭　篁村		あえば	こうそん	饗庭	篁村	東京	北豊島郡
13	饗庭篁村	あえば　こうそん	本所区向島小梅町107	明治40年	1907	明治	4	1	18		饗庭　篁村		あえば	こうそん	饗庭	篁村	東京市	本所区
14	饗庭篁村	あえば　こうそん	本所区向島小梅町百七番地	明治43年	1910	明治	1		21		饗庭　篁村		あえば	こうそん	饗庭	篁村	東京市	本所区
15	饗庭篁村	あえば　こうそん	本所区向島番梅107	明治43年	1910	明治	1	10	15		饗庭　篁村		あえば	こうそん	饗庭	篁村	東京市	本所区
16	饗庭篁村	あえば　こうそん	牛込区赤城下町八一	明治45年	1912	明治	6	20	21		饗庭　篁村		あえば	こうそん	饗庭	篁村	東京市	牛込区
17	饗庭篁村	あえば　こうそん	本所区向島小梅町百七番地	大正7年	1918	大正(1)	1	1	30		饗庭　篁村		あえば	こうそん	饗庭	篁村	東京市	本所区

以下の集計ではピボットテーブルを使用する。データベース内のセルが選択状態（図１ではＡ１セルが選択されている）で、［挿入］リボンの「ピボットテーブル」ボタン（図２）をクリックすると、「ピボットテーブルの作成」というダイアログ・ボックス（設定用の小さなウィンドウ）が表示される。

このダイアログでは、上部ではデータベースの範囲を選択し、下部ではピボットテーブルを配置する場所が指定できるが、デフォルトでデータベース範囲が設定され、配置場所は「新規ワークシート」が選択されているので、そのまま［OK］をクリックする。

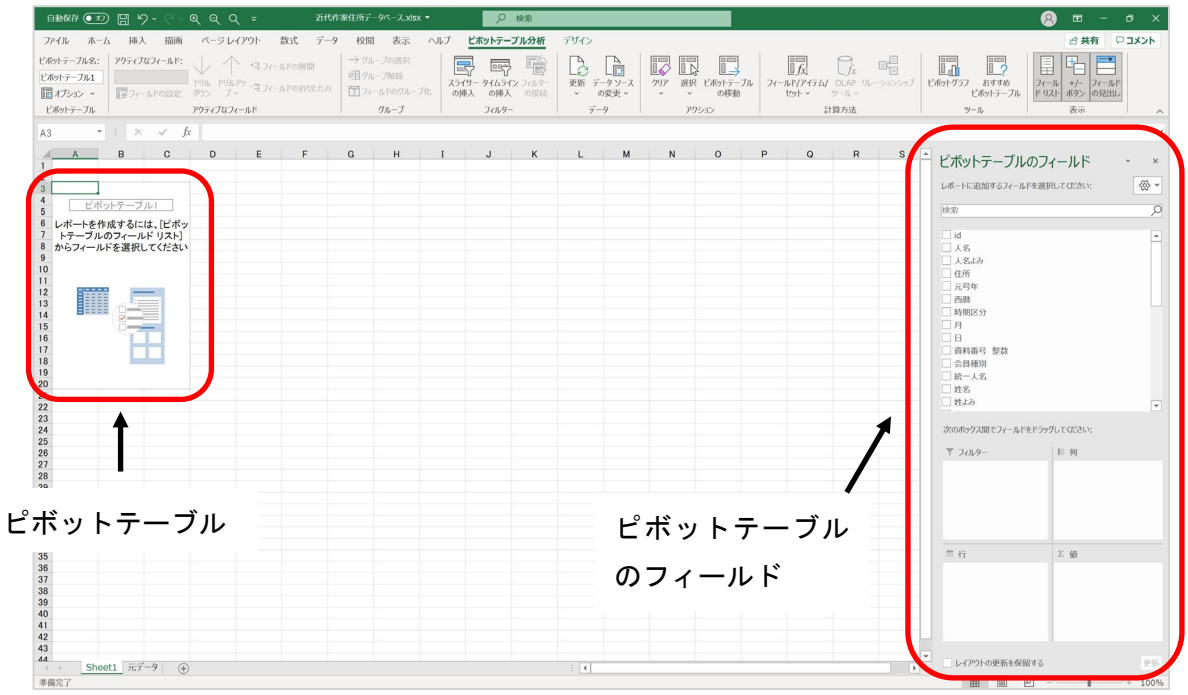
図２　ピボットテーブルの作成



新しいシートが作成され、左側にピボットテーブルが表示され、右側にピボットテーブルのフィールドが表示される（図３）。以上で集計の準備が整った。

右側のピボットテーブルのフィールド（以下「フィールド」とする）の上部にはフィールド名（データの項目名）のリストと、下部にはフィルター、列、行、Σ値の枠がある。これらの枠にフィールド名を設定することでさまざまな集計をすることができる。

図３　ピボットテーブル

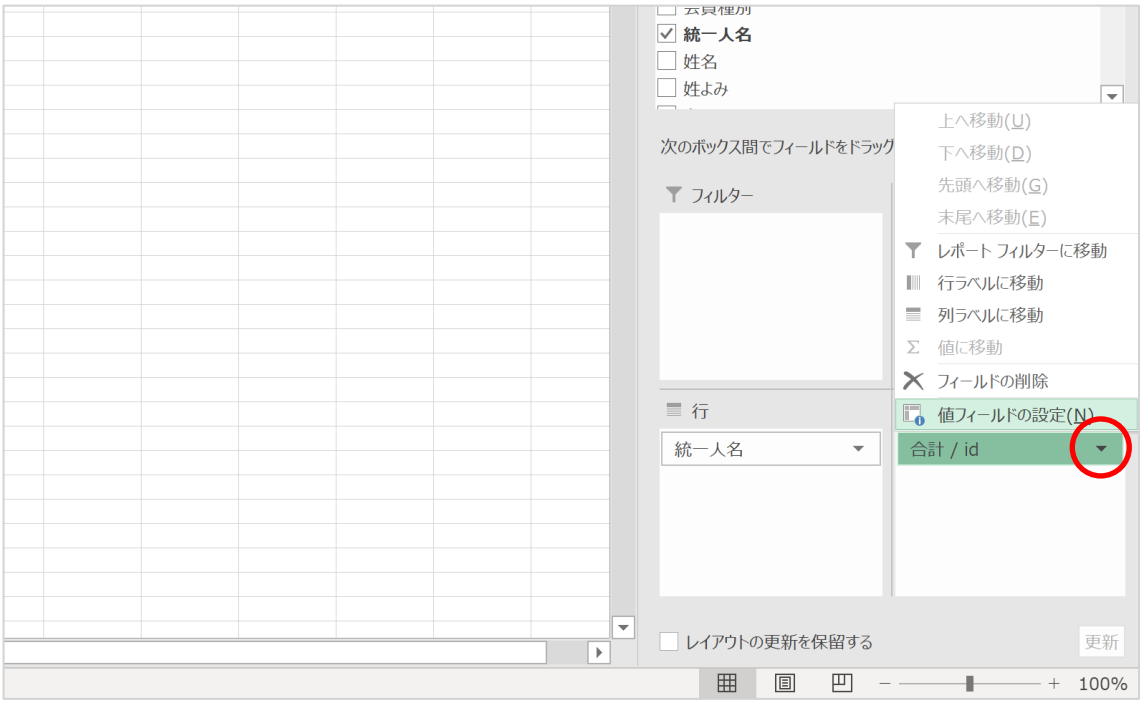


②作家別の住所データ数ランキングの作成

ここでは、作家別の登録された住所データの数を集計してみよう。作家名は元データでは表記揺れがあり、このままでは同一人物が別人として集計されてしまうので、一般的な表記に直した「統一人名」を使用する。

フィールド名リストの「統一人名」をドラッグしてフィールドの「行」に設定する。Σ値にはidを設定する[1]。すると左端のピボットテーブルに集計結果が表示される。

図4　フィールドの設定

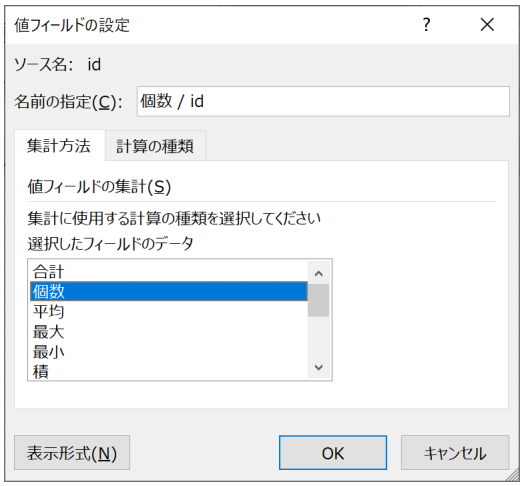


Σ値では集計方法を設定する。デフォルトで「合計」となっているので、idが合計されているが、ここではデータの数をカウントするので設定を修正する。idの右端の▼をクリックし、「値フィールドの設定」をクリックする。「値フィールドの設定」というダイアログの「集計方法」の「個数」を選択し、［OK］をクリックする（図5）。これでピボットテーブルにはデータ登録数が集計される。

---

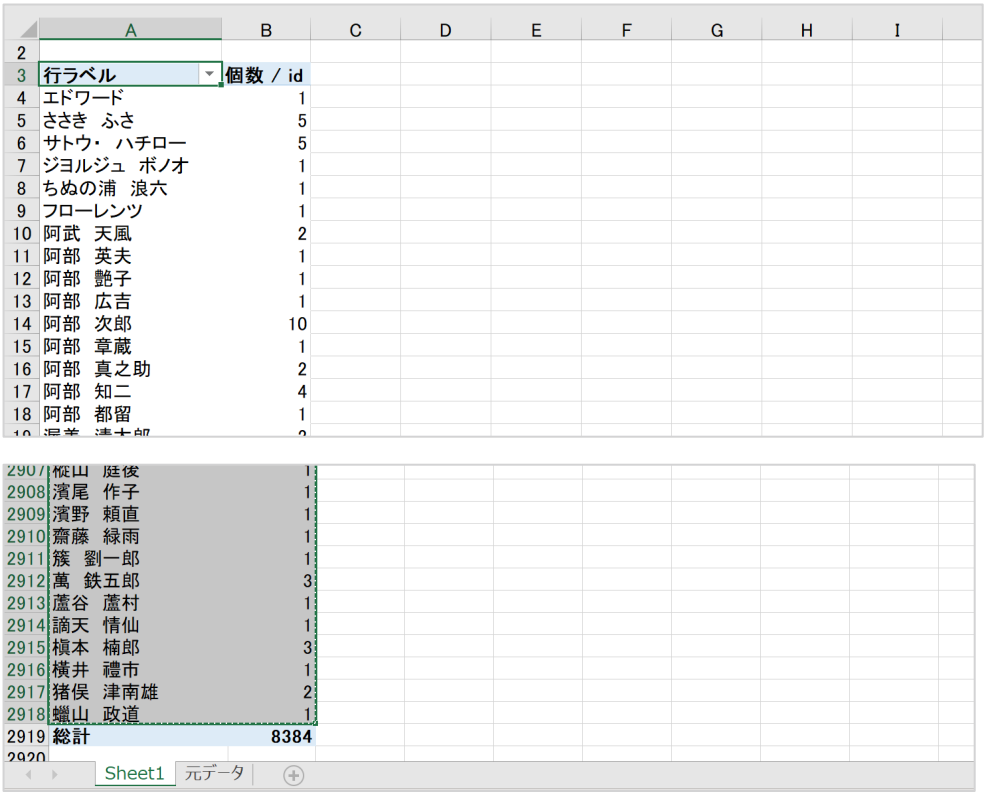
[1] ここではデータ数をカウントするので全てのレコードにデータが入力されているフィールドなら何でもいいが、ここではわかりやすいのでidとした。

図５　値フィールドの設定のダイアログ・ボックス



集計結果をもとに別シートにランキング表を作成する。元の票をコピーするため、集計表の「行ラベル」をクリックし、キーボードの Shift と Ctrl キーをタイプしたまま順に→、↓をタイプすると、表全体を選択することができる（Mac の場合は Shift と⌘キー）。さらに、Ctrl キーを放し、Shift キーだけ押したまま↑をタイプして、「総計」だけ選択範囲から外す（図６）。この状態で Ctrl+C（Mac の場合は⌘+C）をタイプして表をコピーする。

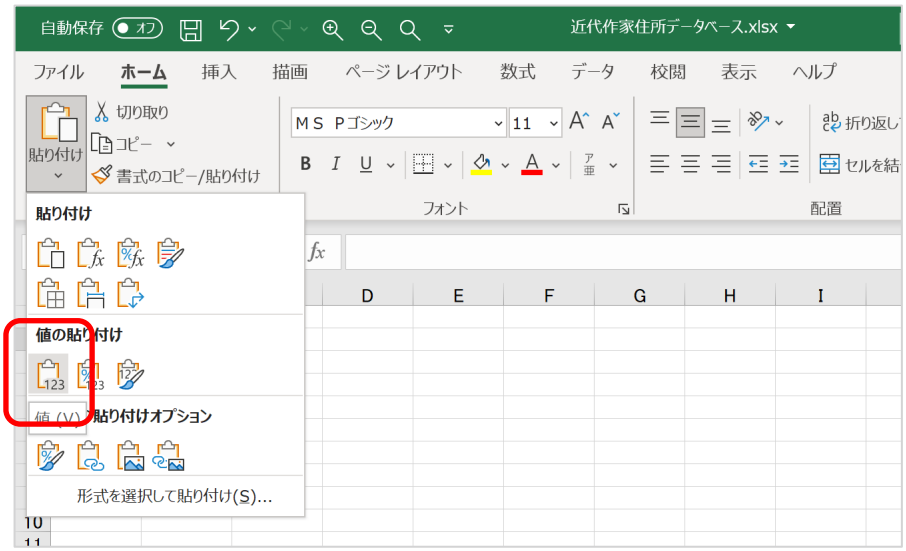
図６　集計表選択



	A	B
2		
3	行ラベル	個数 / id
4	エドワード	1
5	ささき　ふさ	5
6	サトウ・ ハチロー	5
7	ジヨルジュ　ボノオ	1
8	ちぬの浦　浪六	1
9	フローレンツ	1
10	阿武　天風	2
11	阿部　英夫	1
12	阿部　艶子	1
13	阿部　広吉	1
14	阿部　次郎	10
15	阿部　章蔵	1
16	阿部　真之助	2
17	阿部　知二	4
18	阿部　都留	1
2907	樫山　庭俊	1
2908	濱尾　作子	1
2909	濱野　頼直	1
2910	齋藤　緑雨	1
2911	簇　劉一郎	1
2912	萬　鉄五郎	3
2913	蘆谷　蘆村	1
2914	謫天　情仙	1
2915	槇本　楠郎	3
2916	横井　禮市	1
2917	猪俣　津南雄	2
2918	蠟山　政道	1
2919	総計	8384
2920		

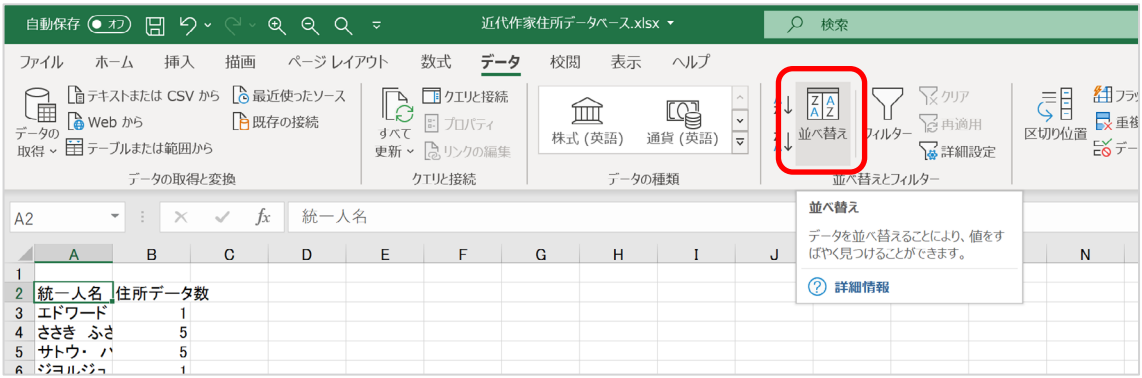
シート名の横の ⊕をクリックして新規シートを作成し、貼り付け先のセル A２を選択状態にする。[ホーム] リボンの「貼り付け」ボタンの下の▽をクリックし、「値」を選択する。これによって、ピボットテーブルの集計値だけを貼り付けることができる（図７）[2]。A２にはキーボードで「統一人名」と入力し、B２は「住所データ数」と入力する。

図７　値の貼り付け



結果が名前順に並んでいるので、住所データが多い順に並べ替えよう。[データ] リボンの［並べ替え］ボタン（図８）をクリックすると、「並べ替え」ダイアログ・ボックスが表示されるので、「最優先されるキー」を「住所データ数」とし、「順序」は「大きい順」に設定し、[OK] ボタンをクリックする。これで表が完成したので、罫線を設定するなどして形を整える（図９）。

図８　並べ替えボタン



[2] ただの「貼り付け」ではピボットテーブルが貼り付けられてしまう。

図９　作家別の住所データ件数ランキング

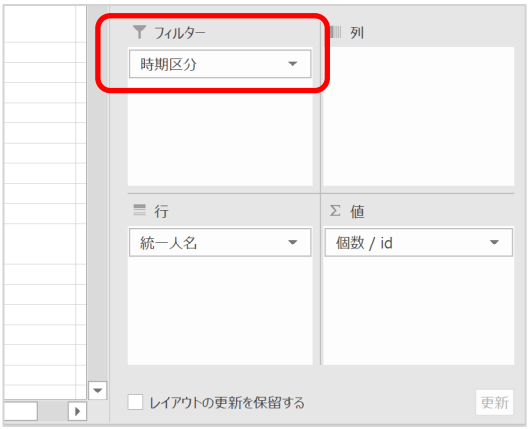
	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	全期間								
2	統一人名	住所データ数							
3	上司　小剣	24							
4	徳田　秋声	23							
5	近松　秋江	22							
6	金子　薫園	22							
7	小川　未明	22							
8	正宗　白鳥	22							
9	泉　鏡花	22							
10	島崎　藤村	22							
11	与謝野　晶子	22							
12	永井　荷風	21							
13	昇　曙夢	21							
14	相馬　御風	21							
15	窪田　空穂	20							
16	広津　和郎	20							
17	野口　米次郎	20							
18	久米　正雄	19							
19	幸田　露伴	19							
20	秋田　雨雀	19							
21	川路　柳虹	19							
22	谷崎　潤一郎	19							
23	北原　白秋	19							

③時期区分別のデータ件数の集計

さらに、時期区分（明治・大正(1)・大正(2)・昭和）別に集計しよう。フィールド名から「時期区分」を「フィルター」にドラッグすると、ピボットテーブルに「時期区分」フィルターが設定されるので、▼から「明治」を選択すると、明治期のデータだけが集計される。②と同様に、集計結果を別シートにコピーし、並べ替えて形式を整えて表を完成させる。

図 10　フィルターの設定

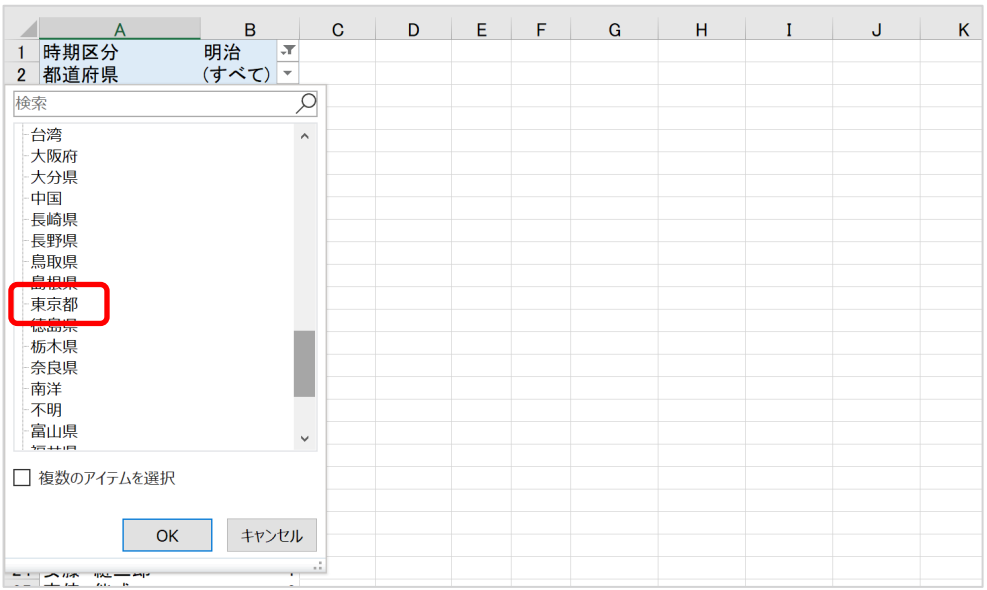
	A	B	C	D	E	F
1						
2	時期区分	（すべて）				
3						
4	行ラベル	個数 / id				
5	エドワード	1				
6	ささき　ふさ	5				
7	サトウ・ハチロー	5				
8	ジヨルジュ　ボノオ	1				
9	ちぬの浦　浪六	1				
10	フローレンツ	1				



東京だけの住所を時期区分別に集計したい場合は、フィルターに「都道府県」を加えて、「東京」を選択すれば、東京の明治期のデータが集計できる。

行、列に設定されているフィールド名をフィールドの外にドラッグすると、フィールドの設定が削除され、ピボットテーブルが再集計される。

図 11　都道府県別集計



④地域別時期区分別のデータ件数の集計

次に、地域別に時期区分別のデータ件数を集計しよう。フィールドの行に「地域」、列に「時期区分」を設定すると、地域別時期区分別のクロス集計表ができる（図 12）。

図 12　地域別時期区分別のクロス集計表（ピボットテーブル）

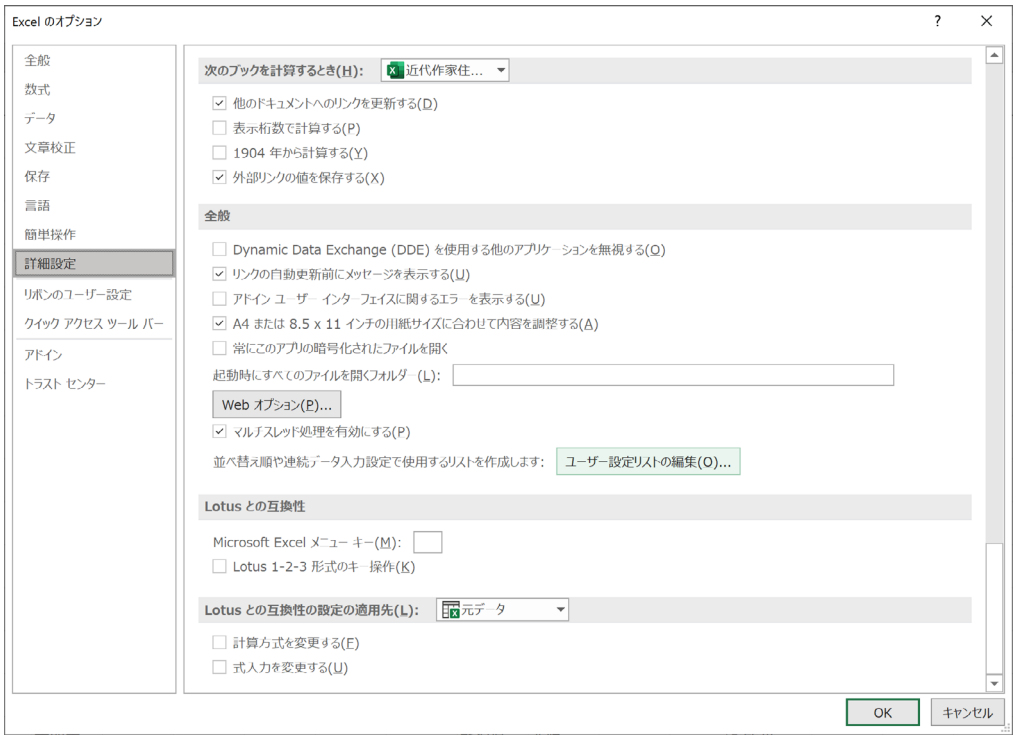
個数 / id	列ラベル				
行ラベル	昭和	大正(1)	大正(2)	明治	総計
アメリカ		3		14	17
その他国外	4	6	3		13
その他国内				4	4
ロシア				2	2
欧州	7	10	5	19	41
韓国・朝鮮	3	1	1	6	11
近畿	240	72	32	160	504
九州・沖縄	24	12	5	18	59
台湾	4	1		3	8
中国	1			19	20
中国・四国	19	8	1	21	49
東海	46	15	8	13	82
東北	41	14	5	28	88
南関東	3550	1532	540	1637	7259
南洋		1			1
不明	26	1	1	25	53
北海道	6	7		8	21
北関東・甲信	48	14	5	32	99
北陸	18	8	5	12	43
満州国	7	1		2	10
総計	**4044**	**1706**	**611**	**2023**	**8384**

この表はデータが文字コード順に並んでいるので、列を時代順に、行は任意の地域順に並べ替えよう。時代順に並べ替えるには、データベース右にある定義リストから「ユーザー設定リスト」を作成する必要がある。時代区分の定義が入力されているデータ範囲（AK2:AK5）を選択し（図 13）、［ファイル］タブをクリックして、一番下の［オプション］を選択すると「Excel のオプション」ダイアログが表示される（図 14）。「詳細設定」の下の方にある「ユーザー設定リストの編集...」をクリックすると「ユーザー設定リスト」ダイアログが表示される（Mac の場合は Excel メニューの［環境設定］から設定できる）。

図 13　時代区分の定義

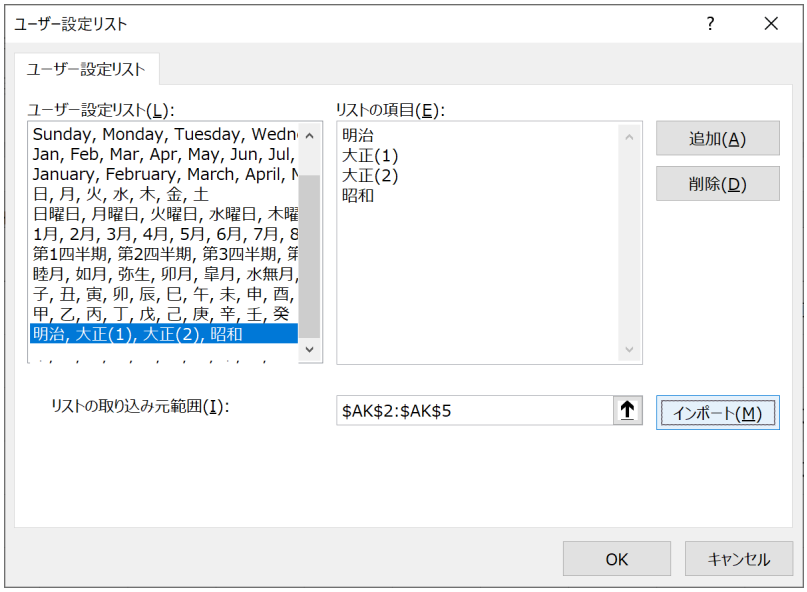
	A	B	AF	AG	AH	AI	AJ	AK	AL	AM	AN	AO	AP	AQ	AR	AS
1	id	人名	年月日	地域						都道府県	地域					
2	1	相沢　熙	明治45年6月20日	南関東			1868	明治		北海道	北海道		1	北海道		
3	2	相島虚吼	明治45年6月20日	南関東			1913	大正(1)		青森県	東北		2	東北		
4	3	相田直彦	明治40年4月1日	南関東			1924	大正(2)		岩手県	東北		3	北関東・甲信		
5	4	相田直彦	大正11年9月5日	南関東			1927	昭和		宮城県	東北		4	南関東		
6	5	相田直彦	大正12年9月5日	南関東						秋田県	東北		5	北陸		
7	6	相田隆太郎	大正14年11月5日	南関東						山形県	東北		6	東海		
8	7	相田隆太郎	大正15年11月10日	北関東・甲信						福島県	東北		7	近畿		
	8	相田隆太郎	昭和3年11月15日	南関東						茨城県	北関東・甲信		8	中国・四国		

図 14　Excel オプションのダイアログ・ボックス



「インポート」ボタンをクリックすると、選択していたデータが「リストの項目」に取り込まれるので「追加」ボタンで選択データがユーザー設定リストとして定義される(図 15)。

図 15　ユーザー設定リストのダイアログ・ボックス



ピボットテーブルの「列ラベル」の▼から「その他並べ替えオプション」を選択すると「並べ替え」ダイアログが表示されるので、「並べ替えオプション」で「昇順」を選択し、ドロ

ップダウンリストから「時期区分」を選択する。ダイアログの下の方にある「その他オプション」をクリックし、「並べ替えの第 1 キー」で先ほど登録した「明治,大正(1),大正(2),昭和」を選択し、［OK］ボタンをクリックする。これで時代順に並べ変わった。

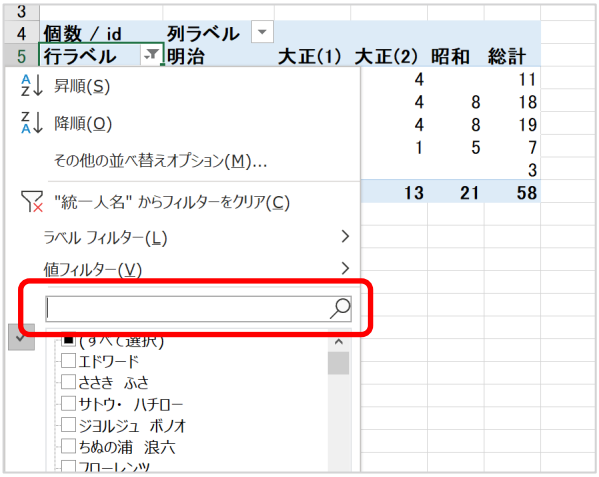
図 16　地域別時期区分別のクロス集計表（完成図）

	A	B	C	D	E	F	G	H
1								
2		明治	大正(1)	大正(2)	昭和	総計		
3	北海道	8	7		6	21		
4	東北	28	14	5	41	88		
5	北関東・甲	32	14	5	48	99		
6	南関東	1,637	1,532	540	3,550	7,259		
7	北陸	12	8	5	18	43		
8	東海	13	15	8	46	82		
9	近畿	160	72	32	240	504		
10	中国・四国	21	8	1	19	49		
11	九州・沖縄	18	12	5	24	59		
12	その他国内	4				4		
13	韓国・朝鮮	6	1	1	3	11		
14	中国	19			1	20		
15	満州国	2	1		7	10		
16	台湾	3	1		4	8		
17	欧州	19	10	5	7	41		
18	アメリカ	14	3			17		
19	ロシア	2				2		
20	南洋		1			1		
21	その他国外		6	3	4	13		
22	不明	25	1	1	26	53		
23	総計	2,023	1,706	611	4,044	8,384		
24								
25								

同様に、AQ 列の地域順をユーザー設定リストに設定し、ピボットテーブルの表側（行）を地域順に並べ替える。表ができたら、別ページにコピーして罫線など見た目を整えて完成となる（図 16）。

フィルターの行に「統一人名」を設定すれば個人別の集計も可能である。例えば第四次新思潮の作家の住所データを集計したい場合、ピボットテーブルの行ラベルの▼をクリックし、先ずは「すべて選択」のチェックを外し、作家の氏名（芥川龍之介、菊池寛、久米正雄、松岡譲、成瀬正一）のチェックを入れる。多くの中から該当する氏名を探すのは大変であるが、検索窓に姓を入力すれば絞り込まれるのでチェック欄をクリックすれば良い（図 17）。

図 17　値フィルターの検索



⑤その他の集計方法

　このほかに、独自の分類で集計したい場合は、データベースの最終列に分類を入力すれば良い。例えば、白樺派、新思潮、プロレタリア文学など文芸思潮ごとの集計をしたい場合は、「文芸思潮」の列を作り、作家ごとに分類を入力する。集計の必要がない場合は空欄にしておいても良い。データが完成したら、ピボットテーブル内をクリックし、「ピボットテーブル分析」タブの「データソースの変更」をクリックし、データベースの範囲を設定し直す（図18）。これにより、フィールド名のリストに新しい項目が表示されるので、ピボットテーブルで集計可能となる。

図 18　ピボットテーブルのデータソース変更

共同研究者一覧

山岸郁子　日本大学経済学部教授　yamagishi.ikuko@nihon-u.ac.jp
小林　修　実践女子大学名誉教授　samu-k@jcom.home.ne.jp
大木志門　東海大学文学部教授　oki.shimon.m@tokai.ac.jp
掛野剛史　埼玉学園大学人間学部教授 t.kakeno@saigaku.ac.jp

研究協力者
滝口富夫（文化資源社）

日本大学経済学部グローバル社会文化研究センター
ワーキング・ペーパー・シリーズ　No.2021-02

2022年3月1日　発行
発行元　日本大学経済学部グローバル社会文化研究センター
〒101-8360　東京都千代田区神田三崎町1-3-2
TEL 03-3219-3309 / FAX 03-3219-3329
URL：https://www.eco.nihon-u.ac.jp/research/cgs/